

振り向きへホームラン 【完結】

pucl19

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コツコツとスタン値を溜め、スタンをしたら頭は大剣や虫棒にさつとゆずる。

後ろから斬りかかってくる太刀や一発でスタンを取っていくチャアクもいるけれど、そこは我慢。

スタン止めろ。カチ上げ使いな。スタンを取れと命令され、頭の前は邪魔だと罵られ、そもそもお前じゃ火力が足りないかと怒られる。

それでも俺はハンマーが好き。

目次

プロローグ	1
第1話くすれ違い様にハイタッチく	10
第2話く集団にスタンプく	20
第3話く集会所でカンパイく	36
第4話く崖下からジャンプ攻撃く	48
第5話くアイテムポーチへ焼肉セット	58
第6話く崖上からジャンプスタンプく	67
第7話くとりあえずはビールく	78
第8話く憧れの狩りピストく	88
第9話く振り向きへアツアツオーウく	98
第10話く後ろから飛び込み斬りく	110
第11話くプライドは2000zく	122
第12話く配給は大食いマグロく	133
第13話くお詫びにタンジアビールく	147

第14話	く	咆哮をフレーム回避	く	223
第15話	く	選んだドリルはブーステツ	く	233
ド	く			
第16話	く	左からロケット生肉	く	244
179				
第17話	く	口の中にカプトムシ	く	255
191				
第18話	く	夢の中でさようなら	く	267
201				
第19話	く	初めての緊急クエスト	く	277
213				
第20話	く	ネバネバ彼女へ横振り	く	287
244				
第22話	く	火力スキルに挑発	く	233
255				
第23話	く	振り向きヘスタ……	く	
267				
第24話	く	帰り道でありがとう	く	
277				
第25話	く	地獄絵図は夢の中	く	
287				
第26話	く	微笑み浮かべて乗り攻撃	く	

			ますく	
			第42話くゴリ押しに山権現く	476
	492		第43話く代わりに我が儘く	501
			第44話く再会は明後日く	511
			第45話く滑空へホームランく	
	521		第46話く未来へ先送りく	535
			第47話く捨てた想いは恋心?く	
	546		第48話く下を向いて赤い顔く	
	556		第49話くひたすらにジャンプ攻撃く	
			第50話く口に出さず伝わる想いく	570
			第51話く乗りスタン痺れ麻痺から水 爆落としスタンく	591
			第52話く頬膨らませて嫉妬く	
	601		第53話くハンマー使いの場合く	
	611		第54話く彼女たちの場合く	625
			第55話く瀕死の敵へ閃光玉く	
	640		第56話く素材玉に光蟲く	651

後日談					
後日談くその1く	757				
724					
第62話く振り返り向きへホームランく		708			
第61話く後ろ脚へカチ上……え？く			699	684	
第60話く約束にスタンプく					
第59話く地底火山で打ち上げ花火く					
第58話くお守りにKO術く			675	664	
第57話く願いを込めてホームランく					
					後日談くその2く
					後日談くその3く
					後日談くその4く
					802
					782
					769

プロローグ

「やー、今回は惜しかったねー。あと10秒だったのに」

いつものように間伸びした声で、闘技大会の受付をしている女性が言った。

4分41秒。あと11秒遅かった。

途中までは良かったんだ。あそこで突進をされなければきつとSランクを出すことができたはず。はあ……まあ仕様が無い。また今度頑張れば良いさ。

「それにしても、どうして君はそこまでソロにこだわるのさー？ 友達いないのー？

やーいぼっちー」

失礼な。張り倒すぞ。

俺はただ、闘技大会イヤンクックでソロSも取れないような奴が、集会所のクエストを受けるべきじゃないって思っているだけだ。集会所でクエストを始めれば、友達だつてきつと直ぐにできる。できるはずだ。

「どうかなー。君って噂になっっているから難しいと思うよー」

「えっ……マジで？」

「うん、マジマジ。ずっと一人で闘技大会をやってる変な奴だつて噂だよー」
確かにここ一ヶ月はずっと闘技大会をしているが、えっ……そんなにおかしなこと
だったのか？

いやだつて、そんな実力もないのに集会所クエストなど行っちゃダメだろ。

「そりゃあそんなハンターはいないよー。私が言うのもアレだけど、闘技大会やるくらいなら、クエスト行った方が絶対に儲かるもん」

それは俺だつてわかってる。

しかし、闘技大会ほど初心者にとつて良い練習の場所となるものはない。何より契約
金口ハつて言うのが一番助かる。それでいて討伐できれば報酬金がもらえるのだ。至
れり尽くせりじゃないか。

まあ、最初の頃は討伐なんてできなかつたが。

先生（笑）とか思っていた昔の自分を殴りたい。クックさんマジ強い。だつてアイツ
火吐くんだけぞ？

「とりあえず俺はソロスが出るまでは続けるよ。また明日来る。またな」

「またな」

受付嬢とそんな言葉を交わしてから集会所を後に。

今までは気になっていなかったが、確かに周りのハンター達からは見られているよう

な気がした。クスクスとまるで嘲笑しているかのような声も聞こえる。

このやろー、見てろよ。絶対に凄腕のハンターになってやるからな！

自宅へと帰り、装備と武器を外してからベッドへ倒れ込む。

此処へ来てもう一ヶ月以上も経ってしまった。未だ集会所で受けたクエストは採取ツアーのみ。何が凄腕を目指しているハンターなんだろうか。一番簡単な闘技大会ですらソロSを取れない。そんな自分が情けなかった。

メイン武器はハンマー。けれどもそのハンマーを使ったのも、採取ツアーでの一回のみ。今では片手剣の使用回数の方が圧倒的に多い。このままじゃ一番好きな武器の使い方だつて忘れてしまう。

ホント、上手くないかない人生だ。

俺は……いつになったら元の世界へ帰ることができるのだろうか。
ホント、どうすりや良いんだろうな。

今でもはつきりと覚えている。

それは莫迦みたい長い大学の夏休みの日のことだった。部活にも所属せず、バイトも休み。実家へも帰る気になれず、ただひたすらにモンハンをやり続けていた。

「はあ、またゴミ武器か。別に最高倍率なんて求めてはいないんだけどなあ」

何が自分をそこまで駆り立てていたのかはわからない。理由があるとしたら、他にやることになかったと言うだけだろう。

金冠マラソンも終わり、称号も全て集めた。プレイ時間は1000を超え、HRはとつくにカンスト。それでも惰性で続けていた。

「もうテオも飽きたし、ゴリラに変えようかな」

一人暮らしを始めてから、独り言がやたらに増えたと思う。

メイン武器以外の発掘はある程度終わっていた。けれども、一番欲しいものだけが入らない。別にやる必要なんてなかった。何処まで行っても自己満足でしかないのだから。

もし理想の発掘武器が手に入っていたら、俺は何をやっていたんだろうか？

「よお14代目、今度こそ使えるお守りを頼むよ」

喋り返してくれることのないゲーム画面に向かって声をかける。周りから見ればさぞ滑稽な光景だろう。それでも何か声を出していると、それだけで気持ちは楽になった。

「……全部売却で」

やはり俺の気持ちは画面の向こうまで届くことはないらしい。たまには俺の気持ちに伝えてくれても良い気がする。

「はあ、リセマラに切り替えるか」

乱数調整をする気にはまではならないが、やはり良いお守りは欲しかった。頑張れ14代目。期待しているぞ。

セーブをせず電源を切る。

電源を入れる。

データが全て消えていた。

「……………」

言葉が、出なかった。

聞いたことはあった。リセマラはデータが「まかふしぎ」されるから止めておくと。

所詮はただの電子情報。それが消えただけ。けれども俺の1000時間を超える軌跡は一瞬で無と化した。

ため息しか出ない。もうこれを機会に止めようとも考えた。それでも俺は——ハンターのセカンドライフを選んだ。

自分でも思う。馬鹿だつて。そんなの何の意味もないつて。

それでも俺はその道を選んだ。

前回のデータと同じ名前。同じ顔、髪、声。行く宛の無い怒りは、筆頭オトモとか言う明らかなバグに「畜生」と名付けることで多少は軽減できたような気がする。

キララクターメイクの間、独り言の多いはずの俺は終始無言だった。

またこれで楽しむことができる。初心に帰って楽しめるじゃないかななんて、一人で強がってみた。

はあ……ため息しか出てこない。

キララクターメイクを終え、ゲームスタート。

このデータはハンマー以外使わないぞ、と心の中で小さく誓った。

そして、目の前が真っ白になった。

真つ白な世界から何処かの船の上のような世界へ変わった。太陽が眩しい。風が強
く、飛んできた砂粒が顔に当たる。

「ようー！ ハンターさん。もう少しでバルバレに到着だな！ どうだ、こっちに来て一
緒に眺めないか？」

低くいかにもダンディーな声が聞こえた。

そちらの方を向く。大きめの帽子を被り、なかなか良い身体をしているおっさんがい
た。あら、カツコイイですね。

そのおっさんは画面越しに見たあのキャラとよく似ていた。

「楽しみだなア。ハンターさんも待ちきれなくなつて、船底から出てきたんだろ？ 実
は俺もなんだ」

……なんだこれ。

なんなんだこれ。

混乱。パニック。意味がわからなかった。

「こうしている間にも、到着が待ちきれなくて血がザワザワと騒ぎ立てるよ」
いや、もう……なんだろうね。

誰か今の状況を説明してくれる人はいませんか？

「それで、ハンターさんはどうしてバルバレを指しているんだ？」

日差しが強い。肌が焼ける。

風が強い。皮膚に当たると砂粒が痛い。

夢？ 現？ それがわからない。

それでも一つだけはつきりとわかった。

「凄腕のハンターになるためだよ」

此処、モンハンの世界だわ。

この時から俺の物語が始まった。

それは臆病で弱虫で馬鹿でどう仕様も無い男が、昔の栄光にしか縋り付くことのできない、最弱とまで言われるようになってしまった武器を担ぐ物語。

それはプライドなぞ捨て、ただひたすらに生き抗った男の物語。
それは意地っ張りで負けず嫌いな男の物語。

鼻で笑ってくれ。お前は馬鹿だつて。

笑われながら生きていくくらいが丁度良いのだから。

そんな物語を書き始めようと思う。

第1話くすれ違い様にハイタッチく

乾燥した空気。皮膚を焼くような強い日差し。

俺が訪れた初めての異世界は砂の味がした。

「はっは！ そうか凄腕のハンターになるためか。そりやあいいことだー！」

そう言っておっさんは豪快に笑った。そんな笑い方はおっさんによく似合っている。なんともカッコイイ人だ。

「あんたは？」

「俺はキャラバンの団長をやっている。今は仲間達と世界中を旅しているんだ。今はその仲間達の元へ帰るところだよ」

そんなおっさんの言葉は、いつか聞いたセリフとよく似ていた。

これがもしゲームの世界だとしたら、このおっさんのキャラバンへ加わり、世界中を旅するのだろう。それがあのゲームのシナリオだった。

「俺たちの団にもハンターがいるが、なかなか面白い奴でな。いつもいつも驚かされてばかりだよ」

……えっ？

あんたの団、ハンターもういるの？ い、いや別におかしなことではないが、なんだろう。てつきり俺はこのおっさんの団員になるものとはかり思っていた。

「懐かしいな。初めてあのハンターと会った時も、こうやって今みたいに話したものだよ」

それでダレン・モーランに襲われたんですね。よく知ってるよ。

あんたのせいで、銅鑼の使い方を間違えるハンターが何人生まれてしまったことか……。この団長の罪は割と重い。

そっか、ゲーム通りに進むと言わわけではないのか。加工屋の娘と会いたかったなあ。ぎゅーっしてもらいたかった。

「さて、そろそろバルバレに着くはずだ。俺はわかるよ。お前さんはいい目をしている。きつと凄腕のハンターになるさ。はっは！ そんな心配そうな顔をしなくても大丈夫だ。お前さんなら、できるぞ！」

どうやら顔に出ているらしい。

けれどもそれだつて仕様が無いことだと思ふんだ。未だ自分の状況なんて全くわからない。いきなり異世界へ飛ばされ、自分の意思とは関係なしに物語は進む。

此処はもうゲームの世界ではないのだから。

それでも、おっさんの言葉を聞いてから少しだけ上を向けるようにはなったと思う。

その後も砂の上を走る船は何事もなく平和にバルバレまで到着した。

別にダレン・モーランと遭遇しなかったわけではないが、少しだけ物足りない。それはわがままだろうか。

おっさんとも別れることとなったが、最後の最後まで笑っていた。できるできると。

おっさんと別れ、どうすれば良いのか困っていると、ギルドの者だと名乗る男性から俺の家だのこれからの予定だのを教えてもらった。

今の俺はこの世界のことを知らなかったため、男性にこの世界のことを聞いてみた。そんなことも知らんのか？　みたいな顔をされたが、無知のままではよっぽどマシだ。

その男性から聞いたことをまとめると、そもそもハンターと言うのは普通の人間ではなれず、特殊な力を持ったものだけがハンターになることができるらしい。

その特殊な力と言うのは、常人に比べて凄まじい体力を持っていると言うことと、武器を扱うことができる者。その武器と言うのが、ハンマーや片手剣などのこと。あの武

器は特殊で、人に対しては何のダメージも生み出さないが、モンスターにはしつかりとダメージが通る特殊な武器らしい。ただ、詳しいことは知らんと言われた。

んで、その武器を扱えるのがハンターと呼ばれる者たちだそうだ。

しかし、ハンターの数は襲ってくるモンスターに対して圧倒的に少なく、ギルドも大変なんだと愚痴を零していた。

まだまだわからないことは多いが、この世界でハンターが優遇されている理由もなんとなく理解できた。この世界の人々にとってハンターとは希望なんだろう。

普通の人間では、小型のモンスターですら勝つことが難しいと言っていた。大型のモンスターが村を襲えば壊滅することもある。そんなこの世界。そりゃあハンターは貴重だろう。

正直、荷は重かった。

まだ俺が小さかった頃、ヒーローに憧れた。悪者を倒し人々を救うヒーローに。

しかし、そんな憧れは直ぐに消えた。自分じゃそんな存在にはなることができないとわかったから。そんな憧れを捨ててからもう何年経っただろうか？

消えたはずのものが今になって現れた。

そんな今の状況には、戸惑いしかない。どうすりゃいいんかなあ。

どうしてこの世界へ来てしまったのかもわからない。どうすればあの世界へ帰るこ

とができるのかもわからない。

けれども、止まっていることが正解じゃないことははっきりとわかった。

あの男性から教えてもらった自分の家へ。

扉を開け中へ入る。6畳程の縦に長い部屋が一つ。部屋の中にはベッドやアイテムボックスらしき物など、家具は充実していた。

アイテムボックスを開くと、其処にはブレイブ装備が一式と片手剣や双剣などの初期武器が一通り。

それらの防具や武器を一通り触ってみた。ゴツイ見た目に反して重さはあまりない。装備をしてクエストに出かける元気もなく、その日は武器防具をアイテムボックスへ戻して寝た。目が覚めたら元の世界へ戻っていることを期待しながら。

目が覚めた。そうして見えてきたのは、見覚えのない天井。直ぐにわかった。此処はあの世界だと。

ため息が溢れる。無性に泣きたくなかった。けれども涙は出なかった。

「……行くか」

声を出す。

少しでも気持ちが悪くなるように。

アイテムボックスを開き、ブレイブ装備一式を取り出してからそれを装備した。

合計防御力はたったの5。発動しているスキルは乗り名人と回復速度+1のみ。それでも装備をしただけで、気分は高揚した。

武器は迷うことなくウォーハンマーを選択。切れ味は黄色、攻撃力312。初期武器だもんね。しょうがないね。

「よっしゃー！ 行くぞー！」

気持ちを入れるため、大きな声を出す。

ドンつと壁を殴る音が聞こえた。どうやら壁ドン是世界を越えるらしい。

気合を入れ、勢いそのままに集会所へ向かう。初期防具に初期武器。どう見ても初心者ハンター。それでも、自分が少しだけ誇らしかった。

集会所へ行くと、下位クエストの受付嬢からクエストを受注する前に「ハンター登録をギルドマスターに頼んでやってくれと言われた。

面倒臭かったが、言われた通りほっほほじいさんの所へ。其処でじいさんからバルバレの歴史やらを聞かされた後、自分のギルドカードをもらった。

「……ほれ、これで登録完了だよ。それじゃ、がんばんなさい。さても新鮮な働きを期待しているよ。ほっほほ」

改めて自分がハンターになったんだと感じた。

HRはまだ1。それでも此処から俺のハンター生活は始まる。けれども、その実感はあまりない。

「ハンター登録、おつかれさまです！ クエストカウンターへようこそ！ ここは下位クエストの受付窓口ですよ！」

何はともあれクエストを受注することに。本当なら旅団クエストをやっていきいたいところだが、残念ながら、俺は旅団に入っていない。つまり集会所縛りプレイと言ったところか。

難易度高いなあ……

「遺跡平原の採取ツアーを受注したいんだけど、いいかな？」

「はい、遺跡平原の採取ツアーですね！ バルバレからは近いので半日ほどで着くかと思えます。よろしいですか？」

……近いのに半日もかかるのかあ。

予想はしていた。此処はゲームの世界ではないのだ。飛行機や新幹線もない。それならそれも仕方が無い。

「うん、頼むよ」

「わつかりました！ 準備ができ次第、出口へ向かってください。ハンターさんが無事、帰ってこられるよう心から願っています！」

よく喋る娘だっと思った。けれども、彼女のおかげで確かに元気にはなった気がする。

ありがとう。頑張ってみるよ。

よっぽどのがない限り、ハンターはちゃんと帰ってくる事ができるらしい。それはハンターをサポートしてくれる人たちがいるからこそできることだろう。彼女だってその一人だ。

これから行くのはただの採取ツアー。

危険なことは何もないはず。

それでも、ちゃんと帰ってこないといけないなと思って思った。

準備をしようにも、アイテムなど何も持っていなかったため、受付を済ませてから直ぐに出口へ。

集会所の中には多くのハンターの姿。俺のように一人でいる奴もいれば、数人で一緒にいる奴らもいる。そしてその誰もが笑っていた。食事をしながら、酒を飲みながら愉快な声が聞こえる。

そんな奴らを横目に初めてのクエストへと俺は出かけることに。

その途中で、クエストから帰ってきたと思われるハンマーを担いだ女性のハンターと目が合った。もちろんお互いに初対面。

彼女と俺は同時に手を挙げた。

そしてすれ違い様にハイタッチ。パシンッと乾いた音が響いたが、そんな音は集会所内の騒がしい音に飲み込まれ直ぐに消えた。

そんじゃ、一狩り行くか！

第2話～集団にスタンプ～

二匹のガーグアの引く馬車（？）に乗り、しつかりとは整備をされていないポコポコの道を進む。

ホロなどは付いていないため、風や日差しは直接身体に当たる。道がデコボコなせいでお尻は痛いし、乗り心地はあまり良いものではない。けれども、それが何処か心地よかった。元の世界ではこんなことを経験したことなどはないし、貴重な体験と言ったところ。

いつの日か、これにも慣れてきてしまう日が来るのだろうか？

馬車に揺られながら、ゆっくりと過ぎていく景色をボーッと眺める。遺跡平原までは半日かかると言われた。長い旅になりそうだ。

目を閉じ、あの世界よりも澄んだ空気を全身で感じていると、俺の腹から『くう』と音が鳴った。

「んニヤ？　もしかして旦那、お腹が減ってるのかニヤ？」

ガーグアを操っていた唯一の同乗者であるアイルーが、此方を振り向いてからそんな

言葉を落とした。腹が鳴るのも仕方無い。だって昨日から何も食べていなかったのだから。

しまったなあ。どうして集会所で飯を食べてこなかったのだろうか。

「そんなわけがないだろうが。お前の聞き間違えだよ」

「それは失礼したニャ。見たところ旦那は新米ハンターだから、飯を食べ忘れてるんじゃないかって思ったんだニャ」

はい、その通りです。飯食べ忘れしました。

「まあ、最近はそのんことをやるハンターもいないし、いたとしても相当な馬鹿ニャ」

はっはっはー。相当な馬鹿か。

……マタタビ爆弾ぶっけんぞ。この猫畜生が。

まあ、そんなことができるはずもなく、腹の減りを誤魔化すためにもアイルーと一緒に笑った。

しかし、どうやら俺の体は自分に正直ならしく、笑った瞬間また腹が鳴った。

「……………旦那」

それは哀れみの視線だった。

やめて、そんな目で俺を見ないで。

「いや、だつて初めてだったからどうして良いのかわからなくて……」

逆ギレしてやろうかとも考えたけれど、其処は自分の中に残っていた小さなプライドが止めてくれた。

正直、今にも泣きそうです。

「あく、えく……う、うん。それなら仕方無いニヤ。誰だつて最初は上手くいかないニヤ。き、気にすることないニヤ」

慌てたように俺を慰めるアイルー。

余計に悲しくなった。何が悲しくて畜生などに慰められねばならんだ。こんな調子でこの先大丈夫かねえ。

「仕方無いから旦那には特別にこれをあげるニヤ」

そう言つてアイルーは小さなボトルを二つほど投げ渡してきた。

落とさないよう、なんとかそれをキャッチ。

「これは？」

「携帯食料ニヤ。それを飲めばとりあえず餓死する心配はなくなるニヤ！」

ああ、そう言えばアイルーを倒すとよく携帯食料を落としてくれたよな。

もらったソレを持ち上げ少し揺らす。へえ、携帯食料つてボトルに入った液体だった

んだな。てつきり乾。パンとかだと思っていた。

「おう、ありがとな」

そうお礼を言ってからキャップを開けた。

匂いは……少し甘い感じかな。

そうやって匂いを確かめてから、ゲームのキャラがやっていたように、ボトルを傾け一気に飲み込んだ。

「なにコレ！ 超不味い!!」

携帯食料の味は未だかつてない不味さだった。吐き出さなかっただけでも褒めて欲しい。

組み合わせなど関係なしに、色々な食材を混ぜてひたすら煮込めばこんな味になるんだろうなあ。すぐく身体に良さそうな味と言った方が伝わるかもしれない。

そしてボトル一つを飲み終わった瞬間、身体の奥から力が湧いてきた。ゲームでは携帯食料一つでスタミナが25アップ。なるほど、こう言う感じなのか。

もう一つもらっているがそれは取っておくことにした。とてもじゃないがもう一ついただく気にはなれない。確かに携帯食料は便利だが、味が終わっている。

こりゃあ、元気ドリンクの大量生産が急がれますな。

「遺跡平原へ着くのはもう少しかかるけれど、旦那はどうして採取ツアーなんて受注したのニャ？」

「初めてのクエストだからだよ。モンスターなんていきなり倒せる気がしない。だから練習がてら採取ツアーに来たんだ」

本当なら俺だって、アルセルタスくらいは倒したかったよ。けれどもモンスターなど実際に見たことがない。そしてあの小さなアルセルタスですらその全長は4mを超え。俺はいきなり目の前に4m以上の虫が出てきたら気絶する自信がある。

だからまずはこの世界に慣れようって思ったんだ。

「なるほど、わかったニャ。でもいくら採取ツアーでも環境は不安定で大型種も出るから気をつけるニャ」

ああ、わかってている。でも、もし出たときは全力で逃げるから大丈夫だよ。

その後も、アイルーにはこの世界のことを聞きながら、ガタゴトと揺られ続けた。

何も考えずに此処まで来てしまったが、今更になって不安に押し潰されそうになった。それでも前に進まなきゃいけないのが、人生難しいところだ。

「それじゃ行ってくるニャー！」

「ああ、行ってくるよ」

遺跡平原ベースキャンプ。地図と松明が用意されている支給品ボックスの隣には川があり、よく見れば数匹の魚影が確認できた。

クエストの時間は50分。半日もかけてやってきと言うのに、御丁寧にクエストの間はゲームと同じらしい。

どうしてそんなにクエストの時間が短いのか聞くと、アイルー曰く、自然を守るためだそうだ。ずっとずっと昔、この世界には高度な文明が存在した。しかし、自然のことなど考えもしなかったせいで結局、その文明は滅んでしまったらしい。

そんな歴史があったため、自然はできるだけ壊さないように。と、言うことらしい。だから必要以上にモンスターを狩ることも許されてはいない。真のハンターとは人を守るだけでなく、自然も守らなければいけないと言われた。

正直、俺にはよくわからなかった。自然を守りつつ、モンスターから人を守ることが。

「よっし、行くか！」

地図と松明を手に取り、いつものように声を出した。

少しでも臆病な自分が前に進んでくれるように。

そうやってから俺はベースキャンプを離れた。

ベースキャンプを離れると、直ぐに草食竜の姿を見ることができた。

「でっか……」

ゲームをやっていた頃は「良心的生肉」などと馬鹿にしていたが、実際に見てみると迫力がヤバい。俺に攻撃をしてくることはなさそうだが、モツシャモツシヤと何かの草を食べているのを見るだけで大迫力だ。なにコレ、超怖い。

い、今倒すのはやめておいてやろう。

……はいそうです。臆病者なんです。

暫くの間、何だかわからない草や、木の実を集めつつ遺跡平原を探索。意味もなくケルビを追いかけたり、転がってくるクンチュウから逃げ回ったりと全てがやること、見ることを全てが新鮮だった。

とは言え……流石に一匹くらい倒さないと不味いよなあ。

残された時間はもう半分もない。別にこのまま戦闘などせずに帰っても良い。けれども、それは嫌だった。変に意地っ張りな性格が邪魔をする。

それでも、自分に対してくらいは素直になりたかった。

「アツアツオーウー！」

「ヒイーフン！」

そして目の前には数匹の小狗竜。

背中にも担いでいたハンマーを手取る。見た目ほど重くはないが、ずしりと確かにその重さを感じることはできた。

モーション値もスタン値も覚えている。ゲームでは数千回と担ぎ一番使い慣れた武器。けれども現実では一度も振り下ろしたことがない。

「アツ？ アツオーウー！」

手足が震えた。

ただの小型モンスターが超怖い。

一度、大きく息を吸う。

わかつていいるさ。今の自分がひたすらに格好悪いことくらい。

でも、きつとまだ間に合う。

「行くぞー！ コラア!!」

大きな声と共に息を吐き出す。

手足はもう——震えない。

手に持っていたハンマーを右腰の辺りに構える。その瞬間、ハンマーがピシユンと光を放ち始めた。腰にハンマーを構えたまま、ジャギイ集団に接近。

呼吸は荒い、ものすごい速さでスタミナが消費していることがわかる。

「ギャ？ オーウー！」

ハンマーを振り上げる。そして渾身の力を込めてそのまま振り下ろした。

一匹のジャギイが吹っ飛んでいくのが見えた。

所謂、スタンプ。吹き飛ばし効果があるため、パーティープレイではほぼ御法度と言っても良い技。けれども、ハンマーの中ではかなり強力な技。

スタンプをしてから直ぐに横へローリングをし、硬直を回避。そしてまた腰へハン

マーを構える。一発で倒せるほど今の武器は強くない。それくらいはわかっている。

構えたハンマーが一度光る、その瞬間、一匹のジャギイに向かつて攻撃。

ローリング一回分の距離を一気に詰め、ハンマーを振り上げた。

溜2攻撃。つまり、かち上げ。モーシヨン値はそれほど高くないが、スタン値が2番目に高い技。やはり味方をぶち上げる効果があるため、パーティーでは注意が必要。

かち上げを決めた後は直ぐにローリング。ヒット&アウェイ。最初はチキンなくらいがちようど良い。

その後も距離をとってからスタンプとかち上げを繰り返した。初期武器なせいかジャギイさんたちなかなか死んでくれません。

さらに一対一など糞喰らえとばかりに集団で襲いかかって来るせいで、尻尾攻撃や噛み付きを何度も喰らった。けれども、何故か痛みは感じない。感覚が麻痺しているのだろうか。

そして何度目かのかち上げを喰らわせた時、ジャギイが混乱したかのようにフラフラとし始めた。

なるほどこれがスタンか。

相変わらず息は荒い。攻撃を喰らい過ぎて体力だって残り僅かだろう。それでも今回は俺が勝たせてもらう。

フラついて一匹のジャギイにハンマーを振り下ろす。見せてやろうじゃないか。弱小と呼ばれた武器の最大火力技を。

一回、二回とハンマーを振り下ろす。二回目を振り下ろしてからそのまま一度ぐるりと回る。そしてその勢いを利用して……

「……あれ？」

気がつくのと、何故かベースキャンピングにいた。

「……おかえりニヤ」

アイルーの声。

なんとなく理解できた。

そっか……俺、ダメだったんだな。

「運んできたアイルーはドスジャギイにやられたって言っていたニヤ」

全く気づかなかった。

周りのことを全く見ていなかったんだな。目の前の敵だけで精一杯だった。

「もう残り時間は少ないけれど、どうするニヤ？ ネコタクチケットなら支給品ボックスに入っているはずニヤ」

納品するよ。

自分の実力もよくわかった。

無言で立ち上がってから支給品ボックスへ行き、中からネコタクチケットを取り出した。そしてそれを納品ボックスへ。

ゲームのような音楽が流れることはなかった。

「お疲れ様ニヤ。帰りはゆっくり休むといいニヤ！」

ありがとう。安全運転で頼むよ。

アイルーの言葉を聞き、来るときと同じように馬車へ乗ったが、バルバレへの帰り道

はよく覚えていない。

「此方が報酬となります。お疲れ様でした」

バルバレへ着くと、ギルドの人から報酬を受け取った。でも、生肉と砥石以外の報酬は全て売却。

辺りは既に暗く、空を見上げると飲み込まれそうなほど綺麗な星空が広がっていた。身体が重い。今ならぐつすりと寝ることができそうだ。

ああ、でもその前に何か飯を食いたいな。でも何処で食べれば良いのやら……

……自分が情けなかった。

いけると思った。なんとかかなると思った。

「そんな上手くいかないことくらいわかってただけだなあ……」

そんな独り言が落ちると同時にお腹が鳴った。

「腹……減ったな」

集会所へ戻れば飯を食べることができただろうか。

なんて考え、集会所へ戻ろうとした時だった。

「おい、オマエ。そんな顔をしてどうしたニヤルよ?」

突然、そんな声をかけられた。

その声の方を向くと、何処かで見たことのあるようなアイルーが一匹。

「腹が減つてさ。どうにも元気が出ないんだ」

「なるほどグンニヤリニヤルか。せつかくだから、私が料理を作つてやるニヤル。その生肉を渡すニヤルよ」

何が何だかわからなかったが、言われた通りにそのアイルーへ先程受け取つた生肉を渡した。生肉を渡すとアイルーは俺に座つて待つていろと言ひ、調理を始めた。

石窯から肉の焼ける良い香りが広がる。その香りを嗅ぐと俺の腹はまた鳴つた。

そんな俺を見て、アイルーは笑つていた。

「ほら、石窯焼きこんがり肉ニヤルよ」

数分ほどで料理は完成。

こんがり焼かれた骨付き肉からは食欲の誘う香りが止まらない。

「いただきますー!」

一つ言葉を出してから、俺はその肉へ我武者羅に噛み付いた。噛み付いた瞬間口の中

には肉の脂と旨みが染み出す。

俺がこの世界へ来て初めて食べた料理は泣くほどに美味しかった。

「ご馳走様。ありがとう美味しかったよ」

「ニヤハ。まさか泣くとは思っていなかったニヤル」

うっせー、ほっとけ。

俺だつて色々あるんだよ。あの料理を食べた瞬間、溜め込んでいた感情が爆発した。そりゃあ涙くらい流れる。

「……また、食べに来ても良いか？」

「もちろんニヤル。お腹が空いたらいつでも来るニヤルよー！」

ありがとう。うん、また来るよ。

お礼を言い、手を挙げアイルーと別れる。

上を見上げれば其処にはやはり満天の星空。澄んだ空気にそんな星空良く映えた。

自分が今日成長することができたのかはわからない。それでも確かに進むことはできたんじゃないかなって思うんだ。

よっし、なんだか頑張れそうな気がしてきた。

「ああ、ちよつと待つニヤルよ」

振り返る。

どうしたのだろうか。

「300zニヤル」

……君、商売上手ね。

第3話～集会所でカンパイ～

離れた場所にいるのにも関わらず、歓声が聞こえた。

それはもう何度も聞いたもの。けれども何度聞いてもその歓声に慣れることはない。鳥肌が立ち、心臓が暴れる。

ピリピリと空気が震える。手足も震えているのは武者震いであつて欲しい。大きく息を吸う。

そして何時ものように声を出した。

「よっしゃ！ 行くかッ!!」

そう声を出し、自分に気合を入れてから何時ものように全力で闘技場へと続く門を潜った。

初めてのクエストから帰って来て次の日。ベッドに寝転がりながら、これからの予定について考えていた。

とてもじゃないが、今のままでは集会所のクエストなど受注することはできない。装備は初期のまま、技術だつてない。そして何より、自信の無さから来る重圧が俺を縛り付けていた。

このままじゃダメだ。

そんなことはわかってる。かと言って、採取ツアーよりも簡単なクエストなどはない、いくら採取ツアーに行つたところで慣れることはあつても、自信がつくことはないだろう。

それじゃあ意味がない。

強い武器を使う前に、頑強な防具を身につける前に自分自身をどうにかする必要があつた。

「……闘技大会行ってみようかな」

確か、HRが1でも闘技大会には出ることはできたはず。この世界の闘技大会の仕組みは良くわからないが、其処でソロスでも取ることができれば自信になる……たぶん。それから一ヶ月以上、ひたすら闘技大会へ出場し続けることになるが、最初はそんな気持ちだった。ただただ、自信をつけたい。その時はそれだけを考えていた。

「こんにちわー。闘技大会受付へようこそー。今後ともとことんよろしくー」

集会所へ行き、闘技大会の受付嬢へ話しかけた。気怠そうな顔。間伸びした声。変わった人。それが彼女の第一印象。

「ここでは、ハンターとモンスターの攻防を、お客様に楽しんでもらえる大会を開催しているよー」

ああ、アレってそう言う設定だったのか。まあ、それで入場料などを集めているのだろう。モンスターとハンターが戦っているところなど、一般人ではまず目にすることはできないだろうし、なかなか上手い商売かもしれない。

……あれ？　つまり俺は観客のいる前でモンスターと戦わなければいけないのか？

マジで？

「えと、闘技大会に参加したいんだけど、俺でも参加できるか？」

「うん、大丈夫だよー。君はまだHRが1だから出ることのできる大会は少ないけれど、参加できる大会もあるよー」

良かった。とりあえず参加はできるのか。

確か、イヤンクックとケチャワチャは最初から参加することができたはず。ケチャワチャのソロSは難易度が高い。けれども、イヤンクックのソロSなら充分狙うことはできる。

「じゃあ、イヤンクックをお願いするよ」

「はーい、イヤンクックの討伐だねー。えつと……もしかして一人で参加するのー？」

なんだろう。一人で参加するのはおかしいことなのか？ そりゃあ二人で参加した方が良いタイムが出るに決まっているが、二人で参加してしまつたら意味がない。

俺の目的は自信をつけるためにソロSを出すことなのだから。

「そのつもりだけど……一人だと不味いか？」

「ううん、問題はないよー。ただ一人で参加する人は珍しいんだー。基本的闘技大会は二人で参加するように考えているから。それで、武器は何を使うのー？」

二人でやること前提と言うのはゲームと一緒か。

ヤバイな。急に緊張してきた。ジャギイすら倒すことのできなかつた俺が大型種なんて倒すことができるのだろうか。

「片手剣で頼む」

「了解ー。闘技大会は4時間後にあるからそれまで待つててねー」

ガンランスでもSを取れないことはないけれど、安定してSを取ることができるのは片手剣。ただこの世界では使ったことないんだよな……練習なしでぶつつけ本番。大丈夫かなあ。

「ああ、よろしく頼むよ」

とりあえず、飯でも食べるか。

相変わらず賑やかな集会所内。

空いている席へ適当に座り、肉料理と飲み物を注文。お酒でも飲みたいところだったが、流石に我慢した。

料理が運ばれてくる間、集会所にいるハンターたちを眺める。どいつもこいつもゴツイ見た目ばかり、そして複合装備をしている奴は一人も見なかった。パツと見ただけど、全員が一式装備。この世界では複合装備と言う考えがないのだろうか。絶対に複合装

備の方が強いと思うんだが……

「……隣、いい？」

そんな考え事していると声をかけられた。

「ああ、大丈夫だよ」

とりあえずそう返してから、声をかけてきたハンターを見る。武器はハンマーのヴェノムモンスター。装備はジンオウガ一式。たぶんHRはまだ下位だろう。それは俺が採取ツアーに出かけたときにハイタッチをしたハンターだった。

そう言えば、女性のハンターもあまり見かけないな。見るのは野郎ばかり。そりゃあ集会所だつてむさ苦しくもなる。

「……ありがと」

そう言つてから彼女は俺の隣の席へ座り、野菜と酒を注文した。

いいな。お酒。俺も闘技大会が終わつたら飲もう。きつと最高に美味しいだろう。

「一人なのか？」

せっかく隣に座つたのだから話しかけてみた。彼女がハンマーを担いでいなかったら、きつと声はかけなかっただろう。ハンマー使いは貴重なのだ。

「そうだけど……悪い？」

「んなわけがない。パーティーでハンマー担ぐとタゲが散って面倒だし、ソロでも良いんじゃないか？ ただソロの奴は珍しいって思っただけだよ」

ソロなら振り向きスタンプで見方を吹っ飛ばすこともない。ハンマーならやつぱりスタンプを入れていきたいよな。

「そう……」

そんな俺の言葉に彼女はそんな言葉だけを落とした。

ふむ、どうやら会話は苦手っぽいな。それならもう話かけるのは止めておこうか。俺だって沈黙を会話で無理矢理埋めるのは好きじゃない。

その後は本当に会話などは何もなかった。

運ばれてきた料理へ食らいついたが、昨日ほど美味しいとは感じない。いや、普通に美味しかったんだけどさ。

そして終に闘技大会が開催される時間になった。

立ち上がってから大きく一伸び。ヤバイヤバイ、急に緊張してきた。本当に俺なんか闘技大会へ参加しても良いのだろうか。

「……行くの？」

「闘技大会へな」

アルコールが回っているせいかな、彼女の顔は少々赤くなっていた。お酒、いいなあ。「一人で？」

「そうだよ。今の俺じゃ誰かと組んでも迷惑しかかけないしな。さて、行くとするよ。またな」

「うん、また」

最初から上手くいくななんて思っていない。

そんじゃま、ボコボコにされてくるか！

時間になってから再び受付嬢の所へ行き、闘技大会の説明を軽く聞いてから、闘技場へと向かう。遺跡平原なんかと違い、闘技場は集会所の傍にあり直ぐに着くことができた。

とりあえず支給された武器防具を装備し、いくつかのアイテムを受け取る。

そして歓声が聞こえた。

まだ支給品ボックスやベッドが用意されている場所で、モンスターのいる闘技場へは入っていないと言うのに。

おいおい……思っていた以上にお客が多いんじゃないか？ 本当に勘弁してくれよ

……

手足が震える。呼吸は荒い。右手に付いている盾がすごく重く感じる。

けれども、もう逃げることはできそうにない。逃げる気もない。

「つしや！ いきます!!」

色々な感情が溢れ出しそうだったから、いつも以上に大きな声を出した。

討伐できるかなんてわからない。きっと観客からヤジを飛ばされ、指差されて笑われるだろう。

それで良いさ。

笑われて生きていこうじゃないか。

そう自分に言い訳をしてから、莫迦みたいに大きく聞こえる歓声の方へ全力で走っていった。

「お疲れ様ー。どうだったー?」

……ダメでした。5乙しました。

ヤバイよ、クックさん超強い。

あのヘンテコな嘴でつつかれるし、初めての乗りは失敗するし、尻尾振り回すし、爆弾当てると発狂するし、空飛ぶし、ヤジを飛ばされて泣きそうになるし、火吐くし……何アレ? どうすれば良いんだよ。いくら初めての武器とは言え流石に酷い。倒せる気がしない。

「最初はそんなもんだよー。この悔しさをバネにガンバレー」

はい、精進します……

受付嬢とそんな会話をした後、集会所にある机に突っ伏した。

緊張やら何やらで体はもうボロボロ。こんな調子で大丈夫だろうか。

「……闘技大会どうだったの?」

この沈んだ気分を変えようとお酒を頼もうとした時、そんな声をかけられた。顔を上げる。其処には出発前に隣に座っていた彼女がいた。もしかしてずっと此処に居たのだろうか。

「5乙で失敗。先生にボコボコにされたよ。良い勉強になりました……」
再び机に突っ伏す。

恥ずかしいと思ったらありやしない。

「そう……。これからどうするの？」

「闘技大会を続けるよ。このままじゃ終われない」

正直、滅茶苦茶悔しい。

もう少しなんとかなると思っていた。けれども、手も足も出ずボコボコにされた。僅かに残っていたプライドなど粉々に叩き潰された。

「そっか……。お酒、飲む？」

「はい、いただきます」

そんな彼女からの誘いに乗り、一緒にお酒を飲んだ。

グラス同士をぶつけると高い音が響いたが、賑やかな集会所ではやはり直ぐに消える。
カンパイ。身も心も乾ききった身体に冷たいエールが良く染みた。

ホント、このままじゃ終われないよなあ……

第4話～崖下からジャンプ攻撃～

片手剣の使い方を覚えるのに3日かかった。

乗りを失敗しなくなるのには5日かかった。

莫迦みたいな時間をかけてでもイヤンクツクを倒したのは、闘技大会へ出場し続けて7日目だった。その時からアレだけ飛ばされていたヤジが聞こえなくなり始めた。

12日目から安定してイヤンクツクを倒せるようになり、狙った部位へ狙った攻撃をできるようになった。

18日目で漸くパターンを構築。

そして、初めてAランクを取ることができたのは22日目だった。

五月蠅いと思っていた歓声は戦っている間、聞こえなくなつた。

そして闘技大会に出始めて31日目――

「よっしゃー！ 行かッ!!」

声を出し、気合を入れる。

五月蠅かった歓声はもう聞こえない。

自分でもどうして此処まで闘技大会へ拘わり続けているのかは、わからない。

最初は臆病な自分のために、自信をつけたいただけだった。けれども、今はもうそんなことは考えていない。ただひたすらに……一心にソロでSランクをとりたかった。

不器用な奴だつて自分でも思う。それでも一度やり始めたことを投げ出したくはなかった。あと少し、もう少しで目標へ手が届くから、ホンの少しだけ頑張ってみようと思ふんだ。

イヤンクツクの待つエリアまで、全力で走る。

右側の入口からエリアに入った瞬間、イヤンクツクと目が合った。まだ慌てない。決めたパターン通りに動かなければ。

エリアには所々に戦闘に使えるアイテムが落ちていて、その中でもエリア中段にある小タル爆弾を2つ拾う。

上段へ上り、羽を広げ莫迦みたいな格好で走ってくるイヤンクツクを誘導。イヤンクツクから軸をずらし、上段からジャンプ突進斬りとジャンプ斬りの二段ジャンプ斬り

を羽に当て、中段でダウンを奪う。

倒れたイヤンクツクの背に乗り、乗りダウン。

乗りダウンを奪い倒れたイヤンクツクの左羽へ、突進斬り、斬り上げ、斬り下ろし、斬り払い、水平斬り、斬り返しの定点コンボを3回。

立ち上がったイヤンクツクにできるだけ腹へ攻撃が当たるよう、もう一度定点コンボ。回転斬りまで派生を広げたところで、バックステップで下段に降りてから、中段へ向かつて突進斬り、ジャンプ斬り上げ、ジャンプ斬り。

イヤンクツクが突進をしないよう、立ち回りを変えながらローリングで上段へ。

そして上段からもう一度、二段ジャンプ斬り。これで2回目の乗りダウン。

乗りダウン後は1回目と同じように定点コンボ3回を左羽に当てる。

定点コンボ後、イヤンクツクが怒る前に先程拾った小タル爆弾を足元に設置。ローリングを1回し、イヤンクツクが小タル爆弾の爆音で怯んでいる間に砥石を使用。

此処までは計画通り。けれども此処からがいつも上手くいかなかった。だって怒ったクツクさん直ぐ走っちゃうんだもん。

乗り攻撃を失敗しないことや、相手から攻撃を喰らわないことは大前提として、良いタイムを出すのには、とにかくクツクを走らせないようにすることが重要。

それくらいわかっているんだけどなあ……

できるだけ走られないよう、イヤンクックから離れすぎないように立ち回りながら、乗り攻撃を当てる。相手の弱点である羽へ向かってひたすらに。

3回目の乗りダウン。今までと同じように左羽に定点コンボを3回。腹へ定点コンボを1回。

時計回りをしながら、突進以外の攻撃を誘導し、攻撃の間へとにかく乗り攻撃を当てていく。相手の攻撃は距離を取って躲すのではなく、できるだけローリングでフレーム回避。

4回目の乗りダウン。2回目の乗りダウンと同じよう、左羽へ3回定点コンボを決めてから小タル爆弾を設置から砥石。

そして、爆音で怯んでいるイヤンクックの耳が畳まれたのが見えた。

それが見えた瞬間、急に身体が重くなった。気がつけば、莫迦みたいに呼吸が荒くなっている。緊張だかなんだか知らんが、視界がぼやける。

ぼやけた視界のままジャンプ攻撃を当て、直ぐにローリング。

ああ、もう。涙邪魔！ 前が見えない！！

乱暴に涙を拭う。

爆音による怯みがとけ、怒りモードシヨン中のイヤンクツクへ、最初から持っていた閃光玉を当てる。視界が真っ白に変わる前に手で一瞬だけ目を塞いだ。

閃光玉で怯んでいるイヤンクツクへ上段から、下段からとにかくジャンプ攻撃。

そしてイヤンクツクの怯みがとけた時、5回目の乗りダウンを奪った。

自分の荒い呼吸音と、心臓の暴れる音ばかりが聞こえる。鮮明だった視界は白黒に変わり、時の流れる速度が恐ろしく遅く感じた。

倒れたイヤンクツクの羽へ突進斬り、斬り上げ、斬り下ろし、斬り払い、水平斬り、斬り返しの定点コンボ。

さらにもう一度、斬り上げをした瞬間。

イヤンクツクが倒れた。

用意されていた時計で討伐時間を確認。

其処には4分10秒と示されていた。

4分30秒切り。つまりSランク。

そのことがわかった瞬間——頭が割れそうなほどの歓声が聞こえた。急に手足から力が抜け、イヤンクツクの倒れている横に倒れ込んだ。

いつの間にか白黒だった視界も戻り、アレだけ五月蠅かった呼吸音や心臓の暴れる音は、歓声に飲み込まれ、ほとんど聞こえなくなっていた。

「……ホント、うるせえなあ」

そんな俺の独り言も誰にも届くことなく消えていった。

良かった。これで漸く前に進むことができる。

そのことが何より嬉しかった。

「おめでとー。まさか本当にSランクを取れるとは思わなかったよー。これで君もSランクハンターだねー」

もう何か色々と疲れていたから、さっさと家に帰って休もうとしていたら、集会所で闘技大会の受付嬢に捕まった。

「いや、いくらSランクだからって相手はクツクだぞ？ 練習すればこれくらい誰だってできるだろ」

ケチャワチャやリオ夫妻でソロSランクを出せれば自慢できるが、相手はクツク。それに本当に上手い奴なら俺の記録よりも、1分は早い。俺にはそんなことできる気がしないが。

あと1分とかどう縮めれば良いんだよ……

「うーん、でも、ソロSランクを取ったのは君が初めてだから、もつと胸張っても良いと思おうよー」

あら？ そうだったの？ それは意外だ。

ああ、でも、そもそもソロで闘技大会へ出ようとする奴がいらないのか。それじゃあ自慢しても恥ずかしいだけだ。

せめて4分は切らないと自慢なんてできないよなあ……

「張るのは意地だけで十分だよ。それにまだHRは1なんだ。まともな武器も防具もない奴がいきがつても仕様が無い」

「ひねくれてるねー」

うっさいわ。

そう言う性格なんです。

「それで、これからはどうするのー？」

「とりあえずは、武器と防具を作るよ」

武器はブーステッドハンマーを作るとして、防具は……どうすつかね。

ギザゴア倍化辺りを作れば良いけれど、下位なら一式でも十分な気がする。それならジャギイー式とかか？ 作るの楽だし。でもゴア装備を作っておけば、上位でも使えるんだよなあ。

これは悩みどころだ。

「そっか。じゃあ、もう当分は闘技大会出ないんだ……」

相変わらず騒がしい集会所内。そうだと言うのに、受付嬢のそんな言葉ははつきりと俺の耳まで届いた。もしかして、彼女は俺が出ること……いや、流石に考え過ぎか。

「そうだなあ。これからは忙しくなるし、闘技大会に出ている暇はないかもしれない」

丸々一ヶ月、闘技大会に出場し続けておいてアレだが、闘技大会に出てもメリットなどほとんどない。コインもいらぬし。

それでも……あの頭が割れそうになるほどの歓声は嫌いじゃない。

「ま、闘技大会は嫌いじゃないしな。ちよくちよく顔は出してやるよ」

「…………ふふっ。H R R Iなのになまいきだねー」

そう言つて彼女は笑つた。

次は片手剣じゃなく、ハンマーでソロSを狙える大会へ出るとしよう。そうなる
とジョーさんが一番楽だけど、いつになることやら……

「それじゃ、またな」

「またな」

そんないつも通りの別れと再会を約束する挨拶をして、彼女と別れた。
次に闘技大会へ出るときは、少しでも胸張つてやろうなんて自分に誓いながら。

闘技大会の受付嬢と別れたあと、腹が減つていたことに気付き、とりあえず飯を食
うことにした。体は疲れたままだが、何かを食べた方が良いに決まっている。

いつもよりも高い肉料理とお酒を注文。今日くらいは豪華にいかせてもらおう。

運ばれてきた料理を夢中で食らいついていると、俺が出ていた闘技大会を見たとか言
う、名も知らぬハンター数人が声をかけてきて、お酒を奢ってもらつた。なるほど、こ
う言うこともあるのか。ラツキーです。

そしてキンキンに冷えたエールを喉へ流し込んでいた時、あのハンマーを担いだ彼女
が見えた。

「何行くの？」

目が合い、言葉を投げかける。

「……グラビ」

そりやあ、またドギツイのに行くんだな……

が、頑張ってください。

「乗れ！ ひたすら乗れ」

「うん、わかっている。あと……おめでとう」

そんな言葉をぼそりと落としてから、彼女は集会所の出口へと歩いて行った。

ありがとう。君も頑張れよ。

どうやら彼女は相変わらずソロハンターを続けているらしい。オトモアイルーを連れてもない。そうだと言うのに、ジンオウガ一式ねえ……

素直じゃないな。

ま、他人のことを言えたもんじゃないんだけどさ。

また明日から忙しくなる。けれども、今日くらいはゆつくりさせてもらおう。

それくらいは許して欲しいかな。

第5話～アイテムポーチへ焼肉セット～

闘技大会も無事目標を達成することができた次の日の朝。自宅のベッドの上、今日も今日とて、ところどころにシミの見える天井をポーチと見つめながら考え事。

これからどうすつかなあ。

とりあえず武器と防具を揃えなければ何も始まらない。それはわかっているが、何を作るのが決めていなかった。

やっぱり最初に武器を作った方が楽だろうか。初めてMH4をプレイした時も、ダレンまでは初期防具でこり押すことができたのだし。まあ、ゴアには何度も乙させられたんだけどさ。

……ふむ。それなら武器から作ることにしよう。とりあえず、ウオーハンマーを2回強化してアクセルハンマーを作ろう。余裕があればブーステッドハンマーまで強化して、最終的にPower of Grease……は流石に厳しいか。

と、なると最初はアルセルタスだな。決して強い奴ではないけれど……虫モンスターって好きじゃないんだよなあ。だってアイツら、倒したのにも関わらず脚動くし。

まあ、どっかの女王虫よりは幾分かマシなだけだし。アイツとだけは二度と戦いたくない。この世界にはいいことを願おう。実際にあんなものを目にしたら発狂する自信がある。

さて、そうと決まれば行くとするか。アルセルタスくらいなら初期武器でもいけるだろう。閃光玉でもあれば楽だけど、残念ながらピカ虫も素材玉も持つてはいない。

そう言うアイテムも用意しておかないと、空の王者さんで苦労しそうだ。

アイテムボックスから、生肉となげなしのお金で買った焼肉セットを取り出す。

そう言えば、この生肉っていつのやつだろ。食べても大丈夫だろうか……。ま、まあ、食べてみたらわかるか。

「そんじゃま、行きますか」

いつものように一つ声を出し気合を入れる。お隣さんから壁ドンをされないよう、ボリュームは抑え目で。

「あれ、お隣さんかな？　初めまして。今から狩りへ行くの？」

家を出て直ぐ、女性のハンターからそんな声をかけられた。

たぶん、彼女は俺の隣に住んでいるハンターなのだろう。この世界に来て一ヶ月以上経つけれど、会うのは初めてだった。

装備は俺と同じブレイブ一式に武器が操虫棍の……たぶんポーンロッド。つまり、初期装備に初期武器。親近感が湧く。

「ああ、初めまして。アルセルタスを倒しに行こうかと思っていたんだよ」

虫棒ねえ……。強いのはわかってはいるけれど、どうにも使う気にはなれなかった。これもハンマー使いの僻みだろうか？

「おおー。徹甲虫かあ。そっか、そっか。え、えと……それ、私もついて行っていい？」

……………はい？

「そ、そんな顔しなくてもいいじゃんか！ だって一人じゃアルセルタスなんて倒せないんだもん。それに、私みたいな新米ハンターを手伝うようなもの好きもないし……見たとこ君だって、まだ私と同じ新米ハンターでしょ？ それなら一緒に戦った方がいいと思うよ！」

いや、確かに俺も採取ツアーしか受けことがないけれど……なんだろう。この彼女は地雷臭がヤバい。実際に戦ってみなければわからないけれど、今の俺には他人のことを心配する余裕なんてない。

俺はジャギイすら倒したことがないのだ。

「よしっ、そうと決まれば早速行こっか」

あの……まだ何も決まってるじゃないんですが。

ああ、ダメだ。彼女、他人の話聞かないタイプだ。

結局、彼女には押し切られ一緒に行くことになりました。

はあ、面倒な人と会っちゃったなあ……。まあ、女の子と一緒に狩りができると考えよう。

人生前向きに生きていった方が良いはずだから。

それが生きていくことの秘訣だと思う。

「こんにちは、ハンターさん！ こっちの受付に来るなんて珍しいですね。今日は闘技大会へは参加しないんですか？」

一ヶ月ぶりに下位クエストの受付嬢と会話。相変わらず彼女は元気だった。

「目標は達成できたからね。自分、闘技大会へ出ることはないと思うよ」

てか、どうして彼女は俺が闘技大会へ出続けていたことを知っているのだろうか。やっぱり噂になってたんかねえ。

目立つのは好きじゃないんだが……

「そうですか。じゃあ受付の彼女も寂しくなっちゃいますね。だからたまには顔を出してあげてくださいよ。よし、それじゃあくクエスト紹介です！」

偶には、か。まあ、それくらいなら出場しても良いのかな。俺だってできればクック片手ソロで4分を切りたいし。

そんなことを頭の隅で考えながら、紹介されたクエストを確認。

「このクエストを頼む」

「はい、美味との遭遇？ ですね！ 場所は遺跡平原でメインターゲットはアルセルタス一匹となりますが、大丈夫ですか？」

「うん、お願いするよ」

このクエストはキークエストだったはず。この世界にキークエストがあるのかはわ

からないけれど、やっておいた方が良いことは確かだ。

アルセルタス倒せるかなあ……。今更になって不安になってきた。大型種の中では最弱だと思うけど。

「参加人数はどうされます？」

「二人で」

「ちよ、ちよつと！ ち、違います。二人！ 二人です!!」

ダメか。もしかしたらいけるんじゃないかと思っただけれど、流石に誤魔化せなかった。本当にこの彼女と一緒に行って大丈夫なんだろうか。

別に自分が上手いとは思わなければならないけど、どうにも不安です。それに一人なら失敗しても迷惑が他人にかかることはない。その分、気は楽と言うもの。

「わかりました。お二人ですね。それでは準備ができ次第、出口へ向かってください」
受付嬢の話を聞き、契約金の300zを払った。

ああ、もう残り1万zを切ってしまった。お金もどうにかしなとなあ……。序盤では必ずと言って良いくらい立ち塞がってくれるお金の問題。効率の良い稼ぎ方って何があつたかな。

「そんじゃ、飯食つたら行くか」

「……………」

彼女へそう声をかけたが、無言で睨まれた。

睨むと言つても俺の方が背が高かったため、それは上目遣いに見えなくもなかった。頬なんかを膨らませているしちよつと可愛いかも。

むう、怒つちやつたよ。

「冗談だったんです。ごめんなさい。飯奢るので許してください」

此処は素直に謝罪。

パーティーの仲を悪くするわけにはいかないのだ。

「……うん、じゃあ許す」

そりゃあ、良かったよ。

これで3000Zの出費か。上手くいかなない人生ですなあ。

「龍頭とピンクキャビアの煮込み料理で」

空いている席へ座り、料理を注文。これでKO術がついてくれれば儲けものだ。どうやら食材は始めから揃っているらしく、食材クエストをやる必要はないらしい。食材クエストの中には旅団クエストも含まれていたからどうなるのかと思つたけれど、これは助かります。しかも食材は全て新鮮らしい。

お食事券いらないね。闘技大会に出場していたから結構持っているんだよなあ。

「うくん、私はどうしよう」

どうにも注文が決まらない様子の彼女。

俺の場合、クエスト前は多分肉と魚の煮込み料理しか頼まないんだろうなあ。これもハンマー使いの運命なんです。

「たてがみマグロとマスターベーグルの揚げ料理がオススメです」

「そうなの？ 食べたことないや。じゃあ、ソレお願いします」

できるだけ自然な流れで『防御術【大】』の発動する料理へ誘導。味は知りません。食べたことないもん。不味いということはないと思うけど。

運ばれてきた料理は彼女の口にあっただらしい。とりあえず一安心。

「あつ、そうだ。ちよつと買いたい物があるから、少し待っててくれんか？」

「うん、いいけど。何を買うの？」

「ピツケル」

武器を強化するために、大地の結晶と鉄鉱石が必要なんです。アクセルハンマーは一発生産ができるけれど、ウォーハンマーから強化していった方が安い。

良いよなあ、虫棒は最初から切れ味が緑ゲージまであつてさ。流石に優遇されすぎな気がする。

そして、160zのピッケルを5本とついでに砥石を20個購入。回復薬は買わないでおいた。支給品の応急薬だけでなんとかなるだろうし。

はあ、みるみる所持金が減っていくよ……。しゃーない、必要経費です。

買った商品をアイテムポーチの中へ入れる。どうやって入れたのかとか、聞いてはいけない。何故か入るんです。焼肉セットとかどうやって入ったんだろうか……

「よしや、準備できたし。行くか」

「そだね。行くっか。いやあ、緊張してきたよー!」

遺跡平原までは半日かかる。その間に緊張など抜けるだろう。

俺は緊張より、不安が抜けてくれない。うん、頑張ろう。

彼女と二人で集会所の出口へと向かう。

それじゃ、ひと狩りいきますか。

第6話　崖上からジャンプスタンプ

1、2、3、ほい。

音楽に合わせ、一定のタイミングで焼肉セットを使い焼いていた肉を上げる。

——上手に焼けましたー♪

こんがり肉ができあがると共に、何処からかそんな声が聞こえた。

あの肉を焼いている時に流れる音楽は、焼肉セットからとして……この声は何処から流れているんだろ。やっぱりこの声も焼肉セットからなのだろうか。相変わらず、わからないことだらけの世界だ。

「そう言えば、君ってハンターになってからどれくらい経つんだ？」

「んー、二ヶ月くらいかなあ」

あー、じゃあ俺よりも先輩だったのか。まあ、一ヶ月しか変わらないのだし、それほど違いはなさそうだけど。

「二ヶ月も経つのに初期装備のままかあ……」

もう一度こんがり肉を作るために、焼肉セットへ視線を移す。

「べ、別にいいじゃんか！ 私は私のペースで進んでいるのっ」

俺は独り言のつもりだったけど、どうやら聞こえていたらしい。失礼しました。

実際のところどうなんだろうね。ゲームなら二ヶ月もあれば大きい蛇さんを倒し、ゴ

リラの乱獲作業への準備へと移行しているだろう。

けれども、此処はゲームの世界じゃない。それなら二ヶ月経つても初期装備と言うのはおかしいことではないのか？ ちよつと遅すぎる気もするけど。

「今まではどんなクエストをやっていたの？」

音楽が鳴り止んでから3つ数えて肉を上げる。

——上手に焼けましたー♪

「……無駄に肉焼くのうまいね。えと、今までは採取ツアーで素材を集めたり、茸を採ったり、魚を釣ったりしてたよ」

ああ、なるほどそう言うクエストしか行っていなかったのか。

素材は沢山持っついていそうだし、防具や武器を作れば良かったのにね。俺の場合、素材なんて全く持っていないせいで強化のしようがない。

「えつと、じゃあ……もしかして、これが初めての狩猟クエスト？」

「うん、そうだよ」

……これ、大丈夫か？

いや、まあ、俺もこれが初めての狩猟クエストなんだけどさ。

うーん、ドスジャギイへ行った方が良かったのだろうか。

「へい、アイルーあとどれくらいかかりそうだ？」

「今、ちょうど半分くらいニヤ」

遠いですなあ……

焦らずのんびり行くとしよう。

「着いたー！」

遺跡平原ベースキャンプへ到着。

元気だなあ。

来る途中は肉を焼きながら、彼女に色々と教えてもらった。クーラードリンクや元気

ドリンクの味とか、そう言うことを。やっぱり味は大切なんだ。ドリンク系が全部携帯食料のような味だと流石に困る。

そして、俺がそのことを聞くと、そんなことも知らないの？　みたいな顔をされ、ドヤ顔で説明された。張り倒そうと思ったけれど、其処は我慢。そのせいで2つほど肉も焦がしたけれど、仕方無いことだと思う。

んでドリンク系の味だけど、どうやらそれほど悪くはないらしい。元氣ドリンクはなかなか美味しいとも言っていた。これで一安心。

「き、緊張するね」

俺だつて多少は緊張していたけれど、アレだ。自分よりも慌てている奴を見ると、緊張つて無くなるんだな。

「身体を動かしゃ大丈夫だろ。んじや、行くか。支給品、半分くれ」

「全部持つていつてもいいよ？　回復薬、持つてきてないんでしょ？」

そんなにいらんわ。たぶん3つあれば充分だろう。

全く準備をしていなかった俺と違い、彼女は薬草から回復薬グレートまでと、かなりの重装備をしてきているらしい。下位クエストなのに回復薬グレートついているのだからか。

回復を渋るハンターは下手なハンターの典型例だけど、だからと言ってがぶ飲みすれ

ば良いと言うものでもない。

支給品ボックスを開けると、其処には地図、松明、応急薬、携帯食料、携帯砥石、ペイントボールとガンナー用アイテム。そしてウチケシの実が入っていた。

むう、閃光玉はないのか。これは面倒なことになりそうだ。

支給品ボックスから地図と応急薬、ペイントボール、携帯砥石を取り出しアイテムポーチへ。携帯食料は飲みたくありません。

「っしやー！ 行るかー！」

「おおー！」

いつものように気合を入れるため声を一つ出す。

アルセルタスの初期位置はエリア4。段差が多く戦い難い場所。まあ、文句を言ったところで仕様が無いだけだし。

途中で鉱石を採掘しながら、アルセルタスの居るエリアに向かった。たぶん、ウォーハンマーを一回強化するのに必要な鉱石は集まったと思う。あと必要なのはアルセル

タスの素材のみ。

そして、エリア4に到着。

「うわっ……でか」

ぼそりと聞こえた彼女の声。

その視線の先には、羽音を響かせながら宙へ浮いている徹甲虫。

確かにアルセルタスは大きかった。けれども、なんだろうか……何故かそんなに怖いと感ぜない。

飛んでいるアルセルタスに気づかれないよう、こつそりと後ろへ回り込んでから、担いでいたハンマーを手に持ち、右の腰へ構える。

そして2回ハンマーが光ったところで、段差から飛びジャンプスタンプをアルセルタスへ叩き込み、空中から叩き落とした。んで、そのまま乗り。

サクサクとアルセルタスの背中を斬りつけダウンを奪う。

ポイントボールを当ててからダウンしたアルセルタスの頭へ縦1、縦2、そしてホームラン。これでスタン値を80蓄積。

ヤバイ！ ハンマー超楽しい！！

「わ、私も戦う！」

そんななんとも頼りなさそうな声を出しながら、彼女が此方に走ってくるのが視界の

端に見えた。

未だダウン中のアルセルタスへもう一度縦3攻撃。そしてホームランを当てたところで、アルセルタスがスタン。初期スタン耐性値は160以下っぽいね。上昇値はどんくらいだろうか。

彼女の振り回す虫棒に当たらないよう、立ち回りながら縦3を当てていく。

うーん、虫棒と一緒に戦い難い。ハンマーにもSAさえあればなあ……

アルセルタスのスタンがとけ、怒りモーシヨンへ以降。右腰へハンマーを構え後ろへ回り込む。アルセルタスの腹が上がるのが見えた。

溜め3、間に合わない。羽を広げ、今にも飛ぼうとしているアルセルタスの腹へカチ上げを一発。そして横ロリで距離を取る。

「おい！ 突進離陸来るぞ。よけろ!!」

明らかに飛ぼうとしているアルセルタスの頭の前に何故かいる彼女。

……何やってんすか。

「へ？」

そんな間の抜けた声を出しながら、彼女が吹っ飛んだ。

うん、まあ、そうなりますよね。

その後も、彼女はサッカーボールみたく面白いくらいアルセルタスに転がされ、終に救助アイルー……つまりネコタクに運ばれていった。

いや、うん。初めてはそんなもんだよな。わかるよ、俺だって最初はそんなもんだっ
た。

はあ、せめて一度くらいは空中から落してもらいたかったんだがなあ……

ベースキャンプへ運ばれて行った彼女を見送り、アルセルタスへ視線を移す。シヤリシヤリと空中で爪を鳴らしながら、此方に威嚇。

現在スタンプは2回、乗り1回。それぞれもう一度くらいはいけそうさ。此方の体力にはまだまだ余裕がある。てか、予想以上にアルセルタスの攻撃力が低い。

そして何より、これでソロ。

一番の得意分野だ。

漸くわかった。どうしてコイツを怖いと思わなかったのかが。確かにコイツはでない。けれども、一ヶ月以上闘技大会で戦い続けたアイツと違い——お前には絶望感が足りない。

さて、反撃開始だ。

「や、やった。勝ったんだよね？」

仰向けにひっくり返り、もう動くことの……いや、脚がまだ動いてるわ。うーん、いつ見ても気色悪いな。これだから虫系のモンスターは……

「そうらしいな。ギリギリだったけどね。まあ、とにかくクリアできて良かったよ」

詳しい時間はわからないけれど、20分針くらいだと思う。タイムにはまだまだ余裕があるけれど、あと1乙でクエスト失敗だった。

けれども最後の一撃は彼女だったんだよね。なんだろうか、この遣る瀬無さは。いや、まあ、別にトドメを刺したかったわけじゃないんだけどさ。

正直、クツクと比ベアルセルタスは弱い。武器の切れ味が残念過ぎるせいで、砥石が面倒だったのと、すぐ飛んでしまい時間はかかったが、難しいクエストではなかった。

俺はそう思うんだけど、2乙かあ……

まあ、初めての狩猟クエストなんだ。これから慣れていけば良いのかな。

「剥ぎ取らないのー?」

「ああ、うん。剥ぎ取るよ」

これから長い付き合いになりそうだし、お互い少しずつ成長していこうじゃないか。その前に、色々と言わなきゃいけないことがあるんだけどさ。

とりあえず今は、クエストが成功したことを喜ぶべきなんだろう。

先はまだまだ長いけれど、焦ったところで仕様が無い。自分のペースで進むのだ。

アルセルタスから3回剥ぎ取ったところで、帰る時間が来た。ハンターと言うのは自然と人間のバランスを考えなければいけない。だからやたらめったら剥ぎ取ることは御法度らしい。

「ありがとう。いただきました」

素材を剥ぎ取ったアルセルタスへ感謝の言葉を一つ落とす。

言葉にする必要はないかもしれないが、何故か言葉に出さなければいけない気がした。

「いや、最初はダメかと思ったけどクリアできて良かったね! 帰ったら打ち上げやろうよ。打ち上げ」

「おお、それは良いな。俺もお酒を飲みたいし」

クエスト中とは変わり滅茶苦茶元気な様子の彼女。

報酬金ももらえるし、今日はパーっとやろう。あのキンキンに冷えたエールを浴びるように飲んでやる。

「でもその前に反省会な」

「あつ、はい。よろしくお願いします……」

ゆっくりでも良い。

前に進んで行こう。

第7話～とりあえずはビール～

「そんじゃ、反省会始めるぞ」

「よ、よろしくお願ひします……」

クエストを終えての帰り道。ガタゴトと揺れる馬車の上、彼女に声をかけた。

一ヶ月以上前にも、この道を俺は通った。あの時は情けなさやら悔しさでいっぱいだったが、あの時よりも少しだけ上を向くことができていると思う。

「まずだな。乙るのは仕方ない。それも初めての狩猟クエストなんだ。ぶっちゃけ成功できただけで充分」

失敗することだって十分に考えることができた。彼女の实力はわからなかったし、俺だってクックク以外の大型種と戦ったことがなかったのだから。

しかもお互いに初期武器、初期防具。アルセルタスが予想以上に弱くて本当に助かった。

「そう言う技術的なことは言って直ぐに直るものじゃないから、これからゆっくりでも良いから覚えていけば良い」

明らかにモンスターからタゲを取られているのに、無闇に突っ込んでいくな。とか、SAのない俺へ後ろから斬りかかって来るの本当にやめてください。とか、乗りを失敗するなら乗り攻撃するな。とか言いたいことは沢山ある。

けれども、それよりも重要なことがあった。

「エキスってわかる？」

「それくらいならわかるよ。虫がモンスターから取ってきてくれる奴でしょ？ 緑色だと回復するから助かってる」

……態々緑エキスを取る必要ってあるのだろうか。納刀して薬飲んだ方が早そうだけど。

そしてどうやら、彼女の言葉を聞くにエキスのことはよくわかっていないらしい。そう言えばゲーム中でもエキスの説明って詳しくはされなかったよなあ。

「そのエキスなんだが、エキスには4種類あるんだ。赤、白、橙、緑の4種類。んで、難しいことは考えず、とにかく赤白橙の3色を取りなさい。モンスターによつては橙が取りにくい奴もいるから、その時は赤白だけで良いからさ」

操虫棍は強い。調整を間違えてるんじゃないかって言うくらいに強武器だ。全ての攻撃にSAがついているし、抜刀状態の移動速度も速い。耳栓スキルだつて勝手についてくる。そして何より火力がおかしい。ぶっ飛んでる。

けれども、それはエキスを3色取った状態での話。エキス無しの操虫棍ははつきり言つて弱い。エキスなしの操虫棍ならハンマーの方が強いくらいだ。

「ん〜……それを取るとどうなるの？」

攻撃モーシヨンの追加、攻撃力1.25倍、防御力1.08倍、スキル金剛体発動、全攻撃モーシヨンにSA付加、MPFはハンマーの約2倍となります。

どう見ても調整ミスです。本当にありがとうございました。

一刻も早い修正が望まれる。

それと比べハンマーはどうだ？ 肝心の縦2からホームランをする時にはSAがなく、スタンを取るために必須なカチ上げには、仲間の吹き飛ばしが付与。ダメージを出すために使うスタンプとホームランにも吹き飛ばしがついてくる。

モンスターの動きを考え、仲間の位置を見つつ漸く攻撃ができる。それでいてなんとかぶち込むハンマー最大火力技のホームランは、操虫棍のXXAループ1回にも勝てない。どうなつてんだよ。

まあ、だからこそハンマーは面白いのだが。

「3色取るとだな、こう……身体が光つて強くなる」

「意味わかんない」

いやだって、他に説明の仕様が無いんだもん。

「まあ、とりあえず騙されたと思つてエキスを取つてみてくれ。やってみればわかる。全然違うから」

「うーん、そんなに言うならやってみるけど……でも君つて操虫棍使つたことあるの？」
1000回は使いました。

ゲームの中の話だけ。あつ、とは言つても俺のメイン武器はハンマーだからな。浮気とかじゃないぞ。ゴリラを狩るのに少し使つただけです。

「あ……いや、使つたことないんだけどさ。ほら、興味があつたからそう言うことは詳しいんだよ」

「元気ドリントコの味も知らないくせに？」

それは関係ないでしょうが。

仕方無いでしょ、この世界へ来てまだ一ヶ月しか経っていないのだから。

「ま、色々とあつたんだよ」

俺がそう曖昧に返すと、彼女はふくと怪訝そうな顔を此方に向けた。

気がついたらゲームの世界にいただなんて言えるがわけない。それにしても、俺はどうやったら元の世界へ帰ることができるんかねえ……

その後も、ガタゴトと揺れる馬車の上での反省会は続いた。反省会と言っても、ほとんど雑談をしていただけな気もする。

動きや立ち回りを口で説明するのは難しいし、言葉だけじゃ聞いている側も理解し難い。結局のところ、上手くなるには実際に動いてみるのが一番なのだ。

そんな雑談をしながらの帰り道で気付いたことが一つ。1ヶ月前のあの日はこの道が随分と長く感じたけれど、こうやって話をしながらの帰り道はやたらと短く感じた。

「着いたー!」

元気な彼女に続き、俺も馬車から降りて体を伸ばす。むう、意外と疲れているな。

しかし、うむうむ。クエストをちゃんと成功して帰ってくることでできたのだし、今はなかなか気分が良い。

此処まで運んでくれたアイルーにお礼を言ってから集会所の中へ。報酬金と報酬素材をいただかなければ。

「お疲れ様です。此方が報酬金と報酬素材になります」

受付カウンターへ行くとそんな声をかけられてから、クエストの報酬を受け取った。素材は予想以上に多く、しっかりと確認はしていないけれど、たぶんアクセルハンマーを作るだけの量はありそうだった。

まあ、ブーステッドハンマーを作るのにまた素材がいるだけどさ。それに蛙の素材も必要だったよなあ……

報酬金は2乙してしまつたせいで、一人あたり350z。つまり料理一回分と少し。……こりやあ、本格的に金策を練る必要があるそうだ。

「わあー。素材がこんなにいっぱい……ふふつ、何作ろうかなあ」
嬉しそうな彼女の声。うん、良かったね。

とりあえず君は防具を作つた方が良いと思うよ。操虫棍なら初期のままでもそこそこ強いし。全く、妬ましい限りだ。

所持金は約6000z。まだまだ余裕はあるけれど、これから2回武器を強化して、さらに防具も作つて……ま、まあ、足りなくなつたらクエストへ行けば良いか。

とにかく今は――

「そんじゃ、ま。打ち上げでもするか」

「うんっ!」

キンキンに冷えたエールビールを浴びるように飲みたい気分だ。

「これからどうしよっかなあ……」

集会所で適当に空いている席へ座り、炙りポポノタンとタンジアビールを注文。運ば

れてきたタンジアビールを煽っていると彼女が呟いた。

ああ、ビールが身体にしみていく……

一方彼女は、ホピ酒とピンクキャビアを注文したらしい。

「俺はこれから防具を作つていく予定だけど、君も一緒に作れば良いんじゃないか？
まあ、ジャギイ一式で良いならだけどき」

ポポノタンは、適度な弾力があり噛めば噛むほど味が口の中へ広がった。少し濃いくらいの塩味が上手い。こりゃあお酒が止まらなくなりますね。

「へ!? え、えっ? 私、また一緒に行つても良いの?」

驚いたような彼女の顔。

そんなに驚くようなことじゃないと思うんだけど……アレ? 最初に声をかけてきた時からそう言うことだと思つていたけど、違つたのかな?

「そりゃあ別に構わないよ」

「でも私、足手まといじゃない?」

正直に言つてしまえば、その通りです。けれども、最初なんて皆そんなもんだらう。それにずっとソロで戦い続けるのが利口なことだとは思わない。グラビヤダレンとかソロじゃやりたくない。

そして何より、操虫棍を使い続けてくれるのなら、いつか絶対に大きな戦力となる。

「んなもん、練習すれば良いさ。ああ、でも嫌なら別に……」

「行く！ 行かせていただきます！ これからも、よろしくお願いしますっ！」

あつ、はい……

うん、此方こそよろしくお願いします。

ビールの入ったグラスを彼女に向ける。そして、彼女の持ったコップにコツンと当たった。一人で飲むお酒も嫌いじゃないが、やっぱり皆で飲んだ方が美味しいと俺は思うんだ。

そして一杯目のビールを飲み終わり、二杯目を注文しようとした時だった。

ぼてぼてと集会所の出口から歩いてくる、あのハンマーの彼女を見つけた。目が合ってから手を挙げると、彼方も手を挙げ此方へ近づいて来た。目が合っ

たぶん今、帰ってきたところだろう。グラビはどうなったんだろ？

「どうだった？」

「……30分針。二度とやりたくない」

お疲れ様です……

そうか毒ハンマーでもそんなにかかるのか。彼女の実力は知らないが、下手そうには見えない。少なくともソロでジンオウガ一式を作る力はあるのだし。

「そっちは？」

「漸くアルセルタスを倒したところ。んで、今はその打ち上げ」

「お金に余裕はないけれど、パーっとやりたい気分だったのだ。だからこれは必要経費だ」

「……一人で？」

「いんや、彼処で店員と喋ってる奴と一緒に」

「俺がそう応えると、彼女は酷く驚いたような顔をした。」

「何ですか？ 俺がソロじゃないのがそんなに意外だったんですか？ ああ、でもそう言えば俺って変なハンターって噂になっていたんだっけかな……」

「一緒にどう？」

「え、えと……私はいい。それじゃ、また」

「そう彼女が言葉を落とすと、慌てたように離れていった。」

「むう……フラれてしまったか。貴重なハンマー使い同士、もっと仲良くなりたいたいんだけどなあ。」

「とりあえず、ビールを追加で一つ注文。」

「さっきの人、知り合いなの？」

「ああ、そうだよ。たまに話をするくらいだけど」

グラビを倒したってことはHR3以上だよなあ。追いつける日は来るのかねえ。いつか一緒に狩りへ行ける日が来ると良いけど。

「あの子、いつもソロだつて噂だよ。すごいよね。私じゃソロで狩猟クエストなんて行ける気がしないのに。ただ、すごく無口なんだつてさ」

「まあ、喋りたがる奴ではなさそうだな」

愛想が悪いってことはないが、取っ付き難いところはある。

ふむ、決めた。自分の目標は彼女に追いつくことにしよう。此方は二人、彼方は一人。それなら追いつくことだつてきつとできるはず。

運ばれてきたビールを煽りながらそんなことを思った。

第8話～憧れの狩りピスト～

「アクセルハンマーまで強化すれば良いんだな。素材は……ああ、足りてそうだ。んで、お代だけ2400zだよ」

……2400zか。

財布の中身を確認。昨日パーっとやってしまったせいで残金は4000zほどしか残っていない。つまりこれで残りは1600zとなる。

カツカツだなあ……

「了解。そんじや、よろしく頼む。どのくらいで武器はできそうだ？」

「そうだなあ、明日の夕方までにはなんとか強化しておくよ」

ふむ。まあ、そんなもんか。それまではちよつと狩りへ行くことはできないな。別にハンマー以外の武器を担いで行けば良いけれど、俺の中のちっぽけなプライドはそれを許してくれそうにない。

「ほいほい、じゃあまた明日の夕方、取りに来るわ」

これでほぼ丸々二日ほど暇になってしまった。闘技大会へ出るという選択肢もある

けれど……どうにもそう言う気分でもなかった。やっぱりハンマーを使いたい。

しやーない。せつかくの機会なんだ。この世界へ来て初めての休日でも楽しませてもらうとするか。

昨日、飲みすぎたせいで痛む頭に辟易しながら、バルバレの中をフラフラと歩いてみる。

むう、背中にハンマーを背負っていないとどうにも変な感じがあるな。まるで、急にハンターから一般人になってしまったみたいだ。一ヶ月前にはこれが普通だったんだけどなあ。

そして、バルバレの中はとても賑やかだった。まだ朝も早いと言うのに、絶えず客引きの声は聞こえてくるし人も多い。何の料理かわからないが、非常に良い匂いがし、俺の腹の調子を崩される。

お金に余裕があれば買っても良いんだがなあ。

まだまだ序盤。無駄遣いはできそうにない。

さらに防具を一式作れば5000zほどはかかるだろう。あまりやりたくないけど、アイテムボックスにあった初期武器全部売っちゃおうかな。そうすれば多少は資金を

得ることが……

「あつ……こつ、こんなにちは」

これからの資金をどうするか考えつつ、フラフラ歩いていると、そんな小さな声が聞こえた。声の方を向くと、其処にはハンマーの彼女がいた。

「よ、おはよう」

グラビと戦ったばかりだと言うのに、こんな朝早くから随分と元気なことで。一方、俺の相棒はと言うとまだ酔いつぶれたままだろう。昨日は運ぶのが大変だった。住んでいるのが隣で助かったよ。

「こんな朝早くから何やってんの？」

「……あ、新しい武器でも作ろうと思つて。そつちは？」

ヴェノムモンスター一本あれば、下位クエストは全部クリアできそうな気がするけど……まあ、どうせなら色々な武器を使いたいよな。

「漸く武器を強化したとこ。でも完成するのは明日の夕方だつてさ。……ゲームなら一瞬だったんだけどなあ」

「……ゲーム？」

ああ、しまった。独り言が溢れていたか。直ぐ口に出してしまう悪い癖だ。

「いんや、なんでもない」

慌てて誤魔化してはみたけれど、彼女は怪しんでいる様子だった。

説明しても良いけれど、説明したところでどう仕様も無い。それなら黙っていることが吉と言うもの。余計なことは言わない方が良いのだ。

「んで、新しい武器って何を作ろうとしたの？ パワー of グレアとか？」

できれば俺も作りたいんだけどなあ。何よりも切れ味が青まであると言うのが魅力的。ただ、ニトロブートハンマーの方がカッコイイ。カチ上げをした時に出るブーストが本当に素敵。これは悩みどころです。

「そうじゃなくて、フォルティツシモを作ろうと……」

「えっ……狩猟笛？」

あ、あれ？ ハンマー使いじゃなかったのか？ 確かにハンマーを使う人は狩猟笛を使う人が多い。俺だってそうだった。『ハンマー変えてきてください』とか言われたときは笛を担いだし。まあ、その後『笛もやめてください』と言われたので、素直に退室したんだけどさ。

笛、強いのかなあ……。過小評価されている武器の代表例だと思う。

「元々は笛だもん。ただソロだと厳しいからハンマーを使ってた」

確かにソロで笛は厳しいか。俺も笛は好きだけど、ソロでやる気にはならん。ソロで

やったとしても、ジンオウガくらいかな？ 狩りピストの道は険しいのだ。

俺の偏見でしかないが、笛使いはどことなく親近感が湧く。笛使いから見ると、良い迷惑な気もするけどさ。

ハンマーは立場弱いんです。

「んじゃあ、パーティーを組むってことか？」

ずっとソロでやっていくのかと思っていた。でも笛を作るといふことはそう言うことなのかもしれない。

ヤバいな。彼女に追いつくことを目標にしたと言うのに、余計に差が開くかもしれない。もう少しゆっくりしていつても良いんだよ？

「そんな予定はないけど……ただ、ほら。作りたかったから」

そんな言葉を落とした彼女は少々恥ずかしそうだった。

まあ、その気持ちはわからんでもない。使うかはわからないけれど、作るだけ作ることはあるのだから。そして専用装備まで組んで、結局マイセットを埋めるだけの存在となってしまう。モンハンあるあるだと思う。

てか、そんなに笛が好きなら誰かとパーティーを組めば良いのにな。彼女だって下手ではないはず。それなら組んでくれる奴も多そうだが……

ソロが好きなのかね？

俺のHRが彼女と同じだったらパーティーに誘っても良かった。けれども、それはやめておくことに。だってどう考えても彼女の足を引く張る未来しか見えなかったから。いつか胸張って彼女を誘うことができる日が来るだろうか？ そんな時は笛、お願いしますよ。

その後、彼女と適当に雑談をして、一緒に昼飯を食べたところで別れた。この後、どうするのか聞いたら――

『グラビでストレス溜まったから、ワンコで発散してくる』
だそうだ。

俺はストレス発散する時はワンコよりレイアだ。笛だったらワンコでも良いんだけどさ。

彼女と別れたあと、再び一人に。

はてさて、どうするか。武器が完成するまで、まだ一日以上もある。武器が完成したら当分はドスジャギイと戯れる日が続くだろう。

武器と防具が完成して漸くスタートラインに立つことができる。長い道のりだ。

「しゃーない。家でのんびり過ぐすか」

そんな独り言を一つ落とした。

止まっていることが苦手なこの性格。

せつかくの休日なのに、全く休みにならない。困ったもんだよ。

たぶん、これは夢だと思う。

世界にはまとまりが見えず、随分とふわふわとした感覚。

明晰夢とでも言うのだろうか。けれども、それはあまり好きな感じではなかった。

そんな夢の世界にはハンマーの彼女とあの相棒がいた。

何を喋っているのかはわからない。けれども、俺に対して何かを喋っているようだ。た。

声は出ない、身体も思ったように動いてくれない。やがて世界が崩壊し始め、ついに黒一色の世界となった。

自分がどんな状況なのかもわからない。それでも、あの二人の姿ははっきりと見える。

悪夢ではない。そうではないけれど、さつきと目が覚めてくれないものだろうか。嫌な予感がするんだ。そして、当たるのはいつだって嫌な予感だ。

「どっちを選ぶの？」

そんな二人の声がはっきりと聞こえたところで目が覚めた。

「あつ、起きた。んもう……寝すぎじゃない？ だってもう夕方だよ？」

目が覚めて直ぐに見えてきたのはいつもの天井だった。

どうやら帰って来てから、いつの間にか寝てしまったらしい。あまり良い目覚めではない。覚えていないけど、悪夢でも見ていたんかね？

「んで……なんでいるの？」

此処は自分の家だ。それは確かなはず。そうだとするのにも、何故かあの虫棒を使う相棒が俺の家に来た。不法侵入ですよ。

「二応、扉は叩いたんだよ？ でもなかなか出てこないから入っちゃった。鍵もかかってなかったし」

おろ、そんなに熟睡していたのか。

思っていた以上に疲れていたんだらうかね。

「まあ、いいや。んで何か用事でもあるのか？ 悪いけど今は武器を強化してもらっているから、武器がないんだ。だから早くても明日の夕方までは狩りに行けないぞ」

「えっ、自分だけ強化してたの？ ずるい！」

強化ぐらい好きにさせてください。

それに君の武器を強化するには素材が足りないぞ。ボーンロッドの強化って確かケチャ素材が必要だし。そしてこの彼女は絶対にケチャを倒していない。

「まあ、いいや。それで別に私も狩りに誘おうとしていたわけじゃないよ。どうしてわからないけど、身体の調子も悪いし」

身体の調子が悪いのはただの飲みすぎだろ。

どうやら昨日の記憶はなくなっているらしい。いつの間にか自分の家に帰っていた

ことを、疑問に思わなかったのだろうか？

「ん〜……じゃあどうしたの？」

「一緒にご飯、食べに行こうよ」

ああ、お食事のお誘いでしたか。

お金は少ないけど、俺には闘技大会で溜め込んだお食事券がある。

「了解、んじゃ行くか」

「おおう、れつつ〜」

昨日はボロボロだったのにも関わらず、今日は元気な様子。クエスト中もこの調子でも頑張ってくれませんか？

狩りへ行くのはもう少しかかるけれど、新しい武器を使うのは楽しみ。

大丈夫、俺はちゃんと前に進んでいる。止まることは苦手なんだ。ゆっくりでも良い。このまま突き進もう。

その後、集会所で相棒と一緒に夕飯を食べたわけだけど、お酒を頼もうとしやがったから全力で止めた。

いや、ホント運ぶの大変だったんだよ。

第9話く振り向きヘアッアッオーウく

「ほれ、アクセルハンマー完成したぞ。割と良いできだと思う。大事に使ってくれや」
昨晩は相棒と一緒に夕飯を食べ、その後は自分の家に戻り早々に寝てしまった。だつてやることないんだもん。

次の日になり、例のごとく相棒と一緒に闘技大会を見に行かないかと誘ってきた。自分以外のハンターの動きを見るのは勉強にもなるし、最初は行こうと思っただけで入場料が予想以上に高く、お財布と相談した結果やめておきました。

あんなに入場料高いならもう少し報酬金が高くて良いのに……

「おおー、ありがとう！」

その結果やることもなくなり、今日は道端にいたプーギーの腹をひたすらつついていた。あれは癖になるやわらかさだったな。

ただ……これほどまでに一日を無駄にしたのは初めてかもしれない。

そして夕方となり、うきうき気分で加工屋の元へ。

アクセルハンマーは名前にハンマーとつくものの、見た目はどう見てもドリル。しか

し、それがカッコイイ。何がすごいってこの武器、噴射口みたいなどころからバーって出るんだよ！ バーって!!

そしてドリルだ。超かっこいい。

さらに攻撃力もウォーハンマーからは武器倍率計算で40もアップ。切れ味も緑となり補正が1.05倍となる。そして、斬り方補正がなくなるのはかなり嬉しい。会心率は落ちてしまうけれども、そんなことは些細なことだ。

ああ、今すぐにも狩りへ行きたい……

このハンマーでモンスターの頭をガツンガツンやりたい。

とは言うものの、残念ながら今すぐに行くことは無理だろう。ギルドによって夜の遺跡平原での狩りは禁止されているのだから。

そう言えば、ゲームの中でも遺跡平原は昼間しかなかったもんな。

逸る気持ちをどうにか抑え、今日はおとなしくしているのが吉。既に相棒には朝一でかけると伝えてあるし、我慢するでしょう。

「しっかし、お前さんもハンマーを使うだなんて変わっているな。ハンマーを作るのなんて久しぶりだったよ」

そんな言葉を加工屋のおっさんが落とした。

……どうやらこの世界でもハンマーを使うハンターは少ないらしい。事実、この加工

屋以外の加工屋ではハンマーなど作ったことがないと断られた。

結局どんな世界へ来ようとも、ハンマーは弱い武器のままなのかもしれない。

「どうしてお前さんはハンマーなんて使っているんだ？」

どうしてか……ねえ。

正直、俺にもよくわからない。気がついたらハンマーばかりを担ぐようになっていた。そのことを気付いた日から俺のメイン武器はハンマーになったのかもしれない。

じゃあ、どうしてハンマーばかりを担ぐのか……

んなもん答えは決まっている。

「コイツが一番カツコイイからだよ」

こうやってハンマーを使い続けているのは、俺なりの抵抗なのかもしれない。近接系の頂点から叩き下ろされ、今では邪魔とすら言われる始末。ハンマーはそんな武器だ。

それでも、そんなことがどうでも良くいらくにハンマーはカツコイイのだ。理屈じゃ説明できない。使ってみればわかる。コイツの魅力が。

「そりゃあ、違いねえな」

俺がおっさんの質問に応えると、そう言っておっさんは笑い、装備の加工に使うであ

ろうハンマーを持ち上げた。

気に入った、今度飲みに行こうぜ。

「いや、やめておくよ。最近カーチャンが怖いんだ。その代わり今後とも武器防具の加工はウチでお願いするよ」

了解、次は防具をお願いすると思う。

そしてどうやら、どこの世界でも母は強いらしい。

「………そんじゃ、行くか」

「おおー」

食事も済ませ朝一番に、相棒と出発。

クエスト名は狗竜の狩猟を披露せよ！ 場所は遺跡平原でターゲットはドスジャギィ1頭。上位クエストならドスジャギィ2頭のクエストがあるはずだけど、まあ、しやーない。

のんびり素材を集めることにしよう。

「ねえ」

いつのも馬車に揺られ、朝の新鮮な空気を感じて欠伸を一つ。

「うん？ どした？」

「なんだか随分眠そうだけど、何かあったの？」

別にどうもない。昨日漸く新しいハンマーができた。家に帰ってからそれを眺めたり、どう攻撃すればカツコイイか考えたりしていたら、寝られなくなっただけ。ベッドへ横になってもワクワクしてしまい、寝られなかった。

遠足の前の日は絶対に寝られないタイプなんです。

「いや、ちよつと寝不足なだけだよ」

「何やってんのさ……」

まあ、寝不足とは言っても身体の疲れが抜けていないわけでもないし、問題はないと思う。遺跡平原へ着くまで寝ても良いが、一度寝てしまうと身体が重くなる。それは嫌だった。

帰りは爆睡すると思うけど。

「んじやあ、これでも飲みなよ」

そう言つて相棒が何かの液体が入ったボトルを一つくれた。

携帯食料ではなさそうだけど、なんだろうか？

「なにコレ」

「ただの元氣ドリンコだけど……ああ、そう言えば飲んだことないんだっけ？」

ほほー。これが元氣ドリンコなのか。いつもお世話になっていました。

元氣ドリンコの見た目は黄色い液体。ハチミツとニトロダケか眠魚とトウガラシの調合で元氣ドリンコはできる。見た目は黄色いのだし、これはハチミツとニトロダケだろうか。てか、コレどうしたんだろう？ 買ったのかな？ ゲームでは売っているところを一度も見たことがないけど。

「買ったの？」

「ううん、私が調合した」

アレ？ もしかしてこの子つて意外とできる子だったりするの？

俺なんてまだ調合したことないのに。てか調合書すら持つてない。お金のない今の状態じゃちよつと買うことができないのだ。

もらった元氣ドリンコのキャップを開ける。すると、ハチミツの甘い香りがした。や

はりハチミツとニトロダケから作ったつぼい。

そして、そのまま一気に喉へ流し込んだ。

「あつ、意外と美味しい……」

「ふふん、なんとたつて私が作ったからね！」

てか、ハチミツの味しかなかった。けれども、喉に張り付くほどの粘っこさもなくて、以上に飲みやすい。そして飲んだ瞬間、眠気が消し飛んだ。便利だな、おい。

「ありがと。元氣出たわ」

「どういたしまして。でも元氣ドリンクくらいならいつでもあげられるよ？」

そりゃあ助かるよ。

また眠くなったときはお願いしよう。

眠気もなくなり身体の調子も良くなった。

とは言っても遺跡平原へ着くまではまだまだ時間がかかるから、適当に雑談をしながらガタゴトと揺られ続けた。

そして揺られ続けること数時間。

「着いたー！」

そんなこんなで、ようやくと遺跡平原へ到着。遺跡平原にこれだけかかるのなら、地底洞窟や氷海、原生林はどれくらいかかるのだろうか？

「んじや、サクツと狩るか」

「お、おおー！」

明らかに緊張している様子の相棒。俺もそうだけど狩猟クエストはこれが2回目。まだまだ慣れはしない。まあ、当分はドスジャギイをひたすら狩ることになりそうだし、直ぐに慣れるとは思うけど。

支給品ボックスから地図と応急薬3つ、携帯砥石2つを受け取り出発。

「あれ？ それだけで良いの？」

「ああ、残りは全部やるよ」

たぶん、すぐ終わる。

だつてねえ、流石にドスジャギイが相手じゃねえ……

ドスジャギイの初期位置はエリア6。けれどもあのせつかちさんは直ぐにエリア8へ移動してしまう。まあ、8の方が戦いやすいから助かるんだけどさ。

「へい、相棒。この前教えたことちゃんと覚えてるか？」

「うん、とりあえずエキスを取れば良いんでしょ？」

正解です。しつかり頼むよ。エキスを取るだけで世界が変わるから。

途中にいたケルビをスタンさせ角を獲ったり、アプトノスから生肉をいただいたりしながらエリア8を目指す。

俺も漸く小型モンスターを倒し、剥ぎ取ることに慣れてきた。人間、変わろうとしなくても変わるもんなんだな。

そしてエリア8へ到着。

「アッアッオーウ！」

数匹のジャギイの中に一際大きい奴が一匹。俺たちに気づいたのか、上を向きドスジャギイは叫んだ。

そう言えば、前回俺はコイツにやられたんだよなあ……
さて。

ひと狩りいきますか。

背中で担いでいたハンマーを右の腰で構える。

ドスジャギイが此方へ近づいてくるのが見える。そして、その立派な頭へハンマーを振り下ろした。

直ぐにローリングで硬直を回避。もう一度右腰へハンマーを構え、今度は一度ハンマーが光ったところでドスジャギイの頭へカチ上げ。ハンマーを振り上げた瞬間、アクセルハンマーの噴射口から炎のようなものが噴射。

超カツコイイ！

カチ上げを当てた後は直ぐにローリングをして距離を取る。そしてまたハンマーを右腰へ構えて、カチ上げをもう一発。これでスタン値を107蓄積。

ドスジャギイの尻尾攻撃をローリングで躲してから、頭へ横ぶり、縦2。これで合計スタン値は144。んで、ドスジャギイがスタン。

ドスジャギイの何が良いつて、スタンをしても頭が動かないことだ。他のドスたちもコイツを見習って欲しい。しかも頭の方が硬い奴とかいるし。

そして、赤白のエキスを漸く取り終えた相棒が近づいてくるのが見えたため、虫棒の攻撃が当たらない場所へ動いてから、縦3ホームランを一回。横振り始動のホームランを1回当てる。

ホームランを出す度に炎を噴射するアクセルハンマー。うむうむ、やはりギミックの

ある武器は使っていて楽しい。

腕にかかるヒットストップが、弾けるスタンエフェクトが、振り上げ、振り下ろすこの感覚が最高に気持ち良い。

これだからハンマーはやめられない。

ジャギイの攻撃は溜め攻撃へ移るモーションのSAをいかして無視。あとは相棒に当たらないよう、スタンを取るまでひたすらドスジャギイの頭へスタンプとカチ上げを繰り返すだけだ。

噛み付き攻撃は軸をずらすことで躲し、飛びかかり、尻尾振り、タツクルはローリングで躲す。攻撃判定も短く、隙だらけ。正直負ける気がしない。

ジャギイに何度か尻餅を付かされたが、それ以外は攻撃を受けることはなかった。

戦い続けること数分。3回目のスタンを取りホームランを決めたとき、ドスジャギイが大きく吹き飛び、そのまま動かなくなった。ドスジャギイのエリチェンはなし。運が良かった。

「おっ？ おおー！ 倒した、倒したよ!!」

前回とは違い、今回は乙ることなく戦い続けた相棒。相変わらず後ろから斬りかかっ

てくれたが……まあ、お疲れ様。

急いでドスジャギイやジャギイから素材を剥ぎ取る。妖怪イチタリナイを出さないためにも、コツコツ集めねば。

「ありがとうございます。いただきました」

前回と同じように感謝の言葉を一つ落とす。

できるだけ大切に使用してもらおうよ。

とりあえず1頭。

はてさて、あと何頭分の素材が必要なんかね？

第10話～後ろから飛び込み斬り～

「乾杯！」

そんな声とともにタンジアビールの入った器をぶつけると、甲高い音が響いた。

あまり疲れていないと思っていたけれど、帰り道の記憶はない。気がついたらバルバレに帰っていました。まあ、いくら元氣ドリノコを飲んだところで、昨晚はほとんど寝ていないのだ。帰り道で寝てしまうのも仕方無いね。

「私今回一度もネコちゃんに運ばれなかったよ！」

グラスを傾けながら、胸を張って相棒が言った。

俺が寝てしまったせいで反省会はしていない。正直なところ、もつと直してもらいたいところはある。斬れ味がなくなったら直ぐに研いで欲しいとか、もつとモンスターの動きを見て攻撃して欲しいとか、だから俺に斬りかかるの本当にやめてくださいとか。けれども、前回と比べると彼女は格段に上手くなっている。それにこの相棒は今回一度も乙らなかった。それだけで今は充分だろう。

もしかしたら、慣れていないだけでセンスはあるのかもしれない。

狩猟クエストはまだ2回目。そうだと云うのに、足を引つ張るまではいっていかないのだから。闘技大会で目標を達成するまで一ヶ月もかかったどつかの誰かとは大違いだ。

「うん、今回は良かったんじゃないか？ 次も頼むよ」

「ふふん、任せなさい」

ドスジャギイも予想通り強くはなかったし、これなら防具だつて直ぐに作ることでできそうだ。てか、アクセルハンマーが予想以上に強い。やはり斬れ味が緑まであるのが大きいのだろう。

「防具つてどれくらいでできるの？」

「ん〜どうだろう。加工屋に聞いてみないとわかんないけど、あと3、4匹倒せば作れるんじゃないか？」

一日一頭倒すとして、一週間もあれば一式装備を用意できる。問題はクエストがあるのかと云うことと、お金が足りるかと言ふこと。

それに防具ができたならアクセルハンマーを強化しないといけないし、彼女の武器だつて強化する必要がある。絶対にお金が足りない。

「うへえ、そんなにかかるんだ……」

レア素材がないだけまだマシな方だと思ふ。この世界にあるのかわからないけれど、発掘武器があればもつと地獄だ。死んだ目をしながらゴリラを狩り続けるハメになる。

そりゃあ、モンキーハンターとか言われもする。

MH4の中で一番倒された大型モンスターって、あのゴリラじゃないだろうか。俺もゴリラだけ討伐数の桁が違ったし。まあ、ハンターが乙らされたモンスターもあのゴリラが一番だろうけど。

「まあ、のんびりやれば良いさ」

「うん、そだね」

……彼女は操虫棍使いだ。流石に今はまだ俺の方が火力を出せてはいるけれど、彼女の方が火力を出す日が必ず来るだろう。それも決して遠くない未来で。

ホント、世知辛い世の中だよ。

そんなことを考えながら飲んだビールはいつもより苦く感じた。

集会所で相棒と別れ、ほろ酔い気分で帰宅する途中、ハンマーを強化してもらった加工屋へ寄りジャギイ一式にはどれくらいの素材が必要か聞いた。

んで、わかったことだけど、どうやらドスジャギイ素材は直ぐに集まるっぽい。けれどもジャギイ素材がなかなか手強そうだった。そして鉱石系も全然足りない。

ドスジャギイはあと2頭も倒せば充分だろう。ジャギイ素材はその序でに集めればなんとか……なるかな？

そして次の日。

「ドスジャギイのクエストですね！ えと……ああ、ありますよ。それにドスジャギイは依頼の多いモンスターですし、クエストがないと言うことはほとんどありません」

「んじゃあ、それお願い」

「わかりました。参加人数はお二人でよろしいですか？」

「うん、そだね」

昨日と同じように朝早くから相棒と合流し集会所へ。

朝が早いせいか集会所はいつもほど騒がしくはなく、どことなく新鮮な気持ちになる。

クエストを受注し、空いている席へ座ってから料理を注文。いつも通り肉魚の煮込み

料理。

「君ってその料理好きだよな。そんなに美味しいの？」

美味しいことには違いない。ただ、好きかと言われるとどうだろうか？ KO術が発動してくれる料理が他にもあれば良いのよね。

「クエスト前はこの料理を食べるって決めているんだよ。もう儀式みたいなもんだ」
「ふくん、変わってるね」

そんな言葉を落とした相棒が頼んだメニューはピンクキャビアとヘブンブレッドの炒め物。確か、医療術が発動したと思う。

俺も今度は違う料理を食べてみようかな。

「んじゃ、行くか。ああ、そうだ。採掘しないといけないからピッケルを持って行ってくれ」

料理を食べ終わってから声をかける。

今日中に鉱石系を集められれば後々が楽になる。早く防具を作り強いモンスターと戦いたいのだ。

「それなら大丈夫だよ。ピッケルならいつも持ち歩いているもん」

……準備万端なのね。きつとこの相棒のアイテムポーチは常にいっぱいなのだろう。

俺なんて砥石とピッケル、焼肉セットしか持ってないのに。回復薬くらいは持ち歩こうかな。

準備をしてから集会所の出口へ。

さくつと行つてきますか。

「つしやー！ マカライト出た！」

遺跡平原に着き、昨日とは違つて今日はまず採掘から始めた。

そして嬉しそうな声を出した彼は、どうやら私の相棒らしい。元気良いね。普段はちよつと冷たそうなどころがあるし、実際意地悪なことを言ったりするけれど、本当は優しくて明るい性格なんだと思う。

私は大型のモンスターなんて一人じゃ絶対に倒せない。初めて対面した時も身体が

固まりました。そんな情けないハンターなんです。

けれども、彼はそんな私のことを「相棒」と呼んでくれた。それが、嬉しかった。

「あと一個出てくれれば、鉱石は全部集まるんだけどなあ」

ふふん、私はもう集まつてるけどね！ コツコツと採取ツアーをしてきたかいがあった。

彼の知識はすごく偏っている。普通に生活していれば知っていることを彼は知らない。けれども、どうしてそんなことを知っているのかってことを知っていた。

使ったことないはずなのに操虫棍の使い方は私よりもかなり詳しいし、他の武器のことだって詳しい。たまくにモーション値とか倍率とか意味のわからないことを言うけれど、それでも彼の知識が多いことは確かだと思う。

まだ3色集めたことはないけれど、エキスの大切さも少しだけわかった。

アレ取るとすごく動きやすくなるんだね。

「むう、出ないか……しやらない。ドスジャギイ倒しに行くか」

「おおー」

彼は私のことを知らなかっただろうけど、私は彼のことを知っていた。声をかけたのは、あのアルセルタスのクエストへ行つた日が初めて。

けれども、私はそれよりも前から彼のことを見ていた。
闘技大会でイャンクックとソロで戦う姿を。

最初に彼を見たときは、あまり上手くないなと思っていました。乗りは失敗しちゃうし、態々モンスターの攻撃が届くところで戦い続けようとするし、回復をしないから直ぐに運ばれちゃうしと。

そんな彼の戦い方ははつきり言つて異常。ハンターの戦い方はヒット&アウェイが基本。でも彼は違う。インファイトだ。回復もガードも無しでひたすら相手を斬り続ける。そんな戦い方だった。

私は初めて見た。そんなふうに戦う人を。そして、そんな姿に魅了された。

たぶん、他の観客も同じだったんじゃないかな。最初は皆彼にヤジを飛ばした。でも日が経つに連れ、彼の被弾は減り終にソロでイャンクックを倒した。その時からヤジが声援に変わった。

闘技大会へソロで出場する人はいないって聞いている。それでも彼は頑なにソロで出場し続けた。何を思っていたのかはわからない。毎日見に行けたわけでもないけれど、当時の闘技大会はたぶん彼が一番人気だったと思う。

私も彼みたいにならなかった。でも、やっぱり私じや彼にみたいにはなれないってわかってた。彼は何か違ったから。根元から、根本的に……

だから私は声をかけた。一度でも良い。一度でも良いから一緒に狩りへ行きたいって思ったから。だって私だってハンターだもん。

絶対に断られると思ったなあ。彼はソロで闘技大会Sランクを出すハンターで、私はソロじゃ何もできないハンターだったから。

それでも彼は私を連れて行ってくれた。

ちよつと……いや、かなり嫌そうな顔をされたけれど、それでも私を連れて行ってくれた。我が儘な奴とか面倒な奴って思われたかもしれない。しかも、そのクエストで私は2回も倒れた。それでも彼と一緒に狩りができたのだから、私は満足。武器は片手剣からハンマーへ変わっていたけれど、あんな間近でしかも一緒に狩りができたのだから、それだけで充分。

なんて自分に言い訳した。

彼と一緒に戦ったときアレだけ固まっていた体は動き、狩りが楽しいって初めて思えた。私にとって彼と一緒に狩りをしたあの日は、そんな夢みたいなお時間だったんです。

でもクエストが終わり、夢も終わった。来て欲しくなんてないのに、現実が戻って来たらしい。

そう思っていた。

だからあの時、彼がかけてくれた言葉は本当に嬉しかったな。

私なんかと一緒に行ってもいいのかな？　って思う。二人で狩りをすればそれだけ報酬だって減る。それに彼ならソロでも充分戦えるはず。

どうして彼と一緒に狩りをしてくれるのかはわからないし、怖くて聞くこともできない。

それでも今——私は楽しいです。

「おけおけ、脚を引きずったか。ふはは！　何処へ行こうと言うのかね？」
でも、クエスト中の彼はちよつと怖いです。

いつの日か足を引っ張らなくなつて、胸張つて彼の相棒だつて言える日が来るといいな。なんて私は思います。

「乾杯！」

昨日のように、集会所へ帰ってから二人で乾杯。

ああ、クエスト終わりのお酒は美味しい……

あと、今回も私は一回も倒れませんでした！ 人は成長する生き物なのだ。

帰り道は反省会をするのかと思っていたけれど、昨日のように彼は寝てしまった。そんな彼の寝顔を見ていたら私もつられてしまい、気がつくとき集会所だった。うーん、そんなに疲れていたのかな？

「あんまり飲み過ぎるなよ？ 明日もまたドスジヤギイへ行かないとなんだし」

「大丈夫だよ。私、酔いつぶれたことないもん」

私がそう言うと、彼からチョップを喰らった。

何をしやがりますか。

「はあ……覚えてないだろうけれど、運ぶの大変だったんだぞ？」

そんなため息と愚痴。

自分の顔が赤くなるのがわかる。そして、たぶんこれはアルコールのせいじゃない。

「そんなこと記憶にございません」

「……でしようね」

一つ、嘘を落とす。

彼はきつと気づいていない。

私が覚えていると言うことを。

その時の記憶が蘇り、さらに赤くなる私の顔。あの日は飲みすぎたせいで身体が動か
なかつたんです。これからも彼が私と一緒に居てくれることが嬉しくて、飲みすぎまし
た。でも何故か、意識だけははつきりとしていて……。アレならいつそ寝てしまえば良
かった。

恥ずかしいと思ったらありやしない。だからこれは私の中へ閉じ込めておくことにしま
す。それくらい嘘は許して欲しいかな。

「これからもよろしくお願いします」

「……いきなりどしたの？ うん、まあ、よろしく」

クスクスと笑う彼。

こんな日が続けばいいって私は思うんだ。

第11話～ブライドは2000z～

防具作りを始めて5日。漸く必要な素材が全て集まった。

ゲームをやっていた時は例のセンサーが発動しまくってくれるおかげで、素材が集まらないことは多かつたけれど、今回はすんなり集まってくれたと思う。

まあ、レア素材もないのだし、こんなものなのかな。

「つ、ついに私もブレイブ以外の装備を身につける日が……」

一方、相棒はと言うと、元々鉱石系などの素材は集めきっていたこともあり俺よりも一日早く素材を集め切った。だから最終日は別についてくる必要はなかったのだけど、俺に付き合ってくれた。助かります。

さて、これで漸く俺もジャギイ一式となるわけなんだが……

「どうしたの？ 難しい顔なんかしちゃって」

一つ問題があります。

お財布の中身を確認。所持金は3000zほど。

まあ、つまるところ……お金が足りません。いくらドスジャギイを倒したところで、

報酬金は多くない。しかもソロではなく二人で行くためその少ない報酬金はさらに半額となる。

そしてジャギィ一式を作るのに必要な費用は約5000z。2000zほど足りなかった。防具を作っても余る素材を売ればなんとかなるだろうけれど、それはあまりやりたくない。

「その、ですね……お金が足りないですよ」

本当に困りました。

一度、魚釣りでも行って小金魚や黄金魚を釣り続ける作業でもやろうかな。アレらは一匹釣るだけで500zにもなるのだし。黄金魚の所持数は10匹が限界だけど、なんとか4匹以上釣れば防具を作ることはできるんです。

ただ、アレひたすら面倒なんだよなあ……

「え……どれくらい足りないの?」

「……2000zほどです」

それならもう一度ドスジャギィを倒して、素材を全部売った方が良いか? たぶんそれが一番早く稼ぐ方法だと思う。

でもそれをするのなら、今ある素材を売っても変わらないか。……しゃーない、素材を売ろう。

「なんだ、それくらいなら貸すよ？」

……うん？

「えっ、良いの？」

「うん、私10万zはあるもん。別に2000zくらいなら直ぐ貸せるよ」

じゅ……10万zですと？

なんでそんなに持っているのさ。お互いHRは1。そうだと言うのに、いつの間になん溜め込んでいたんだ。なるほどこれが格差社会か。

「い、いや。ちよつと待て」

「どしたの？」

確かに今借りれば直ぐに防具を作ることはできる。

だが……だが本当にそれで良いのか？ 俺にだってプライドはある。例えこの相棒が快くお金を貸してくれると言っても、そんなホイホイお金を貸してもらおうような安っぽいプライドは持ち合わせていない。

俺の中にあるプライドはもつとこう……なんか崇高であったはずだ。ちよつと違つた気もするけれど、此処はこの誘惑に打ち勝ち、忘れられかけたプライドを目覚めさせるところだろう。

「ほら、それじゃ早速加工屋へ行こうよ。私も早く新しい防具が欲しいし」
「あつ、はい。わかりました」

プライドは2000zで売った。

いや、お金はちゃんと返しますよ？

「了解、ジャギイ一式を二人分だな。3日後の夕方には完成させておくよ」
採寸をし、素材と代金の4750zをあのアクセルハンマーを作ってもらった加工屋へ渡す。

ふむ、これでまた3日ほど暇になってしまった。まあ、前回アクセルハンマーを作ってもらった時とは違い、武器も防具もあるのだから、クエストへ行くことはできるが。「それにしても、二人揃って同じ装備とは随分仲がいいじゃねーか」

「どうせ集めるなら二人一緒に集めちゃった方が楽なんだよ」

ニヤニヤと意地の悪い笑を浮かべながら加工屋が言った。確かに相棒とは同じ装備なのだから、ペアルックと言えばペアルックだけど、別に深い意味はない。

まあ、仲は悪くないんじゃないかな。俺がそう思っているだけかもしれないんだけど。

「んじや。3日後、取りに来るわ。しつかり頼むぞ」

「ああ、任せとけ」

さてさて、この3日間は何をしようか。

「防具ができるまではどうするの?」

「どうすつかなあ。休日にしても良いけど……何かやりたいものがある?」

加工屋からの帰り道。相棒と二人で満天の星空の下を歩く。

防具が完成したら次は彼女の操虫棍を強化しないといけない。たぶん、彼女のことだから虫の餌は持っていると思う。だから必要となるのはモンスター素材だけど、ケチャワチャの素材なんだよなあ。そして俺はアイツが好きじゃない。なんか嫌い。生理的

に。

「私は特にならないよ。あつ、でも武器を強くしたい!」

まあ、そうなるよな。

操虫棍の種類は少ない。今、彼女が装備している以外の操虫棍となると、ネルスキュラのスニークロッド、ゴア・マガラのエイムoffトリックしか下位では作ることができない。

そんなわけで、今はボーンロッドを強化していくのが一番だろう。

どの道、ネルスキュラとゴア・マガラは戦わなければいけない日が来る。俺もあの2体の素材は欲しいし、その時に集めれば良いだろう。

「と、なると、ケチャワチャに行かないとなんだけど……行く? ああ、別に防具ができてからでも遅くないと思うよ!」

ケチャとかゴリラなんかの牙獣種系つて馬鹿みたいに攻撃力高いんだよなあ。慣れないうちは苦勞しそうだ。イヤンクック以来の比較的ちゃんとした大型種。流石に失敗することはないと思うけど、少し不安。こっそり一人で練習しようかな。

「うっ、ケチャワチャかあ……こ、今回はやめておくよ。流石にクリアできる自信がない」

無難な選択だと思います。

たぶん、怒り状態のアイツの攻撃を喰らえばHPの6割くらいは持つていかれるだろう。それにケチャワチャと戦うエリアにはザコ敵の中でも悪名高いクンチュウがいる。初期防具ではかなり厳しい戦いになりそうだ。

そして何よりアイツはスタンが取り難い！ なかなか頭が吸ってくれないんだ。ダウンした時も腕が邪魔で攻撃し難いし。

「んじゃ、3日後までは休日がてら自由行動にするか」

「了解。あつ、でももしクエストに行くなら連れて行ってよ？」

あゝ……んゝ……後ろ向きに善処します。

「……一人で行く気だったんでしょ？」

ちよ、ちよつとテツカブラと戦いたいなあ。とは思っていました。アイツの素材がないとハンマー強化できないし。そして今の装備でテツカブラと戦えば、1乙はすると思う。一撃で乙ることはないだろうけど、失敗する可能性の方が高い。其処へ連れて行くのは……なんて思っていたんです。

「わかった。わかった。クエストへ行く時は声をかけるよ」

「絶対だよ！」

はてさて、どうすつかね。

その日はもう夜も遅く、そんな会話をしてから相棒と別れた。そして別れた後になって気付いたわけだけど。

「……アレ？　今の俺ってI Zも持ってないか？」

大ピンチです。

次の日。

眠気が抜けていないまま財布の中身を確認すると、見事に何も入っていなかった。夢じゃない。現実です。

「……ヤバイな」

ヤバイです。何がヤバイって、所持金がないとほとんどのクエストを受注することができない。そして、食事が……ああ、お食事券があるから其処は大丈夫か。

いや、まあ、全然大丈夫じゃないんだけどさ。

所持金が0でも行けるクエストは、闘技大会と採取ツアーくらいしかない。ただ、それらの報酬は全て残念だ。素材を売ればお金は入るけれど、そうするとあの相棒に返すお金がなくなる。

借金生活は辛い。

「魚釣るか……」

しゃーない。面倒とか、好きじゃないとか言っている場合じゃなくなったのだ。

あの相棒はクエストへ行くなら連れて行けとか言っていたけれど、まあ、流石に採取ツアーなら連れて行かなくても良いだろうと思ひ、声はかけなかった。だって時間いっぱいまでひたすら釣りをするだけだし。

集会所へ行き、今日も今日とて元気の良い下位クエストの受付嬢に頼んで、遺跡平原の採取ツアーを受注した。そう言えばこのクエストも一ヶ月振りになるのか。

まあ、だからと言って特に思うことはないが。あれだけの数を倒したのだし、ドスジャギイにも借りは充分返せたと思う。

クエストを受注してから、空いている席へ座りお食事券を使って、たてがみマグロと幻獣バターの揚げ料理を頼んだ。これで釣り名人さえ発動してくれれば大丈夫です。

そして食事をしながら幻獣バターって何のバターなんだろうな……。なんて考えていた時だった。

「……今日は一人なんだ。クエスト行くの?」

あのハンマーの彼女が声をかけてきた。

装備も武器も変わった様子は無い。どうやらまだHRは3で止まっていてくれていいらしい。どうかそのままの君でいてくれ。

「うん、今日から3日ほどは自由行動なんだ。んで、俺はちよつと遺跡平原の採取ツアーへ行くところ」

「そうなんだ。ん……。魚、乳製品で揚げ料理……。釣り?」

……随分と鋭いですね。大正解です。

せつかくばかしたのに意味がない。

「俺にも色々あるんだよ。んで、君はどうしたの? またワンコでもいいじめに行くの?」

お金がないから釣りに行くなんて恥ずかしくて言えません。

「そうしようと思っていたけど、今日はクエストがなかった」

やめたげてよ。

ちゃんと俺たちが戦う分のワンコも残しておいて欲しい。

「……ねえ」

「どしたの？」

彼女の声は決して大きい方ではない。けれども、今日はいつもに増して声が小さかった。

そんなにジンオウガと戦えないことがショックだったのかな。

「私、暇になった」

「……うん。そうだね。ワンコいないもんね。仕方無いね。」

「……うん？」

「えと……だから——貴方のクエストについて行っても良い？」

第12話く配給は大食いマグロく

ガタゴトと揺れる馬車の上。

今の季節はわからないけれど、それほど暑くはない日差しと晒された場所の上へ吹く風が心地良い。てか、この世界って季節はあるのか？ 雪のない雪山とか氷海へ行ってみたい。

まあ、どうせ季節なんてないんだろうけどさ。

あの相棒がいらないせいで、随分と静かな馬車となっている。いつもなら彼女がずっと喋ってくれるおかげで、この道のりもそれほど長いとは感じなかった。

しかし、今この馬車に相棒はいない。まあ、俺が置いて行ったってのもあるんだけど。かと言つて、俺一人と言う訳でもない。

隣を見る。

ジンオウガ一式、背中には多くのソロハンマー使いがお世話になったであろうヴェノムモンスター。身長は俺よりも低く、たぶん年齢も下だと思う。胸の大きさは残念だけど、整った顔立ちをしているとはつきりわかる。

そんな一人の女性が隣に座っている。ただただ前を見ている様子で、何を考えているのかなんてわからない。

「どうかしたの?」

俺が見ていることに気づいたのか、こてりと首を傾げ、此方を向いて彼女が言った。

「ああ、いや……ただ、どうして君がこのクエストに来たのかなって思ってたさ」

この彼女のHRは3以上。一方、俺はHR1。そしてこのクエストは遺跡平原の採取ツアーだ。別に大型種を倒す予定なんてないし、今日は時間いっぱい魚を釣る予定。そのことは彼女にも伝えてある。そうだとするのにな、彼女がこのクエストに来る理由がわからなかった。

俺みたくお金が足りないから魚を釣りに来た。とかならわかるけれど、それは違うだろう。だってこの子、貧乏臭がしないもん。

「……暇だったから来ただけ。それにたまには魚釣りも悪くない」

「えっ、君も魚釣りするの?」

マジですか。てつきり採掘や採取をしているものだと思っていた。

いや、だって遺跡平原の魚を釣ったところでお金を稼げる以外の意味なんてほとんどない。古代魚とかカジキマグロが釣れるならまだわかるけど。

「そのつもりだったけど。えと……何か、マズかった?」

「い、いや。別に問題はないぞ」

ホントこの子は何を考えているんだろうなあ……

装備を見る限り、パーティープレイをしたくないと言うことはないと思うけれど、今まではずっとソロだったんだろう。そうだとするのには、いきなり俺についてくるとは……

はっ！ もしかしてこの子、俺のことが好きなんじゃ!? ……まあ、それはないか。今までカツコイイところなんて見せたことがないし。

ホント、何考えてんだろうね？

「へい、アイルー。あとどれくらいだ？」

「まだ3分の1も来てないニヤ」

長いねえ……

「旦那。今日はいつものハンターと一緒にじゃないのかニヤ？」

「ああ、あの相棒はお休みだ」

休みと言うより、俺が抜けがけしただけ。だからバレたらまた怒られそう。どうかバレませんように。

「うニヤ………浮気？」

色々と違うわ。

馬鹿言っていないでキビキビ働け。

恐る恐る、隣の彼女の様子をチラリと見てみたが、特に変わった様子はなかった。何をビビっているんだか……

でも、まあ、それも仕方ないことだと思っただけです。

その後は彼女との会話もなく、ひたすらにゆっくりと過ぎ去って行く景色を見ながら、馬車に揺られ続けた。痛いほどの沈黙ではあったけれど、何を話せば良いのかなんてわからない。

これならソロで来た方がよっぽど気は楽だった。

別に彼女のことが嫌いとか言うわけではないんだけどさ。

そして、ようやくと遺跡平原へ到着。

ずっと座っていたせいで固まってしまった体を伸ばす。

「よしや！ 行くかつ！」

いつものように声だし、気合を入れる。

そうでもしないとこの臆病者は動いてくれないのだ。

しかし、いきなりそんな声を出したものだから、隣にいた彼女は驚いたらしく、ビクつとなり此方を見た。

すみません。癖なんです。

うくん、相棒なら『おおー！』とか言ってくれただけだなあ。どうにも調子が狂う。ま、気にしたってしゃーない。彼女には悪いけれど、自分のペースで行かせてもらおう。

「釣りは何処でやるの？」

「ネコの所」

遺跡平原で釣りのできる場所は2つある。一つがベースキャンプで、もう一つがアイルーやメラルーの住処となっているエリア10。ああ、あとエリア10には山菜じいさんもいるか。

エリア10で釣りをする理由は、彼処でないと黄金魚が釣れないから。今回の目的は

お金集め。そのためには小金魚と黄金魚を釣る必要がある。そして小金魚はベースキャンプでも釣ることはできるけれど、黄金魚は釣れない。だからちよつと遠いけどエリア10まで行く必要があった。

支給品ボックスから、地図だけを取り出す。

そんじや、ま。行きますか。

エリア10へ着くと、数匹のアイルー、メラルーと山菜じいさん。そしてオトモにすることのできるアイルーがいた。

オトモアイルーを雇ってみようかと考えてみたけれど、どう考えても邪魔にしかならないだろうからやめておいた。筆頭オトモとか言う明らかなバグがいらないだけまだマシだけど、オトモアイルーの活躍する光景は思い浮かばない。無駄にヘイト稼ぐの本当にやめてください。

魚がいると思われる水場へ釣り竿を投げる。餌は付けない。

ゲームの時見たたく、どんな魚が泳いでいるのかはわからないけれど、数匹の魚影はつきりと見えた。どの魚が泳いでいるのかわかれば、黄金ダンゴを使ってリセットできるんだけど、これではそれも意味はないだろう。

まあ、黄金ダンゴなんて持つていないんだけどさ。それに時間はあるんだ。のんびりやろう。

糸を垂らすこと数秒。クイツと釣り竿が引つ張られた。それに合わせて釣り竿を上げると、其処には一匹の魚。たぶんサシミウオだと思う。

釣りをする場合、普通なら魚が食いつくまで、0〜2回ランダムでフエイントが入る。けれども、スキルで釣り名人が発動している場合は、そのフエイントは確定で0。

原理は意味わからんけれど、便利なスキルです。

「……………そう言えば、どうして釣りなんてするの?」

竿を引き上げ、釣った魚をアイテムポーチへ入れながら彼女が聞いてきた。チラリとしか見えなかったけれど、その魚は大きく金色に輝いていた。黄金魚、良いなあ……

「あく……………そのですね。お金が欲しかったんですよ」

恥ずかしさを紛らわすために竿を投げる。

そんな恥の多い生涯です。

「そっか」

そしてまた無言に。

なんだこの空気は。助けてください。

男女が並んでひたすら釣り。傍から見ればきつとすごい光景だろう。

こんなことになるのなら、相棒を誘えば良かったかもしれない。

その後もやっぱり会話なんてなく、ひたすらに釣りを続けた。

サシミウオと大食いマグロ、黄金魚は釣った数が10匹を超えてしまい、もうアイテムポーチへ入れることができない。小金魚もかなりの量を釣ったと思う。

随分と生臭いアイテムポーチになってしまったものだ。ホント、アイテムポーチの中ってどうなっているんだろう。

持ちきれなくなつた魚は、後ろで踊っているイルーやメラルーへあげることになり、ニヤーニヤー言つて魚を受け取ってくれる姿はなかなか可愛い。只で魚をもらえるとわかつたのか、今では俺と彼女の後ろには魚を求めるネコたちの行列ができています。魚難民とも言えば良いだろうか。

今釣つた魚を全部売れば、少なくとも5000zは超える。それでも、せっかく時間をかけて此処まで来たのだ、時間いっぱい釣りを続けよう。お金があつて困ることはないはず。

まあ、そろそろ終わりの時間だとは思うけど。

相変わらず無言な二人。別に沈黙は嫌いではないはずだけど、この空気は少々重い。

「……ああ、魚がびよんびよんするんじやあ、」

まあ、かと言って彼女と話すことなんてないん……

「今なんか言っちゃった?!」

なんか聞こえたぞ、おい。

「……何も言っていない」

そうか空耳か。

なんだろう。俺、疲れているのかな。そうだとしたら精神的にだろうな。色々と疲れ
ているんです。

「……貴方って、どうしてハンターになったの？」

「ん、どうしてかって言われてもなあ」

彼女からの質問が来た。

けれども、それは非常に応え難い質問。

「そのだな……気がついていたらさ。ハンターになつていたんだよ。他にやれそうなことも
なかったし、それで続けてる。君は？」

もしかしたら、俺はもう元の世界へ帰ることはできないかもしれない。モンハンには
クリアなんてないのだから。

それでもできる限りはやってみたいんだ。意味はわからないけれど、せつかくこの世界へ来たんだ。それなら俺の好きにやらせてもらう。

「やつぱりそうだったんだ……私も気がついたらそうだった」

うん？ ……私も？

ちよ、ちよつと待て。いきなり過ぎる。せめて伏線くらいは用意してほしい。

水面へ垂らした糸が強く引かれた。けれども、それよりも今は聞かなければいけないことがある。

だって、この彼女の言葉はまるで……

「私は——この世界の人間じゃない。貴方もそうなんですよ？」

此方を真つ直ぐと向き、彼女が言った。

頭の中が一瞬で真つ白に。つまり彼女は俺みたく……そんなことがあるのか？　こんな馬鹿げた話が俺以外にも存在するののか？

「……君はいつからこの世界に？」

「一年くらい前から」

再び視線を水面へ垂らした糸へ向ける彼女。

その糸も強く引つ張られていたけれど、彼女は釣り竿を上げようとはしなかった。

一年……それだけの時間を過ごしても、彼女は元の世界へ帰ることはできていない。

……まいったね、こりやあ。元の世界へ帰るのは本当に無理なのかもしれない。まだ決め付けるのは早いけれど、望みは——薄い。

そんなことを考えたところで、クエストの終了時間が来た。

とりあえず、今日の目標は達成することはできたけれど、何と言うか……今まで見えなかった大きな壁が、見えた気がした。

でもそれが良いことなのか、悪いことなのかはわからなかった。

遺跡平原からの帰り道。

彼女には色々と言わなければいけないことがあったはずなのに、碌な会話をしなかつ

た。

唯一した会話も……

「君は元の世界へ帰りたいたい？」

「わかんない……貴方は？」

「……俺もわかんねーや」

その程度のものであった。

何かを聞かなければいけない。でも何を聞けば良いのかがわからない。何も考えずハンマーを振り回すくらいしかできないような不器用者なんです。

そのまま会話もなく、バルバレへ到着。

飯を誘う気にもなれず、彼女とは別れることに。

けれども、このまま別れちゃダメな気がして、手を挙げ帰ろうとしている彼女を呼び止めた。

「どうしたの？」

俺にもわかりません。

さて、そんなことを言っても呼び止めてしまったんだ。なんでもありませんはマズいだろう。何か理由を作らなければいけない。

ふむ……

「直ぐに追いついてやるからちよつと待ってろ」

彼女へ指を差し、騒がしい集会所の中でも響くような声で高らかに宣言。

そんな俺の言葉に彼女は驚いたような顔をした。

「……うん、待ってる」

そして、そんな言葉を落としてから、静かに笑った。

彼女と俺の間にはまだまだ大きな差がある。それでも、絶対に追いついてやろううだなんて、随分と自分勝手なことを去って行く彼女の後ろ姿を見送りながら思った。

彼女と別れたあと、さっきのクエストで釣った黄金魚と小金魚は全て売却。黄金魚10匹、小金魚24匹で合計17000z。これで暫くはお金に困ることもなさそうだ。

お金が入り財布は重くなったけれど、気分は重くない。

あの彼女とのこともあり、少しばかり沈んでいた気分はもういない。これで調査書も買うことができる、ウキウキ気分で帰宅。

「……おかえり」

そして、家の扉を開けるとそんな相棒の声が聞こえた。扉を閉めた。

いかんいかん、間違えて相棒の家へ入ってしまったか。流石に浮かれすぎていたようだ。

外へ出て家の場所を確認。

けれども、どうやら俺の家で間違っていないらしい。

……まいったね、こりゃあ。

ホント、上手くないかな人生です。

なんて言い訳をすれば良いのやら……

第13話くお詫びにタンジアビールく

扉を開ける。

「ねえ……今日はどこへいった」

扉を閉めた。

……おかしい。なんでアイツが俺の家にいる。別に鍵をかけていたわけではないから、誰でも俺の家に入ることはできる。

でもおかしい。

自分の家に帰ってきたら何故か人が居たとか、普通に怖い。ホントなにやってんの!? 少しばかり混乱した頭を必死で整理していると、家の内側から扉が開いた。

「なんで閉めるの!」

なんで君が此処にいるの!

そんな相棒の様子は明らかに『私、怒ってます!』みたいな感じだった。怒ると直ぐに膨らむ頬がちよっと可愛らしい。

つまり、アレだ。どうしてかはわからないけれど、どうやらバレたらしい。

「え、えと……どうかしましたか？」

「どうかしたよ！ 私を置いてクエスト行かないって約束したじゃん！」

あかん。本当に怒ってる。全面的に俺が悪いのだし、これは謝ることしかできない。

今の相棒は初めてイヤンクックを見たときよりよっぽど怖い。こやし玉をぶつけて逃げたい気分だ。そんなことしたら殺されそうだけど。

「いや……その……本当にすみませんでした」

「……何のクエスト行つてたの？」

極々自然な流れで正座。おかしいことなんて何も無い。

外の地面は予想以上に冷たかった。

「……お金が欲しかったので遺跡平原の採取ツアーに行っていました」

顔を下に向けたまま彼女の尋問を受ける。

お願いします。弁護士呼んでください。

「ふくん……一人で？」

とてもじゃないが嘘をつけるような状況ではない。

でも、なんだろう。此処で彼女と二人で行ってきました。なんて言ったら大変なことになりそう。別に後ろめたいことは何もなかったけれど、そもそもクエストへ行く時は彼女に声をかけると約束をしたのだ。

そして俺はその約束を全力で破った。

ヤバイですねー。超ヤバイですねー。言い逃れはできそうにない。

「どうなの？」

「え、えつとですねえ……一人ではなかったんじゃないかなあつて思ったりします」

はい、言っちゃいました。

もう、どうとでもしてください。でも、できれば優しくしてくれた方が俺は嬉しかったりします。

「……そっか」

顔は地面に向けたまま。相棒の表情は見えない。それでも聞こえてきた声は、何処か憂いのような感情を読み取ることができた。

罪悪感がヤバイ。

正直なところ、別にこの相棒と一緒にクエストへ行っても問題なかった。コイツならいくら採取ツアーでも一緒に来てくれそうな気がするし。

それでも一緒に行かなかったのは、単に俺が恥ずかしかつたと言うだけ。だってあのクエストへ行つた目的が、この相棒から借りたお金を返すと言うものだったんだ。そんなクエストへ誘うのは気が引けた。

まあ、そのせいでもっと大変なことになったわけなんだけどさ。

暫くの間沈黙が続くと、今まで立っていた相棒が俺の前に座るのが視界の端に映った。

な、何が始まるんですか？

「……ねえ」

「ど、どうしました？」

今までも下を向いていたけれど、更に下へ視線を落とす。

「……やっぱり、私がいると邪魔だったの？」

聞こえてきたのはそんな言葉だった。

どんな言葉で罵倒されるのかと思った。けれども、相棒の言葉にはそんな意味が込められているようには聞こえない。

下を向いていた顔を上げる。

そして見えてきたのは不安そうな表情だった。

「いや、そんなこと思っていないけど」

そりゃあ、この相棒はまだまだ強くないし、もつと頑張つて欲しいと思うこともある。けれども、一緒についてきてくれて有難いと思つている。最初は足手まといだつて感

じた。でも、今はもうそんなことは感じない。

それは嘘偽りない事実。まあ、恥ずかしいから口に出せるわけがないんだけどさ。

「本当？」

「うん、本当だよ」

……えつ、なに君、そんなこと思っていたんですか？

この相棒は操虫棍使いだ。明らかに調整ミスの強武器。俺のように入っただけで部屋に居た全員が退室するような武器じゃない。そんな武器を使う彼女を邪魔だと思えるほど、俺は上手くない。

うん？　じゃあもしこの相棒が操虫棍以外の武器……例えば太刀やランスだった時、俺は彼女と一緒にクエストへ行こうとはしなかったのか？

——いや、そうじゃない気がする……良くわからないけれど、例え彼女が違う武器でも俺は断らなかつただろう。

それだけははつきりとわかった。

「……じゃあ、どうして私を置いて違う人と一緒に行つたの？」

これ応えないとダメ？　滅茶苦茶恥ずかしいんですが。

まあ……ダメか。

……しゃーない。正直に答えよう。

「……俺さ、君からお金を貸してもらったじゃん？ だから今日はそのお金を稼ぎに行っていたんだよ。でもそのお金を稼いでいる姿を見られるのはですね、その……恥ずかしいと言うか……」

要はドヤ顔でお金を返して、格好つけたかっただけです！

格好つけて何が悪い！ 俺だってハンターなんだ、カッコイイ方が良いに決まってる。

「……じゃあどうして二人で行ったの？」

「ああ、それは俺が誘ったわけじゃなくて、ついてきただけ。別に断る理由もなかったし」

たぶん、彼女は俺がこの世界の人間じゃないって薄々感じていたんだろう。どうしてそう感じたのかはわからないけれど、たぶんそう言うことだと思う。

彼女はいきなりこの世界へ飛ばされたとき、何を感じたんだろうな。

「そうなんだ」

そうなんです。

だから別に、君を邪魔だと思つて置いていったわけじゃない。それはわかつて欲しいかな。

そしてまたお互い、無言に。

どうなんでしょう……俺は許されたのだろうか？　もしかしたらもう一緒に来てはくれないかもしれない。まあ、でもそれも仕様が無いことなのかな。

ひねくれているこの性格が悪い。そんな性格のせいで損ばかりの人生だ。俺もこの相棒みたく、もう少し素直になれば良いのにな。

「……………飯」

「うん？」

「それとお酒っ!!」

ああ、そう言うことですか。

それくらいで許してもらえるのなら、いくらでも払おう。此処まで一緒に狩りをしてきたんだ。そんな彼女と別れてしまうのはやっぱり切ない。

「それで許してもらえるのなら、いくらでも……」

「許す！　まだちよつとモヤモヤするけど、私は心が広いから許してあげる！」

……うん、ありがとう。

相棒に手を引かれ集会所へ。

どうせまた酔いつぶれて俺が運ぶことになるんだろう。まあ、良いさ。これからも長い付き合いになる。それくらいの仕事は喜んで引き受けよう。

至らないところもあるかと思いますが、改めてよろしくお願いします。そんな小つ恥ずかしいことを心の中でそつと呟いた。

いつかのように酔い潰れた相棒を家に運んでから、自分の家に帰りベッドへ倒れ込んだ。疲れたんです。

相棒のお酒を飲むペースが明らかに早かったけれど、無理です。止められませんでした。酔った相棒は泣いたり笑ったり怒ったりと、見ていて非常に愉快。

ただ、アレだ。酔っ払って面倒くさいね。

クエストへ行く時は絶対に私に声をかけること。と何回も約束させられた。置いていかれたのがよっぽど堪えたらしい。

本当にすみませんでした。

それでも、最後の方はいつもの調子に戻って……はないか。酔っ払っていただけか。ま、まあ、とりあえず機嫌は治ってくれたと思う。……たぶん。

そしてベッドに横になると、眠気が一気に襲ってきた。

俺と同じように違う世界から来たあの彼女。色々と考えなければいけないことがある。けれども、適度に入ったアルコールのせいと考えはまとまらない。

様々な想いが浮かんでは、消えた。

「これからどうなるんかねえ……」

独り言が溢れる。

いくら考えたところで、そんな独り言の答えは出ない。たぶん、あの彼女だつてどうすれば良いのかわからないのだろう。

どうすれば良いのかなんてわからない。この世界に攻略本は存在しないのだから。

あるのは1000時間以上プレイして頭と身体に染み込ませただけの知識。それは役に立たないことも多く、結局一番知りたいことはわからない。

考えても仕方無いとは思う。でも考えずにはいられない。

謎解きは苦手だ。

自分はそんな性格だつてわかっている。できることなんて、我武者羅にハンマーを振り回すことくらい。それくらいの方が俺には合っていると思うんだ。

むう、ダメだ。自分でも何を言っているのかわからない。

「寝ますー！」

防具が完成するまで時間はまだかかる。

だから今は前に進むことはできそうにないけれど、進む準備くらいはできるだろう。できる限りのことをやっていけば、また何かが見えてくるはず。

そう思うのです。

第14話く咆哮をフレーム回避く

「あつ、失敗しちゃった」

「なんだ、調査書は持ってきてなかったのか？」

いつも通り揺れる馬車の上、相棒に元氣ドリコンの調査を見せてもらったけれど、できあがったのは得体の知れない何かだった。ふむ、これがもえないゴミか。

昔みたいに何かに使えれば良いけれど、今作は本当にゴミなんだよなあ……

「うん、流石に持ちきれないもん。はい、じゃあこれあげるよ」

「張り倒すぞ」

「じよ、冗談だよ……」

相棒からのお説教を受けて二日。漸く防具が完成した。

祝、初期防具卒業。たぶんこれで下位クエストくらいならゴリ押せると思う。防御が足りなくなったら鎧玉を使っても良いし。

「てか、やっぱり失敗することもあるんだな」

あのジンオウガの彼女と一緒にクエストへ行つてから、今日までクエストに行くこと

はなかった。採取ツアーくらいなら行っても良かったけれど、相棒の買い物に付き合っていたのと、闘技大会を見に行ったことなどで二日は潰れた。

そして思ったことだけど、女性の買い物ってどうしてあんなに長いんだろう……さつさと買っちゃえば良いのに。

「そりゃあ、あるよ。ほら、ラージャンも木から落ちるって言うじゃん」

「いや、ラージャンは木に登らないだろ」

「あれ？ ケチャワチャだっけ？」

知らんがな。

闘技大会はイヤクツクの大会を見た。観客席には人も多く、闘技大会自体がかなり人気なものなんだろう。数週間前までは自分が闘技場の中へいた。けれどもそれを観客席から見るといっなのは何とも不思議な気分。

そしてイヤクツクと戦ったのは片手剣を使う二人組だった。どうせならハンマーを見たかったんだけどなあ……それにタイムを出すのなら、一人は大剣の方が良いだろうに。

そんなことを思わないでもなかったけれど、闘技大会は見ていて面白いものだった。雄叫びを上げてイヤクツクへ斬りかかる姿とか超カッコイイ。戦っていた時間は7分と長くはなかったけれど、イヤクツクを倒したときは、隣で見ていた知らないおっ

ちゃんとハイタッチして喜んだ。

うむ、今度また見に行こうかな。まあ、闘技大会を見たところで参考にはなりそうもないんだけどさ。

「ケチャワチャかあ……やっぱり強いんだよね？」

そして闘技大会を見た帰りに加工屋へ行き、防具を受け取った。

赤系等を基本としたちよつとカラフルな見た目。スキルは砥石高速化と気絶半減がついてくる。砥石高速化は助かります。

少々燃えやすいのが難点だけど、他の属性には弱くない。序盤では優秀な防具だと思う。

「まあ、アルセルタスやドスジャギイに比べれば強いかな。でも、今回から防具もあるわけだしクリアすることはできると思う」

防御力も50となり、裸同然の防御力だった今までとは雲泥の差。負けることはないと思う。……たぶん。

「む、むう……不安だ」

正直、俺も不安なところがある。でも、コイツを倒さないと相棒の武器は強化することができない。だからどうにか頑張つて欲しいところだ。この相棒の武器が強化できれば戦力は一気に上がるのだから。

「ケチャワチャは白エキスが取り難いけど、とりあえず3色集めた状態を維持するように。あと時計回りに動いていけば攻撃はほとんど当たらないよ」

ケチャさん右手で爪攻撃しないしね。小突きは鬱陶しいけれど、操虫棍なら問題ない。良いよなあ、全モーシヨンSA付加は。

「……なんでそんなこと知ってるの?」

「予習したからだよ」

100匹マラソンをしたおかげで、アイツの行動はちゃんと覚えている。まあ、それもゲームの中のお話なんだけども。

それにしても、ジンオウガの彼女よりやつぱり相棒の方が一緒にいて気が楽だ。道のは長いけれども、この相棒と一緒に早く行けることができると思う。

そんな小っ恥ずかしいことを俺は思うのです。

「つしやー、行くぞー！」

「おぉー！」

遺跡平原に着くと彼はいつも通り大きな声を出した。

どうしていつも声を出すのか聞くと、声を出さないと身体が動いてくれないんだって。そんなふうには見えないけれど、もしかしたら彼は私が思っている以上に臆病なのかもしれない。

「悪いけれど、今回は応急薬半分もらえる？」

「うん、別にいいよ。でも珍しいね。君が支給品をちゃんと取るなんて」

いつもは地図だけ取ってさっさと行っちゃうのに。

それだけケチャワチャが強いつてことなのか。ふ、不安だ……

「全部は使わないと思うけど、初めて戦う大型種だしなあ。念の為だよ」

初めて戦うのに、ケチャワチャの行動とかどうして知っているんだろ。不思議な人。彼が残した支給品を全部回収し、もう既に走り出している彼を慌てて追う。

しつかりは見ていなかったけれど、支給品の中には音爆弾が入っていた。何に使うんだろ？

ケチャワチャのいる場所はエリア4らしい。そこはちよつとゴツゴツしているせいで戦い難い場所。アルセルタスにボコボコにされたのも、きつとそのせいだ。決して私
が弱いわけではない！

そして、エリア4へ行くと直ぐにアイツを見つけた。

長い爪に尻尾。あと鼻も長い。象さんみたいでちよつとカワイイかも。でもやつぱり怖い。

私はケチャワチャを見た瞬間ちよつと怯んでいたけれど、彼はそんなことなくいつものようにハンマーを構えながらケチャワチャへ近づいて行った。

んもう、少しは驚いたらどうなのさ？

あまりもたまたましているわけにもいかないから、私も彼に続く。早くエキスを集めないと。

虫を飛ばし、ケチャワチャの顔に当てる。虫を呼び戻してエキスを回収。色は赤だった。そして彼が高台から飛ぶのが見えた。

さらにケチャワチャの頭へハンマーが振り下ろされ、何とも重そうな音が響いた。ハンマーを当てダウンしたケチャワチャの背中へ乗る彼。えと……乗り攻撃中は攻撃しちやダメなんだよね。

サクサクと背中を斬る彼を応援。がんばれ、がんばれ。

今回、私は乗り攻撃を禁止されている。乗り攻撃するくらいなら普通に斬れとの命令です。操虫棍使いとして悲しい宣告だったけれど、命令されたのだから仕方無い。従います。

数秒程度、彼がケチャワチャの背中を斬り付けていると、ケチャワチャが転倒した。たぶん成功したんだと思う。

倒れたケチャワチャへ近づき、その背中へ虫を当てエキスを採取。色は黄色。これであと一色取れば良いはず。

頭の前でハンマーを振り回している彼を邪魔しないよう、尻尾の方へ。でも、白色つて何処から取れるんだろ……

何色が取れるかわからないけれど、とりあえず大きな尻尾に虫を当て、エキスを採取した。

その瞬間、身体が光った。

——3色取るとだな、こう……身体が光って強くなる。

いつかの彼のセリフを思い出した。

ふふっ、あの言葉は本当だったんだね。クエスト中だと言うのに、笑いが溢れた。でもこれでエキスは集まった。これで私も戦える。

私がエキスを集め終わるのとはほぼ同時に、倒れていたケチャワチャが立ち上がった。え、えと、時計回り、時計回り。

立ち上がり、首をふるふるさせるケチャワチャ。そんなケチャワチャの頭へ彼のハンマーが勢い良く振り上げられた。

そしてまた転倒。確か“ずたん”……だっけ？ 流石です。

モンスターと戦う時、彼はだいたい頭の前にいる。怒られたことはないけど、そんな彼へ私の攻撃が当たると転けてしまう。だから私はケチャワチャの尻尾の方へ。

エキスを3色集めたけれど、赤白の2色を集めた時と何かが変わったようには感じなかった。これなら赤白の2色だけでもいいんじゃない……

攻撃をする時は、連続斬り上げ、けさ斬り、なぎ払いのコンボをひたすら繰り返す。赤色を取るところ言う攻撃ができると知りました。

転倒していたケチャワチャが立ち上がってところで、連続斬り上げから叩きつけてファイニッシュ！ ちよつと飛び過ぎたせいで、彼に当たってしまったけれど、それは許して欲しいかな。

ご、ごめんなさい。

そして、漸く立ち上がったケチャワチャの大きな耳が顔を覆うのが見えた。

小さくジャンプをしてから大きく息を吸い込むのが見えて直ぐ、ケチャワチャが雄叫びを上げた。ピリピリと空気が震える。

咆哮……なの？

大型種は耳を塞ぐほどの咆哮をする奴がいるって聞いている。でも耳を塞ぐほど五月蠅くはない。彼の方を見ても耳を塞いではいないし……

うーん、良くわかんないや。

どうやら怒り状態になったららしいケチャワチャ。大変なのはここからだ。

これで1乗り、1スタン。ホンット、コイツはスタンが取り難い！ 倒れた時くらい

手をバタバタしないでもらいたい。

立ち上がったケチャの小ジャンを確認。攻撃を止め、回避の準備。

頭が少し下がったところでローリングで咆哮をフレーム回避。まあ、ケチャの咆哮は短いし、無理して回避する必要までは無いんだけどさ。

相棒の様子を確認すると、耳を塞いでいる様子は見られなかった。おおー、ちゃんと3色集めたのか。ケチャって白エキス取り難いのに頑張ったんだな。

てか、アレだ。3色集めたせいで相棒の体は光っているわけなんだけど……無駄に神々しいな……

祈れば御利益でもあるだろうか？

そんな莫迦みたいなことを考えながら、カチ上げをケチャの頭へ。しかし、スタンエフェクトも出ず、ヒットストップもない。たぶん爪に吸われたんだらう。

怒り状態のケチャはちよいと面倒臭い。やたらと動きが速くなる。ハンマーはそんなに速く動けません。

そして、大技はまだ喰らっていないけれど……防御力って大切なんだね。ケチャの攻撃が全然痛くないもん。砥石高速化があるおかげで、斬れ味緑ゲージ維持も難しくない。

もう少し苦勞すると思ったけれど、予想以上に難しくないのかもしれない。強くなっていることがはつきりとわかる。

そんじゃ、サクツと行かせてもらおうか。

たぶん、まだ5分針だと思う。そうだと言うのに、ケチャワチャが足を引きずった。

此処まで、乗り・スタン共に2回ずつ。スタン3回目はちよつと厳しいです。部位破壊は全て終えているはず。よだれを垂らし疲労状態のケチャ。

もう少しだ。

エリアチエンジされる前にか倒したかったけれど、怯みもせずケチャは飛んで行ってしまった。

「あつ、ペイントボール忘れた！」

相棒が叫んだ。

ああ、そう言えばぶつけてなかったね。

「どうしよう……何処へ行ったのかわかんないよ」

今回も相棒は一度も乙をしていない。何かを言ったわけでもないのに、俺へ斬りかかるところもかなり減った。下手したら俺よりも火力は出ているかも……さ、流石にまだ俺の方が強いよね？

「大丈夫、どうせエリア9で寝てるから」

確か、ケチャの寝るエリアは其処だったと思う。でもあの場所ってジャギイが叩き起こすことがあるんだよなあ……

「……だからなんで知ってるのさ？」

色々と経験しているんです。

エリア9へ行くと、薦へぶら下がったまま寝ているケチャワチャがいた。

あんな寝方で疲れが取れるのだろうか？ 普通に横になつて寝れば良いのに……

「えと、どうやって起こすの？」

ふむ、どうするか。

寝ている時、最初の一発は2倍のダメージが入る。だから俺のホームランで叩き起こすのが一番だけど……

「音爆弾持つて来てる？」

「うん、あるよ」

「んじや、それ投げちゃって」

これでダウンも取れるし、落とし物をいただければ儲けもの。

やる必要があるかわからないけれど耳を塞ぎ、音爆弾に備える。相棒がポーチから音爆弾を取り出し、ケチャへ投げるのが見えた。

瞬間——馬鹿みたいに甲高い音が響いた。

音に驚き落ちて来たケチャへ直ぐ様、ラツシユをかける。

寝起きで悪いですが失礼します。

「うわあっ！」

音に驚き、怯んでいる相棒はとりあえず無視。お前が怯んでどうすんだよ……

そして2回目のホームランを決めたところで、ケチャが倒れた。

たぶん、10分針はいつていないと思う。上出来です。

「あつ、終わっちゃった」

お疲れ様。

うむうむ、やはり防具があると全然違うな。この調子なら本当に下位クエストはクリアできるかもしれない。

ま、どうせそんな上手いかないんだらうけどさ。

「おーい、剥ぎ取ろうよー」

あつ、はい。

直ぐ行きます。

さて、次はどのモンスターを倒そうか。

第15話く選んだドリルはブーステツドく

「君の操虫棍つてさ、もう虫に餌あげちゃった？」

「ううん、まだ何もあげてないよ。これつてどの餌をあげれば良いの？」

クエストの帰り道。

今日はそれほど眠くはなかったから、いつものように反省会でも開こうかと思っただけ
れど、特に反省することもないので雑談。その雑談ついでに、操虫棍のことを相棒に尋
ねた。

「ん〜……好みもあるんだけど、スピードをひたすら上げるのが一番使いやすいと思う」
属性を強化すれば、なかなかの威力にはなる。でも虫を飛ばすより斬った方が強い。
ゲームをやっていた時も操虫棍を担いでいる奴らの腕についていたのは、ほとんどがオ
オシナトかメイヴアーチルだったし。

ハンマーにもその虫だけもらえないだろうか？

「わかった。じゃあスピードを上げてみる」

ケチャワチャも倒したことだし、これで操虫棍の強化はできると思う。

そうなると相棒の武器のレア度は2。一方俺は1。こりやあ、そろそろダメーじ量が逆転しそうだ。たぶん武器倍率も負けるよなあ……ボーンロッド改の武器倍率って120くらいあった気がするし。

「それでこれからはどうするの?」

「君の武器が強化できればHRを上げていけば良いけど……どうすつかなあ。俺の武器も強くしたいんだよね」

できればブーステッドハンマー。それかクラスターハンマー辺りを作りたい。ブーステッドハンマーを作るのにテツカブラの素材が、クラスターハンマーを作るのにネルスキュラの素材が必要になる。難易度はどちらも変わらないけれど、ネルスキュラならついでに相棒の武器スニークロッドを作ることできる。ただ、ブーステッドハンマーの方がカツコイイ。

むう、悩みどころだ。

「そう言えばさ。HRってどうやって上がるの?」

肝心なことを忘れていた。

ゲームなら決められたキークエストをクリアした後、緊急クエストが出てそれをクリアすればHRは上がる。でもこの世界ではどうなんだろうか?

聞いたこともないクエストとかあったし、もしかしたらゲームとは違うのかもしれない

い。

「私も詳しくは知らないんだけど……なんか頑張っていると、ギルドマスターのおじいちゃん経由でクエストを依頼してくれるんだって。それでそのクエストをクリアできればHRが上がるって聞いたよ」

頑張っているとねえ……。キークエスト的なものはなさそうだけど、今の俺たちはどうなんだろうか？ まあ、それもあのほっほほじいさん次第か。

「そのクエストって一人ずつじゃないとダメなのか？」

「ううん、パーティーでも良かったはず。それにクリアできれば全員上がると思う」

あら、それは便利ね。

ゲームもそう言うシステムなら良かったのに。そうすれば全く関係ない部屋に入ってきて『くえてつだつて』とか言う人も多少は減っただろう。アイツらのせいではどの部屋が壊滅したことか……『ハチミツください』の方がよっぽど可愛い。

まあ、若しくは緊急クエストはソロじゃないとダメにするとかか。

「結局どうするの？」

ん……悩む。

ソロではないのだし、このままの装備でもごり押せる気がする。でも、あんまり好きじゃないんだよなあ。できるなら準備は整えてから進みたい。

ブーステッドハンマーかクラスターハンマーか……

うん、決めました。

「テツカブラでも良い？」

「私はいいいよ」

ありがとう。もしかしたら寄り道になってしまいかもしれないけれど、やはり此処はドリルを選ぼう。

ドリルとブーストとか本当にカツコイイ。見た目だつて大切なのだ。

バルバレへ帰り報酬素材を受け取ってから直ぐに加工屋の元へ向かった。

其処で虫餌と必要な素材を渡し、相棒の武器を強化。完成するのは例のごとく明日の夕方らしい。まあ、つまりこれで一日暇になってしまった。

加工屋へ武器強化の依頼をした後は再び集会所へ戻って乾杯。先に依頼したのは、いつものように相棒が酔い潰れてしまう前にやっておきたかったのです。

「明日はどうすつか？」

いつものようにタンジアビールとポポノタンを注文。どこの世界でも美味しいビールは偉大だ。

「どうしよう。武器ができるのは明日の夕方だったよね。うくん……」

相棒の武器がないせいで明日はクエストへ行けそうもない。俺一人なら行けるけれども、そんな度胸もありません。そんなことをしたら今度こそパーティーを抜けられるかもしれない。

ケチャワチャ素材だけで作ることのできるハンマーでもあれば良かったのに。

んく……お金には余裕があるし、闘技大会でも見に行こうかな。ケチャワチャあたりとか。

「んじゃあ、明日は休日だな」

「そだね。………また私を置いて勝手に行かないですよ？」

ジト目だった。

あの時は本当にすみませんでした。

「大丈夫、流石にもうしないよ。また泣かれるのやだし」

「な、泣いてはしないでしょ！」

いや、お酒呑みながらわんわん……ああ、ダメだ。この子、絶対あの時のこと忘れてる。この調子じゃまた周りの人から変な噂を流されていそうだ。

ぼつちが加速する。友達少ないんです。

今はまだ問題ないけれど、そのうち二人でも辛くなる時が来るかもしれない。その時
もためにも周りの評価は落とすたくないんだけどなあ……ちようど良い新米ハンター
とかいないかね？

「地底洞窟って此処からどれだけかかるかわかる？」

「泣いてない」

「あく……はい、泣いてませんでした」

むう、いらんこと言っちゃったなあ。

相棒のことだし機嫌は直ぐに直ると思うけれど、少々申し訳ない。

機嫌を治してもらうために追加で龍頭を注文し、相棒に渡した。まるで餌付けをして
いるみたいでちよつと面白い。口には出さんけど。怒られるのやだし。

はあ……こんなことばかりやっているから、お金が直ぐになくなるんだろう。なかなか学習してくれない人間だ。

「えと……地底洞窟だったよね。私が行った時は朝出発して着いたのは夕方前くらいだったよ」

「えつ、地底洞窟に行ったことあるの？」

「なんですと？ 俺はまだ遺跡平原しか行ったことがないと言うのに……ちやつかりしているじゃないか。」

「うん、地底洞窟って鉱石がいっぱい取れるから結構行ったよ」

「此奴やりおる……。でもまあ、鉱石を集めるのなら地底洞窟へ行つた方が良いでしょう。俺も一度くらい行けば良かった。」

「そして行くのにほぼ一日かかるのか。まあ、それくらいなら問題ないか。ただ、あの乗り心地の悪い馬車に一日近く乗っているのは、それだけで疲れるかもしれない。」

「ああ、そうだ。今つて火山活動は大丈夫なのか？」

「もし地底洞窟の火山が活動していたら、其処は地底火山となつてしまう。俺たちのH RはI。だから地底火山へ入ることは許されていない。」

一週間ほど前はジンオウガの彼女がグラビと戦っていたのだし、その時は地底火山

だったはず。ああ、でもグラビは原生林でも出るからわからないか。

「うくん、それは聞いてみないとわからないけど、まだ大丈夫だと思うよ。少なくとも一ヶ月前は大丈夫だったし」

むう、火山活動でエリアが変わるのは面倒だな。どれくらいの期間なのかはわからないけれど、今のうちに地底洞窟でやれることをやっておかないといけない。これを逃したら、次がいつになるかわからないし。

「了解、んじゃあ次は地底洞窟で」

「おおー」

コツンとぶつかるグラスとグラス。

騒がしい集会所に良い音が響きました。

焦ったって仕様が無いのだ。明日はゆっくり休んで、次に備えよう。今は順調に進んでいるけれど、いつの日かそう上手くはいかない日が絶対に来る。

難しい人生です。

明日はどうつすかなあ……

第16話く左からロケツト生肉く

「ふふっ、新しい武器楽しみだ」

「良いなあ、俺も早くレア2の武器にしたいよ」

武器を強化し、御満悦な様子の相棒。

レア度が1から2へ上がったただけではなく、攻撃力も279から371へ上がった。武器倍率換算で30アツプ。俺の武器よりも20も高い。ずるい。

「君は一度強化したじゃん」

「一度じゃなくて二度だよ。でも君の武器の方が強いんだよね……」

昨日は何と言うか、何も得ることのできない一日だった。

最初は闘技大会へ行こうとしたが、先日相棒のご機嫌を直すためなどに出費をしてしまったため、やめた。そうなると本当にやることなく、相棒の武器強化が完成するまではいつかのように、道端にいるプーギーの腹をつついて時間を潰した。

アイツで遊んでいると心が洗われる気がする。

「そうだったの？　じゃあ私の武器って結構強いんだ」

「まあ、現段階では一番強いんじゃないか？」

けれどもどうやら俺の運は相当悪いらしく、そうやってニヤけながらプーギーの腹をつついているところをあのにんオウガ一式の彼女に見られた。

哀れみとか同情とか、色々な感情の混ざった視線だった。

『え、えと……うん。そういう時もあるよね……』

そんな声をかけられ俺は泣いた。そつと、心の中で。

足早に俺から離れていく彼女を見ながら悲しみに打ち拉がれた。

次会った時、どんな声をかければ良いのかわからない。まあ、向こうもそれは同じだろうけど。すみません、タイムマシンください。記憶を消す薬でも良いです。

「テツカブラかあ……私、見たことないんだよね」

それから相棒と一緒に加工屋へ行つて武器を受け取った。そう言えばコイツは昨日、何をしていたんだろうか？

まあ、そんなことのあつた次の日。朝早くからテツカブラを倒すために、地底洞窟へ出発。帰りは明日の昼くらいになりそうだ。

テツカブラのクエストの依頼主は土竜族の人だった。テツカブラが大穴掘って採掘に支障が出ているからどうかして欲しいらしい。土竜族ねえ……やりすぎてまたテ

オの住処を掘り当ててしまおうとかならないようにしてもらいたいものだ。

「おろ、そうなのか。まあ、アイツはただの大きな蛙だよ」

ちよつと牙が大きくて尻尾も生えているけれど、蛙には違いない。そして何より、テツカブラは顔が大きいから好きだ。スタン値の初期耐性が高いのと、あの車庫入れはど
うにも困るんだけどさ。

「見た」とあるの？」

「まあ、あるっちゃある」

ないと言えない。てか、ゲームの中なら全てのモンスターを見ている。

最大金冠がなかなか出てくれず、アイツには苦勞させられた。何回、地底洞窟の相撲大会へ足を運んだことか……強くはないからまだ良い方だけど。

「そうなんだ。それでテツカブラって強いのか？」

「強くはない方じゃないかな。攻撃力が高いのと、連続攻撃をしてくるからちよつと面倒臭いくらい。でも、倒せなくはないと思う」

連続突進の後は確定で威嚇が入るし、確か下位クエストなら岩砕きの後も確定で威嚇だったはず。隙がかなり多いモンスターって言うイメージだ。

気をつけるのは、減気プレスからの突進くらいじゃないだろうか。あとは白くなつた尻尾を斬ってしてもらえれば倒せるはず。ケチャワチャよりは戦い易いだろうし、強い

相手ではない。

「それに君の武器だって強くなったんだ。大丈夫だと思うよ」

何より今回はそれが大きい。たぶん俺より火力が出るんだろうなあ……

ま、まあ、これで俺もブーステッドハンマーを作ることができれば、火力も上がる。だから足を引つ張ることはないと思う。……ブーステッドハンマーって攻撃力いくつだったっけかな。

「が、がんばります」

おう、頑張ってくれ。超期待してる。

雑談をしたり、飯を食べたりしながら揺られること数時間。漸く地底洞窟へ着いた。日が昇り始めるくらい朝早く出発したと言うのに、日は西へ沈み始めている。ホントに遠いんだな。原生林や氷海にはどれだけかかるのやら……

「やっ到着いたか……流石にこれは遠いな」

「そればかりは仕方ないよ」

それもそうか。

運んできてくれたアイルーに礼を行ってからクエストへ出発。支給品ボックスからは地図と応急薬6つ、携帯砥石2つを取り出した。携帯食料はいらん。美味しくないも
ん。

「んじゃ、行くか！」

「おおー」

テツカブラの初期エリアは8。段差や坂が多く、弓殺しのエリア。ゲームの時は本当に苦勞したなあ……

一つ声を出し、気合を入れてからエリア1へと繋がる崖を飛び降りた。サクッと終わらせて美味しいビールを浴びるように飲んでやる。

エリア2からさらに崖を飛び降りてテツカブラのいるエリア8へ。

そしてエリア8へ行くと、崖の下に2匹のリノプロスが見えた。ロケット生肉か……面倒臭いな。クンチュウの方がまだ良かった。

その生肉の先にアイツが居た。のそのそと歩くばかりで、崖の上にいる俺たちにはまだ気づいていない。

さて、どうするか。できれば生肉を倒してから戦いたいけれど、倒してもどうせまた出てくるよな……しやーない、生肉を避けつつ戦うしかないか。

「……行くか」

「う、うん」

緊張している様子の相棒。まあ、テツカブラの見た目怖いもんね。緊張するのも仕方無いか。

エリア8の崖を飛び降り、テツカブラの居る段へ。そして、俺たちが飛び降りたのに気づいたのか、テツカブラが此方を向いた。

今まではお散歩みたいにゆっくりと動いていたはずのテツカブラだったが、俺たちを見つけその動きは一気に速くなった。

「き、来たー」

わかってます。

ハンマーを右腰へ構え、此方へ向かって近づいて来るテツカブラへ此方からも近づ

く。そして、発見時の咆哮の前にカチ上げをその立派な顔面へ一発。

カチ上げをして直ぐ横ロリはせず、咆哮へ備える。テツカブラが大きく息を吸い、頭を上げ一拍置いてから咆哮をフレーム回避。

耳を塞ぐことはないけれど、咆哮で震えた空気がピリピリと肌を突き刺した。ヤバイな……予想以上に迫力がある。

ビビるな、怯むな。

フレーム回避後、直ぐにもう一度カチ上げ。これでスタン値は80。テツカブラの初期スタン値は……いくつだったかな。200は超えていたと思うけど。

「赤は顔、白は手足、橙は尻尾か胴体！ 頑張れ!!」

エキスの取れる位置を相棒へ叫びながら、崖を上り乗り攻撃を頭へ一回。

地面から岩を掘り起こそうとするテツカブラからローリングで距離を取り、直ぐにハンマーを右の腰へ構える。そして、大岩を掘り起こしたところでまたカチ上げ。

後退するテツカブラ。んもう、車庫入れやめてください。さらに、もう一度地面から岩を掘り起こしたと思ったら、そのままその岩を啜えた。確か肉質は18とかまで落ちるんだっただかな……

「えっ、これどうすれば良いの?」

驚いたような相棒の声。

まだ神々しくはなっていないからエキスは集めきれしていないらしい。

「エキス取って後ろで斬ってりや問題ない」

岩砕きも後ろの判定は薄い。尻尾でも斬っていてください。

テツカブラから距離を取りしな右腰へハンマーを構える。とりあえず、その立派な牙を破壊させてもらおう。今、俺が欲しいのはその牙だけだ。

斬れ味もつたいたいけれど、構わず岩を啜えているテツカブラ顔へカチ上げ。そしてローリングで距離を取る。テツカブラが岩を噛み砕こうとしているのを見てもう一度ローリングで距離を取ってから、また右腰へハンマーを構える。

とにかく今はカチ上げ！ スタン取るまでカチ上げ！

そんな、今にも岩を噛み砕こうとしているテツカブラの真ん前には、何故か相棒の姿。いや、ホントどうして其処にいるのよ……

砕かれた岩を避けられるわけもなく、吹き飛ばされていく相棒。けれども、エキスは3色集めたらしく、その体は無駄に輝いていた。ああなるほど、赤色を取りたかったのね……

そんなシユールな光景を横目にもう一度カチ上げ。そのカチ上げが当たった瞬間、2本ある牙が1本砕けた。まだスタンじゃないんですか。

牙が砕かれ怯み後退したテツカブラへローリングで距離を詰め、横振りを一発。

其処で本日、一回目のスタンを奪った。

スタンし倒れたテツカブラへ縦1、縦2、そしてホームラ……
「なにこことっ!？」

を決めようとしたところで何かに吹き飛ばされた。

どうやらロケット生肉が本気を出し始めたらしい。本当に勘弁してください。

本気を出したロケット生肉は強く、その突進を躲しているうちにテツカブラは立ち上がってしまった。無意識に舌打ちが出る。

さらに見えていなかったもう1頭の生肉の突進をくらい、テツカブラの前へ強制的に連れて行かれた。洒落にならん、とか考えていると、テツカブラが体を大きく傾かせるのが見えた。

所謂、四股踏み。ソイツを避けられるはずもなく直撃。

華麗なコンボに拍手を送りたい。

クソが。

俺が転がされている間に復活したのか、相棒がテツカブラへ斬りかかるのが見えた。テツカブラはちよいと任せて回復せねば。

そう思い応急薬を飲もうとした時、テツカブラが大きく叫んだ。

ああ、もう!

あまりにも大きな咆哮に耳を塞ぐ、その瞬間生肉に吹き飛ばされた。体力がそろそろ

ヤバい！ お願いです、回復させてください。

やはり生肉を最初に倒した方が良いのか？ いや、でもそろそろエリアチェンジしてもおかしくないはず。それなら今はなんとか耐え……

「うっ……」

生肉に吹き飛ばされ立ち上がったところで、テツカブラの減気ブレスが直撃。体から一気に力が抜け、尻餅を付いた。

そして目の前には今にも突進しようとするテツカブラ。

ああ……こりやダメだ。

ローリングで避けるスタミナもなく、テツカブラが口を大きく開けながら突進をしてくるのが見えたところで、俺の意識は途絶えた。

目が覚めるとベースキャンプに寝ていた。

……なに!? なんなのアイツら! コンボが上手すぎる。中に人でも入ってんじやねーのか!?

テツカブラの攻撃はまだ良い。躲し難いものではない。けれども、その周りを元気に走り回る生肉がちよつとヤバい。

「い、急いで戻らないと」

ヤバい、ヤバい。今、テツカブラとはあの相棒が一人で戦っている。

飲みたくなんてなかったけれど、支給品ボックスから携帯食料を2つ取り出し、一気に飲み込む。そして走り出そうとした時、数匹のアイルーが荷車を運んできて、乗っていた人間をベースキャンプで下ろした。

……うん、間に合わなかったみたいだね。

これで2乙。クエスト失敗のリーチがかかった。秘薬なんて持つてはいないから、最大体力はさっきの3分の2。テツカブラの体力はまだ9割近く残っているだろう。

まさに絶望的状况だ。
けれども、そんな状况は嫌いじゃあない。

第17話　口の中にカブトムシ

「……………」

「いや、すまん。まさか乙るとは思わなかった」

完全に舐めていた。

テツカブラくらい余裕だろうと思っていた慢心が原因。どう考えても自分のせいだ。

さて、反省会を開いている場合じゃない。クエストの時間にはまだまだ余裕があるとは思うけど、これで色々と追い詰められた。

うーん、しかし困ったな。このまま行ってもさつきと同じようにやられるだけだろう。しかもさつきより体力は減っているんだ、戦い方を変えないと。

むう、こんなことになるのならスタンを取らなければ良かった。一度スタンを取ってしまったせいで、耐性値は上がっている。まあ、たれば言っても仕様が無いことくらいわかってはいるんだけどさ。

「それで、どうするの?」

とりあえず、あの生肉をどうにかしないとダメだ。流星にさつきのは運が悪かったか

らだろうけれど、それでも生肉が走り回っていたら面倒臭い。かと言ってこやし玉なんて持っていないし、あの生肉には松明も意味なかったよなあ……

ん、どうすつかね。

「……ちよつと狭いけど崖の上で戦うか」

たぶんそれが一番良いはず。流星に崖の上まで生肉は来ないだろう。来たらお手上げだ。

「崖の上って、エリア8に入って直ぐのところ？」

「うん」

落とされたら面倒だし、テツカブラが落ちても面倒臭い。けれども、此方はもう後がないんだ。どんなに面倒だろうが、もう一度来るよりはよっぽどマシと言うもの。

とりあえずテツカブラがエリアチェンジしてくれば問題ない。エリア3も戦い易い場所ではないけれど、生肉は彼処にいない。それだけで充分だ。

「行けそうか？」

「がんばります！」

うん、頼むよ。

「時間はかかっても良いから無理はしないように。とにかくクリアだけを目指そう」
「おぉー！」

むう、まさかテツカブラにこれほど苦戦するとは……

でも良いさ。それくらいの方がやりがいはある。そう思うことにしよう。

さて、反撃を開始させてもらおうか。

エリア2から飛び降りエリア8へ入った瞬間、テツカブラに見つかった。本当ならよろしいことではないけれど、今ばかりは都合が良い。

「回復するときはエリアを離れても良いから、とにかく安全に」

「了解です！」

崖の下のさらに遠くの方で咆哮をしているテツカブラを見ながら、相棒へアドバイ

ス。もう此方には後はない。とにかく命を大事に。

大きな咆哮をしたテツカブラは直ぐに地面へ牙を突き立て、大きな岩を掘り返した。そしてずるずると後ずさり。

そのせいで、どんどんと俺たちから離れていく。

あのカエル、何やってんだろ……

頭の良い生物ではないと思うけれど、もうちよつとこう……なんとかならないのだろうか。あんな頭の弱い奴にやられたのか……

地面へ牙を突き立て、大岩を掘り返して後ずさり。そんな意味のわからない行動をもう2回繰り返し返してから、漸く此方へ近づいて来た。

「来るぞ」

「う、うん、わかってる」

背中に担いでいたハンマーを右腰へ。

そして、崖下からジャンプで上ってきたテツカブラへスタンプ。溜まっているスタンプはない。上昇量も高いだろうし、どんなに取れてもあと2回が限界だろう。面倒臭い相手だ。

崖から落とされないう、できるだけ真ん中で戦うように意識。無茶な行動はせず、岩を砕いた後や、連続突進の後に確定でやる威嚇モーション中を中心に狙う。

もう失敗はできないことからのプレッシャーで、嫌な汗が止まらない。良い緊張感だ。嫌いじゃない。

そして、怒り咆哮を躲してからカチ上げをぶち込んだとき、2本目の牙が砕けた。これで目標は達成。後は倒すだけ。まあ、それが難しいんだけどさ。

牙を砕いてからは戦い方を変え、手や足、膨らみ白くなつた尻尾を中心に狙う。流石に頭の前はちよつと怖いです。相棒を吹っ飛ばさないよう、カチ上げとスタンプは使わず、溜め1と縦振りをメインに。

手数を減らし、回避を優先。ダメージを受けたら直ぐに回復。そんなことを心がけた。

そして、戦い続けること暫く。漸くテツカブラが疲労状態となつた。

畳み掛けるお!!

口を開き、苦しうに呼吸を繰り返す疲労状態のテツカブラ。そんなテツカブラへ攻撃をしようとしたが、ホームランを尻尾へ当てる前に土の中へと潜り込んでいった。

「うう……まだ倒せないの?」

多くても6割くらいしか削れていないんじゃないかな。

今回は回復薬も持ってきてきているから、薬にはまだまだ余裕がある。ただ、アレだ。精神的にかなり疲れた。体力はまだまだあるけれど、嫌な汗は止まらないし無駄に手足が

震える。

相棒の表情もかなりキツそうだ。これ、倒せつかなあ……

まあ、そんな弱音を吐いている場合じゃないんだけどさ。

「かなり削つてはいると思うし、もうちよいだろ」

まだ時間はかかると思うけど頑張ってくれ。

「……がんばります」

砥石を使い武器を研いでからテツカブラを追いかけエリア3へ。

エリア3へ入ると、未だ疲労状態のテツカブラと直ぐに目が合った。此方も彼方もボロボロだ。

動きの遅くなったテツカブラへとりあえずカチ上げと横振り。ローリングで距離を取り直ぐにまた右腰へ構える。

そして後ろから相棒の虫が飛んできて、テツカブラの顔に当たった。パキンと光るスタンエフェクト。

其処でテツカブラがスタンした。

「えっ?」

何とも間の抜けた相棒の声。ナイスです。

スタンしたテツカブラヘカチ上げを決めてから、横振り始動でホームランを顔面へ。ローリングでテツカブラの左側へ回り込み、もう一度横振り始動でホームラン。

起き上がったテツカブラが大きく息を吸い込むのが見えた。んもう！ 疲労状態終わるの早くないですか!?

一拍置いてから咆哮をフレーム回避。右腰へハンマーを構え――

「あつ、まず……身体が動かない……」

そんな声が聞こえて来た方を向くと、痺れながら相棒が倒れていた。ロケット生肉の次はブナハブラが邪魔をしてくるらしい。

明らかに相棒の方を向いているテツカブラ。

大ピンチです。

「……………めんっ!!」

そう言うってから本当はやりたくなかったけれど、溜め3スタンプで相棒を吹き飛ばした。

相棒を吹き飛ばした後は直ぐにローリング。その瞬間、テツカブラが大口を開け地面

を挟りながら通り過ぎて行った。

ヤバイヤバイ、起き攻めとかこのカエルマジ怖い。

「あ、ありがとう?」

気にすんな。

ちよつとした段差に上りハンマーを構える。乗り攻撃は一度当てている。乗り値に減少はないはずだから、あと一回で乗りダウンを奪える。

テツカブラと目が合った。

右腰へ構えたハンマーへ力を入れる。

呼吸が荒い、心臓の音が五月蠅い。できるとわかっているけど怖いものは怖いのだ。

大口を開け突進してくるテツカブラ。失敗すれば大ダメージ。成功すれば一気に削ることができる。ハイリスクハイリターン。そんな博打も嫌いじゃない。

そしてテツカブラの突進に合わせて段差から飛び、ジャンプスタンプを叩き込んだ。

「つつ……!」

結果、失敗。タイミングが少々遅く突進が直撃。吹き飛ばされました。

乗りダウンを奪うため直ぐに起き上がる。攻撃は入ったはず。しつかりとした手応

えはあつた。

だからダウンは奪え——

「終わった……の？」

……起き上がると其処には仰向けに倒れたテツカブラの姿があつた。

どうやら自分が思っていた以上にダメージが入っていたらしい。まあ、相棒の武器だつて強化したんだ。火力は出ていたんだらう。

「はあ………疲れた」

本当に疲れました。

無駄に緊張してしまつたせいで心身ともにボロボロ。いくら強くない相手とは言えダメだね、舐めてかかつては。

「ん〜疲れたあ……ほら！ 剥ぎ取ろうよ」
わかつてます。

ハンマーの強化にはコイツの大牙が4本必要。どう見てもコイツに牙は2本しかないけれど、運がよければ一回で4本揃う。

まあ、報酬を受け取ってみななければわからないんだけどさ。

ただ、もう暫くこのカエルとは戦いたくないかな。

「なあ、知ってるか？」

「何を？」

残念なことに剥ぎ取りでは大牙が出ない。捕獲なら出るはずだから、捕まえちゃえば良かったね。

まあ、今更そんなことを言っても遅いんだけどさ。

「コイツの口の中ってカブトムシがいるんだぜ」

「……何言ってるの？」

ゲームとは違い、体をすり抜けることができないため、仰向けに倒れているテツカブラの口の中を見ることができない。

はてさて、この世界にもゲームスタップの遊び心は届いているのかな？

そんなどうでも良いようなことを思った。

第18話く夢の中でさようならく

「あたたっ」

ガトゴトと揺れる馬車の上。一際大きな揺れによつて泥のように眠っていたのにも関わらず目が覚めてしまった。

んもう、もう少しくらい道を整備してくれたって良いだろうに。

辺りは暗く、たぶんバルバレへ着くまではまだまだ時間がかかるはず。

馬車の揺れる音の他には何かの虫の声や風のそよぐ音。そして、静かな寝息のような音が聞こえるばかりだった。

そんな寝息は隣から聞こえてくる。其方を見ると、俺の肩を枕代わりに相棒が気持直良さそうに眠っていた。

まあ、今日はいろいろあつたのだし、この相棒だつて相当疲れていたのだろう。

鼻でも摘まんでイタズラをしようと思わないでもなかつたけれど、それは止めておいた。

今回のクエストは俺のためのもの。それに付き合ってくれたんだ。今ばかりはゆっ

くりと休んでもらおう。

辺りは暗く、今どんな道を進んでいるのかはつきりとわかることはない。けれども、決して真つ暗な世界ではなかった。

ふと、上を見上げる。

其処には満天の星空が何処までも広がっていた。

星に詳しくはない。どの季節にどんな星座が見られるのかなんてわからない。でも、この景色を向こうの世界で見ることができないことははつきりとわかった。

科学の発展したあの世界に星空が映えることは、ほとんどないのだから。

「……でつけえな」

真つ暗の世界で輝く星々は、少し手を伸ばせば届くんじやないかってくらいだ。馬鹿みたいな距離が離れていることだってわかってはいる。

それでもあと少し、もう少しで手が届きそうだった。

きつとこの世界では、こんなにも綺麗な星空が当たり前のことなんだろう。

俺のいた世界とこの世界は違う。この世界に来てからは、戸惑いだらけの毎日だ。どうして俺がこの世界に来たのかなんてわからないし、たまに此処がゲームの世界と言う

ことを忘れそうにだつてなる。

この世界は人の手によって作られた世界だ。

けれども、この星空ばかりは人の手に届かない場所にあつてもらいたい。

なくんて、言葉に出せるはずもない恥ずかしいことを、そつと心の中で呟いた。

「着いたー！ 長かったー!!」

「寝てただけだけどな」

まだ朝方と言うこともあつてか、いつもは騒がしいはずの集会所にも、違う空気が流れていた。

緊張した顔でクエストに出発する者。慌ただしくクエストの準備をする者。疲れた顔を隠そうともせず、俺たちと同じようにクエストから帰って来た者などなど。

「なにさー、君だつてどうせ寝ていたんでしょ？」

「まあ、そうつちやそうだな」

結局、あの後も星を眺め続けた。

どうせこれから飽きるほど見ることになるだろうけれど、何故か寝ようとは思わなかった。

あつちの世界ではなかなか見られない景色だったしなあ。

「全くカツコつけちゃつて。んゝ……でも今回はぐつすり寝られた気がする。そんなに疲れていたのかな？」

そんな言葉を落としてから首を傾げた相棒。

正直なところ、あの馬車の乗り心地は褒められたものではない。

それでも、この相棒がぐつすり寝られたと言うのは……まあ、俺を枕にしたからなんだろうなあ。

そんなことを言ったらまた騒ぎ出すだろうし、本人には伝えないけど。

「んじやとりあえず、報酬をもらいに行くか」

「うん、そうだね」

今回テツカブラを倒したのは俺の武器を強化するため。だからもし、これで素材が足りなければ、またあのカエルと戦わなければいけなくなる。

……それだけは勘弁してもらいたい。別にカエル相手に苦手意識はないけれど、どうにも上手く戦える気はしなかった。

受付へ行き、報酬金と素材を受け取る。

そして祈るように素材を確認すると、運が良いことに大牙は4本あった。

だからどうして2本しかないテツカブラの牙が4本あるんだよ！　なんて言うツツコミを入れたくなかったが

『じゃあ、2本いただきますね』

とかギルドの人に言われても困るため、ツツコミはぐつと自分の中へ押し込んだ。

まあ、そんなこと言わないと思うけど。

「素材、足りそう？」

「うん、足りた。お金も余裕があるし、これで武器も強化できるよ」

良かった。これでまたロケット生肉に舌打ちをしながら戦わなくてすむ。

大型モンスターに苦戦するのは良いけれど、メインじゃないモノに苦戦するのはどうにも嫌いなのだ。

「おおう、そりゃあ良かったよ。じゃあもうテツカブラとは戦わなくてもいいってこと？」

「そうだね、素材は足りてるしこれで武器を強化して次は……まあ、HRを上げていく感じになるのかな」

しかし、HRを上げるにはどうすれば良いんだろうね？ 相棒が言うには、ギルドマスターがクエストを依頼してくれるそうだけど……

ま、今度聞いてみれば良いか。

「この後はどうするの？」

「とりあえず加工屋へ行つてくるよ。んで、どうせ武器ができるのは明日の夕方とかになるだろうしそれまでは……」

どうすつかね。

うくん、今日も含めまた二日ほど暇になつてしまうのか。流石に二日間もプーギーの腹をつつき続けるのはヤバい気がする。

かと言って、魚釣りなどのクエストへ行こうとも思わないし……しまったなあ。こんなことになるのなら、もう一本ハンマーを作っておけば良かった。

「何かやりたいこととかある？」

「私も特にはないかなあ。あつ、でもせつかく帰ってきたんだしお酒飲みたい！」

ん……お酒か。でもまだ昼間なんだよね。てか早朝です。

別に朝からお酒を飲んでも悪くはないと思うけれど、どうにも気が進まない。それに

お酒は夜に飲んだ方が美味しいと思う。

「了解。ああ、でもお酒飲むの夜からでも良い？」

「別にいいけど、何かあるの？」

何もありません。ただ単に気分的な問題と言うだけ。

「なんとなくな。んじゃあ、飲む時になったらまた声をかけるよ」

「うーん、わかった」

そんな言葉を交わしてから相棒と別れた。

さて、加工屋へでも行くのでしょうか。

いつもの加工屋へ素材と料金を渡して帰宅。そしてそのままベッドへ倒れ込んだ。

ああ、疲れた……。

けれども、これで武器も防具も揃ったわけだから、これから一気に進むことができるはずだ。ゴアやゲネル、グラビには苦戦するだろうけれど、それ以外は問題なくいける。

まあ、それもゲームの中ならって言う話なだけだよ。どうせ実際に見るゲネルとか滅茶苦茶気持ち悪いだろう。やだなあ、虫苦手なんだよね。

そんなことを言っている余裕なんて、あるはずもないってことくらいわかっているけ

どき。

そんな考え事しながらベッドの上で横になっていると、意識は直ぐに落ちた。

ふわふわと身体の浮く感覚。

地に脚は着かず、自分の状態も良くわからない。俯瞰的な景色。けれども、そんな景色は何処か危なげだった。

ああ、夢か。

それは直ぐにわかった。

浮いているはずの身体は何故かやたらと重く、上手く動かすことはできない。

何かが見える。でも何が見えているのかわからない。やはり気持ちの良いものではなかった。

「は、——ね……」

たぶん声が聞こえた。

けれども、誰の声でなんと言っているのかはわからない。

「そう——てわかつ——。——て、君——つたから……」

やはり、何と言っているのかはわからない。なんだろうか。この感覚は。

「——と会えて、——でした。……あ——う」

相変わらず何を喋っているのかはわからない。でも何かが見えた気がした。
大きな岩のような……山のような何か。なんだろうか、アレは。

「さようなら。——きな人」

そんな声が聞こえたところで、世界は崩壊した。

「ん……ああ、寝てたのか」

目が覚めると、家の中は薄暗くなっていた。

たぶん、もう夕方なんだろう。どうやら随分と長い時間寝ていたらしい。

ベッドから起き上がり、寝ていたせいで固まってしまった体を伸ばすと、お腹が鳴った。

……むう。

まあ、仕方無いね。今日はまだ何も食べていなかったのだから。

うくん、それにしても随分と無駄な一日になってしまったじゃないか。これならプーギーの腹をつついていられるのと何ら変わりはない。

いやホント、アイツの腹は癖になる柔らかさなんだ。撫でるタイミングを間違えると、頭突きをして何処かへ行っちゃうけど。

でも、きつと丸焼きにして食べたら美味しいんだろうなあ。
そんなことを考えたらまた腹が鳴った。

「……相棒を誘いに行くか」

お腹減りました。自分に嘘は付けない性格なんです。

寝起きのせいで未だに少しだけ頭はボーっとするけれど、まあお酒を飲んだって問題は
ないだろう。

もう一度伸びをしてから家の外へ。

そして隣にある相棒の家のドアをノック。家の中にいてくれれば良いけど。

「あつ、はい！　ちよ、ちよつと待って！」

ガタゴトと随分騒がしい音がした。何をやっていたんだろうね。でもどうやら家へ
は居てくれたらしい。

相棒が出てくるのをドアの前でボーっと待っていたら、勢い良く扉が開き俺の顔面へ
直撃した。超痛い。

「うわっ！　な、なにやってるのさ!?!」

いや、ただ待っていただけなんですけど……。それにそんな勢い良く開かなくても

……

ヤバい、ヤバい。コレ、鼻血出るんじゃないか。俺の年齢はまだ二十歳をちよつと超えたくらい。見た目には気をつけたい年頃なんです。

……はて、そう言えばこの相棒つて何歳なんだろうか？ 見た目は俺よりも若そうだけど、お酒を飲んでいるのだしやっぱり二十歳は超えて……いや、世界が違うんだ。二十歳を超えていなくてもお酒を飲むかもしれないからわからないか。

ま、別に何歳だろうと関係ないか。

「飯行こうぜ」

「あつ、うん。行きます。でも顔、大丈夫？」

たぶん大丈夫。どんなに酷くても鼻血が出る程度。

「大丈夫だよ。それより、飯とお酒を飲みに行こうぜ。お腹空いた」

「うくん、それなら大丈夫……なのかな？ そだね、行こつか」

それで良いと思います。

さてさて、今日は予定通り浴びるように飲むとしよう。たまにはそんな日があつても悪くはないだろう。

第19話く初めての緊急クエストく

酒の肴にはちょうど良い塩梅に味付けられたポポノタンを食べながら、ビールを豪快に流し込む。ビール独特の苦さと炭酸が口の中へ広がった。

疲れた身体にビールは良く染みる。

ああ、幸せだ……

「君っていつもビールだけど、飽きたりしないの？」

「これが一番好きなんだよ」

別に他のお酒が嫌いと言うことはないし、お酒ならなんでも好きだけど、やはりビールが一番美味しい。向こうの世界でもビールばかりを飲んでた。まあ、アレは正確に言うとならぬ第三のビールだけだ。

学生は毎日ビールを買えるほどお金を持っていないのだ。

「隣、いいかな？」

相棒とそんな他愛ない会話をしていると、声をかけられた。

それは何処かで聞いたことのある声。その声の主の方を見えるとギルドマスターが立っていた。この人は何をやっているんだろうか。

「すまないね、ちよいと座らせてもらおうよ」

そう言ってからギルドマスターは俺の隣に座った。

一緒に飲みに来たと言うのも考えられるけれど、それは違うだろう。はてさて何の用事があるのやら。

「キミたちの活躍は良く聞いている。そんな活躍目覚ましキミたち宛に『緊急クエスト』が届いたよ」

ああ、なるほどそう言うことでしたか。

此方から聞きに行こうかと思っていたけれど、その手間が省けた。しかし、俺たち宛に届いたって誰が送ってくれたんだろうか？ ギルドはまとめている奴らでもいるのだろうか。

「……クエストの内容は？」

「ネルスキュラの狩猟。状態異常にされ苦しむハンターも多いと聞く。だから準備はしっかりとするんだよ」

ふむ……今回はゲーム通りですか。

しかもネルスキュラが相手ならそれほど苦労することもなさそうだ。火力の高い攻

撃もなく、直ぐ転けてくれるからスタンも取りやすいし、体力が多いイメージもない。強いて言うなら、乗りがちよつと難しいくらいだろうか。

「今、武器を強化しているから、明後日にならないとクエストへ行くことはできないんだけど、大丈夫だろうか？」

「それくらいなら心配いらないよ。しつかりと準備をして望めばいい。それでは、がんばんなさい。ほつほほ、さても素敵な活躍を期待しているよ」

そんな言葉を俺たちに伝えてから、ギルドマスターは立ち上がり俺たちから離れた。

これで漸くHR1とおさらばできるチャンスが来た。7回ある緊急クエストうちの1回目。先はまだまだ長いけれど、まず一步と言ったところだろうか。

「お、おおー……ついにHRを上げるクエストが来たんだね」

緊張している様子の相棒。

HRが上がれば受注できるクエストも増える。そしてその分周りからかけられる重圧だつて増えるだろう。まあ、HRが2になつたくらいじゃ何も変わらないだろうけど。

いや、原生林や氷海に行けるようになるのは大きいか。

「まだまだ俺たちは駆け出しなんだ。当たつて砕けるくらいの気持ちで良いんじゃないか？」

「そうできればいいんだけどさ……」

こんなところで止まっているわけにはいかないけれど、焦る必要はない。ゆつくりでも良いから進んでいけば良いんだ。

それに今まで一緒に戦ってきたところを見る限り、この相棒はなかなか上手い。ちよつと心配性なところはあられるけれど、問題はないと思う。火力だって俺より出てるだろうし……

「ま、そのうち慣れるよ」

「むう……どうして君はそんなに余裕なの？ 君だって私と同じなのに」

俺だっていろいろあつたんです。

もしゲームのデータをそのまま引き継げていたら、きつとこの世界では有名人だったんだらうなあ……それくらいの特典くらいつけてくれても良かったのにね。

「前世の記憶とかが残っているんじゃない？」

「なにそれ」

なんだろうね。俺も説明くらいしてもらいたかったよ。

そう言えば、あのゾンオウガの彼女はどうかだったんだらうか？ きつとあの彼女もゲームは相当やりこんだんだらう。どことなく廃人臭がするし。

ま、とりあえず今はそんなことを忘れ、美味しくお酒をいただくこうじゃないか。

難しい話はまた今度。逃げちゃダメなことだつてあるけれど、逃げた方が良いことだつてあるはずだ。

黄金色の液体が入ったグラスを上げ、相棒のグラスとぶつける。次もよろしくお願いします。

「はい、『地底の捕食者・ネルスキュラ』ですね。がんばってください！ これを乗り越えればHRが2になりますので！ それでははりきつて行つてみましょう。ハンターさんには期待してますから！」

今日も今日とて元気の良い下位クエスト受付嬢と会話をしてから緊急クエストを受注。場所はテツカブラと同じ地底洞窟。まあ、ネルスキュラがテツカブラと同じエリアへ行くことはないんだけどさ。

「えと、えと……解毒薬持っていかなきゃだ」

ギルドマスターから話を聞いて1日以上経ったと言うのに、未だ緊張している様子の相棒。解毒薬も大切だけど、元氣ドリンクも忘れちゃダメだよ。たぶん即死はないと思うから其処まで気をつけなくても良いと思うけど。テツカブラの時と違って生肉もないし。

ただ油断だけはしないようにいこう。前回のようにはいきたくない。

「準備できたら出発するぞー。夜になる前に倒しちやいたいし」

「あつ、うん。すぐ行く」

時間は早朝。いつも通りの飯も食べ、調子も悪くない。

そして何より、今の俺には新しい武器がある！ 攻撃力は572もあり、会心率も5%アップ。名前はブーステッドハンマー。序盤ではお世話になった人も多いだろう武器。これは強い。

まあ、相棒の武器の方が武器倍率も高いんだけどさ……

「準備できたよー」

了解。

そんじや、ま。行くとしますか。

「緊張するね……」

ガタゴト揺れる地底洞窟へと向かう馬車の上、相棒がぼそりと言葉を落とした。

俺はそんなにしません。それよりも今直ぐ新しい武器を振り回したい。新しい武器ができるかと試したくなるよね！

地底洞窟へ着くのは夕方になるはず。その間、ずっと緊張なんかしていれば疲れるだろうに、大丈夫だろうか？

緊張するなど言ってもそれは無理だろう。それに緊張する気持ちもわかる。初めて戦うモンスターで、しかもHRの昇格がかかったクエスト。仕方の無いことだ。

「ネルスキュラだけどき。今まではするなって言っていたけど、乗り攻撃しても良いぞ」「えっ、いいの？」

正直に言うとうと、この相棒は乗り攻撃が下手だ。簡単なはずのアルセルタス相手に3回連続で失敗とかするし。

「うん、ちょうど良い機会だし練習がてらやってみなよ」

「大事なクエストで練習って……」

別に良いんです。乗りダウンには期待していないから。むしろ、ジャンプ攻撃が脚へ当たることでの大ダウンを期待しています。

ダウンしてくれないと頭行き難いし。ネルスキュラが立っているとあの爪に攻撃が吸われるせいで、頭へ入れ辛いんだよね。

「ネルスキュラはさ。乗り攻撃を成功させるのが難しい方なんだ。だからアイツで成功できればほとんどのモンスターは大丈夫だよ」

ゴリラとかミラとかはもつと難しいけれど、ネルスキュラだって難しい方だと思う。暴れる時間は長いし、予備動作も少ないし。

「そうなんだ……でも私、乗り攻撃成功したことないよ?」

ないのかよ! 初耳だよ! ああ、でも一人で大型種を倒したこともなかったもんね。じゃあアレか、俺と一緒にいったクエストが初めての乗り攻撃だったのか。

じゃあなんでこの相棒は操虫棍なんて使っているのだろうか……いや、まあ、乗り攻撃しなくても虫棒は強いだけだよ。

「それなら今回でコツを覚えれば良いさ。暴れたら振り落とされないうしがついて、後はひたすら背中を斬るだけ。慣れりやあ直ぐできるはず」

「が、がんばります」

期待しています。

まだまだ先のことだけど、グラビでは乗り攻撃をひたすら繰り返すことになるだろうし、今のうちに練習してください。

俺もグラビ用に毒か水ハンマー作ろうかな……アイツを倒してしまえば、後はそれほど苦労することもないだろうし。そうすれば上位ハンターが見えてくる。

「そう言えばさ、上位ハンターってどれくらいいるの？」

「ん……私も正確には知らないけれど、そんなに多くはないと思うよ。バルバレのギルドって人が多い方じゃないし」

あら、そうだったのか。

まあ、バルバレにはG級もないから、ハンターはそんなに集まらないのかも。

MH4GになればG級もあったのだろうか？ 発売までもう少しだったのになあ……未だ元の世界へ帰る目処は立たないし、もう諦めるしかないのかね。はあ、G級やりたかったなあ……滅茶苦茶強いモンスターにボコボコにされたかった。トライアル&エラーが好きなんです。

「それにバルバレって移動型集会所だから、やっぱり人は集まりにくいんじゃないかな」
ああ、そう言えばそんな設定があったな。

ゲームの中だとずっと同じ場所にいたからそんな感覚は全くなかった。

……うん？ 移動するとなると、俺はどうすれば良いんだ？ 集会所が歩いて行けなくなる距離になると流石に困るんだが。

「その移動つて次はいつあるの？」

「わかんない。なんかノリと気分で移動してるみたいだし、もしかしたらもう直ぐかも」
ホントかよ、それで良いのか……

まあ、バルバレはキャラバンつきのハンターが主に集まる集会所だったはず。俺たちみたいなはぐれ者の方が珍しいのか。

俺も何処かのキャラバンへ入れてもらえないかね？

「私が此処へ来てからはまだ一度も移動してないけど、移動するときにはバルバレについていけば良いと思うよ。アプトノスに引っ張ってもらえばあの家も動くはずだし」

ああ、なんだ。それで良いのか。これで路頭に迷わなくて済む。

てか、そもそもなんで移動するんだろうね？ 地図に乗らない集会所と言う響きはカッコイイけれど、それが理由ではないはず。

ま、移動する時にでも考えれば良いか。

とりあえず今は目の前にある課題をなんとかしていこう。

第20話くネバネバ彼女へ横振りく

「到着——！ 緊張してきたー!!」

早朝に出発はしたけれど、例のごとく地底洞窟へ着く頃には日が沈み始めていた。

ゲームのように集会所から出て直ぐ到着とかだったら楽だったんだけどなあ。まあ、それはそれでおかしな話なんだけども。

「ずっと緊張してたじゃん」

「今ももつとしてるの!」

「そうですか……」

まあ、クリアさえできれば問題ないから、どうか頑張ってください。

今回ネルスキュラを討伐するのは、HRを上げるためでもあるけれど、同時に相棒の新しい武器を作るためでもある。名前はスニークロッド。毒の操虫棍です。

フルフルのように毒ダメージがほとんど入らない奴や、ダレンみたいにそもそも毒にならない奴もいるけれど、毒武器が一本あれば、ほぼどんなモンスターに持って行ってもそれなりのダメージが期待できる。それに武器倍率だって、今相棒が担いでいる武器

よりも高かったんじゃないかな。

これでまた俺との火力に差が開きますね。

必要素材は覚えていないけれど、操虫棍って武器を作るときってそれほど大量の素材を使うイメージはないし、たぶん一回行けば足りるだろう。

そう言う面でも操虫棍は優遇されていると思う。まあ、虫餌はちよつと面倒なんだけどさ。

「よっし、そんじゃ行くかつ！」

「おぉー！」

とにかく今は目の前の敵に集中しよう。色々考えたところで、クリアしなければ意味はないのだから。

支給品ボックスの中身を半分もらってから出発。解毒薬美味しいです。

ネルスキュラの初期位置はエリア6。前回と違い、雑魚モンスターに振り回されることもないだろうし、ネルスキュラ一匹に集中できる。

ベースキャンプから飛び降りて直ぐに左へ行き、エリア4経由でネルスキュラの待つエリア6を目指す。

「ああ、そうだ。ネルスキュラと戦う時なんだけどさ」

「うん、どうしたの？」

エリア6を目指しながら、相棒へ助言……と言うかお願いをする。

「アイツと戦う場所はだいたい上段と下段に分かれているんだけど、戦う時は基本上段で戦うようにしてもらって良いか？」

「ん……わかった。そうする」

下段でも戦えないことはないけれど、戦うのなら上段の方がやりやすい。下段だと、鬱陶しい攻撃してくるし。

まあ、どうせ上段で戦っていても下へ落ちることになるとは思う。

他に気をつけることは……特にないか。今まで戦ってきたモンスターとはかなり違う動きをするけれど、口で説明できるような動きじゃないし。

そしてエリア6に到着。

キシキシガガサとネルスキュラの動く音が聞こえたけれど、無視して柱を上り上段へ。

俺たちが柱を登り終え上段へ行くと、ネルスキュラが此方に気付いた。

「えっ、何アレ、キモっ……」

そんなこと言っただけでやるなって。まあ、可愛くないことは確かなんだけどさ。

捕食したゲリヨスの皮を被り、弱点である雷に耐性も持たせ、更に背中にはそのゲリヨスの毒を結晶化させた毒刺を生成。

キモイと言えばキモイ。でもコイツの装備つてカッコイイんだよなあ。

「赤は頭、白は脚と爪、橙は胴体！」

「りよ、了解！」

エキスの場所を教えてから、発見時の威嚇をしているネルスキュラヘカチ上げを一発。

爪に吸われる事が多いせいでスタンは取り難いけれど、スタンの耐性自体は高くなく、上昇量もそんなになかったはず。そして何より、頭ひるみを取れば大ダウン。ハンマーにはもってこいの相手だ。

カチ上げを決めてから直ぐにローリングをして、前方爪攻撃を回避。

ネルスキュラの動きは馬鹿みたいに速いため、残念ながらハンマーでは追いつかない。だから相棒を吹き飛ばさないよう気をつけながら、溜め攻撃をメインで戦う。

普段は邪魔な集中が今は欲しいです。

「よっし、集まった！ 乗り攻撃しても良いんだよね!？」

「おう、気をつけながらどんどんしろ」

エキスを集めるのにも慣れてきたのか、集める時間はどんどんと早くなってきている気がする。まあ、集めやすい相手ではあると思うけどさ。

3色集めたことで、神々しい輝きを放ちながら宙を飛ぶ相棒を横目に、ひたすらネルスキュラへ溜め攻撃。1回目のスタンまであともう少しだと思う。

「おっ、の、乗った!」

俺のカチ上げが爪に吸われひるんだところへ、相棒のジャンプ攻撃がネルスキュラへ当たった。そして乗り攻撃へ。

たぶんダメだろうなあ……なんて思いつつ砥石を使って切れ味を戻す。

ハンマーも新しくなり切れ味も良くなっただろうけれど、他にやることもないから砥石。乗り攻撃中って暇だよな。

「あつ、無理です」

そして振り落とされる相棒。知っていました。

振り落としモーションで顔が上がり、それがまた落ちて来た所へカチ上げ。ピキンと綺麗なスタンエフェクトが出た瞬間、ネルスキュラは体半分を地面へ埋めるように仰向けに倒れた。

むう、まだスタンじやないのか。

溜め1、振り上げを決めたところで、ネルスキュラと共に下段へ落ちる。背中から下段に落ち、バタバタと暴れるネルスキュラ。所謂大ダウン。

流石にそろそろスタンを取るだろうから、縦1始動のホームランを腹へ一発。モジモジしてキモいね1。

ホームランを決めてから顔の前へ移動し、ハンマーを右腰へ構え溜める。そしてネルスキュラが起き上がったところでカチ上げ。

其処で本日1回目のスタンを奪った。祝ノルマ達成。

スタンを取った後は、顔に縦1始動のホームラン、溜め1、振り上げ、そしてもう一度縦1始動でホームランをその顔面へ。

振り上げ、振り下ろす度に出るブーステッドハンマーのブーストが本当にカッコイイ。うむ、この武器を作って正解だったな。

スタンから起き上がったネルスキュラは顔を上げ、威嚇。その口からは白く染まった空気が溢れ、目と腹の模様が真っ赤に染まった。どうやら、ネルスキュラさん怒ったらしいです。

「上段へ上がるぞー！」

「わ、わかりました……！」

怒り状態のネルスキュラにひるんでいるのか、相棒の元気がちよつとない。蜘蛛が苦手ののだろうか。

怒り状態のネルスキュラはちよつと面倒臭い。ただでさえ速かった動きは更に早くなり、攻撃力も上がる。

上段へ上がつてからは、のしかかりと飛びかかりに注意しつつ、また溜め攻撃メインで戦う。何処に仕舞つてあつたのかわからない鈍角はネルスキュラの腹下へ潜り込んで躲し、後は全部横ロリで軸をずらす。

蜘蛛の糸や睡眠攻撃さえ喰らわなければ、強い相手ではないと思う。

「うわつ、なにコレ！ ネバネバする……」

喰らわなければ……

うん、まあ、3連糸発射避け難いもんね。仕方無いね。

白色のネバネバに拘束されるってちよつとエツチだよなあ。とか思いながらも相棒に横振りを当て、拘束を解いてあげる。

「ありがとー！」

……ネルスキュラに襲われる相棒の薄い本はよ。

いや、冗談ですよ？

そんな馬鹿なことを考えつつ、ネルスキュラを見ると爪を高く振り上げ威嚇をしている。チャンスタイム。

ハンマーを右腰へ構えつつ接近。そして2回ハンマーが光ってから、威嚇をしているネルスキュラへハンマーを高く振り上げ……たところで、ネルスキュラが何処かに隠していた、鋏角が現れた。

ああ……：そう言えば、下位でも威嚇の後は予備動作なしの鋏角かみつきへ派生するんだったよな。

そしてハンマーを振り下ろす前に鋏角が直撃、ダメージはそれほどないけれど、吹き飛ばし+毒状態。さらに、ネルスキュラの身体が沈み、此方へ飛びかかろうとしているのが見えた。

マジ洒落にならん。コンボが華麗すぎる。

ネルスキュラの飛びかかりの判定は腹下まであり、なかなか厚い。だから横ロリでとにかく距離を……いや、これ無理だわ。絶対に間に合わん。

「乗ったー!!」

ナイス。超ナイス！ 相棒さん素敵！ 結婚して！ ホント、完璧のタイミングです。

相棒がネルスキュラの背中へしがみついている間に急いで、解毒薬と応急薬を飲む。

ああ、もう！ どうしていちいちガッツポーズなんてせにやならんのだ！！

応急薬を飲み終わり、砥石まで済ませたところで、ネルスキュラが仰向けに倒れ込んだ。

……えつ、乗り攻撃、成功したんですか？

「よっしゃー！！ 見た？ 成功したよ！！」

ごめん、見てなかった。

また今度お願いします。

上段で乗りダウンを取った場合、ネルスキュラは直ぐに下段へ落ちてしまう。だからまた右腰へハンマーを構え、ネルスキュラの落ちた穴から溜め切ったところで飛び降り、ジャンプスタンプとホームランを当てる。

ホームランを当て、仰向けに倒れたのに暴れている爪に邪魔されない位置から、ネルスキュラの顔面へ縦1始動でホームラン。

さらにもう一度ホームランを当てたところで、本日2回目のスタンを奪った。

2本あった爪も1本は完全に壊れ、ゲリヨスの皮で覆われていた胴体も今は、はつきりと露出している。うん、そろそろ終わりだろう。

スタンしたネルスキュラの顔へ縦1、縦2、そしてホームラン。

腕にしつかりとしたヒットストップがかかり、スタンエフェクトが光った瞬間。ネルスキュラは完全に倒れ、動かなくなった。

少々、危ない場面もあったけれど、今回はかなり上手く行った方だと思う。0分針と言うことはないと思うけれど、確実に10分針は切ったはず。順調順調。

まあ、武器と防具も作ったのだから、これでグダっているようじゃダメなだけどき。「ふふん、ねえねえ、私の乗りダウン見た？」

乗り攻撃が成功したのがよほど嬉しいのか、いつも以上にテンションの高い相棒。

すみません、研ぎ終わったハンマーを眺めていて見ていませんでした。乗り攻撃中もガッツポーズしてました。

「ああ、おめでとう。次からもよろしく頼むよ」

「うん、任せて！」

たぶん次は失敗するんだろうなあ……

けれども、まあ、成功したことは確かなんだ。この相棒は確実に上手くなっている。それだけで充分だろう。

ちよつと頼りない武器ですが、これからもよろしく願います。

第21話く追加でフォルティッシモく

「いやあ、今回は上手くいって良かったね！」

緊急クエストであるネルスキュラを倒しての帰り道。

隣が五月蠅い。

確かに戦っていた時間は短かったけれど、それでも疲れていないと言うことはない。てか、もう日は完全に沈み月だつて顔を出している。時刻は夜だろう。

つまり、俺は眠いので寝たいのです。

そうだと言うのに、相棒のテンションは未だ高く、なかなか俺を寝かせてくれない。小学生の修学旅行じゃないんだからさ……

「ああ、うん。そうだね。今回は良かったと思うよ。だから寝て良い？」

「ふふん、これで漸く私も操虫棍を使えるようになってきた気がする。ねえ、次はどんなモンスターを倒しに行くの？」

ああ、ダメだ。この人、俺の話を全然聞いてない。クエストの帰り道はいつも、この相棒の方が早く寝ていた。そうだと言うのに、今はこの様子。元氣ドリントコでもキメて

るんじゃないだろうか。

とは言うものの、正直この相棒の上達スピードはなかなかのものだ。このクエストだつて俺一人だつたら倍以上の時間はかかっていたと思う。

だからこの相棒にはちゃんと感謝している。操虫棍と言う武器のおかげもあるだろうけれど、実力だつてかなりあるのだろう。俺みたいに知識ばかりに偏り、実力の伴っていない人間とは大違いだ。

「ん〜そうだね、次は……」

とりあえず、これでHRは2となつた。だから氷海や原生林へ行けるようになるわけだけど……どうすつかね？ ゲームの中ならキークエストはレイア、フルフル、ザボア、ガララだつたはず。この中で一番苦勞せずにクリアできそうなのは……レイアかフルフル辺りだろうか？ 初見でザボアやガララはちよつと辛い気がする。

まあ、防具を新しく作り直すつもりはないから、いつか行かなきゃいけないんだけどさ。

よし、決めました。

「次はフルフルを倒しに行くか」

怒つたときの攻撃力はなかなか凄まじいけれど、動きは其処まで速くないから一番戦

い安い気がする。ただフルフルさんって見た目がちよつと怖いんだよね。「フルフルってあのかわいい奴のこと?」

……うん? かわいい? フルフルが?

「……いや、可愛くはないだろ」

異様に首は伸びるし、ブヨブヨしてるし、鳴き声は甲高く不気味。血管とか浮き出て見た目もかなりグロテスク。昔の生態ムービーとかもう……

「あれ? 私の思ってるのと違うのかな? 白くてのぺつとして可愛いモンスターじゃなかったっけ?」

マジで? アレが可愛いのか!? アオアシラとかならまだわかるけれど、フルフルはわからん。どの辺りが可愛いのだろうか……

相棒さんが余計にわからなくなった。

「あく……うん、たぶんそれで合ってると思います」

そっか、フルフルは可愛いのか……

今度ジンオウガの彼女にも聞いてみようかな。

可愛くはないと思うんだけどなあ……

「ま、まあ、とりあえず次はフルフル辺りを目標にしよう。あと、新しい君の武器を作りたいと思うんだけど良い?」

「えっ、いいの？ そりゃあ嬉しいけど……あと、新しい武器ってどのモンスター素材？」

「ネルスキュラ」

素材が足りていると嬉しいが。

まあ、足りなかつたら俺の素材を渡せば良いのかな。たぶんネルスキュラの素材は使う予定なんてないだろうし。

んで、新しい武器を作っている間にクエストへ行きたいなあ。なんて思っているんです。フルフルが相手なら、ポーンロッド改でもスニークロッドと期待されるダメージはそれほど変わらないと思う。

「なんだ、そうだったんだ。それならちょうど良いね。うんじゃあ、新しい武器お願いします」

これでスニークロッドができれば更に火力は上がる。

相棒ばかりが強くなっている気もするけれど、其処は我慢。せめて足を引っ張らない程度には頑張ろう。たぶん、相棒は気づいていないと思うけれど、既に火力は彼女の方が出ている。それに気がついたとき、もしかしたらこのパーティーも解散することになるのかもしれない。

まあ、それも仕方無いことなのかね。

「あと、お願いがあるんだけどさ」

「どうしたの?」

例えそんな未来が訪れるとしても、今は自分にできる最大限のことをやっていこう。大丈夫、他人から避けられソロで戦わされることになることは慣れている。いつだってそうだったから……

「もう寝ても良いですか?」

「あつ、はい。どうぞ」

だからそれまではよろしくお願いします。

おやすみなさい。

……寝ちゃった。

どうやら彼も結構疲れていたらしく、寝て良いか私に聞き、目を閉じて直ぐに寝息が聞こえてきた。

ちよつと私が舞い上がっていたせいで、寝られなかったみたい。ごめんね。

今回のクエストで私は初めて乗りに成功した。たぶんギリギリだったと思うけれど、とにかく成功した。そのことが本当に嬉しかった。

だって、初めて私が役に立ったような気になれたから。

今、寝息を立て眠っている彼は——上手い。

闘技大会で彼の戦う姿を見ていたから彼が上手いことは知っていた。でもこうやって実際、一緒に戦うことでそのことはさらにはつきりとわかった。

彼はちよつと抜けているところもあるし、何を考えているのかわからないことも多い。そしてHRは私と同じ。そうだと言うのに、私と彼の間には埋めることのできないほどの差がある気がする。

私が入手くないことくらいわかっている。頭で考えていることと実際に体を動かした結果は全然違うものだし、戦っていると周りなんて直ぐに見えなくなる。

そんな私でも此処まで順調に進めているのは、やっぱり彼と一緒にだったから。私一人

じゃきつと今頃も採取ばかりをしていたらう。

だから今日は嬉しかった。下手つぴな私が少しでも役に立てた気がしたから。

……どうして彼が私と一緒に来てくれるのかなんてわからない。

いつこのパーティーが解散してもおかしくはないと思う。私には彼が必要だけど、彼には私が必要ではないから。

解散するのは……怖い。てかイヤだ。だって一人じゃどうして良いのかわかんないもん。

だから先日は彼にそんな私の我が儘をぶつけた。彼が遠くに行ってしまったようで、怖くなったから。自分でも思った、酷く我が儘な人間だって。

そんな自分が嫌になる。それに私が我が儘をぶつけたあの時の彼の顔は忘れること
はできそうにない。心から申し訳なきようなあの顔を。

別に彼は悪いことなんてしていない。そりゃあ、約束したのに、二人で（ここ重要！）
勝手にクエストへ行ってしまったのは悲しい。

でも私にはそのことを止める権利なんてない。私が彼を縛り付けて良いはずなんて
ないのだから。

それでも、彼は私の我が儘を受け入れてくれた。こんな酷い人間なのに、彼は私に

謝ってくれた。

そのことは嬉しかったけれど——それ以上に心は痛んだ。

たぶん、彼のことを思うのなら私が離れた方が良いと思う。今の状況は彼にとつて私は足枷でしかない。だから私が離れること。それが一番なはず。けれども私にはそんな勇気がないので。この臆病者はまだ一人で戦えるほど強くはないのです。

技術的にも。

精神的にも。

だからもう少しだけ、この彼との関係が続けば良いなあ。なんて私は思います。そりやあずつと一緒に居てくれれば良いけれど、そう上手くはいかないことくらいわかっている。

きつと彼と別れるとき、私はまた泣いてしまおうと思う。笑って別れてあげたいけれど、それはきつと難しい。弱い人間なんです。

きつといつか来る別れ。

けれども、それまではどうかよろしくお願いします。

ただ、願わくはできるだけ長く一緒に居てくれると嬉しいなって私は思うのです。

「不束者ですが、これからよろしくお願いします」

そんな言葉をそつと呟いてから、いつかのように彼の肩を借り私も目蓋を閉じた。

「おーい、着いたぞー」

彼の声で目が覚めた。

景色は明るく、どうやらもう朝らしい。

寝起きのせいか、一瞬自分が何をしてたか忘れてしまったけれど、直ぐに思い出すことができた。

ああ、そつか。ネルスキュラ倒したんだつた。

そうだ、これで私たちのHRも2へと上がったはず。新米ハンター脱出と言ったところかな？

「おはようー！」

「あつ、うん。おはよう」

とりあえず起きたのだから挨拶。挨拶は重要なのです。

彼は少しだけ戸惑っていたけれど、私は気にしません。

彼にそんな挨拶をして、此処まで運んでくれたネコちゃんにお礼の言葉。いつもありがとね。本当に助かっています。

そうしてから彼と一緒に集会所の中へ。報酬楽しみだね！

そして集会所へ入ると――

「あつ、帰ってきた」

いつかのジンオウガ装備の彼女がいた。でも、私が見た時とは違い、武器はハンマーから狩猟笛へと変わっている。

そう言えば、彼はこの彼女と知り合いなんだっけ？ いつもソロで有名な彼女だと言うのに、何処で知り合ったんだろう。

「おつす、おつす。って、あれ？ 今日笛を担いでいるけど、ハンマーはやめたのか？」
「……うん、もう待つのは飽きちゃったもん」

飽きちゃった？ 何のことだろうか？ でもこの人もすごいよね。ずっとソロなのに、HRは私たちよりも高く、あのジンオウガ装備だもん。年齢は私とあまり変わらなそうなのに、きつとめちやくちや上手いんだろうなあ……

「ん〜……どう言うこと?」

どう言うことだろうね。私もわかりません。てか、私は彼女とお話したこともないし。

なんか、こう……話しかけるなオーラがすごいんです。そんな彼女に話かけるのは、ただでさえ弱虫な私じゃとても無理です。

「だから私も貴方たちのパーティーに入れて」

……え?

第22話～火力スキルに挑発～

「だから私も貴方たちのパーティーに入れて」

緊急クエストから帰って来ると集会所にはあのジンオウガの彼女の姿。何故かハンマーではなく笛を担いでいたことに疑問を感じていたら、そんなことを言われた。

……ちよつといきなりすぎるせいで、どうにも頭がついてこない。

正直なところ、俺から彼女を誘おうとは思っていた。けれども、まさか向こうからパーティーに加えてくれと言ってくるとは思わなかったんです。

いきなりどうしたと言うんだろうか？

「んと……あゝ……別に俺たちと一緒に戦ってくれることは嬉しいんだけどさ。どうして？」

この彼女のHRは3。一方俺たちはと言うと、まだHR2だ。それもつい先程ネルスキュラを倒し漸くと言ったところ。

つまるところ、この彼女には俺たちと一緒に戦うことのメリットがほとんどない。そ

りやあ、パーティーで戦った方がソロよりもモンスターを早く倒すことはできるし、安全だ。

しかし、俺たちのHRでは彼女の行きたいと思うクエストへ行くことは、ほとんどできないだろう。

ああ、いや……彼女が受注してくれば俺たちも行けるのか？ その辺のことは良くわからないけど。

「……おじいさんに、流石にソロじゃダメだつて言われた」

えーと、おじいさん？ 何のことだかさっぱりわからないのですが……

いい加減、独り身でいるな。的なの？ なんか違う気もするけど。

「それってもしかして、上位ハンターになるためのクエストのこと？」

相棒の声。

「そう」

ああ、おじいさんってギルドマスターのことか。漸く合点がきました。

上位ハンター……つまりHR4になるための緊急クエストがこの世界では何なのかわからないけれど、そのクエストへソロで行こうとしたらギルドに止められたってことですな。

てか、そんなに進んでいたんだ。

此方はようやっとHR2だと言うのに……やっぱりこの彼女は相当上手いんだろうなあ。どんどん俺の立場が弱くなっている。

「……なるほど。なんとなく理解できたけど、でも俺たちはまだHR2になったばかりだから、君の行きたいクエストへ行くのはかなり時間がかかるぞ？ それなら、一時的でも良いから俺たちよりHRが高い奴らと組んだ方が良いと思うんだけど」

結局のところわからないのは其処だ。

どうして俺たちと組もうとするのかがわからない。この相棒だつて上手い方ではあると思うけれど、それでもまだまだだろうし、俺に至ってはもう武器もコレで、腕だつて良くはない。

彼女の實力がどんなものかは知らないけれど、足を引つ張ることは多くなるだろう。

そのことは彼女だつてわかっていると思うけど……

そうだと言うのに、何故？

「……だつて、貴方がいるから」

俺の方を真つ直ぐと見ながら彼女が言った。

その言葉に一瞬ドキリとしてしまったけれど、まあ、どう考えたつてそう言う意味で

はない。この世界とは違う世界から来たと言う共通点。それが彼女の何かを掴んだんだらう。

そのことがわかるだけに、少々残念に思うけれど仕方の無いことです。ちよつとだけ期待していたり、していなかつたり……俺だって男だもん、期待しちゃうのも仕方無いよね。

「……はあ？」

再び相棒の声。其方を見るともの凄い表情をしていた。表情は豊かな方であるとは思っていたけれど、こんな表情は初めて見た。

てか、ちよつと怖い。まあ、傍から見ればあの言葉は告白にしか聞こえないもんね。驚くのも仕方の無いことかもしれない。

「え、えと……私にはどう言うことだかわかんないんだけど……」

「まあ、ようは俺たちのパーティーに入りたいってことだろ。それで……別に俺は構わないんだけど、相棒さんはどう思いますか？」

ジンオウガの彼女だって、そんな誤解を招く言い方をしなくても良いだろうに……

表情が乏しいせいで、この彼女が何を考えているのかはわからない。こう言う人は正直、ちよつと苦手です。

「ああ、うん。私も大丈夫だよ。それに人が多い方が良いし。でも、貴方は私たちのパ-

ティーに入っちゃっても本当に良いの？」

「……うん。他のハンターたちとは組みたいと思わないし」

……俺たちよりも上手い奴らなんて沢山いる。それでも俺たちを選んでくれたんだから、此処は素直に喜ぶところなのかな。

そして何より、この彼女の存在は有難かったりします。一人よりも二人の方がやっぱり気持ちは楽になる。

この彼女だつて、もしかしたらそんなことを思っていたのかもね。

「そんじゃま、そう言うことだし、これからよろしくお願いします」

「お願いします」

「……うん、よろしく」

これでパーティーは3人となったわけだけど……はてさて、これからどうなるのかな？

もしの話だけど、次に加わるメンバーはできれば男の人だと嬉しいなあ。なんて思います。女性二人に野郎が一匹。ますます立場が弱くなりそうです。

これで俺たちのパーティーは3人となった。だからこれからどう進めていくのかとか、話し合いをしたかったけれど、とりあえずギルドマスターへネルスキュラの狩猟が終わったことを報告した。

報告を終えると、持っていたことすらほとんど忘れかけていたギルドカードへHR2と更新。そんなちよいと面倒臭い手続きをしたことで、俺たちは晴れてHR2となった。

その後、帰る途中相棒へ言ったように、新しい武器を作成するため加工屋へ。運の良いことに素材も足りていたらしく、相棒の素材だけで作ることができた。

俺もクラスターハンマーを作れるか聞いてみたけれど、クラスターハンマーを作るために必要なアイアンストライクがそもそも作ることができなかった。あと、もしアイアンストライクができていたとしても、クラスターハンマーも素材が足りないらしい。

リアルラックの差が現れ始めました。まあ、良いさ。俺にはドリルがあるのだから。武器を強化している間暇になるし、できれば武器は2本作っておきたかったんだけど

なあ……

ジンオウガの彼女が使っていたヴェノムモンスターをいただけたりはしないだろうか？

そんな諸々のことを終え、再び集会所へ。

「お腹空いた……」

そんな声を落とし、元気がない相棒。

わちやわちやしていたせいで、時刻はもう正午くらいになってしまった。考えてみれば、昨日クエストへ行く途中に食べたのが最後。それからは何も口にしていない。

応急薬と解毒薬は飲んだけれど、アレはノーカン。お腹膨れないし。てなわけでお昼です。俺と相棒だけではなく、あの彼女も一緒に。

昼になると集会所はかなり騒がしくなるけれど、まあ、其処は我慢。それに静まりかえっているよりはよっぽど良い。

「ねえ、お酒飲んでもいい？」

「ん〜……今日くらいは良いのかな。せつかく新しいメンバーも入ったんだし」

俺がそう相棒へ言うのと、『やたっ』と嬉しそうな声を出し、ホピ酒と女帝エビを頼んだ。

あつ、すみません。俺もポポノタンとタンジアビールをお願いします。

今日はこの後なんの予定もないし、騒ぎ倒すのもありかもしれない。
「君はどうするの？」

ジンオウガの彼女に尋ねる。

「じゃあ……ブレスワインとロイヤルチーズで」

そんな注文を終え、全員の料理が揃ったところでグラスをあげる。

「乾杯！」

いつもは二人きりの食事も少しだけ賑やかになりました。

乾杯の言葉を落としてからグラスを傾け、一気にその中身を飲み干す。強めの炭酸が口の中で弾け、それでも無理矢理飲み込んだため、目からは少しだけ涙が溢れた。けれども、それが美味しい。

「はやっ！ もう飲んじゃったの？ もう少し味わって飲めば良いのに……」

確かにそうした方が良かったろうけれど、ビールはこうやって飲んだ方が美味しい。ちびちび飲むような飲み物じゃないのだ。どっかの偉い人も言っていた。ビールは口ではなく喉で味わうものだ。

その後、お酒を飲みつつ料理に舌鼓。お酒が入れば会話も弾むと言うもの。

まあ、会話の提供はほとんどが相棒からなんだけどさ、俺もあの彼女も自分から話し

かけるようなことは少ない。だからこんな時、相棒がいてくれて良かったと思う。ただ、できれば酔い潰れないでもらえると嬉しいなと思って俺はそつと思うのです。でも、どうせダメなんだろうなあ……

そんな予想は見事に的中し、相棒は机に突っ伏してしまった。

どうしてコイツは学習しないんだろう……

「……い、いつもこんな感じなの？」

「そうだな。いつも酔いつぶれてるよ」

もう慣れてはきたけれど、もう少しどうにかならないのかなあ。

ただ、今日は明らかに相棒のテンションは高かった。HRが上がったと言うこともあるだろうけれど、たぶん新しい仲間が増えたことで、余計に空回りしたんじゃないかな。

お疲れ様。ちゃんと家まで送ってあげるから今はゆっくり休んでくださいな。

「そっか。楽しそうだね」

うん、楽しいよ。

いきなり知らない世界へ飛ばされ、そのことを悲しんでいたのを忘れるくらいには。

「君はどうしてソロでやっていったんだ？」

4杯目のビールを頼んでから彼女に質問。

以前も同じような質問をしたけれど、あの時は誤魔化された。聞いたですつもりなんてないが、少し気になった。

「……最初は何処かのパーティーに入ろうと思った」

ブレスワインの入ったグラスへ視線を落としながら、ポツリポツリと語りだした彼女。

アルコールが回っているせいか、その顔は赤く染まっていた。

「でも、この世界の人たちがNPCとしか思えなくて、どうしても一緒にいられなかった」

NPCねえ……

だとすると、彼女から見れば今机に突っ伏し寝ているこの相棒もそう見えるのだろうか。その気持ちはわからないでもない。だってこの世界は俺たちにとってはゲームの世界でしかないのだから。

まあ、俺はそんなことを感じたことなかったから、彼女の気持ちを理解することはできないだろうけど。

彼女の装備はジンオウガ一式。発動スキルは力の解放と雷属性強化。そしてマイナ

スキルが一つ。

それは決して弱い装備ではないけれど、もつと良い装備はあつたはず。しかもソロで戦うのならわざわざジンオウガ一式にこだわる必要はない。

ただ、ハンマーや笛などの頭を狙う武器の場合、このジンオウガ一式は非常に便利なスキルがある。しかし、そのスキルはパーティーでないと意味はない。設定上はマイナススキル。けれども、俺たちにとつてあれほどに強力なスキルはなかなかない。

だから、この彼女はずつとソロじゃなくパーティーで戦いたかつたんじゃないかなつて思っていた。

それに笛使いはパーティーの方が輝けるもんな。ソロも悪くはないけれど、演奏はやつぱり誰かに聴いてもらいたい。俺はそう思うのです。

注文していたビールが届いた。

並々とビールの注がれたグラスを持ち上げる。

そして、彼女のグラスへぶつけた。

色々あるかと思いますが、これからよろしくお願いします。

第23話く振り向きへスタ……く

相棒が一生懸命脚へ攻撃してくれたことで倒れたレイアに縦1、縦2、そしてホーム……

「あう」

「あつ、ごめん」

大丈夫です。それくらい気にしません。

彼女の右ぶん回し笛攻撃が当たり、ホームランを出す前に尻餅。笛さんって思った以上
上に攻撃範囲が広いのね。

横振り始動でもホームランまでは間に合わないだろうから、SAの維持ができる溜め
1、振り上げ攻撃を当て直ぐにローリング。

むう、思っていた以上に戦い難いかもしれない。

彼女が後方攻撃をするのを横目に、もう一度ハンマーを右腰へ構えカチ上げの準備。

そして、彼女を吹き飛ばさないうようレイアの頭へカチ上げ。手にかかるヒットストツ
プ。弾けるスタンエフェクト。ふむふむ、やはり頭が低い位置にあるモンスターは戦い

易くて好きだ。

また直ぐにローリングをしてからレイアを見ると、口からは僅かに炎が漏れていた。レイアさんおこです。

残念ながら回避性能がないとレイアの咆哮はフレイム回避ができない。レイアやレウスは怒り咆哮の後は確定で後ろへ飛ぶ。だから咆哮のフレイム回避から閃光玉を投げることで、飛んだレイアを落とすことができる。

まあ、今はそんなことができないんだけどさ。

咆哮が来ることをわかっていても此方は何もできないため、仕方なくレイアの咆哮を受け、耳を塞ぐ。ビリビリと震える空気。飛竜種の咆哮はケチャなんかのそれと比べて、確かに大きく感じた。ああ、もう五月蠅いな。

そして、レイアは咆哮から後ろへ飛んだ。

その瞬間。目映い光で視界が真っ白に。

相棒が投げたとはちよつと考えにくいから、たぶん彼女が投げたんだろう。緊急回避でもしたのかね。

閃光にひるみ、落ちてくるレイア。ナイスです。

陸の女王なんて呼ばれているんだしき、やっぱり地上で戦いましょうや。

右腰へハンマーを構え、倒れたレイアにカチ上げ。そして横振り、縦2、ホームラ……

「あう」

「……………めん」

……いえ、大丈夫です。

俺の立ち位置がまずかっただけです。

そうやって俺がまた尻餅をついていると、彼女の後方攻撃からの演奏が頭へ決まりレイアが2度目のスタン。

ああ、俺のスタンが……

なんて思わなくもなかったけれど、別に文句があるわけではない。スタンは皆のものなのだ。

今度は彼女の攻撃が当たらない場所から、縦1始動でホームランを決める。そのせいかホームランは首に吸われ、あのヒットストップもなく、スタンエフェクトが出ることもなかった。残念。

レイアが起き上がってから直ぐにローリングをして突進を回避。

右腰へハンマーを構え、溜めながらレイアの後を追う。さらに近づき、前へ滑るように倒れ込んだレイアの尻尾の先で構える。

そして、振り向きへ……振り、振り向きへ……振り向きませんでした。レイアさん彼女へ向かってまた突進しました。

俺だって相棒ほど手数を出せているわけではないから、レイアが此方を全然見てくれない。ほとんどの攻撃が相棒や彼女に向けてのものだ。たまくに、申し訳程度には攻撃をしてくれるけれど、本当にたまくにと言った感じ。

正直に言おう。超戦い難しいです。なかなか頭へ行けないせいで、どうにも調子が出ません。

手数は相棒が圧倒的だろうし、俺よりも手数の少ない彼女は演奏のおかげで、レイアさんに向けてもらえている。そして一番大きいのが、彼女が発動している“挑発”スキルだろう。

相棒と2人の時はまだ良かった。狙われるのは俺か相棒の二人だから、相棒の立ち位置を見ながら移動すれば、モンスターの振り向きへ合わせられる。

けれども3人となってしまえばそれも厳しい。

頭にいけないハンマーとかもう……ね。

こりやあ予想以上に厳しいかもしれない。

彼女が俺たちのパーティーへ入ってくれた次の日の朝のこと。

クエストへ出発する前に一つ提案をした。

「あれ？ フルフルは行かなくてもいいの？」

「いや、別にフルフルでも良いんだけどさ。氷海って丸々1日かかるって言うから違うのにならと思うたんだ。それに新しいメンバーも増えたんだし、近い方が良いのかなあって」

そんな考えです。

たぶん、フルフルも倒すことはできると思う。だってあの彼女が俺たちのパーティーへ入ってくれたのだから。

けれども、氷海はちよつと遠い。だから近くの遺跡平原の方が良いのかなあって思った。そして、どうせだったらレイアと戦ってみよう。と言った感じ。

「うーん、そうだね。初めてだもんね。……うん、じゃあ私はそれでいいよ。貴方は？」

「……私も大丈夫」

うむ、それなら良かった。

相棒の新しい武器ができるのは今日の夕方。遺跡平原へ行き、帰ってくればちょうど良い時間なはず。そして戦うモンスターはリオレイアに決めている。

ふふん。レイアは結構戦ってきたから得意なのだ。

まあ、それもゲームの中のお話なだけどさ。

そして、いつも通りK.O術の発動する料理を食べてからクエストへ出発。

できれば閃光玉を持っていきたいけれど、残念ながら素材がなく調合できません。せめて素材玉くらいは売ってくれても良いのにね。

そんじゃ、行きますか。

遺跡平原へ向かっている途中はいつも通り雑談。

「リオレイアかあ……飛竜かあ……」

不安気な様子の相棒。

レイアは今まで戦ってきたモンスターとはちよつと違うもんな。いかにもモンスターと言った感じ。不安になるのも仕方無いかもしれない。

「ちよつと橙色のエキスが取り難いけれど、3色集めれば大丈夫。3色集めたらどんどん乗っちゃって良いよ」

3色集めれば咆哮も防げるから、乗りだつてかなり成功しやすくなる。期待してます。

あと、できれば尻尾も斬つてくれれば嬉しいな。俺と彼女の武器が武器だけに尻尾はちよつとキツイ。まあ、無理して斬る必要もないんだけどさ。

そんな感じにいつも通り雑談。

基本は俺と相棒が喋っていたけれど、彼女も会話には参加してくれた。仲も悪くはならなそうだし、思っている以上に良いパーティーかもしれない。

そんなことを思った。

そして、遺跡平原へ到着。

「よっしやー、行くぞー!」

「おおー!」

「お、おおー……」

いつも通り声を出し気合を入れる。それにいつも通りの言葉を返してくれる相棒。

そして少々恥ずかしそうだったけれど、彼女も声を出してくれた。

あつ、でも無理はしなくても良いんだよ？　ただ、俺が気合を入れるためにやっていくだけだし。

そんな何とも言えないような雰囲気ではあつたけれど、できるだけ気にせず、レイアの待つエリア3に向かって走り出した。

と、其処までは良かったんです。

いや、その後も別に悪いことはなかったんだけどさ……

「おつ、おおー倒したー！」

力尽き、倒れもう動くことのない陸の女王。

残念ながら尻尾を斬れてはいないが、タイムはきつと過去最速だろう。今まではずっとハンマーを使っていただろうに、彼女の笛はかなり上手かった。

演奏効果を切らすことはなかっただろうし、それでいて手数も出せスタンも取れる。追加演奏からスタンをとった時など、鳥肌が立った。

実は何処かで練習していたのかもね。てか、そうであってほしい。初めてでアレだけ上手いとかなるとバケモノみたいだし。

そう、レイアは問題なく倒すことができた。

倒すことはできたんだけど……

「おーい、剥ぎ取らないの？」

「あつ、うん。剥ぎ取ります」

レイアからせつせと剥ぎ取っている彼女をチラリと横目で確認。

いつも通りの表情。何を考えているのかはわからない。

「ありがとうございます。いただきました」

しっかりと3回剥ぎ取りを終えた後は感謝の言葉を一つ。使うかどうかはわからないけれど、大切にします。

「ん〜……何だか元気がないみたいだけど、どうかしたの？」

「いや、別にそんなことはないと思うけど」

嘘です。

滅茶苦茶凹んでいます。

今回のクエストでわかったことは沢山ある。彼女の実力だったり、このパーティーにおけるモンスターーの動きだったり……

けれども、そんなわかったことの中で、かなりシヨックだったこともある。

「そかそか、それなら良かった。それじゃ帰ろうよ。帰って打ち上げやろ！ 打ち上げ！」

「おう、そうだな。パーつとやるか」

「ま、また飲むの……？」

この彼女は上手い。俺よりは確実に。

今回のクエストで俺はほとんどダメージを稼げてはいないだろう。別に自分が上手いとは思っていなかったけれど、それがわかるだけになかなかシヨックだった。

俺の立ち回りが原因で何度も彼女の攻撃で転かされてしまったし、モンスターーが此方を向いてくれないせいで、頭へ行くこともできなかった。

「……スタンも取れないハンマーか」

独り言が落ちる。

頭へ全く攻撃できなかったわけではないけれど、流石に今回は酷い。そんなハンマー

は意味があるのかね？

「ねえ、ねえ、ちゃんと私の乗り攻撃見てた？」

「うん？ ああ、失敗したときは見てたよ」

ま、良いさ。

上手いかわないことくらいわかっていたんだ。それに彼女が加わってくれたことに、マイナスは何もない。

「どうしてその時だけ見てるのさー！」

「いや、だって成功したつばいときは研いでたし」

ただ俺が上手くなれば良いだけ。

今までは我が儘に戦いすぎただけ。

大丈夫、何も難しくなんてない。それに、こんな状況は負けず嫌いな俺に合っている。焦る気持ちもあるけれど、焦ったところでどう仕様も無い。

ホント、つくづく使い難い武器だと思う。

SAもなければ、火力もない。動きは遅いし、ガードもできない。

それでも俺はハンマーが好き。

意地張って、胸張って……我武者羅にハンマーを振り回せば良いだけ。

おっし、頑張ろう。

少しでも力になれるように。

第24話く帰り道でありがとうく

「笛ちゃんが私たちのパーティーに入ってくれて本当に楽になったね！」

クエストの帰り道。

流石に慣れてはきたけれど、乗り心地の悪い馬車の上で操虫棍を使う彼女が言った。

あと笛ちゃんって言うのは……私のこと？

そんなふうに呼ばれたことがなかったからちよつと恥ずかしい。

彼女は私と違ってよく喋る娘だ。私は自分から話しかけるのが得意ではなかったから、彼女みたいな性格は羨ましいって思う。

私の場合、何かを喋ろうと思っても言葉が出てきてくれない。頭の中ではこう喋ろうって思っても、私の口から声が出てきてくれることは少ない。だから彼女が羨ましかった。

私も彼女のような性格だったら、もつと生きやすい世界になっていたのかもしれない。

あの彼がいるパーティーへ入れてもらって初めてのクエストは、上手くいったと思っている。こつそりと笛の練習をしてきたかいがあった。

うん、まあ、別にこつそりと練習する意味はなかったのだけど……知り合いなんてほとんどいないし……

「貴女の乗り攻撃も良かったから……」

私も彼女に対して何か呼び方を決めた方が良いのかな？ 私が笛ちゃんだから、彼女

は……虫ちゃん？

……いやいや、ダメだ。悪口にしか聞こえない。

「ふふっ、ありがとう」

うん、良い笑顔。

笑顔がよく似合う女の子だね。

このパーティーへ入れてもらえるかは不安だった。最初はダメかなあって思った。だって、彼と彼女の二人でパーティーとかカップルにしか見えないから。そんなところへ私なんかが入れるわけがない。

けれども、どうやらそうではないことがわかった。彼女の方はわからないけれど、少なくとも彼はそんなことを考えてはいないみたい。

だから私は強引ではあったけれど、彼のパーティーへ加えてもらえないか尋ねた。私の中のちっぽけな勇気を振り絞りました。頑張りました。

そして運が良いことに願いは叶った。ずつと憧れていたパーティーでの狩り。勇気を出して良かったって思う。

チラリと横目で彼の様子を確認。

目は閉じている。寝ているのか、起きているのかはわからない。

私がこのパーティーへ入りたかった一番の理由が彼。私と同じよう、違う世界から何故かこの世界へ来てしまった人間。

一番初めに彼と会ったのは、私がジンオウガのクエストから帰ってきた時だった。何かのクエストへ出発しようとしていた彼と目が会い、何故かハイタッチ。意味はわからなかったけれど、悪い気分ではなかったかな。

それから彼とは少しだけ喋るようになった。一緒に食事をしたり、少しだけ雑談したり……

それは普段の私なら絶対にやらないようなこと。元々話すことは苦手だったし、何よりこの世界の人を私と同じ人間だっと思えなかったら。

けれども、彼だけはそんな気持ちにはならなかった。

彼は何か違うって思った。

それが少し気になったから、あの時の彼がひたすら挑んでいた闘技大会を見ることに。闘技大会を見ることは今までも何回かあった。でも私の性格的に、他人の戦う姿を見るよりも自分で戦う方が合っているみたいで、あんまり面白くはなかったかな。

それに、ゲームの闘技大会のようにいかに早く討伐するかを目標としていない闘技大会はちよつと退屈。だから、闘技大会を見ることはあまりしなかった。

けれども、彼の出場する闘技大会を見たときの驚きは忘れない。

まず、一人で闘技大会へ出場するハンターなんていないのに、彼は一人。モンスターの隙を攻撃するのが普通なのに彼は違う。立ち回りで無理矢理モンスターの動きを制限し、隙を作り出しながら攻撃。パターンでも決めていくかのような乗り攻撃。

他のハンターとは動きが全然違う。滅茶苦茶だった。

そんな滅茶苦茶な動きのせいで何度も攻撃を受けていたし、挙げ句の果てに体力もなくなりアイルーに運ばれる始末。

でも、そんな滅茶苦茶な動きは確かに私の知っている闘技大会の動きだった。

もう随分と昔のことになってしまったように思える記憶が、蘇った気がした。

何かが違うと思っていた彼。そして直感でしたかなかったけれど、その何かがわかった。

そして何より、私は一人じゃないんだって思えてそれが嬉しかったかな。

「あら？　また寝ちやつてる。んもう、今日くらいは起きてればいいのに」
「いつもそんなの？」

それから彼を追いかけてしまうようになっちゃったのは、仕方の無いことだと思う。なんとなく、一人でクエストを進めていくのだろうと思っていた彼がパーティーを組んだのは意外だったけれど、私がそれを止めることはできない。

それに、もしかしたら私もパーティーを組んでくれるかもしれないのだし、悪いことではない。なんて思った。

「ん〜……いつもは私の方が寝てる気がする。で、でも最近はお彼の方がよく寝ているよ」
「別に寝ちやうのは悪いことじゃないと思うけど……」

そして、ついに私は彼のパーティーへ入れてもらえるように。これですつと使おうと思っていた笛を使うこともできるし嬉しい。ソロだとちよつと厳しかったけれど、やっぱり自分の好きな武器を使いたいって思っていた。

まだ全然慣れていないから、笛を上手くは使えていない。今日だって、何度も彼を転ばせてしまった。反省。今まではずつとソロでやってきたから、どうしても上手く立ち回ることができない。

彼のハンマーが私に当たることはなかった。でも、私の笛は幾度も彼に当たった。もつと上手くならないとだ。

「まあ、そんなんだけど……でも、今日は笛ちゃんが私たちのパーティーに入ってくれて初めてのクエストなんだもん」

……優しいね。貴女は。

この彼女は私たちとは違い、元々この世界にいた人だと思う。それは私が苦手にしていた人。でも、この彼女の優しさは嬉しい。話していても苦にならないし、突然パーティーに加わったのにも関わらず、彼女は嫌な顔なんてせず、むしろ歓迎してくれた。このパーティーにいたのが貴女のような素敵な人で良かったって心から思う。

そんな言葉も私の口からは出てくれないけれど、ちゃんと感謝している。

「……良いパーティーだね」

「うん、私もそう思うよ！」

そっか。それなら良かった。

この二人より私のHRは高い。でも私はそんなに心が強いわけじゃないから……ずっと一人で戦っていけるほど強くはないから……パーティーに入ることができたのは本当に良かった。

そんな弱虫な私ですが、精一杯頑張るのでこれからもどうかよろしく願います。

「これからの予定って何か決まってるの？」

「いや、特に決めてないよ」

クエストを終え、集会所へ戻り報酬を受け取ってから直ぐに加工屋へ行き、彼女の武器を受け取った。

そして、その後は彼女が言っていたように打ち上げ。まだ良くわからないけれど、どうやら彼女はお酒を飲むのが相当好きみたい。

私もお酒は嫌いじゃないけれど、元々そんなに飲む方ではなかったから、ちよつと戸惑ってます。これもいつか慣れるのかな？

眠っていた彼も集会所へ着く少し前に起き、今は美味しそうにビールを飲んでいる。

「次、どうすつかなあ……そう言えばさ、この世界ってキークエストある？」

彼女へ聞こえないようにか、小さな声で彼が私に言った。

「……たぶんだけど、決められてはいないと思う。それに緊急クエストも」

どれだけのクエストをクリアすれば良いのかとか、詳しいシステムはわからない。

それに私の場合HR2から3へ上がるための緊急クエストはゴアじゃなくレウスだった。上位ハンターになるための緊急クエストはダレンみたいだけど。

「あら、そうだったのか……むう、それじゃあ手当たり次第にクエストをやつていくしかないのか」

ある程度クエストを熟すと、あのおじいさんから声をかけてもらえるって感じだと思う。もしかしたら明確なラインがあつたりするのもかもしれないけれど、たぶん緊急クエストが来るのはあのおじいさん次第。

面倒と言えば面倒だけど、もしかしたらゲームより少ないクエストクリア数で緊急クエストを受注することもできるかもしれない。

「どうすつかなあ……へい、相棒。何か行きたいクエストつてあるか?」

「うん? んん……そだね。あつ、フルフル! フルフルに行きたい!」

あう……フルフル、ですか。

「了解。そんじや次はフルフルへ行くとするか」

「やたつ、生フルフルとかきつとすごく可愛いんだろうなあ……」

おいこら、待ちなさい。

今、なんて言った?

フルフルが可愛い……？　ちよつとその感覚はわからないのだけだ。

「勝手に決めちゃったけど、君もフルフルで大丈夫？」

「えっ……あつ、うん。大丈夫」

正直に言うと、フルフルは好きじゃない。のぺつとして、ぶよぶよして不気味だし、叫び声のようなあの甲高い鳴き声には鳥肌が立つ。

ゲームをやっていた時も好きではなかったけれど、この世界へ来て生でフルフルを見たときはクエストをリタイアしようか真剣に迷った。

「ね、笛ちゃんも可愛いって思うよね」

「……う、うん」

そんな彼女に言葉に私が否定できるはずもなく、頷いた。

もしかして私がおかしいの？　打ち解けてきたかと思っていたけれど、どうやらこの彼女と私の間にはまだまだ大きな壁があるらしい。

確かにフルフルは妙に人気のあるモンスター。でも、可愛くはない。決して！　可愛くはないっ！！　てか、可愛いモンスターなんていない。

「……え？　君もフルフルを可愛いと思っていたの？　マ、マジですか？　ま、まあ、好みは人それぞれだもん……うん、良いと思いますよ」

何と言うか同情のような視線を彼が私へ向けた。心が折れそうだ。

ああ待って、違うの。本当はフルフルを可愛いとは思ってなんかいないんです。ただ否定できなかっただけなんです。

「ふふん、これで2対1だね。君の負けー」

「負けとか言われても……いや、だってフルフル可愛くないじゃん」
私もそう思う。

でも、もう言っても遅いんだろうなあ……

それに私じゃやっぱりそのことを声には出せやしない。

何と言うか……やっぱり人生って上手くいかないって思った。

第25話く地獄絵図は夢の中く

ハンマーと言う武器を担ぐにあたって、頭の共存と言うのは不可欠なこと。

スタンをしたら火力の低い俺は退き、虫棒や大剣に譲れば良い。けれども、その前にスタンを取らないとどうしようも無い。

一応、SAを維持させながら殴り続ける攻撃もある。けれども、如何せん火力が出ない。ホームランを入れることで初めてハンマーは使える程度の火力になるのだ。

ハンマーのホームランは自分の身体の右側から正面にかけて当たり判定がある。だから、狭い範囲を共存した場合は相手の右側へ立てば問題ない。そう……俺がホームランで吹き飛ばす問題はないんだけど……

困ったことに、今後も頭を共存していくであろう笛は右側に強い判定のある攻撃をしなければ火力が出ない武器だ。だからもし俺が右側にいるとその攻撃は確実に当たる。

じゃあ、左側に立てば良いのかと言うとそうでもなく、笛は左側にも攻撃する。あと俺のホームランが当たる。

あれから色々と考えてみた。

スタンや乗り、脚ひるみなどで倒れたら俺は頭へ行かず違う部位へ行けば良いんじゃないかとか、例えば火力が落ちようがSAの維持できる攻撃はすれば良いんじゃないかとか、そもそも俺が——ハンマーをやめれば良いんじゃないかとか……

でも、それらの考えは何かが違う気がした。

自分にできることは全てやりたい。けれども、それで火力が落ちパーティーに迷惑をかけるようじゃあ仕方無いのだ。

本当に色々と考えました。

さして良くもない頭を使って考えてみました。

そして、そんな俺の出した答えは——

「えと、お願いがあるのですが……」

「……どうしたの？」

笛の彼女にお願いすることでした。

自分でも情けないって思う。けれども、これが一番だと思うんだ。いや、本当に一番なのは俺がハンマーをやめれば良いってことだけど、それは勘弁してください。ハンマー好きなんです。使いたいんです。

そんな我が儘は許して欲しいかなって思う。

「できれば良いのですが……これからはダウンを取ったときの立ち位置を決めませんか？」

前回のクエストはソレを決めていなかったせいで、二人共モンスター頭のほぼ真正面に位置取っていた。

そうなればS Aのない俺はひたすら転ばされる。ダウン時の立ち位置なんてすごく大事なことなのに、今までは相棒としかクエストへ行っていないかったせいで、すっかり忘れていました。

位置取りを決める時は基本的に二人共頭の正面には立たず、少しずれた位置へ立つことになる。そうすればいくらリーチの長い笛でも攻撃は当たらない。だからお互いに頭へ行けるようになる。

しかし、だ。この位置取りを決めると言うのは、この笛の彼女にとってメリットは何もない。つまりこれは完全に俺の我が儘なんです。

「……そう言えば決めてなかったね。うん、わかった。貴方はどつちに立つの？」

……あら、予想以上にあっさりとなだめしてくれただけで驚いた。

「え、えと。頼んでおいた俺が言うのもアレだけど本当に良いのか？」

「……………？ 何をそんなに気にしているのかわからないけど……………だってそうしないと私の攻撃が当たっちゃうもの。だから私も決めておいた方が良いと思う」

ああ、良い娘だ……………

笛の彼女の優しさに感動した。どうかこれからもその優しい君のままできてね。

「うん、ありがとう。別に俺はどっちでも構わないけど……………そうだな、じゃあ俺は正面から見て左へ行くから君は右をお願い」

「了解」

おおー、お願いしてみるものだ。

良かった……………これで、これで漸く俺も前見たく気にせず頭をガツンガツンできる。やっぱりハンマーなら頭を殴りたい。

「何かをずっと考えているのかと思ったら……………そんなことを考えていたの？」

「うん？ ああ、だって前回のクエストは俺がほとんど攻撃できなかったからなあ」
現在はガタゴトと揺れる馬車の上。

向かうは氷海。目的はフルフルの捕獲。朝出発し、今はそろそろ日が暮れ始めるくらいだろう。その間、ずっと考えていました。

氷海には丸々1日かかるそうだし、着くのは明日の朝になるはず。

「私のことなんて気にせず言ってくれても良かったのに……………」

それができない性格なんです。

それに今回のお願いは俺の我が儘なんだ。こんな形になってしまったのも仕方無いと思う。

「それに何かあればどんどん言ってくれた方が私も嬉しい」

……そっか。

もう君も俺たちの仲間だもんな。

うん、了解です。できるだけ頑張ってみます。

「へい、相棒」

「ん〜？ どしたの？ そろそろ寝ようと思ってたんだけど」

本当に眠いのか、目蓋は少し下がりがり気味。眠いところ悪いね。

あく……それなら明日、言った方が良いのかな？ この相棒、寝たら忘れそうだし。

まあ、また明日も言えば良いのか。

「今回、スタンを取ったら、頭を攻撃してくれないか？」

「いいの？ 君を転ばせちゃうけど」

大丈夫、俺は退きますので。

今までのモンスターは頭以外にも柔らかい部位のあるモンスターだった。けれども今回戦うフルフルは頭以外はかなり硬い。

そしてこのパーティーの中で一番火力が高いのはこの相棒だ。だからスタンを取った時くらいは頭へ行ってくれた方が助かる。

「その時、俺は胴体を叩いているから大丈夫。頼んだ。超期待してる」

「うん、わかった。頑張る」

よろしくお願いします。

さて、そんじゃ俺も寝ようかな。

クエスト直前まで寝ていると気分的に体も動かない気がする。それなら早めに寝るのが吉と言うものなのだ。

どうやらいつの間にか寝てしまったらしい。

そして、目が覚めてまず初めに思ったことが――

「寒っ！」

そんなことだった。

砂漠の近くと言うこともあつてか、バルバレは基本的に温暖な気候。そんな場所に慣れてしまつていたせいかな、この寒さは流石にキツイ。

「あつ、起きたんだ。もうちよつとで着くつて、ネコちゃんが言つてたよ」

そんな寒さの中でも相変わらず元気な様子の相棒。

太陽はまだ昇つていないけれど、空は明るくなり始めていた。むう、本当に丸々1日もかかるのか……面倒くさいな。もし必要素材の関係でマラソンすることになったらしても、氷海はやめておこう。馬車の上でじつとしてるのは苦手なんです。

とりあえず腹に何かを入れようと考え、焼肉セットを取り出し肉を焼く。

「あつ、私も食べたい」

了解です。焦げたらごめんね。

さて、相棒は起きてるけど、笛の彼女は……ああ、まだ寝てるわ。毛布に包まつてすびすびと寝息を立てている。

俺も次からは毛布を持ってこようかな。

「ふふつ、ぐつすり寝てるね。これって起こした方がいいのかな？」

——上手に焼けましたー♪

おっし、成功。あともう一つか。上手に焼けた生肉を相棒に渡し、再び生肉を焼く。んく……どうなんだろう？ せっかく寝ているのだし、着くまで寝かせておいてあげたいけれど……まあ、でも起こした方が良いのかな？

気持ちよさそうに寝ている笛の彼女の様子を見るとそんな気も失せるんだけどさ。

「……ああ、ラグでモンスがびよんぴよんするんじゃあ、く」

——上手に焼けましたー♪

寝ている彼女から何か聞こえた。

この彼女、時たま意味わからないこと言うよね……

「……何言ってるんだろ、笛ちゃん」

俺にもわかりません。

こんがり焼きあがった肉へ齧りつく。溢れ出る肉汁がやみつきになりそうだ。あ

あ、お肉は今日も美味しい。

「ほら、笛ちゃん。そろそろ着くよー」

「うう、アカムの三連飛鳥文化なんて聞いてない……」

何その地獄絵図になりそうな攻撃。

ゆさゆさと相棒が揺すったけれど、なかなか起きない笛の彼女。鼻つまんで口から元氣ドリントを流し込めば起きるだろうか。

いや、やりませんよ？　ちよつとやってみたいとは思うけれど。

そして、太陽が完全に顔を出したくらいの時になつて漸く彼女は起きた。

ぐしぐしと目を擦っているところを見るあたり、まだまだ眠そうだ。てか、どんな夢を見ていたんだろうね？

そんな明らかに寝起きな状態の彼女は自分のアイテムポーチをガサゴソといじつてから、何かを取り出し、それを飲み込んだ。

僅かに広がるハチミツの香り。

ああ、元氣ドリント持っていたんだ。俺も持っているけれど、それは全部相棒が調合してくれたものだから、自分で調合したものは一つも持っていない。

いい加減俺も自分で調合するか。

「おはよう！　笛ちゃん」

「……うん、おはよう」

元氣ドリントを飲んだおかげか、もう眠そうには見えない。便利なものだね。

そんなことから暫くして氷海へ着いた。

氷海がこの調子だと、天空山はどれくらいかかるのかね？ 近くはないだろうし、マラソンをするならやっぱり遺跡平原が一番か。

アイルーにお礼を言ってから馬車を降りる。

今回は初の捕獲クエスト。幸いなことに、フルフルは捕獲するタイミングがわかりやすいから、間違えて倒してしまいう可能性は少ないはず。

怒りの時の火力の高さや、壁際へ追い込まれてのハメは怖いけれど、倒せない敵でもない。

支給品ボックスからホットドリンクなんかのドリンク系と携帯シビレ罠、捕獲玉を持ち出発。

「おっし、行くかつー！」

「おおー！」

「……おおー」

目標は4スタンプ。

見た目はアレだけど、苦手な相手ではない。

そんじや、ひと狩り行きますか！

第26話〈微笑み浮かべて乗り攻撃〉

フルフルの初期エリアは6。段差もなく戦い易いエリアではあるけれど、天井と壁があるせいでフルフルさんつてば直ぐくつついちゃうのよね。

アレをやられるとせつかく溜めたスタン値がモリモリ減っていくから少し苦手だった。

ま、今はソロじゃなく笛の彼女もいるのだし、スタンはかなり取れると思うけど。

支給品ボックスから取り出したホットドリンクを一気に流し込む。

クーラードリンクと比べ、絶対に飲まなければいけないアイテムではないけれど、できる限り携帯食料は飲みたくない。

ホットドリンクの調合素材は苦虫とトウガラシ。正直、美味しそうではない。けれども実際に飲んでみると、味は其処まで悪くなかった。なんか味噌みたいな味でした。

ホットドリンクを飲むと、今までは寒いと感じていたはずなのに、その感覚が一切なくなった。便利なものだ。

そんな準備をしてからベースキャンプを出て、エリア5経由でエリア6を目指す。シヤクシヤクと積もった雪を踏む感覚がちよつと面白い。

エリア5ではクンチュウを横目にピッケルで採掘。ドラグライト美味しいです。そしてエリア6に到着。

のそのそと何かが動いている音が頭の上の方から聞こえた。

なんでコイツっていつも天井に張り付いているんだらうか。

「わっ、わっ、フルフルだ！ 本物だ！」

興奮気味の相棒。何に興奮するのか全くわからない。

初めてリアルに見たフルフルは……うん、やっぱり可愛くはないと思う。

さっさと天井から降りてきてもらうために、フルフルの真下でウロウロしてみる。打ち上げタル爆弾でも持ってくれば良かったかもしれない。

そして、フォルティツシモ独特の演奏音が流れた時、フルフルの首が伸びあのやたらと甲高く不気味な咆哮が響き渡った。

緊急回避！

「うんやっ！」

相棒が耳を塞ぎながら何かを言っていたが、よく聞こえなかった。

緊急回避から起き上がり直ぐに、笛の彼女の方を目指す。最初に狙われるのは絶対に

彼女だろうし。

「赤は頭か首。橙は胴体。白は脚か翼。任せた！」

「りよ、了解です」

天井から彼女目掛けて飛び降りてきたフルフルへと、りよあえずカチ上げ。

初期スタン耐性はそれほど高くなかったはず。できれば怒る前に一度くらいはスタンを取りたい。

フルフルの動きはかなり遅い。まあ、見た目とかいかにも遅そうなモンスターではあるんだけどさ。ただその分、コイツの攻撃は出が速い。予備動作がない攻撃も多く、腹下へいると放電を喰らうことだってある。

彼女が後方攻撃をするのを見て、横からフルフルの頭へカチ上げ。フルフルは何処から頭で何処から首なのか、が非常にわかりにくい。だからできるだけ先つぼの方へ当てる。先つちよ！ 先つちよだけだから！！

攻撃を一度入れたら直ぐに回避をして距離を取る。そうしないと回転攻撃に間に合わないんです。

フルフルが身をよじり、その身体が青白く光るのが見えた。

「お先にどうぞ」

「……了解」

笛の彼女へ一言。その一言で意思は伝わってくれたらしい。

フルフルの放電が当たらない場所で、右腰へハンマーを構える。

そして彼女が笛を大きく振り上げてから、その笛を叩きつけた。それは放電の範囲外からの笛、最大威力の叩きつけ攻撃。

その後、彼女に続いて俺も放電の範囲外からスタンプ。スタンプをする時はちよつと前に出ちやうから、少しだけ気をつける。

其処で、本日一回目のスタンプを奪った。

「頭、頼んだ！」

「あつ、はい」

エキスを3色集めきり神々しくなっている相棒へ言葉を落とす。

スタンプをしたら頭は虫棒にさつとゆずる。悲しいけれど、これがハンマーにできる一番のことなんです。スタンエフエクトも出さず、ヒットストップもさしてない、フルフルの腹へホームラン。やっぱりちよつと物足りない。

スタンから起き上がったフルフルはその口から青白い吐息を吐き出した。その攻撃チャンスへ、彼女の後方攻撃と俺のカチ上げを決める。

「乗るよー」

「任せた」

そして相棒のジャンプ攻撃。

何だかハメっぽくなってきているけれど、それだけパーティーが上手く立ち回れているって言うことだと思う。パーティープレイなぞ、突き詰めていけばハメと変わらないのだ。

「えへへ、背中がひんやりしてきもちいい。ふふつ、可愛い奴め」

……アイツ病気なんじゃないだろうか。

フルフルを可愛いと言った笛の彼女も、背中に乗った相棒の言葉には流石に引き気味だった。変わった奴だと思っていたけれど、まさか此処までだとは思わなかった。

恍惚とした表情のままフルフルの背中を斬り付けている相棒の姿なぞ猟奇的にしか見えない。なるほど、これがヤンデレか。

とりあえず相棒の性癖は良いとして、まずは砥石。

笛の彼女はその間、攻撃強化と風圧無効の演奏をしてくれた。助かります。相棒の乗り攻撃を成功し、倒れたフルフルへ近づき直ぐに縦1を叩き込む。

「ふふん、ねえ見てた？」

自慢するように言葉を落とした相棒さん。はい、今回は見ていました。

あまり見たくはない光景だったけど……

さらにクエストの出発前に打ち合わせたよう、左側から頭へ縦2、ホームラン。彼女

もちゃんと立ち位置を変えてくれたらしく、フルフルの頭を挟み反対側で笛を振り回していた。

そしてもう一度、縦1始動からのホームランを入れ、彼女の左ぶん回しがフルフルへ当たった時、2回目のスタンを奪った。

うむうむ、良い連携だ。これからもこの調子でお願いします。

その後も、特に問題なく狩りは続いた。

強いて言うならトリップした相棒が乗りを失敗したことと、転がってくるクンチュウにブチギレた笛の彼女がフルフルそっちのけでクンチュウを叩きのめしに行っただくらい。

笛さん超怖い……。怒らせないようにしようって心から思った。

そして、エリアも5番へ移り戦っていると、ピタリと急にフルフルの動きが止まった。その動きを見てから急いで納刀。そしてアイテムポーチからシビレ罠を取り出してから設置。間に合えー！

「えっ？　もう置いちゃうの？」

うん、もう捕まえられます。

運も良く、シビレ罠が間に合いビリビリと痺れているフルフル。自分自身だって電気

を使うのに、シビレ罨にはかかるんだね。

そして痺れているフルフルへ捕獲玉を2回当てた。

その瞬間、フルフルは横に倒れ、眠ってしまった。捕獲クエスト完了です。

「おおー。すごい。捕獲できたー！」

流石に0分針ではないと思うけれど、10分針は切ったと思う。お疲れ様でした。

ん〜……疲れた。早く帰って温かい食べ物を食べたいところ。

「そんじゃ、帰るか」

何と言うか、非常に表現のし辛い笑みを浮かべて寝ているフルフルを見つめている相棒と、未だクンチュウへの怒りが収まっていない彼女へ言葉をかける。もう、やめてあげてよ……

なんだか変なパーティーだとは思うけれど、悪いパーティーではないんじゃないかなって思います。

クエストからの帰り道。ふと、目が覚めた。

辺りは真つ暗で、いつもなら見えていたはずの満天の星空も雲に覆われているせい
か、その姿を確認することはできなかつた。

クエストを終え、いつものように馬車に揺られて帰つたのだけど、その時は直ぐに寝
てしまった。相棒もかなり上手くなつてくれたおかげで、するような反省もない。

昼間から寝たら夜寝られなくなるんだらうなあ。とは思っていたけれど、適度に揺れ
てくれる馬車は容赦なく夢の世界へと旅立たせた。

そして、案の定起きたら夜だ。目もぼつちり覚めてしまい、これ以上寝ることも難し
い。かと言って、上を見上げてもいつものように瞬く星々を見ることはできない。

暇になつてしまいました。

「……起きたんだ」

ぼそりと静かな声が聞こえた。

暗いせいで、その表情をしつかりと見ることはできなかつたが、その声をかけてきた

のがあの笛の彼女だと言いうことはわかった。

「うん、今ね。相棒は？」

「ぐっすり寝てる。たぶん、ちよつと前までずっと騒いでいたから疲れたんだと思う」

まあ、今日はやたらとテンション高かったもんな。

そんなにフルフルと戦えたことが嬉しかったのだろうか。

「……このパーティーに入って良かった」

それも静かな声であつたけれど、馬車の揺れる音にかき消されることはなく、はつきりと聞こえた。

「そっか。そりゃあ良かったよ。正直、俺と相棒だけじゃいつか絶対に躓いてしまう日が来ただろうし」

それもきつと遠くない未来で。

その時はハンマーを諦めようとも思っていた。けれども、どうやらそれをしなくとも済みそうだ。それは本当に嬉しいこと。

自分の一番好きな武器で戦えないのは辛い。例えば、弱いとか邪魔とか言われようが、ハンマーはカツコイイのだ。周りの意見などどうでも良いくらいに。

モーション値が落ちた？ スタンの価値が減った？ DPSが低い？ ……そんなもん関係ない。コイツの魅力と比べればまだまだお釣りは十分にくる。

使ってみればわかる。

ハンマーはそれくらいカッコイイ武器なのだ。だからそんな武器を担いでいる今は楽しい。

そう……楽しいとは思っているんだ。

「……貴方はまだ帰りたいつて思う？」

再び、彼女の声。

それはいつかした質問と同じものだった。

「どうだろうな。確かに帰りたいつて気持ちはあるけれど……」

俺はこの世界の人間ではない。だから帰りたいつて思うことは当たり前のことなのかもしれない。

でも、どうして帰りたいのかと聞かれても、きつと俺は答えることができないだろう。これと言った目標もなく生きていたあの人生。そこにこの世界以上の魅力があるのかと聞かれても俺にはわからない。

それくらいには今の世界が気に入っていた。

「私は今楽しい」

うん、俺もそう思うよ。

本当にそう思う。そうは思うのだけど……

それでも、やっぱり俺は——

「でも——やっぱり私はあの世界へ帰らないといけないんだと思う」

……ですよね。

こればかりは理屈じゃないのだ。

例えばこの世界がどんなに面白かろうが、やっぱり俺たちは帰らないといけないんだろ
う。

帰りたいか、帰りたいくないか。そんなことはわからない。

けれども、帰らなければいけないって思うんだ。どうやったら帰ることができるのか
なんてわからないけれど、それでもやるだけやらないといけない。

それが俺の使命だと思う。

「わかっているよ。それはわかっている。だから今も我武者羅に前へ進んでいるんだ。……
でもさ、どうせ進むんだったら楽しみながら進んでやろうぜ」

それくらいならきつと許してもらえるはず。

「……うん、そうだね」

そう言った彼女の表情はやっぱり見えなかったけれど、たぶん笑ってくれていたと思
うんだ。

うん……大丈夫、きつとこのパーティーならどんなクエストだってクリアできる。

そう自分へ言い聞かせた。

第27話　癒しにプーギー

「ん、やっぱりバルバレは暖かくていいね！」

馬車から降り、相棒が最初に落としたのはそんな言葉だった。

アイルーに礼を言ってから、笛の彼女に続いて俺も降りる。いつもありがとう。助かってます。

「……寒いのは苦手」

そんな笛の彼女の言葉。

まあ、ジンオウガ一式とか見るからに寒そうだもんな。可愛いとは思うけれど、其処は大変そうだ。

寒さ無効が付くと言えは……ウルクシリーズだったかな。ユニクロ装備も確かあったと思う。そして両装備とも何故か回避距離がつく。回避距離はヘビィやスラクなんかを使うときは便利だけど、あのローリング距離に慣れていないせいか、どうにも感覚がずれる。

難しいところです。

「これからの予定って決まってるの?」

「うん? ああ、んく……どうすっかなあ」

普通に進めようと思えるのなら、ガララアジャラかザボアザギルだろう。

ガララアジャラなら原生林。ザボアザギルならまた氷海だ。ただ、氷海には今しがた行ったばかり。そして俺だってやっぱり寒いのは苦手なんです。暑くも寒くもなく此処から距離も近い遺跡平原が大好き。

「ガララアジャラでも良いか?」

「私はいいよー」

「……私も大丈夫」

了解。そんなじゃ、次はガララアジャラにしよう。

ガララアジャラ自体は決して強いモンスターではない。

ただガララアジャラは決して賢いって言う設定のせいとか、何としてでもハンターを囲み地中からの突き上げ攻撃をしてこようとすると、鳴甲の破裂に当たると確定でピヨらせるし、ピヨらされたら絶対に囲まれるしとちよつと鬱陶しいモンスター。

更に頭が高いせいで、ハンマーじゃ頭へ攻撃が届かないことが多い。確定で入れられるのなど、2連噛み付きくらいじゃないだろうか。

そんな鬱陶しいモンスターだ。大ききだつて、超巨大モンスターを除けば一番大きい

だろう。確か50mとかだった気がする。だからアイツって、あのアカムより大きいんだよね……

けれども、何よりガララアジャラは体力が少ない。

そして有り難いことに怯み値もやたらと低く、割とゴリ押しがきくモンスターだと思う。何だか良くわからないけれど、叩いていたら倒しているってことが多いのだ。笛ならアイツの頭にも届くし、スタン耐性も高くない。

とは言うものの、相棒はまだ戦ったことがないだろうし苦労するんだろうなあ。ガララアジャラに囲まれ、何が起きているのかわからず、わちゃわちゃしているところをブチ抜かれる姿が用意に想像できる。

いや、まあ、俺も初見なんだけどさ。

けれども、今まで戦ってきたモンスターは全てゲームと同じ動きだった。だから俺は別。

「そんじや、次はガララで。えと、原生林もまた丸々1日かかるんだっけ？」

「うん。それくらいかかる。遠い」

むう、そりやあまた面倒な。

ガララ装備一式を集めるとかなったらどれくらいかかるのやら……

ま、しゃーないか。

「出発は明日の朝にしよう。それまでは自由行動で」

「了解」

「わかった」

時刻はまだ朝の早い時間。氷海から帰ってくる時はほとんど寝ていたせいで、もう眠くもない。

はてさて、どうすつかね？

少しばかり考えてみた。

止まっているのがどうにも苦手なこの体。せつかくの休みのはずなのに、心がそわそわとしてしまい、どうにも休めない。何かをやらなければいけない焦燥感に駆られる。

けれども、何をして良いのかがわからなかった。

だから家に帰り、少しばかり考えた。
答えなど出るはずはないと言うのに。

「あゝ……クエスト行くか」

それが正解かはわからない。

けれども、間違つてはいないんじゃないかと思って思うんだ。

何をすれば良いのかなんてわからないけれど、とりあえず動くことにします。そつちの方が自分に合っていると思うから。

以前一人でクエストへ行こうとして、相棒から滅茶苦茶怒られた。そしてまた同じことをしようだなんて流石に思わない。ちゃんと声をかけねば。

特に行くクエストが決まったわけでもないのに、家を出る。

そして家を出て直ぐ、いつも俺の暇つぶしに付き合ってくれているプーギーが目についた。更に其処には何故か笛の彼女の姿。その彼女はゴロリと横になっている。プーギーの前に座っていた。

何をやっているんだろうか。

「……お腹柔らかいね。ぶにぶに。へへっ、ぶにぶに」

……何を、やっているんだろうか。

微妙に半笑いつぽい顔がちよつと怖い。こんな時、何て声をかければ良いのかわから

ない。

たぶん、見なかったことにするのが一番なんだろうけれど、声をかけずにクエストへ行くわけにいかず、声をかけることに。

「あゝ……あの？　ちよいと良いですか？」

近づいた俺に気づくこともなく、一心不乱にプーギーの腹をつつき続ける彼女。その気持ちはわからないでもない。

俺も1日中プーギーで遊んでいたことがあつたけれど、こんな感じだったのだろうか。

そんな彼女に声をかけると、座っていた彼女は上を見上げるようにゆっくりと此方を向いた。

「……………違う」

何がだよ。

「ど、どうして貴方が此処に？」

「いや、だって、直ぐ其処が俺の家だし……」

むしろ、どうして君が此処にいるのか聞きたい。

やはりアレだろうか？　彼女も日々の疲れをプーギーの腹をつつくことで癒そうとでもしていたのだろうか？

それならプーギーの腹をつつく会でも作る？　今なら名誉会長の座を君にあげられるよ。

「そんなこと聞いてない」

いや、だって言っていないし……

因みにだけど、相棒も近くに居るよ。家、隣だし。

なんだろう。もしかして俺が悪いのだろうか。別段悪いことをした覚えはないけれど、妙な罪悪感がる。

「え、えと、ですな。これから遺跡平原のクエストにも行こうと思っていたんだけど、君も行く？」

「……………今日は遠慮します」

滅茶苦茶落ち込んでいた。

あの姿を見られたのがよほどショックだったのだろう。

ああ、うん。今日はゆっくり休んでください。

肩を落とし、トボトボと去って行く彼女の背中を見送りながらそんな言葉を呟いた。

俺の家の周りには比較的人通りも多い。だから彼女の行動は色々な人に見られていた

んだと思うけれど……まあ、それは言わないであげた方が良さそうだ。人生、知らない方が良いことだってあるはずなのだし。

寝ているプーギーの頭を一度撫でてあげてから、相棒の家へ。

遺跡平原なら今から出発しても暗くなる前に帰ってくることができる。しかし、何のクエストへ行こうか。特に欲しい素材があるわけでもないし……

そんなことを考えながら、相棒の家のドアをノック。

「あつ、はい。今出ます！」

いつも通りの騒がしい声。元気だね。

「およ、どうしたの？ もしかして朝食のお誘い？」

「いや、そうじゃなくてさ。暇だから遺跡平原へ行こうと思ったんだよ。だから一緒に行くか聞きに来た」

そう言えばまだ朝食も食べていなかったね。

まあ、クエスト前に食べるしちょうど良いか。

「ん……別にいいけど、何のクエストへ行くの？」

「なんも決めてない。採取ツアーでも行こうかなって考えてる」

俺がそう言うと、相棒は首を傾げた。

まあ、そりゃあそうか。俺だって暇だから行こうと思っただけなんだ。其処に深い理

由なんて何も無い。

「うーん。よくわからないけど、わかった。ちよつと待つてね。直ぐ準備するから。あ、笛ちゃんも誘わないとだ」

「彼女は行かないってさ。あゝ……どうも疲れたらしい」

「あらあ……そうなんだ。うん、了解」

深くは聞かないでください。俺も何て答えれば良いのかわかんないし。

そしてどうやら一緒に来てくれるらしい。別に一人でも良かったけれど、どうせなら二人の方が良いかもしれない。

相変わらずバタバタと騒がしく準備をする相棒を少し待つてから、一緒に集会所へ向かう。

まだ時間的には朝と言うこともあつてか、集会所は其処まで騒がしくはなかった。

遺跡平原の採取ツアーを受注してから料理を注文。

「あれ？ 今日はいつとも違う料理なんだ」

いつも通り肉・魚の煮込み料理でも良かったけれど、釣りもしようかと思ひ魚・乳製品の揚げ料理にした。

「たまにはね」

一方相棒は肉・肉の炒め料理。随分と男らしい料理ですね……固定で発動するスキル

はないけど、日替わりスキルが2つ発動するはず。何が発動したんだろうか。

ピツケルと回復薬・砥石くらいで、後は必要な道具なんてほとんどないから、料理を食べた後は直ぐに出発。

「ふふっ、つい最近までそうだったのに、二人でクエストへ行くのって何だか久しぶりな気がするね」

何処か楽しそうに笑う相棒。

そう言えば、何だか久しぶりに感じる。笛の彼女が入ってくれてから3人となったパーティー。そんな彼女が俺たちのパーティーへ入ってくれたことは本当に有難い。

こちらとら、まだまだ駆け出しのハンターなんです。けれども、まあ……初めてクエストへ行った日のことが懐かしいと思えるくらいには成長したんじゃないかな。

「それで、今回は何をやるの?」

「あく……ホントに何も決めてないんだ。釣りとか採掘とかかなあ」

乱入で現れたモンスターくらいは倒そうと思っている。乱入してくるのも、ケチャカジャギイかアルセルタスと強い相手ではないし。

あとは、時間いっぱいのおんぴりと採取。

「ん〜……何だか珍しいね。君が何も決めていないなんて。いつもはコレをやるうって決めてるじゃん」

ガタゴトと揺れ始めた馬車の上。

最近はどんな時間よりもこの馬車の上にいる時間の方が長い気がする。

「そう言う日もあるさ。まあ、今日くらいはのんびりと採取ツアーをすれば良いんじゃないか？」

「そだね。たまにはそう言う日も良いかも」

そう言つて相棒はまた笑つた。

ホント、良く笑う女の子だ。

フルフルに対するアレはどうかと思つたけれど、どうかそのままの君でいてくれると俺は嬉しいです。

そんじゃ、のんびり行かせてもらいますか。

第28話～松明でアイルーダンス～

「着いたー」

馬車に揺られること数時間。遺跡平原へ到着。

うむうむ、やはり遺跡平原は近くて好きだ。全部これくらい近かったら楽だったのにね。暑くもなく、寒くもない丁度良い気温。

支給品ボックスから地図と松明を取り出し出発。

今回は時間いっぱいまで採取するつもりだし、もうベースキャンプへ帰ってくることもないと思う。

「そんじゃ、行くか」

「おおー！」

今回は本当に何かをやる予定なんてなかったから、相棒と雑談をしながらピッケルや採取。鉄鉱石や大地の結晶、ハチミツが美味しい。

上位になったら流石に回復薬グレートがないとやってられないし、今のうちにコツコツと集めねば。

そんなことをしているとところにひよこひよここと現れたアルセルタス。けれども、まあ、直ぐに倒すことができました。

「あ、あれ？ もう倒しちゃった」

前に戦った時よりも武器も強くなつたし、腕だつて上手くなつたはず。火力で言うとも2倍くらいは上がつてそうだ。そりゃあ直ぐに倒すことくらいできる。

最初は結構苦労したんだけどなあ。良いことではあると思うけれど、何故か変な寂しさを感じた。それが成長したつてことなのかね？

倒れたのにも関わらず、ヒクヒクと脚が動いているアルセルタスから剥ぎ取り。

ありがとう。いただきました。

遺跡平原も一周し、ピッケルポイントもなくなつた。それでも時間は余っていたからネコの住処へ行って釣り。もう後は時間いっぱいまで釣りでもしよう。お金にもなるし丁度良い。

俺が糸を垂らしている間、相棒は松明を持ってアイルーたちと一緒に踊っていた。楽しそうではあるけれど、何やってんだらうか……

サシミウオなどは早々に10匹以上釣れてしまうため、余つたそれらは全て相棒と一

緒に踊っているネコたちにあげた。

松明を持って踊るハンターと、そのハンターを中心に踊るネコたち。そんなネコたちへ俺が魚をあげるせいで、テンションは更に高くなる。まさにお祭り状態。

もうなんか異様な光景だった。

まあ、たまにはこう言う日も良いのかな。なんて思い、そんなお祭りを横目に時間が来るまで俺は糸を垂らし続けた。

結局、クエストが終わる時間が来るまで相棒はネコと遊んでいたし、俺は釣りを続けていた。

黄金魚と小金魚は10匹以上も釣ることができ満足。これでどうぶんお金に困ることもなさそうだ。うむ、これだけでも来た意味はあったと考えると良いはず。

「今日は楽しかったね！」

「うん、そうだな。たまには良いかもしれない」

馬車に乗り込みながら落とした相棒の言葉に同意。

この相棒はずっと遊んでいたけど、もしかしていつものクエストより疲れているんじゃないだろうか。

……いや、流石にそれはないか。ないと信じている。信じているぞ相棒。
「ん〜……なんかいつもより疲れた気がする」

……お前にはガツカリだよ。

いや、別に悪いことではないんだけどさ。

遺跡平原からの帰り道。疲れたと言っていたのに、珍しく相棒は直ぐには寝なかつた。明日もあるのだし、今は寝た方が良い気がするけど。

そして、何故かじつと此方を見ている。なんなんでしょうか？

その相棒の表情は何時もよりも少しだけ真剣そうに見えた。

「どしたの？」

見られていると、どうにも心がざわつくため堪らず聞いた。

「……私は今、楽しいよ。す〜く」

あ〜……うん？

そりゃあ、良いことだ。良いことなんだけど……えと、何が言いたいのだろうか。

普段から何を考えているのかわかり難い奴ではあるけれど、今回は本当にわからな

い。俺だって察しの良い性格ではないのだし、ちゃんと言葉にしてもらわないと伝わらない。

「……君がさ。どんな人なのか私にはわからない」

ああ、なるほど。

ふむ……そう言うお話ですか。

「だけどき。今が私はすごく楽しい。私がついて、君がついて、笛ちゃんがいるこの生活は楽しい。ずっとこんな生活が続けば良いって思ってる」

この相棒が何を考えているのか、詳しいことはわからない。けれども、思うことは色々あったのだろう。

まあ、疑問に感じない方がおかしい気もするんだけど。HRだってまだかなり低く、駆け出しハンターの俺。そうだと言うのに、知識だけはやたらと持っている。相棒から見れば、そんな俺なんて異様に見えることだろう。

「だから私からは何も聞かないし、少し寂しいけど喋ってもらわなくてもいいかなって思ってる。でもやっぱり……いつか君のお話も聞きたいです」

そう言うってから彼女は何時ものように笑った。

俺が元の世界へ帰ることができかなんてわからない。だから話することに意味はないのかもしれない。

でも、この相棒は大切な仲間なんだ。だからそれくらいはしてやらないといけないのかな。何時までも不安にさせたままと言うのはあまりよろしくない。

失礼ながら勘違いしていた。この相棒はあまり気にしない方なんじゃないかって。けれども、どうやら一番考えてくれていたのはこの相棒なのかもしれない。

「……うん、いつか話すよ」

それがいつになるのかはわからない。

それでも、いつか、必ず。

「ありがと。……よし、それじゃ、私は寝ます！ おやすみ！」

うん、おやすみ。

ちゃんと起こしてあげるから、今はしっかり休んでください。

こんな俺ですが、これからもよろしくお願いします。

あの後、相棒は集会所へ着くまで眠り続けた。

本当に眠っていたのかはわからないけれど、俺も声をかけることはせず、ゆつくりと過ぎいく景色を見ながらポーツと考えごとをしていた。

色々なことを考えたけれど、何を考えていたのかは忘れしました。

集会所へ着く頃には日も落ち始め、夕食には丁度良い時間。

相棒に声をかけてから馬車を降り、俺のアイテムポーチを生臭くしている原因である魚を全部売ってから夕食。いや、別に生臭い匂いがしたわけじゃないんだけど……ほら、気分的に生臭いんだ。

「夕食、笛ちゃんも誘おうよ」

「ああ、そうだね。でも、彼女の家の場所ってわかる？俺は知らないんだけど」
相棒の様子は特にいつもと変わっているようには見えなかった。

「どうやら心の切り替えはなかなか上手いらしい。」

「うん、知ってるよ。前に教えてもらったし」

「なんと、そうなんですか。俺は教えてもらってないのに……なんだか仲間外れにされたみたいだ。」

そんなことで、相棒と一緒に笛の彼女の家へ向かった。

家のある場所は俺たちの住んでいる所から予想以上に近かった。あら、ご近所さんだったんだな。こんなとき、自分の交友関係の狭さを実感させられる。

相棒が笛の彼女の扉をノックし、声をかけ暫くすると彼女が出てきた。見るからに、元気がなかった。まだ今朝のことを引きずっているのだろうか？

どうやら心の切り替えはなかなか下手らしい。

「……どうしたの？」

「これから皆で夕食を食べようと思ってるんだけど、笛ちゃんも一緒に行こうよ」

チラチラと視線を此方に向けてくる彼女。

大丈夫、相棒にあのことは喋ってないし、喋るつもりもありません。てか、其処まで恥ずかしいことではないと思うんだけどなあ。プーギーの腹をつつくことは俺も良くやっていたし。

ああ、でも俺もあの姿を彼女に見られたときは凹んだか。

「……じゃあ、行く」

お願いだから、明日までには元に戻ってね。君の調子が悪いと戦力が一気に落ちちゃうし。

そんな不安もあったものの、其処は無意識だと思うけれど相棒が一生懸命声をかけて

くれたおかげで、笛の彼女もいつもの調子に戻った。

最初に彼女と会ったときは表情の変化が少ないと思っていたけれど、どうやらそうではないらしい。てか、浮き沈みは激しい方かもしれない。フルフルと戦っていた時だつて、早々にブチギレてクンチュウを追いかけ回してたし。

うん、そんな彼女の心のケアは相棒に一任しよう。

俺がやつたら悪化させそうだ。

例のごとく酒を頼もうとした相棒を止め、未だ不安そうな視線を向ける彼女にアイコンタクトでそんなつもりのないことを伝える。

そんな何とも落ち着かない食事。

相変わらず集会所は騒がしく、ゆっくりなんてできそうにない。

けれども……うん、まあ、俺も楽しいって思います。

いつまで続くかわからないけれど、もう少しくらいこんな生活が続いてくれると嬉しいです。

明日は初めての原生林で初めて戦う相手。どうにも面倒な相手ではあるけれど、強い敵ではない。それにこのメンバーなら問題なく倒せるはず。

ゆっくりなんてできそうにはないけれど、のんびり進めさせてもらいますか。

第閑話く横から溜3連射く

それは不思議な出会いでした。

別にドラマ的でもなかったし、最初に出会った時はどうすれば良いのか本当に困った。

けれども、あの出会いは私にとってすごく大きなものになったのは確かなことだと思うのです。例え、不本意でもそれは本当のことだと思ってしまうのです。

結局、あれから彼と一緒にクエストへ行くことはまだないけれど、それでもあの時一緒に戦った1回のクエストは私にとってすごく大きなものとなりました。

それくらいインパクトが大きかった。良い方にも悪い方にも……

そんなお話は、私がまだ周りも碌に見えていないような駆け出しのハンターの時でした。

「はい、リオレイアの狩猟ですね！ 今度こそ頑張ってください！ これをクリアできればハンターさんのHRも上がりますから！」

私がHR1から2へと上がるためのクエストの内容はリオレイアの討伐でした。

けれどもこれで、もう4回目の挑戦。何度戦ってもあの空中へ飛んでからの尻尾攻撃に当たってしまう。それで、毒になってピヨピヨしてプレスでやられる。ずっとずっとそんなことを繰り返していました。

別に一人でクリアしなくて良いのですが、勇気のない私は他の人を誘うこともできず、結局一人で。それにたぶん、私のようなハンターについて来てくれる人もいなかったと思うのです。

防具はケチャ一式、武器はパワーハンタボウI。弱い装備ではないと思うけれど、強い装備ではない。でもこれが今の私に用意できる最高の装備だったんです。

よしっ、今日こそは頑張ろう。

なんて、いつものように自分へ気合を入れる。けれども、私の中にいる卑屈な私はどうせ今日もダメだろうな。なんて呟くのです。

そんな自分が嫌いでした。

変わらなきやって思う。でもきつかけが何もないからやっぱり変わることができない。人間は難しいのです。

そして、少々重くなつた気を引きずりながらクエストへ行こうとした時でした。

それが彼との初めての出会い。

私が変わることができたんじゃないかって言う一つのきつかけ。

「あの、そこのお嬢さんちよいとよろしいですか？」

防具のせいだとは思うけれど、籠つたような声をそんな言葉を後ろからかけられました。

いきなり声をかけられたものだから、少しビツクリ。そして後ろを振り返り声をかけた人物を確認。其処には――

「あの……生理的に無理です」

丸々と太つたピンク色のクマの着ぐるみのような防具をつけ、黒い猫のハンマーを担

いでいる男の人がいました。

「ひでえ……ええ、えとですね。もしよろしければ俺もクエストへ連れて行ってくれないでしょうか？」

自分でも先ほどの言葉ちよつと酷いとは思いましたが、彼の装備を見たら誰だってそう思うはず。なに、その装備？ 私をバカにしてんのか。

「……全力でお断りします」

そりゃあ私だって上手くはありません。それにこのクエストをクリアできない可能性の方が高い。けれども、この彼よりは私の方が頑張れる気がしました。

なんと言うか……彼から溢れ出る地雷臭がもうすごいのです。

基本的に狩りは一人よりも二人の方が絶対に良い。けれども、彼と一緒に不味い。

「あつ、いや、確かに装備……てか見た目はアレだけど、絶対に脚は引つ張らないし役に立つのでどうかお願いします！」

お願いされても困ります。

あと、自分の見た目が不味いとわかっているのなら変えれば良いのに……

「あれ？ こんなところで何をしてるのー？ 今日はいつものメンバーと一緒にじゃないのー？」

ついに土下座までして私に頼み始めた彼。マジやめろ。

そんな私と彼にあの闘技大会の受付をしている女性が話しかけてきました。そしてどうやら彼女は彼のことを知っているらしいです。まあ、こんな見た目なのだし彼は有名なのかもしれませぬ。

「あとその気持ち悪い装備はどうしたのー？」

「い、色々あったんです……ああ、そうだ君からも彼女が俺を連れて行ってくれよう頼んでくれませんか？」

あつ、この流れはダメだ。

これ絶対に押し切られる奴だ。

「やだよー、面倒だもん」

そんな心配はありましたが、どうやら彼女の性格的にそれはないようでした。

心から安堵。

「ほっほほ。それじゃあ、私からお願いしようかな」

そんな声の主はギルドマスターのおじいさん。一瞬安堵したのも束の間。直ぐにまた不安材料が現れやがりました。

クソが、ギルドぐるみで私へ嫌がらせか。

「確かにその彼の見た目は残念だけど、決して下手ではないはずだよ。それに今までソロで戦ってきたキミにとってパーティーで戦うのはきつと大きな経験になる。だか

ら一度行ってみるのも良いんじゃないかな？」

私にそんな状況を断れるわけがありませんでした。

「……わかりました。よろしくお願いします」

本気を出し始めた世界になど、私が勝てるはずがないのです。

なんとも納得がいきませんでした。仕方無しに彼と二人で出発。

そう言えば、これが初めてのソロ以外でのクエストです。はあ……そうだとするにその相手がコレって……

「君っていつもソロなの？」

フルフェイスの頭防具のせいでもなんとも箆ったような声。

そのせいで、彼の年齢がわかり辛い。それに体型も。いったい何の防具なのでしょう
か？

「……そうですが」

できるだけ不機嫌オーラを出しながら彼へ返事。全力で貴方が嫌いですアピール。

この調子じゃ今日のクエストもダメだろうなあ……

「そかそか、まあ、別にそれが悪いってわけじゃないんだけどさ。パーティーって言うのも結構良いものだよ」

それくらいはわかっています。

けれども、最初くらいはやっぱりソロで頑張りたいのです。それに今までもケチャワチャくらいならソロで倒してきた。今はちよつと躓いているだけ。

……きつとそうなのです。

その後も遺跡平原へ着くまで、彼は良く喋りかけてくれました。

……私がどんなに冷たく接しようが。

今まではどんなモンスターと戦ってきたのか、とか。レイアにはどうやって負けたのか、とか。それは主に私に対しての質問でした。彼の見た目が見た目だけに、真面目に聞いているのかわかりませんが、どうしてか巫山戯ているようには思えません。

もしかしたら、見た目の割に悪くはない人なのかもしれないですね。

でも、その見た目は無理です。

彼のHRはわかりません。私と同じかもしれないし、私より高いかもしれない。で

も、もし私より高かったとしても尊敬できそうにない。人間、見た目は重要です。

「よしや、そんじや行くか！」

遺跡平原に着き、そんな大きな声を出した彼。

支給品ボックスからは何も取らなかつたけれど、大丈夫なのでしょう。あと勝手に仕切らないでほしい。

支給品ボックスからいくつかのアイテムを取り、慌てて彼の後を追う。いつもと違い、支給品ボックスのアイテムを全部は取りませんでした。一応、彼のために残したのです。

リオレイアの初期位置はエリア3。もう4回目だし流石に覚えます。

そして彼がそれを知っていたのかはわかりませんが、彼をエリア3に向かって走っていました。

そんな彼に続いてエリア3へ到着。

リオレイアなんかの大型種は発見時に大きな咆哮をします。だからその前に弓へビンを装填……

彼がレイアさんへハンマー叩き込んだと思ったら、吠えました。大きな咆哮に耳を塞ぐ。もちろんビンを装填できていません。

むう、序盤から少しだけ躓いた。

耳を塞ぎながら彼の様子を確認すると、私のように怯むことなく、レイアへ攻撃をしていました。あの防具には耳栓のスキルでもついていたのでしようか？

そして、漸く咆哮の怯みが解けたと思ったら、またレイアの咆哮。

あう……何もできない。

でも、あれ？ もうレイアが怒ったんですか？ 流石にそれは早すぎる気が……

そんな疑問を感じていると、今度は視界が真っ白に。んもう、さつきからなんなんですか……

視界が元に戻ると、其処には地面へ倒れているレイアの姿。何が起こったのかは全くわかりませんが、どうやら先ほどの閃光で怯んだようです。

私も何時までも怯んでいるわけにはいかなかったので、慌てて強撃ピンを弓へ装填して、倒れているレイアの頭へ弓を思いっきり引いてから矢を放つことに。

そして起き上がったと思ったレイアは彼の攻撃を受け、また横にコテリ。今日のレイアはやたらと転んでくれますね。いつもこうなら良いのですが……

其処までは良かったのです。

けれども、起き上がったレイアはついに猛攻を始めました。

主に、私へ対して。

レイアの正面にいる私は3連突進なんて避けられませんし、ブレスなんて顔面で受け

止める以外の方法を知りません。飛んだかと思えば、恐ろしい勢いで私の方へ近づいてきて、何時ものようにグルリと回りながら尻尾で攻撃。もちろん直撃です。

毒状態になり、ピヨピヨして、更にレイアに捕まり捕食攻撃まで喰らったのにも関わらず、ベースキャンプへ運ばれなかったのは、彼のおかげだったりします。

私なんかじゃ使うのも躊躇ってしまう。『生命の粉塵』を彼は惜しみもなく私のために使い、更に捕食攻撃中のレイアへこやし玉まで投げてくれました。

……ありがとうございます。

やっぱり私が勘違いしていたみたいです。

人は見かけによらないとは言いますが、感謝です。

こやし玉を受け怯んだレイアは直ぐに何処かへ飛び立って行きました。ああ、しまったペイントしてない。レイアの行動範囲は広く、一度見失ってしまうとかなり面倒なのに……

そんなちよつと焦った状況だと言うのに、彼はのんきに飛んで行ったレイアへ手を振っていました。何やってんだ。

「……え、えと生命の粉塵とこやし玉ありがとうございますました」

そんな彼にひとまずお礼。

私なんかのために、貴重なアイテムを使っても良かったのでしょうか……
「うん？ ああ、別に気にしなくても良いよ」

やはり籠ったような声。

決して恰好良くはありませんでしたが、彼の見た目も悪くはないと思うようになってしまったのも仕方無いと思うのです。

「ほら何時までもレイアへ手なんか振ってないで、行きましょう」

「え？ いや、これはレイアへ手を振っていたわけじゃなくて、観測船に……まあ、良いけどさ。ああ、そうだ」

観測船？ 観測船と言うとあの空に浮いている奴のことだったはず。

でも、何故？ 知り合いでもいるのでしょうか？

「えと、どうしました？」

「あく……余計なお世話かもしれないんだけどさ。アドバイス……的なの？」
アドバイス……ですか。

確かに、今の私はちよつと情けない。それに彼には助けてもらった。

「聞きます」

「ん、ありがと。えと……レイアの弱点は頭だから、頭へ攻撃するのは良いんだ。でもさ、だからと言って其処まで頭に拘る必要はないし、そもそも君は弓なんだから横から

でも頭は狙える。そりゃあ正面から攻撃した方が良いけど、それで攻撃を避けられないんじゃないや仕方無い。だから一定の距離を取って自分が安全だと思ったときに攻撃すれば良いと思うよ。それにレイアは頭じゃなくて脚だって柔らかいから、頭へ攻撃できない時は脚でも良いんじゃないかな」

……予想以上に真面目なアドバイスで驚きました。

弓なんてやめて違う武器を上げ、とか。もうハンターなんてやめてしまえくらい言われるかと思った。

「……はい、やってみます」

「うん、頑張れ。ああ、あとレイアはエリア8だよ」

……あれ？ もしかしてこの人って私よりそうとう上手い？

どうして彼がレイアのいるエリアを知っていたのかはわかりませんが、エリア8へ行くと確かにレイアはいました。ただ、段差が多いせいで、先ほどのエリアより戦い難い。そんなことを言っても仕方ないので、早速彼に言われたことを実践。正面に立たず、横から横から。

すると、確かにレイアの突進やブレスには当たらないようになりました。まあ、代わ

りに回転攻撃による尻尾が良く当たるようになったわけですが……

けれども戦い易くなったのは確か、今まで狭かった視野が一気に広くなったような感覚。そのおかげか、彼の戦う姿もよく見えるように。

残念ながら私はハンマーを使ったことはありませんし、ハンマー使いの方を見るのも彼が初めてです。ですので彼がハンマー使いとしてどうなのか私には良くわかりませんでした。

けれども、彼が私よりも上手いことは確かみたいです。

まず、彼は攻撃を喰らいません。私よりも危ない位置にいるはずなのに、最後まで彼が攻撃をくらい吹っ飛ばすところは見ませんでした。それでいて、手数も多い。

どうやらあのハンマーは麻痺武器だったらしく、彼一人で麻痺を取り、そして頭を攻撃してレイアからダウンを取る。

詰まるところ……私いませんね。

そのことがわかった時はかなりショックでしたが、それでも戦わないわけにもいかず、一生懸命私なりに頑張ったつもりです。

そして、戦い始めて10分も経たないくらいでレイアは倒れました。

私がいだけやったのにクリアできなかつたモンスターが今、確かに目の前に倒れています。何だか複雑な気分。

どう考えてもこのクエストをクリアできたのは彼のおかげ。あんな巫山戯た装備をしている彼のおかげ……

なんでしょうね、この気分は……もつと上手くならなきやです。せめて、この人と同じくらいには。

でも、ちよつと遠いなあ……

「つと、終わりか。ん〜……お疲れ様」

「あつ、はい。お疲れ様です」

そんななんとも複雑な気分のまま、倒れたレイアから素材を剥ぎ取ってから遺跡平原を出しました。

気分は何とも微妙な感じ。ただ、前よりはいくらか気持ち軽くなった気がします。

クエストからの帰り道。彼からは色々なことを教わりました。

どうやら彼も弓を使っていたことがあるようで、私が知らなかったことを沢山教えてもらいました。彼の見た目はちよつとアレですが、それでも多少は彼を見ることができるようになった気がします。

あと、観測船に向かつて手を振ると大型種のいるエリアを教えてくださいれるそうです。そ

れは知りませんでした……

「あの……」

「うん、どしたの？」

もう直ぐバルバレに着く辺り。ガタゴトと揺れる馬車の上で疑問を彼にぶつける。

「貴方ってHRはいくつなんですか？ あと、どうして私のクエストへついて来てくれたのですか？」

彼が私よりは上手いのは確か。

もしかしたら彼は上位ハンターなのかもしれない。そんな人がどうして私何かについてきたくれたのかわからなかった。

私は知り合いが少ないけれど、一人だけ上位ハンターの知り合いがいます。彼女はもう思っているのかわかりませんが、それは私にとって大切な友人で私の目標の人。HR 7と言う、あの古龍へ挑む権利を持ち、実際に何体かの古龍を倒している憧れの女性です。

まあ、彼女は私と違い弓使いではなく、操虫棍使いですが。

いつか、彼女と同じパーティーへ入るのが私の密かな目標です。確か彼女のパーティーはまだ3人だけのはずですし。

「HRは……まあ、君よりは高いかな。それで、君のクエストへついて行ったのはですね……」

そう言った彼の声はただでさえ籠り聞こえ辛かったのに、余計聞き取り難くなった。なんででしょうか。もしかして何か大きな理由が……

「……君を手伝ってあげてくれと頼まれていたんだよ。知り合いから」
なんと、そうだったのですか。

確かに、私は何時までもHRが1のまま。誰が彼に頼んでくれたのかはわかりませんが有り難いです。しかし、どうしてそんな装備を……

「その装備は？」

「ああ。これは罰ゲームで」

………うん？

罰ゲーム？

「あつ、だからと言って今日は手を抜いていたわけじゃないよ！ 装備はアレだけど俺にできる最大限の力は出しました！」

「じゃあ、何時もその装備ってわけじゃないんですね……」

わたわたと慌て始める彼。

私は手伝ってもらった側なのだし、文句を言える立場ではない。それに彼が真面目に

戦ってくれていたのも知っている。

ただ、なんでしよう……それならちゃんとした貴方と出会いたかったです。

そんな何とも微妙な空気でバルバレへ着きましたが、私のせいではない気がします。うん、きつと彼がいけない。

「おつ、帰ってきた。やほー弓ちゃん。クエストはどうだったの?」

バルバレへ着くと其処には件の操虫棍使いの彼女がいました。

もしかして、彼に依頼したのは貴女ですか?

「はい、無事クリアできました」

「おおー。そりやあ良かったよ。ふふつ、これで君もHR2だね。おめでとう!」

はい、ありがとうございます。

それもクエストへ付いてきてくれた彼のおかげです。見た目はアレですが。

「……に、似合ってると思う」

「やめて、無理に気を遣わなくても大丈夫だから……」

そんな彼は操虫棍使いの彼女と一緒にいた笛の彼女と何かを話していました。

少しばかり頭が混乱。

「え、えと、もしかして彼は……」

「うん。私と同じパーティーの人だよ。何時もはあの格好じゃないけど」

ああ、なるほど。漸く話が繋がってきました。

そりやあ上手いはずですよ。彼女たちはバルバレの中ではかなり上にいるパーティー。きっと下位クエストくらいなら余裕なんですよ。

でも――

「じゃあ、どうしてあの装備を？」

「うん？ ああ、だってあの装備カワイイじゃん。なんでもお願いを聞くつて言うからお願いしたの。可愛いよね。リノプロ装備！」

……カワイイ？

いや、可愛くはないと思う。あと、アレってリノプロ装備だったんだ……初めて見ました。

「……か、かわいいよ？」

「ホントやめてください。そろそろ泣きます」

相変わらず笛使いの女性は彼の心を抉っていた。それもかなりの確に。私も見習わないと。

「それじゃ、打ち上げやろうよ！ せつかく弓ちゃんのHRも上がったんだし」

お酒を飲むのが好きな彼女。私もお酒は嫌いじゃないので嬉しいです。彼も参加してくれるでしょうか？　こんな機会なかなかないだろうし、もう少し話したい。

「その前に着替えて……ああいえ、なんでもないです……そうですね、今日は一日この格好でいます……」

やはり彼もあの装備は好きではないらしい。

そんな彼からの提案は彼女の一睨みによって打ち消されました。彼つてこのパーティーの中の立場弱いんだ……

その後は、彼女のパーティーの方々と一緒にお酒を飲みました。しかも全部彼のおごりだそうです。

そのことが少し申し訳なかったけれど、今日くらいは良いのかなって思います。例のごとく燥ぎ過ぎた彼女は酔い潰れ、そんな彼女は彼に背負われていました。

「あ、あの……」

帰り際、彼に挨拶。

「どしたの？」

「今日はありがとうございました」

クエストのことやお酒のこと。言わなきやいけないお礼は沢山ある。

「ふふつ、別にこれくらいなら良いよ。またいつか一緒にお酒でも飲もう」

たぶん彼は笑っている。けれどもやはり彼の表情は見えません。

こんな時でもその装備は邪魔だった。

「……………いつか」

「うん？」

アルコールが入っているせいでしょうか。

その時の私は普段なら絶対にならないようなテンションでした。ただ、その言葉を言っておいて良かったと少しだけ遠い未来で思うのです。

「いつか私も貴方のパーティーへ加えてくれますか？」

彼方はあの古龍ですら倒してしまふようなハンター。

一方此方は、漸くHRが2となった新米。それも彼の力を借りなければきつとHRは

1のまま。

そんな私が言つて良いようなセリフではなかったと思います。

けれども彼は――

「うん。じゃあ君が来るのを待つてるよ。大丈夫、ちゃんと枠は空けておくからさ」

そう言つてくれました。

やっぱり表情は見えない。でも、きつと笑つてくれていたと思います。

そして、その後は先ほどのセリフが急に恥ずかしくなり、私は逃げるように彼と別れました。

ただ、その足取りは軽かったんじゃないかと思えます。

それが私と彼が出会ったお話。

アレから結構な月日が経ちましたが、私は彼と一緒にクエストへは行っていません。更に彼の姿そのものも……

嫌な噂はよく聞きます。

彼はもうこの世にはいないとか、そう言うことを……

ただ、なんとなくまた会えるんじゃないかって気はします。

「弓ちゃ〜ん！ クエスト行くよー」

彼女の声が聞こえました。

彼女は彼がどうしたのか知っているただ一人の人物。けれども、未だに彼がどうなったのか教えてはくれません。

それに彼の話をすると彼女は一瞬だけ暗い顔をします。直ぐに明るい表情へ戻ってはくれませんが……

彼がどうなったかはわからない。

けれども、また会える。そんな漠然とした予感はあるのです。

そしてその予感はきつと——間違つてない。

「はいっ、今行きます！」

だからまた彼と会うことのできるその日まで、私は一生懸命狩りをして上手くなるのです。

今度は私が彼を助けてあげられるように。

さて、それじゃあ、ひと狩り行きましようか。

第29話くカチ上げでキャンセルく

相棒と二人で遺跡平原の採取ツアーへ行った次の日の朝。ガララアジャラ討伐に向けて出発。

かなり落ち込んでいたように見えた笛の彼女も何時もの調子に戻ってくれたみたい。うん、どうかそのままの君でいてくれ。

「そう言えばさ、デンジャーコールって作れてる？」

ガタゴトと揺れる馬車の上。朝が早いこともあつてか、随分と眠そうな顔をしていた笛の彼女に質問。

「ううん……牙が一本足りない」

あら、そうだったのか。

じゃあ、今回のクエストをクリアできれば作ることもできそうだ。攻撃アップと聴覚保護を吹け、麻痺まで取れる素敵な武器。笛使いなら誰もが一度は作るくらいじゃないだろうか。

これからもあの笛があればかなり楽になる。

「あと、音が笛っぽくないからあまり……」

うん、まあ、あの笛ってなんかポコポコ鳴るもんね。笛の音と言うより太鼓の音に近い気がする。

しかし、笛の中にはギターみたいな音を出す武器もあるし、もう何でもありなのかもしれない。

そしてどうにも暇だったから、また声をかけようと思ったけれど笛の彼女はいつかのように毛布に包まり、完全に眠る体制へ移っていた。

そんな彼女に声をかけるわけにもいかず、じゃあ相棒で良いかと思いついたけれど、相棒も既に夢の世界へ旅立ってしまったていたらしく、寝息が聞こえるばかり。

寂しい。

二人共寝てしまったので、残っているのはガーグアを操っているいつものアイルーと俺だけ。

「へい、アイルーお前って彼女いる？」

恋ばなしようぜ、恋ばな。

「バカ言ってるんで旦那もさっさと寝るニヤ」

……構ってこない。

寂しいね。

今、寝てしまえば起きるのはきつと夕方になる。そうになると、あの暗い時間に寝ることとはできないだろう。でもなあ、皆寝ちやったし……

うん……寝ます。

寝ようとは思ったものの、其処まで眠いわけでもなかったから、結局寝ることができずたのは目を閉じてから数時間後くらいだったと思う。

そしてもう慣れたとは言え、馬車の上は寝心地があまり良くはない。だから起きているのか、寝ているのか良くわからないような状態がずっと続いた。毛布を忘れてしまったことに後悔。

夢か現か。そんな世界を行ったり来たりを繰り返した。

「あつ、やつと起きた。随分と長い時間寝ていたけど、そんなに眠かったの?」

そんな状態の俺が現実の世界へ完全に戻ってくることができたのは、相棒の声が聞こえた時だった。まあ、そもそもこの世界が現実なのかもわからないだけどさ。

日は既に落ちたらしく、真つ暗な世界へと変わっている。

「ん〜……いや、眠くなかったから長い時間寝ていたんだと思う」

「どう言うこと?」

俺も良くわかりません。

硬い馬車の上で寝ていたため節々が痛い。そんな体を伸ばしてどうにか痛みを和らげる。ケルビやポポの毛皮くらい敷いておいてくれても良いのにね。ギルドもお金がないのだろうか。

「ねえねえ、お腹空いちやったからお肉焼いて」

なんでかはわからないけれど、このパーティーでは俺が肉を焼く係に任命されている。それくらいなら別に面倒ではないし、断ろうとも思わない。でも、なんだろうね。こう……俺の立場がすごく低く感じる。

「だって、君が一番お肉焼くのうまいじゃん」

ああ、そう言うことだったのか。

でも上手いも何も決まったタイミングで、セットした肉を上げれば良いだけな気がする

る。そんなに難しいことじゃないよ？

なんてことを思わないでもなかったけれど、他にやることもなかったし、自分と相棒の分の肉を焼くことに。生肉にはまだ余裕はある。でも、そろそろ生肉もなくなるかもしれない。アプトノスを見かけたら倒すようにしよう。

因みにだけど、笛の彼女が起きたのはそれから数時間後でした。

良くそんなに寝られるね……

相棒が起きてくれたこともあり、それから原生林へ着くまであまり長いとは感じなかった。食事をして雑談。やっぱり一人より二人の方が色々の良いものです。きつとあの時、この相棒が俺に声をかけてくれなかったら、今も俺はソロで戦っていただろう。

そんな生活はちよつと想像できないけれど、きつと楽しいとは思っていないんじゃないかな。

そして日が昇り始めた頃、漸く原生林へ着いた。ガーグアの頑張りもあるだろうけれど、氷海よりは少しばかり近いのかもしれない。

原生林は水が豊富で緑豊かなステージ。エリアーにはフラミンゴのような鳥がいる

し、巨大キノコや青色に輝く蝶、ヘラクレスオオカブトなど見ていて飽きないステージです。

そして一番目に付くのが謎の巨大な骨。あのダレンやラオなんかよりも遥かに大きい。なんの生物なんだろうね？

「つしや、行くぞー！」

「おおー！」

「おおー！」

支給品を受け取ってから、エリア1、2を經由でガララアジャラの初期エリア5を目指す。エリア5へ入るだけならベースキャンプからエリア3へ飛び降りた方が早い。けれども、ガララアジャラのいる位置がエリア2へと続く道に近いため、接触するのは結果的に此方の方が早いかな。

まあ、ゲームだとエリアホストが欲しいからベースキャンプから飛び降りるんだけどさ。

飛んでいるフラミンゴやネルスキュラが作った蜘蛛の巣を横目に目指し、エリア5へ到着。

「うわあ……でかつ」

そしてエリア5へ着くと直ぐにソイツを見つけてることができた。全長40mオー

バーの蛇。初見は俺もどう戦って良いのかわかりませんでした。

「頭と尻尾が赤、前、後脚が白、後は橙。乗り攻撃頼んだ」

「了解！」

いつも通り相棒へエキスの位置を教えてから、咆哮に備える。笛の彼女もいつもなら直ぐに演奏を始めるけれど、今回は納刀したままだった。

そして、ガララアジャラが馬鹿みたいに大きな叫び声を上げた。

緊急回避ー。

こんな時、抜刀したままでも咆哮をガードできるガード武器が羨ましく感じる。

俺と笛の彼女は咆哮を回避できたが、エキスを取っていたらしい相棒は耳を塞いでいた。ああ、ありや捕まったな。

「えっ? えっ? なにコレ? どうなってんの?」

そしてガララさんお得意の囲み攻撃。予想通りガララに囲まれわたわたしている相棒。

「ジャンプで身体を飛び越えられるぞ」

「えっ? あっ、はい」

相棒が虫棒を使ってガララの身体を飛び越えると、一度地面に潜ったガララが地中から突き上げ攻撃をした。

「あぶなっ！ な、何アレ!? 超怖いんだけど……」

当たったら大ダメージ。けれども、ガララはアレ以外は気をつけることが特にならない。それに操虫棍なら囲まれても直ぐに抜け出すこともできる。

毒も効果時間が長いし、スニークロッドを担いでいる相棒とガララの相性は抜群。

さて、それじゃあ反撃させてもらおうか。

残念ながらハンマーのリーチではガララの頭に届かない。だから今回、頭には行きません。ひたすら後脚を狙います。頭の次に肉質が柔らかく、破壊すれば大ダウン。

「乗ったー!」

後脚を追いかけて暫く攻撃していると、相棒がガララの背中へ乗った。ナイスです!

ガララは乗り攻撃中に咆哮もなく、2連で暴れるのを気をつければダウンを取るのとは比較的楽な相手。期待してます。

そして笛の彼女の攻撃アップの演奏が終わった時、乗り攻撃成功。ホント上手くなっただね。

倒れたガララの頭へとりあえずカチ上げ。其処で、本日1回目のスタンをとってしまった。そのせいで、せっかく相棒が取ってくれた乗りダウンがなかったことに。

「い、い、ごめんなさい……」

「よくある。別に気にしない」

俺の謝罪に対して直ぐに返事をしてくれた笛の彼女。まさかそんなにスタン値が溜まっているとは思わなかったんです。あ、あら？ ガララのスタン耐性ってそんなに低かったっけ？

スタンを取ったガララへの頭へ。横振り始動でホームランを2回。笛の彼女と被らないよう位置取りは以前と同じように。

そして2回目のホームランを叩き込んだとき、ガララの嘴へヒビが入った。うむ、これで牙も出てくれるだろう。

スタンから起き上がったガララを見ながら納刀。怒り咆哮に備える。

顔を高く上げ、鳴る甲を震わせながらの怒り咆哮。緊急回避！。

「……あつ、まずいですな」

また回避に失敗したらしい相棒の声がぼそりと聞こえた。

そんな相棒をガララが見逃すわけもなく、その巨体をいかしてまた相棒を取り囲んだ。まあ、虫棒だし大丈夫だろうと思いい、ガララに囲まれわちゃわちゃしている相棒を横目に砥石。

「えつ、痺れ……」

……あかん。

運悪く痺れ100%の噛み付きを喰らったらしく、ガララに囲まれた中心で倒れている相棒の姿。ハンマーや笛のスタンプをすればまだギリギリ間に合うけれど、俺は砥石中。彼女は演奏中。

ああ……こりやあ、ダメだ。

地中へ潜るガララ。ハンマーを研いでいる俺。痺れている相棒。演奏中の彼女。

そしてフォルティッシモ独特の演奏音が原生林へ響き渡る中、ガララによる地中からの突き上げ攻撃が相棒へ直撃した。

他人事ではあるけれど、すごい光景だった。

「……あつ、耐えるんだ」

ぼそりと呟いた彼女の声。うん、俺もダメだろうと思った。

そんなガララアジャラの最大威力の攻撃を喰らっても相棒は倒れていなかった。ジャギィー式の防御力を舐めていたらしい。

まあ、笛の演奏と虫棒の防御力アップのおかげだとは思う。俺が食らっていたらどうなっていたかはわからない。

「うう……ダメかと思った。久しぶりに運ばれるかと思った……」

よく耐えた。偉いぞ。とりあえず今は回復してくださいな。

相棒へ攻撃がいかないようガララを誘導しながら後脚へカチ上げ、横振り、縦2。其処で、ようやくと後脚が壊れた。

「……ナイス」

まあ、俺にはこれくらいしかできないから、それくらいは頑張ります。

大ダウンしたガララへ横振りからのホームランを2回。ガララは体力も少ないし、もうそろそろ倒せると思うんだけど……

「2回目ー!」

大ダウンが解けた瞬間に相棒のジャンプ攻撃が決まった。タイミングは完璧。良い連携だ。悪くない。相棒さん素敵。

彼女の演奏を聞きながらも一度砥石。次のダウンで終わらせたい。

そして、相棒の乗り攻撃が成功し、ダウンしたガララへ右腰に構えていたハンマーをカチ上げた。

2回目のスタンを取りました。また乗りダウンがなかったことになりました。

「……ホント、すみません」

「あー……ど、どんまい……」

そんな声をかけてくれた彼女の優しさが心にくる。

いや、だってガララのスタン耐性なんて知らないんだもん……

主に俺のせいでスタンのタイミングは悪かったけれど、2回目のスタン中にガララ体力を削り切ることができた。

お疲れ様でした。

「おおー、終わった……な、なんだか良くわからないけど終わった」

うん、俺もコイツは良くわからない。

戦い易い相手ではない。けれども、強い相手ではないと言う本当にどう表現して良いのかわからない相手。

そんなじゃ、有り難く剥ぎ取らせてもらおうか。

身体は大きいけれど、剥ぎ取ることのできる回数は3回。

やっぱり良くわからない奴だ。

第30話～帰り際にお伽話～

「なんだか最近良い感じだね！」

ガタゴトと揺れる帰り道に元気な声が響いた。

虫棒に笛、そしてハンマー。それは決して組み合わせの良いパーティーではないと思う。まあ、そう思ってしまうのは全部俺の担いでいる武器が原因なんだろうなあ……

超火力武器に、優秀なサポート武器。つまり虫棒と笛は良いのだ。けれども、火力もなくサポートに徹することもできないハンマーは……

まあ、今更この武器を変えようとなんて思いはしないし、このまま行けるとこまでは行くつもりなんだけどさ。

「そうだな。このままなら下位クエストは装備も変えずにクリアできると思う」

それにHRが3となれば天空山へ行くことができる。其処でレビテライト鉱石が手に入れば、相棒の武器は更に強化できるはず。現状、このパーティーで一番火力が出ているのは相棒だ。だから相棒の武器を強化するのがパーティーにとっては一番良い。欲を言えば俺も強化したいところではあるけれど。

「上位かあ……ちよつと想像つかないや」

別に上位になったからと言って、恐ろしく何かが変わるわけでもないけどね。ちよつとモンスター体力と攻撃力が増えるくらい。だから下位クエストでしつかり戦えていれば上位だつて問題なく戦える。悲観することは何も無い。

「……次はどうするの？」

笛の彼女が聞いてきた。

「緊急クエストを受注できるようなら緊急クエスト。無理なら……ザボアかな」

ゲームならザボアもキーククエストの一つだった。だから絶対にクリアしなければならぬけれど、今ザボアを倒したところで旨味は何もない。アイツの素材を使うこともないし。

そう言うことで、緊急クエストを受注できるようなら受注したい。まあ、まだわからないんだけどさ。

「ザボア……ちよつと苦手」

まあ、初見は大変だよ。攻撃力は高いし、なんか膨らむし、膨らんだ巨体をいかして馬鹿みたいに広い範囲の攻撃をしてくるし、膨らむと頭届かないし。俺も得意なモンスターではない。

「どの道、ギルドマスターのじいさんに聞いてからだな」

ゲーム通りに行けば次の緊急クエストはゴア。ちょいと面倒な相手ではあるけれど……
はてさて、どうなることやら。

バルバレに帰って来て報酬を受け取ったあと、その日は解散となった。ただ、例のごとくあの酒好きが夕方になったらお酒を飲もうと言ったので、また集まることに。

それまでの間、笛の彼女は加工屋へ。相棒は買い物でもするそうだ。

俺もできれば武器を強化したいところではあるけれど、現在の素材ではたぶん何もできない。もしかしたら、ハアムバド辺りなら作ることはできるかもしれないが、これ以上毒武器が増えても仕方がないだろうしやめておいた。

そして、暇になった俺が向かった先はギルドマスターの所だった。

「ほっほほ。確かにキミたちの実力ならHRを上げてても良いとは思うよ」

あら、随分と高評価なんですね。

まあ、今までクエストに失敗したこともないし、低評価をもらっていないと思っただけだ。それに今のパーティーにはあの彼女もいる。このメンバーならダレンだつて倒せるだろう。

「でもね、キミたちはHR2となつてからまだ7日も経っていない。さても悩ましいところではあるが、もう少し待つて欲しい。そうだね……次のクエストが成功したらキミたちのためにクエストを用意しておくよ」

それつて、採取ツアアでも良いのかね？ いや、流石にダメか。

現時点で戦えるけれどまだ戦つてことのない大型種は、ドスゲネポス・ゲリヨス・ババコング・サボアザギル・ウルクススくらいか。

その中で一番楽な相手はドスゲネポスだろう。しかし、此処はギルドの期待に応えておいた方が良さそうだ。そうなると……まあ、ザボアになるのかな。

なるほどねえ……明確な基準は作られてはいないっほいけど、一応ギルドも考えてはいるんだな。他のハンターたちはどれくらいの時間をかけてHRを上げていつている

のだろうか？

「わかった。それじゃあ、無事クエストが成功したらまた来るわ」

「うん、キミたちには本当に期待しているよ。ほっほほ。ガンバンなさい」

期待ねえ……約束することはできないけれど、自分にできる限りのことはやるって誓うよ。

そうしてギルドマスターから離れようとしたけれど、何故かその後もギルドマスターは色々な話を聞かせてくれた。どうやらこのじいさんは各地のお伽話を聞くことが好きらしく、そんな話。

正直なところ、俺はそんな話にはさして興味はなかったけれど、じいさんがあまりにも嬉しそうに話すものだから、形だけでも聞くことに。

そしてじいさんから解放されたのは昼の時間を過ぎたくらいだった。

何？ あんた暇なの？ 別に俺もやりたいことがあったわけではないから文句はないけれど、ギルドマスターとしての仕事は大丈夫なのか疑問に思う。

「それじゃあ、これからも仲間を大切にするんだよ」

ああ、大丈夫。それだけは約束できる。

よくもまあ、此処まで話を続けられるものだ。一度一緒に酒を飲まないか聞いたこと

があつたけれど、あの時は断つてくれて助かつたかもしれない。お酒なぞ入つたら絶対に止まらなくなる。

「……最近ね。なにやら嫌な空気が流れているんだ。同じようでも何かが違う。そんな空気が。だからキミも充分気をつけるんだよ」

……フラグっぽいことを言うのは止めてください。

もしこれがゲームの中なら絶対にこの後、悲惨なイベントが待っているじゃないか。ま、流石に大丈夫か。大丈夫……だよ？ ラージヤンの乱入とかないよね？

「わかっている。けれども今はアレだけ頼りになる仲間もいるんだ。多少のことくらいなら問題ないよ」

「ほっほほ。流石、期待のハンターだ。うんうん、私もそれで良いと思うよ。それじゃあ行きなさい」

最後にそんな言葉を交わしてからギルドマスターと別れた。

飢餓ジョーやゴリラみたいなの奴らが乱入なんてしてきたら流石に無理だろう。けれども、それ以外ならなんとかなるんじゃないかって思う。それくらい今のパーティーを信頼しているのです。

「あつ、お帰りー。随分遅かったけど、何やってたの?」

「……お邪魔してます」

さて、昼飯はどうしようか。なんて考えながらも、とりあえず帰ろうと思い、自分の家へ帰るとその中には何故か、相棒と彼女とプーギーがいた。

……なんているんですか。あとプーギーはあつた所へ戻してきなさい。ソレは皆の物だ。

「いや、ギルドマスターと話をしていたんだけど……何やってんの?」

此処、俺の家だよね?

別に盗まれる物などないだろうし、盗む奴もいないだろうと思ひ、鍵はかけていないけれど、これは一度考えた方が良くもしいれない。自分のプライバシーは自分で守るのだ。

「……ガールズトークしてた」

……そりゃあ、楽しそうで何よりだ。

でも俺の家でやる必要はないよね？ 隣にある相棒の家でやれば良い気がする。そ

れにどうせガールズトークになぞ、俺は参加させてもらえないだろうし。

「ち、違うよ！ お昼に君を誘いに来たんだよ」

ああ、そう言うことだったのか。

えっ、じゃあ、さっきは笛の彼女がボケたってこと？ わかりづれーよ。

相変わらず何を考えているのかわからない女性だ。あと可愛いのはわかるけど、良い

加減プーギーを放してあげて。

「了解。んじゃ、昼飯食べに行くか」

「もう飲む？」

あく……確かにもう飲み始めちゃっても良いかも。

「この後つて皆は何か予定ある？」

「私はないよー」

「……私も」

一瞬だけ彼女の視線がプーギーへ向いたのは見逃さなかった。たぶん、午後もずっとプーギーで遊んでいるつもりだったのだろう。もしこの先プーギーの姿が消えたら最

有力な容疑者は彼女になる。お願いだからそれだけはやめてね。

いつかやると思っていました。以外のコメントが思い浮かばない。

「そんじや、もう飲み始めるか。明日も朝早いし」

ぶつちやけ移動時間が1日もあるのだから、出発直前まで飲んでいても良い気もする……まあ、流石にそれはやらないけどさ。それにお酒はクエストが終わった後に飲むから美味しいのかもね。

「おおー。ふふん、皆でお酒楽しみだねー」

なんだか、昼からお酒を飲むことに抵抗がなくなってきた気がする。それもこれも全部、この相棒に影響されてだと思う。

良いことなのやら、悪いことなのやら……

「ああ、そう言えば次のクエストをクリアしたら、HRを上げるためのクエストを受注できるとさ」

「えっ？ ホントに？ 嬉しいことではあるけど……そんなに早く上がっちゃって大丈夫なのかなあ」

まあ、大丈夫だろ。他のハンターたちの様子は良くわからないけれど、俺たちだって下手ではないはず。それにHRを上げておいて悪いことは何も無い。他人から羨まれるくらいになれば良い。

それに……どうせなら天辺取ったるくらい気持ちが一番良いのかもしれない。

「……そろそろ、行く」

笛の彼女が呟いた。

ああ、うん。そだね。

でもその前に、プーギーは戻して来てください。

第31話～氷海で大咆哮～

「……寒い」

氷海へ向けて進む馬車の上、笛の彼女がぼそりと呟いた。

バルバレから離れもう数時間は経っている、そりやあ寒くもなるだろう。今回は俺も毛布をちゃんと持ってきているし、前回よりはかなりマシになった。

「ホットドリンク飲んじやおうかな……」

「いや、それはあまり意味ないと思うけど」

確かにホットドリンクを飲めば温まりはする。けれども、10分しか持たないしあまりオススメはしない。結局のところ、毛布に包まれているしかないだろう。

相棒だつて今はスピスピと眠っている。そう考えると、寝てしまうのが一番なのかもね。

「結局、ガララ笛つて担ぐの？」

「うん、でもできるのは今日の夕方」

そかそか、それじゃあ、次のクエストでは担いでくれているのかな。フォルティッシ

モも優秀な笛だとは思うけれど、耳栓が吹け、麻痺を取れるガララ笛はやはり強い。

「アレがあれば、寒さ無効だって吹けたのに……」

馬車の上で吹くのは止めてください。あとアレはホットドリンクより効果時間が短いし、本当に意味がない気がする。

今は日が沈み始めたくらい。氷海へはまだまだかかるだろう。ま、のんびり行こうじゃないか。

「……貴方は余裕そうだね」

確かに寒いとは思うけれど、今回は毛布がある。前回だって我慢できる程度だったのだし、これくらいなら大丈夫。

そんなに寒いのなら俺が温めてあげようか？　なんてアホみたいな考えが一瞬頭を過ぎったけれど、そんなことをした何をされるのかわかったものじゃないから、口には出さなかった。パーティー解散の危機は避けたい。

それにしても、今日の彼女はよく喋る。いつもはほとんど喋らないと言うのに……それほどの寒さが嫌なのだろうか。

さてさて、そんな彼女には申し訳ないけれど、俺も寝るとしようかな。一睡もせずに狩りに望むのはよろしくないのだ。

それじゃ、おやすみなさい。

目が覚めても、相変わらず辺りは暗いままだった。
むう、しまった。もしかして全然寝ていないのか？

寝覚めは良いからそれなりの時

間寝ていたと思うんだけど……

「あつ、おはよう」

「おう、おはよう」

相棒が声をかけてきた。

一方、彼女の様子は頭まで毛布に包まり完全防寒耐性。寝ているのか起きているのか
わからないけれど、まだ声はかけない方が良さそうだ。

「笛ちゃんってなんだか、ネコちゃんみたいだね」

「装備的に犬だろ」

正確に言うとは狼だけど、ワンコだから犬。お手とかしてくるし。まあ、そんな可愛らしい存在でもないが、モンハンで犬と言えばアイツな気がする。

「いや、そう言うことじゃなくて……まあ、良いけど。あつ、お肉お願い」
じゃあ、どう言うことだろうか？ ん〜……よくわからない。

あと、お肉かしこまりました。

「あと、どれくらいで着くのかわかる？」

「そんなにかからないみたいだよ。もう直ぐ日が昇って、それくらいには着くってネコちゃんが言ってた」

あら、そんなに来ていたのか。

じゃあ、ちゃんと寝られていたんだな。これが終わればいよいよ緊急クエスト。楽しみだ。

その後、肉を焼いて、その肉を相棒と雑談しながら食べていると笛の彼女が動き始めた。相変わらず寝起きはボーっとしていたけれど、直ぐに元氣ドリンクを飲んだため、いつもの調子に。

いつもの調子と言っても……まあ、寒そうではあった。

そして日が昇り暫く進むと、氷海のベースキャンプへ到着。

「着いたー！」

このクエストが終わったら当分此処へは来なくなるだろう。次に来るのは……上位ハンターになってからかな。まだまだ遠い未来の話だ。

支給品ボックスからいくつかのアイテムを取り出す。ご丁寧に今回は支給用音爆弾も入っていた。でも、4つもいらないうです。1クエストで1回も使わないことの方が多いし。

支給品ボックスから取り出したホットドリンクを一気に流し込む。寒さは和らぎ、これで少しは頑張れそうだ。

そして何時ものように気合を入れるため、大きな声を出す。

「つしゃー！ 行くか」

「おおー！」

「おー」

ザボアザギルの見た目は鮫だ。背びれを出し泳ぐ様など鮫としか見えない。でも実際は蛙らしい。そしてガノトトスのように未発見時なら釣ることもできる。好物は釣りカエル。てかアレって、共食いだよね……ブナハブラとか食べれば良いのに。

そんなザボアの初期エリアの2番。平坦で広く、ガンナーにも優しいエリア。

エリア2へ到着すると、氷で覆われた地面を泳ぐヒレが見えた。

「……サメ？」

相棒の声。

カエルです。

「赤は頭と腹、白は脚、背びれと尻尾が橙。乗りは頼んだよ」

「はい、任せろー！」

笛の彼女の演奏を聞きながら、エキスの場所を指示。そしてガリガリと何かの削れる音が響き、氷を割ってザボアが飛び出してきた。

フレーム回避できっかなあ……

此方に気づき、ザボアが上半身を上げながら大きく息を吸い込むのが見えた。

引きつけて、引きつけて……

氷海に響き渡るザボアの大咆哮。はい、フレーム回避失敗しました。耳を塞いでいる自分が少々情けない。コイツの開幕咆哮のフレーム回避はいつも失敗する。怒り時の咆哮のフレーム回避は楽なんだけどなあ……

ザボアはあのテツカブラと同じ両生種。そしてテツカブラと同じように、スタン耐性

が馬鹿みたいに高い。更に厄介なのはテツカブラと違い、顔が大きくないから非つ常に頭を狙い難い。

前脚を引き、丸まるような格好となったザボアへカチ上げ、そして直ぐに左側へローリング。丸まったあとは、ブレスか突進、回転攻撃に派生する。

その中でもブレスは当たり判定が見た目より厚いからちよつと苦手。そして何より、水やられだけは防ぎたい。ハンマーが水やられになると本当に何もできなくなる。

できるだけひつかき攻撃を誘導するように顔の前でウロウロ。そして攻撃の際にカチ上げ。

本当は顔を狙わず、後脚を攻撃した方が良いけれど、どのモンスターでも一度はスタンを取りたいのです。そして、コイツの場合、一度膨らんでしまうと貯めていたスタン値はほぼなくなる。面倒な相手です。

「あつ、今度は潜っちゃった」

ガリガリと氷を削りながら潜るザボア。

むう、貴重なスタン値が……笛の彼女がどれだけ攻撃を当ててくれたのかはわからなけれど、たぶんスタンまでもう半分くらい。カチ上げをもう2回も当ててば取ることができはす。

そして、俺の下の地面が揺れた。

「あら、珍しく俺狙いですか。いつもこうなら嬉しいんだけどなあ……」

揺れによる怯みが解けてから直ぐにローリング。その瞬間、ザボアは水中から飛び出してきた。流石に一発で乙ることはないと思うけれど、大ダメージであることは確かだと思う。

ローリングをしてから直ぐ、右腰へハンマーを構え、ハンマーが光つてから直ぐに力チ上げをザボア顔面へぶち込む。

スタンまできつとあとちよつと。

笛の彼女の後方攻撃でザボアが怯んだのを見て、もう一度ハンマーを構える。そして力チ上——

「乗ったー!」

あぶねえ! どうにか力チ上げの方向を変え、力チ上げを空振りさせる。

これでスタンを取ったら流石に怒られる。

砥石でハンマーを研ぎつつ、乗りダウンに備える。ガンバレ、ガンバレ。

「あつ、ごめん」

そして見事に振り落とされる相棒さん。しゃーなしです。次、ガンバレ。

相棒を振り落としたザボアの顔面へ、俺の力チ上げと彼女の後方攻撃が直撃。其処

で、本日1回目目のスタンを奪った。本日のノルマ達成です。

笛の彼女の立ち位置を見ながら、バタバタと暴れるザボアの顔面へ縦1始動でホームランを1回。横振り始動でホームランを1回。

さて、次は流石に怒り咆哮が来るはず。此処までは順調。後は膨らむまで耐えれば……あら？

「あれ？ も、もう倒しちゃったの？」

間の抜けたような相棒の声。

スタンから起き上がったザボアは咆哮を上げることなく、その場にくたりと倒れ込んだ。

そんなザボアを見て思わず手が止まってしまった。

ああ……こりゃあ、マズイですな。

「……なあ、星2でなるっけ？」

「ならないはず。でも、これは……」

ですよねえ。

——最近ね。何やら嫌な空気が流れているんだ。

攻撃をしなければいけない。

けれども、俺の頭の中ではギルドマスターのじいさんの言葉ばかりがグルグルと回っていた。

——同じようでも何かが違う。そんな空気が。

ザボアを倒すと仰向けに倒れる。けれども今のザボアうつ伏せ。

更に、その口からは濃い紫色のような吐息が溢れていた。つまり、まだ倒していない。はあ……あのじいさんも随分と余計なことを言ってくれたものだ。

そして終に、起き上がったザボア。その身体は黒く染まったようにも見える。「なに……これ？ どう言うこと？」

何が起きているのかわからないといった様子の相棒の声。全く……ギルドもちやんと調べておいて欲しい。随分と面倒なことになってしまった。

「戦ったことある？」

「……ううん、初めて」

そっか……彼女ですらまだなかったのか。

それは初めての狂竜化个体。

伏線の回収が早すぎると思うんだ。もう少しくらいのもんぶりしてくれただって良いだろうに。ゲームでは、ザボア単体の狂竜化発症个体の下位クエストはなかったはず。

ま、戦うしかないか。

今の装備で勝てつかないか……

随分と恐ろしい姿へと変わってしまったザボアの大咆哮が氷海へ響いた。

第32話く自棄糞にスタンプく

別に狂竜化したところで、劇的に何かが変わるわけではないだろうと思っていた。どっかの碎竜や黒狼鳥のようにカメラが追いつかないスピードで動き回る奴は別だけど、その他の奴らは大して変化はないだろう。そう思っていた。

油断していたわけじゃない。むしろいつもよりは慎重な動きだったと思う。

それでも、狂竜化したザボアと戦った経験が俺には少なすぎた。

「つつ……まあた、俺ですか……」

ガリガリと氷を削る音を立てながら、足元の地面が揺れた。

いつもならモンスターが自分を狙ってくれたことを喜ぶところだけれど、今回ばかりは無意識に舌打ちが出る。

そして、突き上げ攻撃が直撃。

幸いにして、このジャギイー式装備でも即乙はしないらしい。まあ、これで乙るとか

たまったものじゃないんだけどさ。

本来のザボアの突き上げ攻撃は、足元の地面が揺れ、振動による怯みが解けた瞬間にローリングをすれば躲すことができる。それにローリングではなく、ダツシユでも躲すことはできただろう。

けれども、狂竜化した怒り状態のザボアは速かった。

立ち位置が悪いと振動による怯みが解けた後、最速でローリングをしても突き上げ攻撃が直撃する。

突き上げ攻撃は向かって右側の判定が厚く、左側が薄い。だからザボアの潜った位置を確認してから、左へローリングをし続ければ躲すことができるはず。

そう頭ではわかっているけど、実際には上手くいかない。現に、狂竜化してから2度の突き上げ攻撃が俺に向けてやられているが、2度とも直撃。支給品ボックスから受け取った応急薬は使い果たし、持ってきた回復薬も残り僅か。

詰まるところ——大ピンチです。

まだ一人も乙はしていないけれど、それもいつまで持つのかはわからない。笛の彼女も余裕がないのか、演奏の効果が切れることも多くなっている。

相手の体力はそれほど多くないはず。ちょこちょこ頭へも攻撃できているため、もう一度くらいならスタンプだって狙える。

けれども、状況はよろしくない。

せめて膨らんでくれれば一気に畳み込むこともできるのだけど……

「え？　なにこれ。今、モワってなった……」

相棒の声。其方を見ると、体からは濃い紫色の煙みたいな奴が出ている。

祝。相棒さんが狂竜症を発症しました。

自分で言っておいてアレだけど、全くもってめでたくない。

狂竜化したザボアは今までと違うパターンでの攻撃をしてくる。1度だったものが2度続いたり、攻撃と攻撃のインターバルが馬鹿みたいに短くなったりと。

そのせいで、此方の手数はどうしても減ってしまう。そろそろ俺も狂竜症になるかも

……

「んっ………よこしよ」

ちよいとマズイな。なあんて考えつつ、溜めモーションへと移行したザボアへ無理矢理力チ上げを決めようとした時、そんな声とともに笛の彼女の叩き付きけがザボアの顔

面へ直撃した。

ついでに俺も吹き飛びました。

「あつ、ごめん」

大丈夫、俺のカチ上げも確かに入ったから。

そして、ザボアの身体が一気に膨張した。

此処までクエスト開始10分弱くらいと言ったところ。やつとですか……

「うっわ、かわいくない……」

相棒の声。

可愛くないのは同意見だけど、フルフルよりはまだ可愛いと思う。

「えと……これ、どうすれば良いの？」

「……ぶよぶよのお腹に叩き込めばいい」

ぶよぶよつて……まあ、ぶよぶよか。そんなぶよぶよとなってしまったザボア。其処に鮫の面影なんてありやしない。

しかしこれで弱点は剥き出し。まさに殴りたい放題。畳み掛けるチャンス。

膨らんだ腹を引きずりながら動き回るザボア。怖いのはその巨体を生かした転がり攻撃だけ。その転がり攻撃に当たらないよう、正面以外から攻撃。

頭には届かないせいで、スタンエフエクトを見ることはできないけれど、腹へホームランを叩き込んだ時のヒットストップが気持ちいい。

そして狂竜症克服。会心率15%アップが美味しい。

ザボアが上を向き、自分の周りへ口から氷弾を吐き出す時は絶好のチャンス。周囲へ氷弾を撒き散らすザボアは……もう、なんかすごい光景だけど密着すれば氷弾には当たらない。ひたすらに縦1始動のハンマー最高火力技を叩き込む。

「あつ、まずった」

珍しく、焦ったような笛の彼女の声。

慌てて其方を見ると、雪ダルマ状態の彼女がいた。うむ、なんか珍しいものを見た気分だ。

むう、助けに行きたいところだけど、ミイラ取りがミイラになる可能性が高い。俺だつて余裕ないんです。

「今、助け……おう？」

相棒の声。

どうやらミイラが増えたようです。

……洒落にならん。

まあ、転がり攻撃さえしなければ問題ないだろう。雪ダルマ状態って意外と早く動けるし。むしろ、解けた瞬間に起こる謎の硬直の方が怖い。

そして、ハンマーを右腰へ構えた瞬間、ザボア大きく後ろへ飛んだ。ちよつとマズい。いや、まだだ、まだ転がり攻撃をするとかはわから……ああ、ダメだ。転がってきた。クソが。

ザボアの転がる先には雪ダルマが二つと俺。そして、この転がり攻撃がザボアの中では一番痛い。直撃したら即乙もあるよな……

下手したら3タテ。それでクエストは終了。

半ば……と言うか、もう自棄糞で転がって来るザボアに当たる直前に右腰へ溜めていたハンマーを開放した。

膨らんだ状態のザボアへハンマーが頭を狙える数少ないチャンス。けれどもそれは、圧倒的にリターンよりもリスクが大きい。

どうか止まってくださいお願いします。と祈るような気持ちでザボアの転がり攻撃が俺へ当たる直前に地面に向けてハンマーを叩き込んだ。

揺れる地面。弾けるスタンエフェクト。

「……むちやする」

そして、ギリギリでザボアが止まった。

「怯み値計算してたから」

括弧震え声。

正直なところ、マジ怖かったです。

けれども、とりあえずはこれでピンチを一つ乗り越えた。

未だ雪ダルマ状態の相棒へ横降りを当て、雪を壊してあげていると、膨らんでいたザボアが一気にしほみ始めた。

あと、ちよつと……もう少して倒せるはず。

しほみ切り倒れているザボアへカチ上げ。横振り、縦2、そしてホームラン。

其処まで叩き込んだところで、少し間を置いてから怒り咆哮をフレーム回避、カチ上げ、横振り。

其処で、本日2回目のスタン。

おおう、まさか取れるとは思わなかった。

怒り状態で硬くなった頭は諦め、スタンしたザボアの背びれへハンマーを叩き込む。

ホント、あと少しだと思っただけ……

「乗ったー!」

相棒さん素敵!

笛の彼女の演奏を聞きながら相棒を応援。此処は決めてくださいな。

右腰へハンマーを構え、限界まで溜める。

いやあ……流石に今日は疲れました。

そして、乗り攻撃が決まりダウンしたザボアへ溜めていたハンマーを振り下ろした瞬間、ザボアは仰向けに倒れ動かなくなった。

たぶん、10〜15分針。決して良いタイムではない。

けれども、初めての狂竜化相手に0乙。それは誇っても良いことだと思うんだ。

お疲れ様でした。

クエストの帰り道はいつも騒がしいはずの相棒も含め、皆直ぐに眠ってしまった。俺も色々と疲れていたせいかな、少しばかりの考え事をしているうちに意識は落ちた。

そして、目が覚める其処は真つ暗な世界となっていた。

むう、これは昼夜逆転してしまったかもしれない。帰ったらどうせ打ち上げをやらうとか言うだろうし、もう今日はずっと起きていようかな。

「あつ、起きた。んく……やつぱり寒くないっていいね」

そんな相棒の声。その隣には毛布に包まり、すびすびと寝ている何時も通りの笛の彼女の姿。

「そりゃあ、そうだろう」

これで自分、寒いところでやるクエストはないだろうけれど、その分暑い場所で戦うクエストは増えるはず。

あつ、でもまだ地底洞窟の火山が活動期に入っていないかもしれないのか。そうなる、暑い場所では戦わなくても済むかもしれない。

「それにしても、ザボアザギルってあんなに強いんだね……」

いや、今日のはちよつと特別。

そもそも、通常ならHR2が狂竜化個体と戦うことはないはずなのだ。だから、たぶん今回はギルドの手違いだろう。

ふむ、それにしても俺は予想外のこと起きると途端にダメになるな。明らかに手数が落ちていた。確かに狂竜化するとモーシヨンの繋がりは変わり、動きは速くなる。けれども、流石にビビリ過ぎだ。臆病なくらいが丁度良いとは言え、このままはちよいとマズいかもれない。

今後もしも今回みたいなきっかけが起きる可能性は十分にあるのだから。

「これからはあんな奴らばっかだと思おうよ」

「うわあ……そうなの？」

ゲーム通りなら狂竜化個体とは戦わなくても上位ハンターになることはできる。けれども今回のことを考えるに、これからはどのモンスターが狂竜化してもおかしくはない。

緊急クエストに狂竜化ブラキが来ないことを祈ろう。アイツばっかりは今の装備じゃ勝てる気がしない。地底洞窟の火山さんがおとなしくしてくれれば良いが。

「そっか、これからはあんなのばっかなのかあ……」

「まあ、今回もなんとかなったのだし大丈夫だろ。頑張つていこう」

それにもう少しでHRも上がる。そうすれば新しい武器を作ることできる。それが何より大きい。

「はい、頑張ります」

このパーティーのメンバー的に、この相棒の頑張り次第でタイムはかなり変わってくる。重い役割を押し付けてしまっているようで申し訳ないけれど、俺も精一杯やるのでどうか頑張ってくださいな。

その後も、バルバレに着くまでは相棒と雑談を続けた。長いはずの夜も二人で過ごすのと短く感じる。調子の良い体なことですよ。

一方、笛の彼女は一度起きたかと思つたらまた直ぐに寝てしまい、結局着くまで起きなかつた。いや、流石に寝すぎじゃ……

寝る子は育つと言うけれど、そんなこともないんだなって、彼女の身体の一部を見ながらふと思った。

そんなことを口にしたら、何を言われるのかわかつたものではないから、そつと自分の中へ隠すことにします。この世の中、やっぱり不公平なものですな。

そしてバルバレに着くと、ギルドの人から滅茶苦茶謝られた。

何をそんなに謝るのかと思ったら、ザボアが狂竜化していたことに対してらしい。詳しく聞くと、ギルドも必死で情報を集めているものの、狂竜ウイルスのことは未だはっきり解明ができてないんだとき。

戦っている最中はギルドもしつかりしてくれよ。なんて思っていたが、結果的にクリアできたのだし、それほど文句はない。結果論万歳。

それに、狂竜ウイルスに感染しているのかどうかは、やはりわかりにくいのだろう。それは仕方の無いこと。だからギルドの人にはそんなに気にしなくて良いと伝えてから、直ぐに別れた。

そして使うことがあるのかわからない、ザボアの素材を受け取ってから、その日は一旦解散に。今日もまたお昼から打ち上げだとき。

そんななんとも愉快的なパーティーはやっぱり嫌いじゃない。

第33話 その提案にお断り？

「ああ、素材も足りているようだし作っておくよ」

ザボアとの戦いを終えた次の日。朝一番に加工屋の元へ向かい、新しい武器ができないか聞いてみた。

武器の名前はファッティプッシュ。それは先日戦ったあの化け鮫の素材を使ったハンマー。正直なところ、見た目はブーステッドハンマーの方がカッコイイ。けれども、ファッティプッシュはブーステッドハンマーよりも武器倍率が10高く、氷属性120付与されマイナス会心もない。劇的に強くなるほど火力が上がるわけではないけれど、やっぱり少しでも強い武器を使いたいんです。

どうせ化け鮫素材は使うこともなさそうだし、それならいっそ、なくって思い、現在に至ります。

「完成するのは、明日の夕方か？」

「そうだな。それまでには作っておくよ」

しかも、これでついに俺は2本のハンマーを持つことになった。つまり1本を強化し

ている時でも、もう一本をクエストに持っていける。これがなかなか有り難いのです。

HRが3となり天空山へ行けるようになれば、ブーステッドハンマーもフアツティ
プッシュも強化できるはず。楽しみです。

「了解。そんじゃよろしく頼むよ」

さて……そんじゃ、集会所へ行きますか。

「あつ、やっと来た。おはよー」

そして集会所には相棒と笛の彼女の姿。む、ちよつと遅刻したか。

前回言われた通りなら、これでHR3へ上がるための緊急クエストを受注できるよう
になったはず。そのことを聞くため、今日は全員集まることに。でも、前回のクエスト
の疲れもあるだろうから今日は休日になりました。

「おつす、おつす。おはよう」

「……おはよう」

何処かボーっとした様子の笛の彼女。朝は苦手と言っていたし、まだ眠いのだろう。昨日も昼間から飲み始めたはずなのに、気づけば夜も遅い時間となっていた。そんなだから今日は俺もちよつと眠いです。

あと、新しい武器も作ってしまったしそろそろ懐の具合がマズくなりそうだ。この先、武器強化できるだろうか……

「んじゃ、聞きに行くか」

そして、3人揃ってギルドマスターの元へ。

「やあ、待っていたよ」

ギルドマスターに会って直ぐ、まずそんなことを言われた。

はてさて、次の緊急クエストはどんな内容なんでしょうね？ ゲームではゴアなはず。けれども、そうではない可能性は十分にある。

「まずだけど、先日は申し訳なかったね。此方のミスでキミ達に危険な目に合わせてしまった」

「……別に気にしてない。アレくらいなら大丈夫」

珍しく、ギルドマスターの言葉の返事へ笛の彼女が口を開いた。

最近になってわかってきたけれど、この彼女は待つことが苦手……と言うか、気が短い方らしい。きっと早く緊急クエストの内容を聞きたいのだろう。

「ほっほほ。流石だね。さて、それで次の緊急クエストだけ……キミたちには選んでもらいたいんだ」

……選ぶ? それならできるだけ簡単なクエストが良いのだけど……どう言う意味だろうか? まあ、聞いてみないとわからないが。

「選ぶってのは?」

「……さても素晴らしいキミ達の活躍は私も良く聞いている。そしてだね、今このバルバレのギルドはハンターが不足しているんだ。それで優秀なハンターを確保する必要がある。けれども、そんなことをモンスターは待つてくれない。そして毎日、多くのクエストの依頼が届く」

ん……何を言いたいのだろうか。

此方としては早くクエストの内容を聞き、場合によっては色々準備をしたいのだが。別に気の短い性格はしてないと思うが、目の前に餌をぶら下げられ我慢できるほどではない。

「もちろん反対意見もあった。あまりにも早すぎると。此処で慌ててしまい、もしキミ達を失うようなことがあっては、此方も大打撃となるからね」

それは以前も聞いた。

しかし……ふむ、意外と俺たちの評価は高かったのか。嬉しいことではあるけれど、評価が高いからと言ってメリットがあるわけでもないんだよなあ。

まあ、低いよりは良いと思うけど。

「キミとキミはHRは2だ。HR2と言えば、まだまだ駆け出しのハンターと言ったところ」

俺と相棒を見ながら言葉を落とすギルドマスター。

「けれども、私はキミ達を信じると決めたよ。だから何かがあつた場合この件は私が全責任を取る。このことに前例なんてない。それでもキミ達ならきつと大丈夫なはず。だからだね……」

「……つまり？」

何が何だかまだわからないが、どうしてかやたらに心臓が暴れる。

そしてたぶん、これは——悪いことじゃあない。

「キミ達の飛び級を認めよう」

ギルドマスターの言葉聞き、鳥肌が立った。

つまり、俺たちはH R 2から一気にH R 4……つまり上位ハンターになるための緊急クエストを受ける権利があると言うことだろう。

「でも、それは私が押し付けて良いことじゃない。だからキミ達には選んでもらいたくない。此処で、前例のないH R 飛び級のための緊急クエストを受けてくれるかどうかを。もちろん他のハンター達と同じよう、一つずつH Rを上げていってくれても構わない。それでもキミ達は充分早い方なんだよ」

ふむ……そう言うことですか。

此方としてはそれは願ってもないこと。緊急クエストの内容にもよるけれど、このパーティーならクリアすることができる気がする。

ただ、そのことを俺だけが決めて良いはずかない。

「えと……それって私も受けていいんですか?」

何処か不安そうな声で相棒がそんなことをギルドマスターに尋ねた。

「もちろん」

……そりゃあ不安にもなるよな。

この相棒は初めて大型種を倒してからまだ1ヶ月も経っていないのだ。そうだと言うのに、もう上位ハンターへ手の届くところまで来てしまっている。

この世界のハンターたちが、どれくらいの時間をかけて上位ハンターとなるのかはわ

からないけれど、俺たちほど早くはないだろう。

「……少し、考えさせてもらっても良いか？」

「ほっほほ、そうだね。ゆつくりと考えるといいよ」

焦る気持ちを抑え、どうにかギルドマスターにそんな言葉を落としてから別れた。とりあえず、これは話し合いですね。

「……さ、最初に言いますが、私は自信がありません！」

集会所で話し合いをしても良かったけれど、どうにもあの五月蠅い中でする気にはなれず、俺の家で話し合うことになりました。

俺一人の時はそう感じないが、この部屋に3人もいるとかなり狭く感じてしまう。

そして俺の家に入って、まず相棒がそんな言葉を落とした。

「だって、私は君や笛ちゃんほど上手くないもん……」

んく……上手いか上手くないかで言ったら、この相棒は上手い。乗り攻撃は未だに失敗するけれど、ソレは初見のモンスターだからと言うことだと思う。

それにこのパーティーで一番火力を出せているのは間違いないこの相棒だ。だから実力的には充分だとは思うけれど……まあ、そう言うことじゃないんだろうなあ。

ギルドマスターからの提案は嬉しい。上位ハンターとなれば、行けるクエストもかなり増え、今よりもずっと強い武器を使えるようになる。それはすごく楽しみなこと。

ただ、それは俺の個人的な意見。そんな理由で、この相棒の意見を踏み倒して良いはずがない。それに此処で焦ったところで仕様が無い。

「君はどう思う?」

笛の彼女に聞いてみる。

そう言えば、この彼女の場合はどうなるのだろうか? 普通に考えれば俺たちと同じようにHR4となるだろうけど、もしかして一気にHR5まで上がるのかね?

「……私はこのパーティーが良い」

んく……俺たちに合わせてくれるってことかな。つまり、この件は俺と相棒で決めてくれと言うことだろう。

そして、相棒の気持ちはわからないでもない。少し考え過ぎだとは思うけれど、これ

ばっかりは仕方の無いこと。

うん……しやーないか。

「申し訳ないけどギルドマスターの提案、断ろう」

「……そうだね」

これは俺だけの都合じゃないのだ。

そりゃあ、上位ハンターにはなりたい。でも、例えこの機会を逃したところで、元々の予定より遅れるわけじゃない。用意された近道を通り過ぎるだけ。

大丈夫、俺はちゃんと前へ進めている。

「い、いいの?」

「うん、問題ないよ」

不安そうな顔をしながら言葉を落とした相棒に返事をする。俺だってこのパーティーでやっていきたい。だからこの相棒の意見を無視することはできないだろう。もし、この相棒の意見を無視して、このパーティーを離れられてしまうのはやはり悲しい。

「で、でも、君なら上位ハンターになれる実力はあると思う。だから私を抜かしてクエストを受けても……」

「そこに君がいらないと意味ないでしょうが。それに此処であのじいさんの提案を断った

ところで、今までと何かが変わるわけじゃないんだ。だから大丈夫だよ」

飛び級の緊急クエストの内容はわからないけれど、この相棒がいなくてかなり辛い。どの道、クエストを受ける気にはならない。

「うう……いい、1日考える時間をもらっても良いですか?」

えっ、いや、ホント別にあの提案を断っても良いんだけど……

ちよつと気にし過ぎじゃないか? まあ、気にするなと言ったところでどうにもならないと思うけど……

「それは良いけど……キツそうならキツイって言うてくれて良いんだぞ? 別に焦る必要なんてないのだし」

「うん……ありがと。でも、ちよつと考えてみる。また明日の朝、来ます……」

そう言つて相棒は俺の家から出て行った。

これで残っているのは俺と笛の彼女だけに。

「……もしかして俺の言葉のせいで余計に気を遣わせてる?」

「たぶん」

ですよねえ……

ああ、もう！　　こういうは苦手なんです！　　人の感情なんてわかるわけがない。どうしろってんだよ。何て言葉をかければ良いのか全くわからん。不器用な性格が此処に来て響く。

「君はどう思う？」

「……なにが？」

「あの相棒について」

ふと、彼女が相棒についてどう思っているのかが気になった。あの相棒はこの世界の人間なはず。そして彼女はこの世界の人間が苦手だと言っていた。

けれども、今までの関係を見る限り仲はそれなりに良さそうだった。

「……明るく、優しくして良い娘だと思う。それにすごく上手い。あれなら上位になっても大丈夫」

だよなあ。

なんでそのことを本人がわからないのやら……確かに自分の實力はわかり難いけれど、初見モンスター相手にアレだけ立ち回ることができているんだ。それで下手なはずがない。

不安になることなんて何も無いんだけどなあ……

とは言うものの、俺と相棒の間にはどうしても超えることのできない溝がある。

ゲームとは違うことも多いけれど、あの時に溜め込んだ知識や経験の差は大きい。そんなせいもあって、俺と相棒では考え方が根本的に変わってきてしまっている。

この世界の上位ハンターがどの程度の価値なのかはわからないけれど、そんな不安になることなのかね？

ま、どの道、HR3になるための緊急クエストは受注することはできるはず。

ゆっくりと進んでいけば良いのだ。

第34話く気づいたのは遠い未来く

や、やってしまった……

逃げるように自分の家へ帰ってから直ぐにベッドへ倒れ込んだ。

絶対に彼、困っていたよね……それも私のせいで。

でも、やっぱり自信なんてない。ないものはないのだ。

上位ハンターと言えば、皆の憧れの存在。そんな場所へ私が居て良いのかがわからない。そりゃあ私だって上位ハンターにはなりたくない。なりたくないけれども、流星にこれはちよつと早すぎるよ……

だって、初めてアルセルタスを倒してからまだ1ヶ月も経っていないんだもん。漸く、彼の足を引つ張ることも少なくなってきたかなあつて思えるくらい。そして、実際はまだ足を引つ張っているはず。

そんな私に上位ハンターになる資格があるとは思えなかった。

彼や彼女は上手い。本当に上手い。だからやっぱり上位ハンターになつてもらいたい。でも、私がそこへ一緒に立っていて良いとは思えない。

きっと私がイヤだと言えば、彼はそれを受け入れてくれる。それはわかっている。でも、そうやってまた彼の優しさに甘えてしまうのも嫌だった。

じゃあ、どうすれば良いのか……それがわからない。このままじゃダメだつてわかっていても、何をすれば良いのかがわからない。

……やっぱり私が彼のパーティーを抜けることが一番なのかな。今のままじゃ私は足枷にしかないもの。

一度パーティーを抜けて、一人で頑張ってみて、そして時間が経ったらまた彼のパーティーに……つてのは流石に都合が良さすぎるか。

そして、やっぱり彼のパーティーを抜けるような勇気もないのです。まさに雁字搦め。身動きが全然とれない。

上位ハンターかあ……そこにはどんな世界が待っているんだろう。でも、周りなんて見えていない今の私にはどんな世界だろうと、結局は見えないんだろうなあ。

彼の優しさに甘えるか。

勇気を出して上位ハンターを目指すか。

それとも、彼のパーティーを抜けるか。そんなことをうだうだと考え続けた。けれど

も、いくら考えたところで答えなんて出そうにはない。
ホント、どうすれば良いのかなあ……

そして気がつくと、部屋の中は暗くなり始めていた。

どうやらいつの間にか寝てしまったみたい。変に頭を使ったせいで疲れていたのかな。

「……おはよう」

彼女の声でした。

超ビックリした。

えっ？ え？ な、なんで彼女が私の家に？

「え、えと……うん、おはよう。それでどうしたの？」

申し訳ないけれど、まだ答えは出ていない。答えが出る気はしないけれど、もう少し

待つて欲しいかな。

「……コレ、貸してあげる」

そう言つて彼女は何故か抱いていたプーギーを渡してくれた。

意味がわからない。いったいどうすれば良いと言うのだ。それに貸すつてプーギーは彼女のものじゃないよね……

「お腹をつつくと癒される」

そう言つて、彼女は私の家を出て行つた。彼女は何がしたかつたんだろう。

いや、ホントどうすればいいのさ……

とりあえず、彼女が言っていたようにプーギーのお腹をつついてみた。

うん、確かに柔らかくて気持ちいい。気持ちいいけど……なんだろう。癒されるかどうかはわからなかった。相変わらず彼女は何を考えているのかわかりにくい。悪い人ではないと思うんだけど……

暫くの間プーギーのお腹をつついたり、頭を撫でてあげたりしていると彼女が私の家に戻ってきた。

「癒された？」

こてりと首を傾げながら私に聞く彼女。

いや……うん、まあ、たぶん癒されました。

「……それなら良かった」

やっぱり何を考えているのかわからないけれど、彼女なりに私のことを心配してくれているのかな。そうだと嬉しいな。

そしてとりあえず、プーギーは彼女に返した。すると嬉しそうにプーギーを受け取る彼女。本当にプーギー好きなんだね。

「……もし貴女がこのパーティーから抜けると、火力は半分になる」

ふにふにとプーギーのお腹をつつきながら彼女がぼそりと呟いた。

えと……いや、流石にそれはなくないですか？　だって私、全然上手く戦えてないよ？　乗り攻撃だつてよく失敗するし、エキスだつてまだ早く集めることはできていないもの。

「ううん、それは貴女が気づいていないだけ。貴女はあの彼よりも絶対に多くのダメージを与えているはず。そして、もちろん私よりも。だからもつと自信を持つても良いと思う」

つまりこのパーティーの中では私が一番つてこと？

いやいや、まさか……そんなはずが……だ、だって私だよ？ 自分で言っただけで悲しくなるけれど、私は上手くない。

「……私や彼の使う武器は強くない。どんなに上手く戦っても、貴女の武器の半分くらいのMP……あー……半分くらいのダメージしか出すことができないの。私はもう笛以外を使うつもりはないし、それは彼も同じだと思う。だから、貴女がいないとちよつと困っちゃう」

そう……なの？

そんなこと考えたこともなかった。足を引つ張らないようにすることで精一杯だった。それなのに、私が一番……だったの？

それはやっぱり信じられるようなことではなかった。

「私がこのパーティーへ入ったのは彼がいたからだけど、このパーティーにいたのが貴女で良かったって思う。そして、できれば最後までこのパーティーでいきたい。だから私は二人のペースに合わせる。……ただ、何時までも下位ハンターでいるつもりもない」

私を真つ直ぐと見つめながら言葉を落とす彼女。

私で良かった、か。

うん、そうだよ。何時までも止まっているわけにはいかないもんね。せつかくハン

ターになったんだもん。それならできる限り上を目指したいよね……

「私でいいのかな？」

「貴女でないとダメなの」

そうだったんだ……

彼女の言葉は純粹に嬉しい。けれども、やっぱり自信はない。

「これからも足引つ張ると思うよ？」

「大丈夫。それに足を引つ張るくらいでないと私たちの立場がない」

ふふっ、なにそれ。

……本当に私でいいのかな？

彼や彼女の横に立つのが私みたいな人間で本当に良いのかな……

不安しかない。上位ハンターになった未来の私なんて全く想像できない。

そして、もう少し上手く励ましてくれても良かったんじゃないかなあとは思ってください、これだけ彼女に励ましてもらった。

うん、決めました。

もう少しだけ頑張ってみます。

「ねえ、笛ちゃん」

「うん？」

私の今の状況がなんだかわからないけれど、もう良いんです。我武者羅でも良いから前に進むんです。何かを考えることが苦手な私にはそれくらいが丁度良いのです。

「上位ハンター目指します」

「……うん、がんばろー」

そう言っただけで彼女は可愛らしく笑ってくれた。

はい、頑張ります！

この時はもう上位ハンターになりきったつもりだったけれど、よくよく考えると、次のクエストをクリアしないとなれないんだよね……

そんなことを考えると急に不安になった。

でも、きつとこのパーティーなら大丈夫って思えるくらいには自信を持てるようにはなりました。

そしてこれからは、もうひたすら前へ進もうと私が決めた瞬間でした。

この先……ずっとずっと遠い未来で、今よりももう少しだけ自信を持つことのできた

私は、あの二人と別れることになったけれど、それでも頑張ろうと思えたのは、この時の彼女の言葉があつたからなんじゃないかなあつて思うのです。

だからこの日は、私が彼に初めて声をかけた時と同じくらい大切な日だったと、遠い遠い未来で思うのです。

まあ、この時の私はそんなこと全くわからなかつただけだね。

だって、未来なんて誰にもわからないんだもの。

次の日の朝になってから、彼に私の考えを伝えた。

これからも足を引っ張るとは思うけれど、なんとか頑張るのでよろしく願いますと。

私がそう伝えると、彼は別に気を遣わなくても良いとか、嫌なら嫌だつて言っても良いとか、ちよつと引くくらしいの勢いで私の心配をしてくれた。

心配してくれることは嬉しいけれど、そんなに気を遣わなくても良いのに……でも、そのことが嬉しかった。ありがとう。

その後、なんとか彼に納得してもらい3人で集会所へ。もう止まらないつて決めたんです。だからギルドマスターにそのことを伝えないと。

「ほつほほ。私の提案を受け取ってくれるんだね。良きかな、良きかな」

「んで、飛び級をかけたクエストの内容は？」

彼がギルドマスターへ聞いた。

これで、もう戻ることはできない。そのことはやつぱり怖いけれど……うん、頑張ります。

「ちようどこの時期になるとね。彼らは現れるんだ。それはもう此処バルバレの名物と言つて良いかもしれない。今はそんなお祭りみたいな時期」

……私もその話は聞いたことがある。

そつか、もうそんな時期だったんだ。多くの腕自慢のハンターたちがその名を知らせるために挑むクエスト。

でもそれは、ギルドから与えられた多くの高難度クエストをクリアしたハンターのみ
に与えられる権利だと思っただけ……

「本当なら、此方で与えたクエストをクリアしたハンターへそのお祭りへ参加できる権
利を送るのだけ……残念ながら、今回はそんなハンターが一人もない。けれども、
彼らを撃退してもらわないとバルバレは潰れてしまう。そこで、今回はキミ達にそれを
任せる」

……私みたいなハンターが本当にいいのかな？

そんな大切なクエストに……

い、いや、もう私は止まらないって決めたんだ。もういつそ、このクエストをクリア
して私の名をバルバレへ知らしめるくらいの気持ちでいかないと！

つまり、HRの飛び級をかけたこのクエストのターゲットは——

「……ダレンか」

ぼそりと呟いた彼の声。

彼もやっぱり知っていたんだ。

「そう、超大型古龍種であるダレン・モーランの討伐をキミ達に任せるよ」

第35話～お祭りの始まり～

正直なところ、あの相棒が飛び級をかけたクエストを受けてくれるとは思っていなかった。

俺や笛の彼女は、そもそもこの世界の人間ではないから別にHRが上がったところで、プレッシャーなどは何もないし、上位ハンターになったところで誇らしいとも思わない。俺のいた世界では、下位ハンターよりも上位ハンターの方が絶対に多かったと思う。だから、できるだけ早く上位へ上がりたいと言う気持ちが強かった。

けれども相棒は違う。そんな世界のことを知らないのだから。

この世界における上位ハンターの価値はやはりよくわからない。けれども、どうやらこの世界ではハンターそのものが尊敬される立場にあるように感じた。そして更に、上位ハンターとなれば周りから受けるプレッシャーと言うのはさうとう大きくなるんだろう。

この世界でハンターは貴重な存在。そしてその貴重な存在の中で更に限られた者のみが上位ハンターとなれる。俺にはその感覚が良くわからないけれど、上位ハンターと

はたぶん、そんな認識で良いと思う。

あの相棒はたった1ヶ月でそんな存在に近づいてしまった。それなら引いてしまうのも仕方無い。だから、今回の提案は断ろうと思っていた。

早く上位ハンターになることよりも相棒の方がよっぽど大切なんです。

けれども、考えさせてくれと言った次の日。相棒はクエストを受けると言った。何があつたのかと思いましたが。どんな心境の変化があつたのかはわからないけれど、まさかこうなるとは……いや、嬉しい誤算ではあるんだけどさ。

ただ、どうしても相棒が俺たちに気を遣っているんじゃないかと思ひ、執拗いと怒られるまで何度か聞いてみた。そして、どうやらこれからは本当に上位ハンターを目指すとわかつて一安心。

早く上位ハンターとなつたところで、俺や彼女が元の世界へ戻れると言うことはない。だから、焦る必要はないんだよなあ。まあ、とは言うもののやっぱ強いモンスターと戦いたいし、強い武器を使いたい。

しっかしホント、何があつたのやら……

「君はあの相棒に何があつたかわかる?」

そしてそのことが気になつたから、一応笛の彼女へ知っているかどうか聞いてみた。

けれども――

「さあ？ 私も知らない」

と、言うことらしい。

まあ、別に悪いことではないから良しとしました。

いくら考えたってわからないことはあるのだ。

そして、相棒の答えを聞いたところで早速集会所へ行き、ギルドマスターからクエストの内容を聞きに向かった。

お願いだから、ブラキとかは勘弁してください。なんて思いながら、相変わらず回りでどい話を聞くと、クエストの内容はダレン・モーランの討伐らしい。

それはゲームでH R 3からH R 4へと上がるための緊急クエストの内容と一致する。

そんなクエストの内容を聞いた時は、思わず心の中でガツポーズ。よっしゃー！

来ましたわ!! みたいな感じで俺の中はお祭り状態。どうにか表情には出さなかったと思うけれど、それほど嬉しかった。

今のパーティーは決して弱くない。けれども、俺と相棒は未だにジャギイ一式で、武器だつてレア度が2の物を使っている。だからいくら3人とは言え、クエストによってはかなり辛くなるだろうと思っていた。

けれども、ダレンなら話は別だ。アイツが相手なら武器を使わなくても討伐することができる。しかも此方は3人。岩石やタックルのダメージは気になるけれど、よほどのことがない限り負けない。狂竜化ブラキなんかよりはよっぽど戦い易い。

それに、ダレンは古龍種の中でも一番戦い易い相手じゃないだろうか。

「……了解。それで、そのクエストはいつ頃になるんだ？」

未だ俺の中ではお祭り状態が続いていたけれど、どうにかソレを出さないよう気をつけながらギルドマスターに尋ねた。

「申し訳ないけれど、あまり時間がないんだ。今直ぐにとは言わないけれど、7日以内には挑んでもらいたいかな」

ああ、なんだ。思ったより時間はあるんだね。

それなら加工屋へ頼んでいたファッティプッシュもどうにか間に合いそうだ。まあ、ダレン戦で使うかはわからないんだけどさ。

「それじゃ、此方の準備ができ次第また声をかける」

「ほっほほ。期待しているよ」

そんな言葉を交わしてからギルドマスターと別れた。

「ダレン・モーランってあのすごく大きなモンスターだよね……あんなの本当に3人で大丈夫なのかなあ」

3人揃い集会所で朝食を食べながら、今後の予定の話し合い。

普段は騒がしい集会所も朝方は人が少なく、話し合いをするのには困らない。

「ん……確か全長は100m以上だったかな。まあ、なんとかなると思う」

「相変わらず君は余裕なんだね……」

流石にダレンは慣れました。

てか、もう二度とやるかってぐらい戦ったんです。まあ、ゲーム通りの行動をしてくれるのかはわからないから、本当に余裕かと聞かれれば答えに詰まる。

けれども、今までのモンスターの行動を考えるに、その可能性はかなり薄い。

「……行動パターンは覚えてる？」

パンに齧りつきながら彼女が聞いてきた。

ああ、そう言えばこの彼女のおかげで防御力の底上げができるのか。それなら、即乙はなくなりそうだ。うむうむ、俺たちの未来は明るい。

「うん、船頭へ来るところまでなら」

ネコのレベルを上げるためや鎧石のため、ダレンとは100回以上戦った。それだけやれば流石に行動くらいは覚える。

ホント、あの勲章を集めるのは大変だった……ダレンと戦いながら何度寝落ちしたとか。筆頭オトモさえいなければもうちよつと楽だったんだけどなあ。あの勲章には悪意しか感じない。

「えっ？　戦ったことあるの？」

「あく……実際に戦ったわけじゃないけど、戦っているのを見たことがあるって感じ」

実際に戦っていたのはゲーム画面の向こうにいたハンターなのだし、間違いではないはず。

そして、正直戦っていて面白い相手ではないと思う。クエストの形式的にそうなっちはしまうのは仕方がないけれど、どうしても作業ゲーのようになってしまう。

「よくわからないけど……私たちでも倒せそう？」

「それは相手の行動しだいかな。でも、しっかりと作戦を立ててから行けば倒せる相手

だとは思うよ」

ゲームとは違い、ひたすらサイドタックルをしてくるとかされると流石に勝つことは難しい。だからその辺りのことは実際に戦ってみないとわからない。

ただ、3人いるのだしバリスタや大砲だけで倒すことはできるはず。今回はソロじゃないってことが本当に大きい。

「大丈夫かなあ……クエストはいつ受けるの?」

「今、俺の新しい武器を作ってもらっていて、それが完成するのが今日の夕方だから……まあ、その後の方が嬉しいかな」

やはり新しい武器は楽しみ。

ドリルと別れてしまうのは寂しいけれど、此処は見た目よりも火力を優先させてもらおう。

「んで、皆は何か予定ある?」

「私は特にないよ」

「……私も」

あら、そうなのか。んじやあ、明日にもクエストを受けることができそうだ。

そして、そのクエストをクリアすれば晴れて上位ハンターになることができる。本当に大変なのはそこからだよなあ……上位になり立ては苦勞しそうだ。

この装備で上位モンスターと戦うことはできるだろうか……

ま、今はそんな未来のことよりも目の前に見えていることに集中しよう。いくら慣れているとは言え、油断できるような相手ではないのだから。

「了解。それじゃあ、明日行くか」

「おおう……そうだね。早い方が良いもんね。うん、頑張ります」

「私まんばる」

ダレンと戦う場所は砂漠だしバルバレからも近いはず。

だから明日中にはクエストを終わらせることができそうだ。初めての古龍種との戦い。そんなお祭りの時間は短いけれど、精一杯楽しませてもらうおうじやないか。

第36話～押し付けに撃龍槍～

「ぎ、緊張します」

砂上船の甲板の上で、不安そうな相棒の声が響いた。

上を見上げれば雲一つない空に浮かんでいる太陽が輝いていた。照りつける日差しは強く、まさに砂漠と言った感じ。砂の上を走っているせいか、細かな砂が顔に当たり、少しばかり鬱陶しい。

そしてそれは随分と懐かしい感覚だった。

ああ、そうか。あの時からもう2ヶ月も経ったのか……

それは俺が初めてこの世界に来た時と同じ感覚。あの時は何が何だかわからなかった。けれども今はこの世界にもそれなりに慣れてきたのかなって思います。

「……きた」

その巨体を回転させながら、砂の中から現れた全長100mを超える巨大な身体。砂の中からそんな奴が出てきたせいか、顔に当たる砂の量が一気に増えた。今までの敵とはスケールが違う。流星は超巨大古龍と言ったところか。

さてさて、それじゃあ——また一步進ませてもらおうか。

色々と考えてみたけれど、今回はとにかく安全に行こうと決めた。

ダレンの背中には乗らず、船に用意されている道具をフル活用する。ゲームなら砲術マスターとネコの砲撃術を発動させれば、ソロでも船の上にある道具だけで決戦ステージへいけるはず。

そして今回はソロでなく3人もいる。それなら十分にダメージは足りるだろう。

適当にしか計算してないけれど、対巨龍爆弾を二つと撃龍槍を当てれば、後は大砲を45発とバリスタを16発当てるだけで決戦ステージへ行くだけのダメージを与えることができる。

だから火力に関しては問題ない。問題があるとすればダレンの攻撃力だ。大タツクは全て阻止する予定だけど、岩石飛ばしで乙るようだと少々マズい。

まあ、たぶん大丈夫だと思うけど……

そんなわけで、今回は武器を使いません。だからクエスト前に食べる食事もネコの砲撃術が発動するように、肉・乳製品の蒸し料理を選んでもらうことに。

相棒はその意味がわかっていないせいかな、首を傾げていたけれど其処は了承してくれた。飯を食べるだけで火力が1・1倍になるのは大きいんです。

そんな準備をし、相変わらず長つたらしいギルドマスターの話を聞いてから、俺たちはクエストへ出発した。

砂上船の運転って誰がしてくれるんだろう……なんて思っていたけれど、其処はどうやらギルドの人が責任をもってやってってくれるらしい。あと、救出とかもしてくれるんだって。安全運転でお願いしますよ。

砂上船に乗り込んでから直ぐに支給品を受け取った。

俺はバリスタ用拘束弾とバリスタの弾を10、そして支給用大タル爆弾を2つ。

相棒がバリスタの弾を10。

そして対巨龍爆弾は笛の彼女に任せた。

つまるところ、このダレンからこの船を守る仕事はほぼ全て俺が引き受けることに。まあ、相棒に任せるわけにはいかないから良いんだけどさ。

そして船が揺れ始め、終に砂の上を走り出したことがわかった。

中においても仕方が無いため、全員揃って甲板へ。

日差しが強い。

当たる砂が痛い。

でも、悪い気分じゃない。

いつも通り相棒は緊張している様子。笛の彼女は……たぶん、いつも通りだと思う。いつものクエストとは形式が違うってこともあり、俺もやや緊張気味です。

「つしや、行くか！」

だから声を出した。

臆病な自分を前へ進ませるために。

「おおー！」

「おおー！」

そしてその姿を現したダレン・モーラン。超デカイ。

さて、お祭りの始まりだ。

「最初は大砲で」

「りよ、了解です！」

ダレンの行動パターンは最初に岩石を飛ばしてくる。けれども、その前に一発は大砲を当てられたはず。

甲板の後ろの方に一人15発用意された大砲の弾をせっせと運び、大砲へセットしてぶっ放す。轟音と爆風。そして、ダレンの巨体へ着弾した時の爆発が心地良い。

大砲を当てると、ダレンが背中を丸めるような行動をした。

「岩石来るぞー！」

できるだけ攻撃を喰らいたくはないから、直ぐに退避。パーティーだと誰狙いなのかわからないのがちよつと辛い。

彼女の演奏音が響いた。防御力アップ助かります。そして、ダレンの飛ばした岩石が先程まで俺がいた場所へ落下。ダメージがどれくらいなのか確かめてみたいけれど、今はやはり自分の身が可愛いです。

岩石を避けてから直ぐに、大砲を運ぶ。最初はとにかく大砲！ 15回撃ち切るまでひたすら運搬！

3発目の大砲の着弾を確認。

「撃龍槍やってくる。爆弾頼んだ」

「……了解」

そう彼女へ頼んでから急いで船首の方にある撃龍槍のスイッチの場所へ移動。

ダレンが砂上船へその身体を押し付けようとするモーションを見てから、撃龍槍のスイッチを全力で叩いた。

キュルキュルと仕掛けの音が鳴り、回転しながら突き出た撃龍槍がヒットエフェクトを弾けさせ、ダレンの立派な角へ直撃。

むう、3ヒットか……できればフルヒットしてもらいたかった。

撃龍槍を撃つてからはまた直ぐに大砲の弾を運搬する作業へ戻る。今のところ行動パターンはゲームと同じらしい。

まあ、例え行動パターンが変わっていてもやることは変わらないんだけどさ。

「……任務完了。退避―」

爆弾を置いてきてくれたらしい彼女がダレンの背中から飛び降りてきた。そんな彼女となんとなくハイタッチ。乾いた音が乾いた空気に響いた。

お疲れ様。助かりました。

その後は三人揃ってひたすら大砲の弾を運んだ。一度ダレンの飛ばした岩石が俺に直撃したけれど、即乙はしませんでした。うむ、これならいける。

応急薬を飲んで体力をマックスに戻してから、また大砲運びへ戻る。

そして直ぐにダレンの小タツクルが砂上船へぶつけられた。

ダレンの小タツクルはバリスタの位置では当たるけど、大砲の位置なら当たらない。「な、なんか、ミシミシ言ってるけど、これ大丈夫なの?」

不安そうな相棒の声。

大丈夫。この船かなり頑丈だから、あと20発くらいは耐えるよ。

小タツクル後、2回大砲を運んでから俺だけバリスタの位置へ移動。ダレンが大きく

身体を引いたところで、バリスタ用拘束弾を発射。俺の発射した拘束弾がダレンへ当たると、更に数本のワイヤーが伸びダレンを拘束した。

面倒なので流石に大タツクルは防がせてもらいます。

「大砲、終わっちゃった！ どうすればいい？」

「バリスタをどんだん頼む。狙うのは角以外で！」

「了解です！」

むう、もう15発打ち切ったのか。意外と早いんだな。

未だ拘束されているダレンへ彼女と一緒に大砲を当てる。これで俺も大砲の残りは5発。

更に大砲を当てていると、ようやくと拘束を解いたダレンの身体が少しばかり砂へ沈んだ。この時は大砲がダレンの上を通り過ぎてしまうためちよつと待機。大砲もバリスタみたいに向きを変えられれば良かったのにな。

そして何処に隠していたのかわからない角のようなものが、ダレンの背中から生えてくるのが見えた。それを確認してから、最後の大砲をぶつ放した。

これで俺も大砲は終わり。バリスタ撃ちます。

できるだけ多くバリスタを当てたいから、怯ませないよう、角以外の部位をバリスタで狙う。ダメージはもう足りていそうだけど、念の為できるだけダメージを稼ぐので

す。

背中を丸めるようなダレンのモーションが見えた。慌ててバリスタの位置から退避。その瞬間、ダレンの背中から角のような岩石が発射され、バリスタのあった場所を塞いだ。……面倒臭い。

「うわっ、なんかある！ えと……これ、どうすればいいの？」

そのための爆弾です。

支給品から受け取っていた大タル爆弾2つをセット。そして武器出し攻撃で起爆してから、一拍置いて爆風をフレーム回避。

バリスタを塞いでいたものを破壊完了。作業へ戻ります。

「……ダメージ足りそう？」

「たぶん、もう足りていると思うけど……自信はないかな」

支給品として受け取ったバリスタ10発も撃ち終わり、船の上にあるバリスタの弾を拾っていると彼女が声をかけてきた。

計算が正しければもう決戦ステージへ行けるだけのダメージを与えたはず。だからもう銅鑼を鳴らしても良いはずだけど……やっぱりちよつと不安です。

ま、足りなかつたら足りなかつたで良いか。

そんなことを思い、そしてバリスタの弾を10発拾ってから、銅鑼を鳴らすためのスイツチを叩いた。

そして砂漠に広がる轟音。更に砂上船へ頭から突進しようとしていたダレンがその銅鑼の音に怯んだ。

これで、ダメージが足りていれば決戦ステージへ。足りていなかったら、砂上船を飛び越え今とは反対側でまた戦うことになるはず。

銅鑼を鳴らしたは良いものの、やっぱりちよつと不安だったから、先程拾ったバリスタをできるだけだけダレンが潜る前に当てておいた。

ゆつくりと砂の中へ沈んでいくダレン。

飛ぶなよ……出てくるなよ……なんて心の中でお祈り。

そして、暫くしてもダレンが船を飛び越えることはなかった。どうやらダメージは足りていたらしい。一安心です。

さて、この後はどうなるのかな。なんて思っていると、ギルドの人が出てきてダレンが潜るのを止め、完全に砂上へ現れたことを確認したから其方へ向かうと教えてもらった。

どうやらこのお祭りもそろそろ終盤らしいです。

砂上船を止め、砂漠へ降り立つと船の後ろにはうつすらとだけど、バルバレの姿が見えた。

「おおー、思っていた以上に遠くへ来ていたんだな。」

「い、今からアレと戦うんだよね……どうすればいいんだろ」

そして、そのバルバレのある反対側からはそのそとゆっくりとしたスピードでダレンが近づいてくるのが見えた。

「バリスタ撃つてれば大丈夫だよ」

30数発で倒せるはず。

お祭りの終盤とは言え、はつきり言つて此処からは何も危ないことはない。角も壊していないからダウンも取れるし、たぶん大砲が届く距離となる前に倒すことができる。

強いて言うなら飛ばしてくる岩石に気をつけるくらいだと思う。でも、あの攻撃でも即乙はしないのだし……

つまるどころ……この勝負は俺たちの勝ちです。

そして、その後は本当に何事もなくダレンを討伐することができた。倒したのは初期から船のある位置の半分くらいと言った場所。あの場所なら大砲は届かなそうだ。

うむうむ、やはりソロじゃないって言うことが本当に大きかったね。

「おおー倒した!! すげい、見て！ 倒したよー！」

いつも以上に興奮している様子の相棒さん。

しつかり見ているので大丈夫です。

「……お疲れ様」

「うん、お疲れ」

そして、彼女ともう一度ハイタッチ。意味があるのかはわからないけれど、なんとなく気分は良い。

さて、漸くこれで俺たちも上位ハンターだ。

でも、本当に大変なのは此処からだよなあ……

第37話　静かな暮らしとさようなら

随分と面倒なことになってしまった。

無事ダレン・モーランの討伐を終えて思ったことはそんなことだった。

お祭りなどと呼んでいたあのクエストは、どうやら俺が考えていた以上に大きな意味を持っていたらしい。

クエストを終え報酬への期待に胸を膨らませながら、集会所へ向かった。

そしてその集会所へ入った瞬間、異変に気付いた。集会所はいつも騒がしい場所ではあるけれど、その時はいつも以上だった。こう……熱氣的な何かがあったんです。

そして面倒なことにその熱気はどうやら俺たちへ向けられていた。

その時は何が何だかわからなかったけれど、とりあえず報酬を受け取ることに。其処でギルドマスターから声をかけられ、ものすごい勢いで褒められた。

いや、褒められるほど難しいクエストではなかったんだけどなあ……なんて思っていると、更に俺たち三人へ“三ツ星ハンターの印”とか言う勲章の授与が行われた。其処でまたギルドマスターの有り難いお話を聞かされたけれど……まあ、何を喋っていたの

かは忘れた。その時は早くお酒が飲みたいとしか思っていなかったんです。

勲章の授与だのなんだのは予想以上に長く、とても疲れました。精神的に。たぶんクエストの時間より長かったんじゃないだろうか？ マジ勘弁してください。勲章をもらうよりハチミツをもらえた方がよっぽど役に立つ。

そんな長つたらしいものが終わり漸く報酬をもらえると思っていると、今度は話したこともないハンターどもに囲まれた。クソが。

其処で俺は限界。報酬を受け取るのは諦め、集会所から逃げ出しました。因みに、一番早く逃げたのは笛の彼女だったりします。

まあ彼女の性格的に、こう言うの苦手そうだもんね。褒められるのは悪い気分じゃないけれど、自分の中では別にすごいことをした覚えもないから、それで褒められると何だか微妙な気分になる。

宝くじで大金が当たると急に知り合いが増えると聞く。今回のことは、たぶんそれに近いんじゃないかなって思います。

そんなことのせいで、俺たち3人はバラバラに。てか、相棒だけ集会所に残ったまま。結果的に相棒へ面倒なことを全部押し付けてしまった気もするけれど、其処は深く考えないことにした。

すまんな。

そして厄介なことに、俺たちがダレンを倒したことはバルバレ中に広がっていき、集会所から抜け出すことには成功したのに、今度はハンターじゃない人たちに捕まった。

主に、加工屋や道具屋なんかがこれからはウチの店で買ってくれ。だとかそんなことだった。あと、数人からはサインとか握手をお願いされた。サインを求められるのなど、配達のお兄さんを抜かせば人生初だ。サインの書き方など知らないから断ったけど。

でも、道具屋がくれると言ったアイテムは有り難くいただきました。もらえるものももらうに限る。たぶん、あんたの店を使うことはないだろうけれど、このアイテムは大切にさせていただきます。

後々になってわかったことだけど、どうやらダレンと戦っている間、俺たち3人の似顔絵がバルバレ中に配られたらしく、それで顔がバレてしまったらしい。今まで有名でもなんでもなかったのに、どうしてこうも知らない人から声をかけられるのか、とか思っていたけど……とんでもないことをしてくれたものだ。

因みにだけど、俺の似顔絵は闘技大会の受付嬢が書いてくれたんだとき。それを見せてもらったけど、予想以上に上手く驚いた。

クエストから帰ってきたばかりと言うのに、色々な人に揉みくちやにされ、心身共にボロボロ。食事を取る元気もなく、這う這うの体で自分の家へ逃げ込んだ。

もう疲れたから今日は寝よう。なんて考えながら家のドアを開けると、中には笛の彼女がいた。あとプーギー。

色々とツツコミを入れたところだったけれど、疲れていたし、もうなんかどうでも良くなった。

「……………おかえり」

「うん、ただいま」

でも、此処は君の家じゃないよね？ いや、別に文句があるわけじゃないんだけどさ

……………

「えと……………何やってんの？」

「きちやった」

そんな彼女の言葉に一瞬ドキリとしたけれど、どう考えたって彼女なりの冗談だろう。

やめてください。恋愛関係のことには疎いので直ぐに勘違いしてしまいます。

「……………彼女は？」

「はぐれちゃったからわからないけど、たぶんまだ集会所で捕まってるんじゃないかな」
此処に来て少しばかりの罪悪感。

いや、でも、俺にあの空気は無理です。静かに暮らしたいです。

はあ……ホント面倒なことになった。せつかく上位ハンターとなったのにね。このお祭り状態はいつたいいつまで続くことなのやら……それも贅沢な悩みなのだろうか。

「迎えに行かなくても大丈夫？」

「あー、行った方がよいとは思うけど……今の集会所へは行きたくないかな」

「……同感」

ふにふにとプーギーで遊びながら言葉を落とす彼女。溜まったストレスの捌け口となつているのにも関わらず、プーギーは嬉しそうだった。

お前は単純で良いね。

「これからの予定は？」

ん……どうすつかね。

これからは今までとは違って上位クエストとなるから、早く武器防具を揃えたいところだけど……武器をどうするかが難しい。ソロならベネ・ホワユンで良いけれど、相棒のスニークロッドも毒なんだよなあ……山権現でも作ることができればそれで良い気もする。報酬次第だけど、要求素材はそんなにキツくなかったはず。

防具は……まあ、ジャギイSが無難なところだろうか。本当はさつさと複合装備を組んでしまいたいけれど、その素材を集める時の装備が欲しい。

「とりあえずは装備を整えないとかな。君は武器どうするの?」

「マスターバグパイプ作って、その後はガララ笛になると思う」

まあ、そんなもんだよな。

上位になったとは言え、行けるクエストはまだ多くない。色々な武器や防具を作るのにはHRをあと2つは上げたいところ。

防具は全員同じ物を作ってしまった方が絶対に効率は良いけれど……パーティー全員が同じ装備ってどうなんだろう。いや、仲は良さそうに見えるけどさ。

ああ、そう言えば俺たちは全員HR4となったのか。

すっかり忘れていたけれど、これで俺は彼女に追いつくと言う目標を達成することができた。うむうむ、なかなか順調じゃないか。

まあ、HRの上限が解放されたらクエストクリア数の関係で彼女とはまた離れることになるんだろうけどさ。それがいつのことになるのかはわからない。

でも、それまではこの彼女と肩を並べることができる。それが少し嬉しかった。

上位かぁ……本当に苦労しそうだ。ハチミツの量産体制へ移る必要がありそうだ。流石に回復薬グレートなしはキツイ。

ま、今までもちよこちよこ集めはいたから、なんとかなると思うけどさ。

「そんじやま、そろそろ行くか」

「何処へ？」

これ以上放っておいたら流石に怒られる。

「あの相棒を迎えに」

気は進まないけれど、大切な仲間のためちよいと我慢しよう。

渋るかなあと思っていた彼女もちちゃんについて来てくれるらしく、二人で集会所へ向かった。

やはり途中で何度も知らない人から声をかけられたけれど、どうにか逃げ切ることに成功。集会所の中は相変わらず騒がしいままであったものの、俺が逃げ出した時よりは

かなり落ち着いていた。

そして、集会所のテーブルに突っ伏している相棒を発見。

……俺が逃げ出したあと、何があったのかわからないけれど、どうやらかなり大変だったんだろう。お、お疲れ様です。

「えと、だ、大丈夫……ですか？」

そんな相棒の肩を叩きながら声をかけた。

「私はもう疲れました……」

でしようね。

「二人共、私を置いていくなんて酷いよー」

ガバッと起き上がり大きな声を出す相棒。

いや、だってアレは無理だろ。あんな経験慣れていないし、好きにはなれる気がしない。申し訳ないとは思っているけれど、次にまた同じようなことがあっても俺は絶対に逃げる。

「お疲れ様。これで君も有名人だな」

「私にはそんな実力なんてないのに……」

それなら、これから上手くなれば良いさ。

大丈夫、君ならきつとそれくらいの実力をつけることはできるよ。

「ま、とりあえず、飯食べようぜ。お腹空いた」

せつかく上位ハンターとなったのだからお酒だつて飲みたい。

これからのことを色々と考えないといけないとは思うけれど、未来のことばかり考え
ても仕方無い。今できることを少しずつやっていけば良いのだ。

第38話〈背中向けて後方攻撃〉

「はい、喧嘩両成敗！ です。場所は遺跡平原でメインターゲットはドスジャギイ2頭となりますが、よろしいでしょうか？」

「ああ、お願いするよ」

ダレンを倒しH R 4となった次の日。早速上位クエストへ行くことにした。

星3の天空山のクエストで武器を強化することも考えたけれど、一度上位クエストの難易度を確認してからでも良いかなと思ひ、上位クエストへ。それに此処で少し無理をしても防具を作ってしまうえば、後々かなり楽になる。

お祭りの影響が残っているせいか、未だすれ違う人々から様々な視線を向けられるけれど、もう気にしないことにしました。

こちとら他人に気を遣っている余裕なんてないのです。

「上位のクエストは下位とは比べ物にならないほど危険です。ケガしたら、ダメですかね。ふふふ。どうか気をつけてください」

「うん、ありがとう。行ってくるよ」

今、担いでいる武器はファッティッシュ。ブーステッドハンマーよりはかなり強く
なったはず。でも、やっぱりブーステッドハンマーの方がカツコイんだよなあ。

本当は山権現を担いで行きたいところだったけれど、加工屋に依頼したのは昨日のこ
と。完成するのは例のごとく、今日の夕方となる。そして、俺はそれを待つていられる
ほど我慢強くない。

早く上位クエストをやりたかったんです。できることが一気に広がったせいで、何を
すれば良いのかがわかり難くなるけれど、何でもできるんじゃないかって言うこの感覚
は嫌いじゃない。

ま、失敗したらその時はその時だ。

支給品は期待できないけれど、ちよこちよこと集めていたハチミツのおかげで、今回
からは回復薬グレートもある。相手の火力はまだわからないけれど、なんとかなつてく
れるんじゃないかと思う。

防御力は心配だけど、一箇所でも防具ができればかなり楽になるはず。

それに今回は作戦がないわけじゃない。今まで試したことはないし、ちよつとどうな
かなあつて思うところはあつたけれど、一度試してみないとわからない。

さてさて、そんじやま。ひと狩り行きますか。

「思ったけど、私と君って2頭クエストはこれが初めてだよな？ しかも、それがいきなり上位クエストって……」

ガタゴトと揺れる馬車の上。操虫棍使いの彼女が不安そうに言葉を落としたり。

そうだったんだ。私は何度か2頭クエストを受けたことがあるけど……

「確かに初めてだけど……まあ、どうせ沢山狩らなきゃいけないだし、丁度良いんじゃないか？」

彼の声。

なんだか不安になってきた。私の装備なら流石に大丈夫だとは思っているけど、彼と彼女の防具はジャギィ一式。確か、防御力は50とかだったと思う。

彼なら大丈夫だとは思っているけど、彼女は大丈夫かなあ。

「だ、だって、2頭だよ？　それが同時に襲ってきたら、どうすればいいのかわかんないじゃん」

うん、2頭クエストはそれが本当に面倒臭い。

ただ、闘技場のようにエリアが1つしかないってわけでもないからまだマシなのかも。こやし玉便利。

「そのために、こやし玉を沢山持つてきたから大丈夫。そして、そのことだけどき……今回2手に別れないか？」

2手……私たちのパーティーは3人。つまり彼の言葉は、一人が1対1でドスジャギイと戦うつてことを指す。そして彼の性格的に、一人で戦うのは……

「誰が一人で戦うの？」

私が聞いた。

「俺がやるよ」

彼が答えた。

ほら、やつぱり。

確かに、ドスジャギイ1頭に対して3人で戦うのは無理がある。特に、彼の使うハンマーみたくSAのない武器では、下手すると何もできないかもしれない。

でも、一人で戦うと言うのはそれ以上に危険が伴う。彼が上手いのはわかっているけ

れど、これは初めての上位クエスト。武器と防具は未だレア度2。上位モンスターを一人で戦うにはちよつと物足りない。

「えっ？ それ、大丈夫なの？ 皆で一緒に戦った方が良いと思うけど……」

「あく……やってみないとわからないけれど、ちよつと試したいことがあるんだ。まあ、無理っぽかったら直ぐにそつちと合流するから大丈夫だよ」

彼が何を考えているのかはわからない。ドスジャギイみたいな鳥竜種と戦う時、ハンマーはスタンブがメインになる。だからパーティーで戦うよりはソロで戦った方が絶対効率が良い。それはわかっているけど……むう。

でも、考えはあるってことだと思う。それならそれを信じた方が良いのかな。

「……じゃあ、お願い。ガンバ」

「おう、頑張るよ」

そう言った彼は何だか複雑な顔をしていた。

貴方は何を考えているの？

ガタゴトと揺れること数時間。漸く遺跡平原へ到着。

バルバレから一番近い場所ではあるけれど、やっぱり遠い。でも、ソロで戦っていた時よりは短くなったんじゃないかなって思う。

ゲームとは違って、クエストの始まりはちゃんとベースキャンプからだった。そのせいで秘境へ行くことはできないけれど、クエストがはじまったら目の前にモンスターがいると言う状況はないのだし、これはこれで良いのかも。

ただ、初期位置がベースキャンプから遠いモンスターと戦う時はちよつと面倒だ。そして、支給品ボックスの中身は地図と松明のみ。其処はゲームと同じみたい。

「つしや。行くかつー！」

「おおーー！」

「おー」

いつも通り、大きな声を出した彼。

大きな声を出すと、緊張が解れると言っていた。私は大きな声を出すのは恥ずかしいからちよつと遠慮したい。

「んじや、此処で別れるか。俺は左へ行くから、君達は右をお願い。ドスジャギイを倒し

たときはサインを出すって感じで」

ベースキャンプを離れてすぐ、エリアーで彼がそう言った。

ドスジャギイの初期エリアは4番と6番。つまり彼はエリア4へ行くってことだと思おう。

私の武器は漸く完成したデンジャーコール改。攻撃力アップと耳栓を吹けて、麻痺も取れちゃう優秀な音符赤空の笛。でも、音があまり好きじゃない。

普通に考えれば、私と彼女のペアの方が先に討伐できるはず。だから、できるだけ早く倒して彼の手助けに向かわないとだ。

……うん、頑張ろう。

「了解！ 気をつけてね」

「ああ、そつちもな」

そう言つて彼はエリア2の方へ走つていたけれど、その顔はやつぱり複雑そうだった。

「大丈夫かな？」

「たぶん彼なら大丈夫。でも、できる限り早く倒さないと」

「うん、そうだね！」

これは上位クエスト。今までのモンスターとは攻撃力も体力も違う。正直に言つて

私も他人へ気を遣っている余裕はあまりない。

彼と別れて、エリア3経由でエリア8へ入ると、エリア6の方からドスジャギイが現れた。

相変わらずキミは直ぐに移動しちゃうね。この調子だと、彼の戦っているドスジャギイとの合流は避けられなそうさ。

「来たー！」

うん、わかつてる。

とりあえず武器出し、柄攻撃で白音符を2回出してから自分強化の演奏。これがないと始まらない。

エリアの中にはジャギノスが見えなかった。つまり彼女は橙色を集めることができず、SAを付与することができない。転ばせないよう気を付けないと。

ドスジャギイの動き自体は下位とほとんど変わらず、周りの雑魚がちよつと鬱陶しいくらい。演奏中にドスジャギイのサイドタックルが直撃したけれど、私の防御力なら2発は耐えてくれるみたい。

彼女はちよつと厳しいかもしれないけど。

「少しでも攻撃を喰らったら回復して」

「りよ、了解です！」

思っていたよりはドスジャギイの攻撃力は低い。けれども安全にいった方が良い。流石に、ソロでは戦いたくない。

連音攻撃で音符を整えてから、後方攻撃で1回目のスタン。むう、やっぱり彼がいないとスタンまで時間がかかる。

「ナイス！」

うん、ありがとう。

スタンを取った序でに攻撃力アップを重ねがけ。

雑魚の動きと彼女の立ち位置を確認しながら、スタンをしているドスジャギイの頭へ、連音攻撃で麻痺値を溜める。目標は2スタン、1麻痺。

むう、気にかけることが多すぎて、立ち回りが遅れる。ちよつと面倒臭い。

「乗った！」

ぐうれいと。

たぶん次のダウンで麻痺を取れるはず。

彼女が乗り攻撃をしている間、散々邪魔をしてくれたジャギイたちへ叩きつけをして蹴散らす。どうせまた出てくるだろうけれど、溜まったストレスを発散するには丁度良い。

そして、乗り攻撃が成功し、後ろへ大きく吹っ飛んだドスジャギイへとりあえず叩き

つけ。ローリングで硬直をキャンセルしてからまた直ぐに連音攻撃。

麻っ痺れ、麻っ痺れ。

乗りダウンから立ち上がり、ご丁寧に威嚇をしたところで1回目の麻痺。順調順調。

麻痺を取ったドスジャギイへ、今度は連音攻撃ではなく左右のぶん回し攻撃で、スタンを稼ぐ。彼女も私の攻撃が当たらない尻尾の方を攻撃してくれているし、今は気にせず攻撃ができる。

そして、それは2回目のスタンを取った時だった。

クエストが始まってからまだ5分ほどしか経っていないはず。

そうだと言うのに、彼が出したと思われるサインが遺跡平原へ響き渡った。

「えっ? も、もう倒しちやったの?」

一瞬、混乱。

最初は何か問題があったんじゃないかって思った。けれども、このクエストに乱入はないはず。つまり、彼はもうドスジャギイを倒したってこと。

彼が上手いのはわかっている。

けれども、これはあまりにも——早すぎる。

残念なことだけど、彼がどんなに上手くても彼の使っている武器が強くない。決して弱い武器ではないけれど、この時間で1頭を倒すのは流石に……

そうなる……SB? ハンマーで? しかも罨師を発動させているとは聞いていないし、そもそも彼の食べた食事は肉と酒ではなく、肉と魚だったはず。つまりSBではない。

じゃあ、この異常に早いタイムは……?

それこそ、ハメでも使わない限り……

そして、あの彼の複雑そうな表情を思い出した。

ああ、そつか。そう言うこと……なのかな。

それならこのタイムにも、彼のあの表情も理解ができる。

「薦ハメ……使ったんだ」

第39話～役割はムードメーカー～

鳶の上に倒れ動かない状態のドスジャギイを見て、一つため息が溢れた。

「……やっぱりやらない方が良かったのかな」

何度かミスはあった。

完全にハメきることはできていない。けれども、此方はノーダメージでたぶん0分針。それは今の装備では少々良すぎる内容とタイム。

実際のところ、今回はかなり運が良かった。出会って直ぐにこやし玉を投げたけれど、相棒たちと合流することも考えられた。けれども、運良く鳶のあるエリアへ移動してくれ、其処で戦うことができた。

それが次もできるかはわからない。

そして何より、次もこの方法を使って良いのかがわからなかった。

ゲームでは幾度も色々なハメをした。水爆やガンナー、こやし閃光や乗り麻痺スタンループ、そして今回やったような鳶ハメも。

ハメは楽だ。そして絶対にタイムも良い。けれども……ハメを嫌う人は多かった。

そして、そんなハメを嫌う人たちの気持ちもわからなくはない。

モンスターと戦うことが楽しくてモンハンをやっているのに、それが作業となつてしまつては何が楽しくてモンハンをやっているのかわからなくなるから。

あの相棒はわからないだろうけれど、たぶん笛の彼女なら俺がやったことに気がつくだろう。その時、彼女がどう思うのかはわからない。それが少し不安だった。

この世界に来てハメは初めてやった。

モンスターを安全に倒すことができるのだし、この世界ならハメをしたところで悪いことはないと思う。それでも……なんとも複雑な気分だ。

成功するのなんてわからなかったから、彼女たちに薦ハメをすることは伝えていない。やっぱり事前に言っておいた方が良かったのかな……

無事に倒すことはできたけれど、先ほどから後悔ばかりだ。

何処からハメで何処からハメではないのか……それは俺にもよくわからない。そしてその答えはきつと人によって違う。もしかしたら、ハンマーのスタンすらダメだと言う人だっているのかもしれないのだから。

けれども、上手いパーティーの戦い方なんて、突き詰めていけばハメと変わらない。モンハンはどれだけ敵の好きに行動させないかが、大切なものだから。

むう、一人で考えていても仕方無い。

早く彼女たちと合流をしないと。

「ありがとうございます。いただきました」

そして3回の剥ぎ取りを終え、感謝の意を伝えてから他の皆に倒したことを伝えるためのサインを出した。

……上位のモンスター超強いです。

別に動きが速くなったとか、今までとは違う動きをするとかはないけど、攻撃力がすごいです。

たぶん、私の防具が下位のものだからだとは思うけれど、一発でも喰らってしまえば、

一気にピンチになる。今までみたいなゴリ押しはちよつとできそうにない。

あとお願いだから黄色のエキスをください。んもう、なんでロスジャギイは2色しか取れないのさ！ ジャギノスもないし、これはちよつと困る。

それにしても……私には彼女がいるからまだ回復できる隙があるけれど、彼はソロで戦っているはず。大丈夫かなあ……

そんな心配をしながら戦っている時だった。

音が響いた。

それは彼が出したサインだと思う。

「えっ？ も、もう倒しちゃったの？」

思わず声が出る。

だってあまりにも早すぎるから。

彼が上手いのは知っているけど、これは上位クエスト。今までのクエストはレベルが違う。そうだと言うのに……

「葛ハメ……使ったんだ」

彼女の声がぼそりと落ちた。

「蕪ハメ？ 何のことだろう。たぶん、これだけ早く倒したと関係があるとは思われない。たぶん、その言葉の意味が私にはわからなかった。」

「えと、どうする？」

「……剥ぎ取りに行く」

私たちの戦っているドスジャギイはまだ倒れていない。あとどれくらいかかるのかもわからない。

「うん、そだね」

でも、とりあえず彼が倒したドスジャギイから剥ぎ取りにいかない。

そして、未だスタン状態のドスジャギイにペイントボールをぶつけてから彼の居た方へ私たちは向かった。

「あつ、来た。そつちは大丈夫だった？ 乙ってない？」

エリア9の蕪の上。そこに彼がいた。そんな彼の表情はせつかくドスジャギイを倒したと言うのに、複雑そうだった。

そしてドスジャギイもその蔦の上に。ホントにソロで倒しちゃったんだ。なんだろう。これでまた彼との差が広がってしまった気がする。

遠いなあ……

「うん、まだ大丈夫だよ。でも、こっちはまだ倒せてないかな」

二人で戦ってたから回復もできたし。危ないときはあつたけれど、なんとか大丈夫でした。

てか、君が早すぎるんだ。どうやればそんなに早く倒せるのさ。

でも、とりあえずはドスジャギイから剥ぎ取り。できるだけ早く上位の防具を作りたいです。

「まずかったかな……?」

「……別に私は気にしない」

そうしてドスジャギイから剥ぎ取っていると、彼と彼女の会話が聞こえた。

でも、何について話をしているのかはわからない。

「……そっか」

この二人の会話は私に理解できないことが多い。

今回もそうだ。私に知識がないのがいけないってことはわかっているけれど、それはちよつと寂しい。

仕方の無いことだとは思っているし、この二人が私のことを悪く思っていないこともわかってる。でも……やっぱり私との間に壁があるようで、ちよつと寂しい。

「剥ぎ取り終わった？ んじゃ、もう一頭を倒しに行くか」

「おおー」

「おー」

いつか、私にも話をしてくれる日が来るのかな。

そんな日が来てくれれば嬉しいな。そう私は思うのです。

「……な、何もできなかった」

「あー……ごめん」

「どうやらもう一頭のドスジャギイも結構弱っていたみたいで、3人で戦い始めてすぐに、ドスジャギイは脚を引きずってくれた。」

「そして隣のエリアへ移ったわけだけど、そこにはジャギノスも居てくれたから、私もついに3色を集めることができました！」

「3色集めれば私は他の人の攻撃で転ばなくなる。だから私は大丈夫だった。そして、彼女も他の人の攻撃で転ぶことはない。」

「でも彼は転びます。私の攻撃でも、彼女の攻撃でも当たれば転びます。」

「一応、気をつけてはいたけれど、いくらドスジャギイと言っても相手は上位のモンスター。はつきり言っただけで周りを気にしている余裕なんてほとんどない。てか、例えば下位のクエストでも余裕なんてほとんどない。」

「そんなんだから、私の攻撃が彼に何度も当たってしまった、何度も転ばせちゃいました。……ごめんなさい。」

「いや、わかっちゃいたんだけどさ。ドスジャギイ相手に3人でも戦えばこうなることは」

「ああ、だから一人で戦ったのかな？」

「私にはちよつと無理だけど、彼の実力なら確かにそっちの方がいいかもしれない。パーティーよりもソロの方がいいって言うのもなんか変な感じがするね。」

でも、私は遠慮したいです。

「あと何頭くらいで防具できるかな？」

「ん〜……どうだろう。今回の報酬次第だけど、あと2頭クエストを2回でも行けばドスジャギイの素材は足りると思うよ。それよりも鉱石系を集める方が大変かも」

おお、意外とあっさり集まるんだね。

これで防具が完成すれば私も立派な上位ハンターだ。ふふつ、集会所でも目立つちゃうね！ それは誇らしい。

ああ、でもダレン・モーランを倒したときみたいになるのは嫌だな……

我が儘だけど、こう……私が通ったあとに『今の人、上位防具だったよ。カツコイイね！』とか言われるくらいがちょうどいいのです。

言われてみたいなあ……

「んでさ、今回俺がやったことだけど……」

今は、ガタゴトと揺れる帰り道。

心配そうな表情で言葉を落とす彼。

「蔦ハメつてのをやったんだ」

「えと……その蔦ハメつてなんなの？」

おおー、今回は私にも教えてくれるんだ。

ちよつと嬉しいです。

「その……ようは敵を薦に埋めさせて一方的に攻撃し続ける戦い方、かな」

……なんだそれは。

そんな素敵な戦い方ができるのですか？　ずるい！　私もやりたい！　でも、今までそんな戦い方を見たことはないんだけど。

「ん〜……よくわかんないけど、それが？」

「えと、ですね……やっぱりやらない方が良かった？」

……うん？

彼の言っている言葉の意味がよくわからなかった。むしろそんな戦い方ができるのならどんどんやるべきだと思う。

「……貴方は私たちに気を遣いすぎ」

彼女の言葉。

私もそう思います。今だって、すごく不安そうな顔をしている彼。そんな彼の言葉の意味はわからないけど、今回もたぶん彼の考えすぎなだけ。

今までだってそうだった。彼が見ているのはいつだって他人だ。自分のことは二の次。それが悪いこととは言わないけど、もう少し自分のことを考えてほしいな。

アレだけ早く上位モンスターを倒したのだから、もつとドヤ顔とかしてもいいのに。「確かにハメを嫌う人はいたけど、私は気にしない。それに倒せたのにハメをしなかったから失敗したら意味ない」

ハメつてのがやっぱりよくわからないけど……うん、そうだね。彼女の言う通りだと思っ

たぶん、そのハメつてのをすれば安全に倒すことができるんだろう。だったら、やった方がいい。私たちハンターはモンスターを倒さないといけないんだから。

たまに忘れそうになっちゃうけれど、私たちがモンスターを倒さないと困る人が沢山いる。そんな人たちのためにも私たちが頑張ってモンスターを倒さないと。

「……そっか。うん、ありがとう」

そこでやっと彼の不安そうな顔はなくなった。うむ、何が何だかさっぱりだけど、この件は解決つてことでもいいのかな。

彼が何を思っていたのかはわからない。

でも、もう少しくらい私たちに頼ってくれてもいいんだよ？ そりゃあ私は君や彼女みたいに上手くはないけれど、もう少しなら力にだってなれるだろうし、私だって頼りにされてみたい。

きつと、これからもこのパーティーで長く続けるのだろうか。

「それじゃ、帰ったら打ち上げやろ！」

「そだね。初めての上位クエストもなんとかあったもんな」

私にできることはやっぱり少ないです。

なんとか頑張つてはいるけど、私はそんなに器用じゃないから。そして、そんな私を迎えてくれるこのパーティーはやっぱり好きなんです。

だからせめて、明るく元気に振舞つてどうにかムードを悪くさせないよう頑張ります。

例え——それが空元気だとしても。

それがこのパーティーにおける私の役割なんじゃないのかなって最近思うようになりました。

第40話～最恐へホームラン～

強い敵と戦ってみたい。それはきつと多くのハンターが思うこと。

けれども結果的にそれは自分の慢心だったんだろう。最初の頃は何度か壁にぶち当たり、思うようにいかないことが多かった。それでも、相棒とパーティーを組んでからは怖いくらいに調子良く此処まで進んで来ることができた。

自分の実力を過信。

自分が上手くないことくらいわかりきっていると言うのに。

それでも、此処で訪れたチャンス逃したくはなかった。より強いモンスターと戦うことのできる喜びが、自分の実力を忘れさせた。

下位武器に下位防具。どう考えたって勝てるはずがない。それでも一矢報いるために俺はハンマーを振り下ろした。目の前にいる今までとは桁違に強いモンスターに對して。

そしてその日、俺たちは初めてクエストを失敗した。

「ふふっ、これで私も頭と脚だけは上位ハンターになれるねー」

いつも通りガタゴトと揺れる馬車の上。何処か嬉しそうに相棒が言葉を落としたり。

昨日、初めて上位モンスターを倒した後、加工屋へ向かい作ることのできるジャギイ装備を聞いて見たところ、相棒は頭と脚の素材が足りていたらしく無事上位防具を作ることができた。

まあ、完成するのにはまだ時間がかかるんだけどさ。

そして、笛の彼女もいくつかの部位を作ることができたらしいけれど、全部位の素材が集まるまでは、ゾンオウガ装備でいるらしい。まあ、俺や相棒はジャギイ装備からジャギイ装備へ変わるだけだから、デメリットなんてないけれど、彼女の場合、一部だけ作ってしまうとスキルが消えてしまう。防御力は上がるけれど、スキルが消えちゃう

のはもったいないもんね。

一方、俺の方はと言うと……まあ、1部位も作ることができませんでした。此処に来てまたりアルラツクのなさが現れ始めた。ドスジャギイの素材は良いけれど、鉱石系がちよつと足りなかったんです。俺も早く防御力を上げたいんだけどなあ……

そんなことがあった次の日。また今日もドスジャギイを倒しに行こうかと思っただけで、残念ながらドスジャギイのクエストがなかった。

どうすつかなあ。なんて考えたけれど、此処で1日無駄にしてしまうのももったいなかったから、遺跡平原の素材ツアーへ行くことに。鉱石欲しいです。

それに、彼女たちもまだ足りていない鉱石があるみたいだから丁度良かった。

そんなわけで、今日もまた遺跡平原に向けて揺られているところです。

「思ったより報酬も多かったし、これなら防具も早く揃えられそうだな」

てか結局、皆ジャギイ装備になりそうだ。まあ、スキルも優秀だし弱い装備ではないと思うけれど……なんだかパーティー全員同じ装備って変な感じがする。

「ん〜と、それなら、次は武器になるの？」

「うん、まあ、そうだね」

ガタゴトと揺られながら相棒さんと雑談。俺はどんな武器を作っていこうかなあ。できれば爆砕の破鎧とか作りたいけど、ブラキはなあ……

最終的にはラグナを作れば良いけれど、それまではもう一本何か欲しいところ。まあ、そんな先のことを考えても仕方無い。今はもう少し現実的なハンマーを探すべきなのかな。

それに防具も考えないといけないのか。むう、やらなきゃいけないことが沢山だ。

けれども、やれることが沢山あると言うことはきつと良いことなんだろう。ゲームをやっていた時みたく、目標もなくただらだと続けているよりは今の方がよっぽど良い。

「とりあえず今日はドスジャギイ以外の素材を集めちゃおう」

「了解ですー」

上位遺跡平原の素材ツアー、か。

確かクエスト開始から2分30秒くらいで、エリアは……3番だったよな。

うん、ちよつと楽しみだ。

平凡な日常だけではつまらない。その時の俺はそんな考えだったんだと思うんだ。一度叩きのめされないと気づかないことだってある。

たぶんそう言うこと。

「そんじゃ、此処からはバラバラで行くか」

「おおー!」

「おー」

もう流石に慣れてきた遺跡平原。

別に全員揃って素材を集めても良いけれど、必要な鉱石なんてどうせ直ぐに集まると思う。その後は、まあ、各自で好きなことをやっていた方が良いのかな。なんて思った。

「また50分後に」

「了解!」

「……了解」

狙うはドラグライト鉱石とカブレライト鉱石。それさえ集めてしまえば、今回の目標は達成。まあ、どうせもう何度かはドスジャギイと戦うために遺跡平原へ来なきやいないから、此処で無理をする必要はないけれど、集めてしまえば楽なんです。

そして俺たちはバラバラに別れた。

皆と別れてからは直ぐにエリア2と9へ向かい、青色の石へピッケルを叩きつけた。そもそも要求数がそれほど多くなかったこともあり、それで無事カブレイト鉱石の方は必要数に達した。ドラグライトの方はもう少しと言ったところ。

ふむ、順調順調。

今はまだクエストが始まってから2分も経っていない。まだ、時間は沢山ある。けれども、アイツが現れる時間はもうほとんどない。

さて。

さてさて。

今回のクエストは採取ツアー。失敗したところでデメリットは何もない。それなら何も気にせず挑むことができる。

そんなじゃ、行くとしますか。

緊張で少しばかり脚が震えたけれど、気にせずエリア3へ向けて走った。

そしてエリア3へ到着。まだアイツはいない。

息が荒い。心臓が暴れる。

これから戦う相手は間違いなく今まで一番強い相手。どっちのアイツが現れるのかはわからないし、そもそもアイツが出てくるのかもわからない。

それでも——戦ってみたい。

そして、地面が揺れた。

エリア2へと続く道に土を掘り起こしながら現れたアイツ。

来た。

顔を確認。龍属性オーラは溢れていない。

つまり通常個体。

それでも、今の俺が勝てるような相手ではない。戦いを挑んで良いような相手でもない。

だからこそ、戦ってみたい。

目標は1スタン。できれば頭部破壊をしたいところではあるけれど、今の武器ではそれも難しい。

罨も肉もなく、久しぶりのソロでやるガチンコバトル。本当ならHR7にならないと

戦えない相手。アイツを倒すことなんてできないし、一発でも喰らえば此方は乙る。でも悪い気分じゃない。

そして、採取ツアーに乱入したイビルジョーは天を向き大咆哮を上げた。

「ビリビリと震える空気。嫌な汗が吹き出す。今までで一番の緊張感。怒らせるくらいはできれば良いけど……」

咆哮を避けてから、直ぐにハンマーを右腰へ。そして、のそのそと此方へ近づいて来たイビルジョーの顔面へスタンプ。

ソロならイビルジョーはハンマーとの相性は悪くないはず。イビルジョーの初期スタン耐性は200もないんだ。大丈夫、今の武器でも1スタンは十分に狙える。

スタンプ後、直ぐに横口りで硬直をキャンセルしてからイビルジョーの胸元へ。

そして少し後退してから尻尾回し攻撃。それをフレーム回避。

180。回ったイビルジョーの頭の位置を確認。尻尾振り攻撃は確定で2回連続。位置を調整。

もう一度尻尾を振り、頭が再び元の位置に戻ってくるタイミングに合わせ、その頭へ掠らせるように縦1。デイレイはかけずに縦2。そしてホームランを顔面へ。

ホームランは肉質65%のソレへ直撃。スタンプエフェクトと確かに腕へかかるヒットストンプ。

……大丈夫、いける。攻撃を喰らわなければ良いだけ。回避不可の攻撃もない。大丈夫、きつと大丈夫。

正直、滅茶苦茶怖かった。呼吸なんて荒いままだし、自然と溢れてきた涙のせいで、視界も悪い。でも、俺がやりたかったのはこんな戦いだ。

上がるイビルジョーの右脚。横ロリで左足の裏へ。そしてその右脚が落ち、少しだけデイレイをかけてからもう一度ローリングで揺れをフレーム回避。

そしてまた尻尾振り攻撃。つまりチャンス。回ってくる尻尾を躲してから位置を調整。頭が戻ってきたところで縦1始動でホームラン。これで後一発。

てか、ホームラン2回叩き込んで怯みなしですか……いや、まあ、わかっていたけどさ。

半歩下がるイビルジョー。……ヤバイ。

そこからシオルダータックル。喰らえば即乙。冗談じゃない。

どつちに避ける？ 脚の間？ 判定の薄い尻尾？ 相手の行動に頭が追いつかない。もう少しゆっくりしろってんだよ。

祈るように脚の間に向けてローリング。身体に掠るイビルジョーの身体。フレーム回避成功。けれども、生きた心地がしない。

既に視界から色は消え、白黒の世界に。聞こえてくる音だって、自分の出した荒い呼

吸と暴れる心臓のソレだけ。

どう考えたって絶望的な状況。

しかし、ソレが何よりも楽しい。

スタン値の減少は10秒ごと。休んでいる暇なんてない。

イビルジョーの胸元へ入り込み、横振りから縦2。

そしてイビルジョーが一步下がり、丁度ジョーの頭が真上にきたところでホームランをぶち込んだ。

横に倒れこむイビルジョー。

祝、スタン。

スタン状態となりバタバタと暴れるイビルジョー。白黒だった視界も戻り、今はイビルジョーの籠ったような声も聞こえる。

まだ手足は震えるけれど、確かにスタンを取ることができた。

……も、もうちよつとだけ良いよね？　せめて頭部破壊を狙うくらいはやつても良いよね？

バタバタと暴れるイビルジョーの頭へ近づき、縦1始動のホームランを2セット。そして、起き上がったイビルジョーに合わせて、横振り始動のホームランを叩き込んだ。

弾けるスタンエフェクトと同時にイビルジョーの頭についていたトゲのような牙が

壊れた。

っしや！

まあ、破壊報酬はもう一段階壊さないとなんだけどさ……

でも、もう良いです。俺は満足したので。

後はさっさと逃げるだけ。

そう思ったとき、イビルジョーの身体の身体が赤く染まり、背中の筋肉は大きく隆起した。

……えつ、怒るんですか？

現れた時のように天を向くイビルジョー。そして大咆哮。それをフレーム回……失敗しました。

ヤバい、ヤバいと思つているところにジョーさんつてば、シオルダータツクルの準備中。ああ、こりやマズいつすね。

それでもそんな技喰らいたくもないから、先程躲したときと同じように脚の間へローリング。

そこで俺の意識は途切れた。

気がつくくとベースキャンプにいた。

……うん、まあ、こうなりますよね。下位の序盤で作った防具と武器で挑めばそりやあこうなる。それくらいはわかっていた。

それでも、目標は達成することができたのだし、悪い気分ではない。

鉱石系も集めたし、流石にもう一度イビルジョーと戦おうとは思わない。

「……釣りでもするか」

上位クエストならベースキャンプの釣り場でも小金魚を釣ることができたはず。今はまだお金に余裕があるけれど、これから上位一式の防具を作ればそんなの一瞬でなくなってしまう。今のうちにちよこちよことお金を貯めるのだ。

そして機嫌も良く、鼻歌交じりに釣りを続けていた時だった。

あの笛の彼女が救助のアイルールの引く荷車に乗せられ、ベースキャンピングに運ばれてきた。

……こりやあまた、随分と珍しいものを見た気分だ。

「……えと、何があつたの？」

一応そう聞いてみたけど、なんとなくその原因はわかつていた。

「……ハチミツを取ろうとエリア³へ行つたら、何故か怒り状態のゴーヤがいて、スタン取ろうとしたら返り討ちにあつた」

ああ、うん。やつぱりそうだったんだ。

まあ、ジョーさんがいたら戦いたくなつちやうよね。その気持ちわかります。怒つていた原因は俺だけど……謝つた方が良いのだろうか？

てか、ヤバいな。これで俺たちは2乙。もう後はない。

まあ、これは採取ツアーなのだから例え失敗したところでデメリットがあるわけじゃ

……

「あつ、全員揃つた」

そんなことを考えていたとき、彼女がぼそりと呟いた。

うん？ 全員？ それってどう言う……

慌ただしく俺たちの方へ走ってくる救助アイルー。

そのアイルーの引く荷車の上には相棒がいた。

ああ、なるほど、そう言う意味でしたか。

「……何があつたんだ？」

運ばれてきた相棒に聞いた。

「ガ、ガーグアが金の卵を落としたから皆に自慢しようとして運んでたら、何故か怒り状態のイビルジョーがいて吹き飛ばされました……」

ああ、うん。そりゃあ災難だったね。

えっ？ てか、これで俺たちは……

「……残念だけど、これで旦那たちの報酬金は0ニヤ。これ以上は危険だからこのクエストは失敗と判断するニヤ」

アイルーの言葉。

まあ、そりゃあ、そうですね。

この世界に来て2ヶ月と言ったところ。

初めてのクエスト失敗は上位の遺跡平原採取ツアーだった。

第4 1話～心の中でよろしく願います～

「すみませんでした」

初めてクエスト失敗を経験した帰り道。俺と笛の彼女の声が被った。

「えっ、いや、そんな謝らなくても……私もやられちゃったわけだし……」

3人で一回ずつの乙。それで3乙。しかも全員が同じモンスターでソロの時にやられた。仲良死とでも言うべきだろうか。

正直なところ、1回くらいならやられても良いだろうって思っていた。そんな甘い考えがありました。もし俺がイビルジョーに戦いを挑んだとき、既に2乙していたのなら俺がイビルジョーに挑むことは……まあ、あつたかもしれないけれど、その可能性は低かった。

相棒のやられた理由もちよつとどうかとは思うけれど、俺や彼女のように、自分から戦いを挑みやられたわけではないのだから、まだ良い気がする。

そして彼女に至っても、俺がイビルジョーを怒らせていなければ……いや、彼女の性格的にどの道乙るまで戦うか。

あえて言うのなら今回の原因は俺になるのだろう。でもなあ……やっぱり強いモンスター戦ってみたんだもん。こればかりは許して欲しい。

流石に通常クエストでは自重するけど、今回は採取ツアー。失敗しても良いと言う気持ちは人のリミッターを外させる。それに……なんだかんだ言ってイビルジョーと戦っている間はやっぱり楽しかった。それは、武器も防具も揃っていない今しか経験できないこと。確かにやられはしたけれど、アイツからスタンを取ることでもできたのだし、ちよつとだけ自分が誇らしい。

弱い弱いと言われたこの武器でも戦いにはなっていたと思う。それが嬉しかった。

そもそも、そんな考えがいけないのかね？

「ま、まあ、とりあえず、今回で素材も集まっただろうし、良しとしよう」

無理矢理まとめてみる。

これ以上この話を続けると、色々と危ない気がしたから。

「ん……そだね。また次から頑張ればいっつか」

……その相棒さんの単純さが俺は大好きです。たぶん、色々と考えていることはあると思うけれど、そのままの君が素敵だと思う。

そして

——うーん。それじゃ、私は寝るから着いたら起こして。

なんて言つて相棒は夢の世界へと旅立つた。

さらに暫くすると相棒の寝息のようなものが聞こえてきた。俺もジョーと戦うとき無駄に緊張していたからちよいと疲れてる。んく……特に話をするともないし、此処は俺も寝かせてもらおうかな。全員寝てしまったとしても、着いたらネコが起こしてくれるだろう。

そう思い、目を閉じようとしたとき、笛の彼女に防具を引つ張られた。

「どしたの?」

彼女の表情の変化は乏しい。そのせいか、この彼女の考えていることがわかり難い。だから彼女から話しかけられるときは未だに緊張します。

このパーティーになってそれなりの時間は経つたけれど、野郎一人と言う状況は精神的に辛い時もあるのです。一見するとハーレムみたいではあるけれど、この臆病者にとってはそんな状況も其処まで嬉しいとは思えない。

いや、贅沢な悩みだとは思っていますよ?

「……私が戦う前からジョーの牙が壊れてたけど貴方が?」

「あく……うん、まあ、そうだね」

何故かちよつと恥ずかしかつた。

別に恥ずかしかつるようなことではないと思うけれど。

「そっか……やっぱ貴方は上手いね」

いや、それは違うだろう。

この世界へ来てからの時間は長くはないけれど、ゲームはそれなりにやりこんだ。それでいてこんな状況なんだ。本当に上手い奴ならHRが上限解放していてもおかしくない。

そうだと言うのに、未だ俺のHRは4。それも飛び級までさせてもらってなのだから。それに上手さで言ったらこの彼女の方が上手い。もし俺がソロで続けていたら、未だHRなぞーのままだろう。そして、きつとその俺はハンマーを担いでいない。

「俺がアイツの牙を壊せたのは、運が良かったからだよ。だから俺じゃなく、最初に君がジョーと戦っていたら牙は壊せたと思う」

運良く、尻尾回し攻撃を連発してくれたし、シオルダータックルの頻度も少なかった。それに本当ならローリングをせずタックルを躱さなければいけないところ、俺の立ち回りが悪いせいでフレーム回避せざるを得なかった。

初めての相手とは言っても、アレだけ戦った相手。もつと上手く戦えたはず。

「ううん、私じゃ無理だった……だって私はアレと戦ったとき、怖くて身体が動かなかつた」

彼女にしては珍しく、消極的な発言だった。

怖くて……か。

俺はどうだったんだろう。確かに俺だって怖かった。手足は震えたし、呼吸だってアレだけ荒くなった。けれども、それ以上に——楽しかった。

でもそれはこの世界じゃおかしいこと……なのかな。

「貴方は上手い……上手いけれど、ちよつと怖い」

えっ、いや、そんなことを言われましても……えっ？ 何？ 俺ってそんなトリガーハッピー的な目で見られていたんですか？ それは誤解です。至って正常……だと思えます。

「い、いや、だってイビルジョーだよ？ 戦いたく……な、なったりしませんか？」

「そりゃあ、なるけど……でも、いざ戦ってみるとそれでも身体は動かなかった。やっぱりこの世界はゲームと違うから……」

——ゲームと違う。

そんな言葉がやたらと印象に残った。

俺だってわかっているつもりではあったけれど、心の底ではそう思えていなかった……のだろうか。

それが良いことなのか、悪いことなのか今の俺にはわからない。

どうして俺がハンターをやっているのかって考えると、モンスターと戦うのが面白いから。と言うのが一番の理由になる。そしてモンスターと戦う時はやっぱり強い相手の方が面白い。圧倒的に自分が有利な状況も嫌いではないけれど、そんなものは直ぐに飽きる。

……アレ？ それじゃあ、俺ってもしかしてドM？

い、いや、それはいいはずだ。確かに縛りプレイ（エッチな方じゃないよ）も嫌いではないけれど……そ、それでも決してドMってわけではないはずだ。

「私はこの世界に来て一年以上経つ。ゲームと同じことも沢山あった。でも、やっぱりゲームとこの世界は根本的に違う。……貴方はどう思っているの？」

「俺だって、ゲームとは違うと思っっているよ」

たぶん、きつと。

でも、なんだろうか。此処に来て、それもなんだか怪しくなってきた。今まで真剣に考えたことがなかったせい、本当は自分がどう考えているのかがわからない。

「え、えと、もし俺がこの世界をゲームのままだと思っっていたら、それって不味いこと……なのかな？」

「本当はどうなのか私にもわからないけど……私はやっぱりそう思えないから、貴方が

少し怖い」

「じゃあ、どないすりや良いんでしようか……」

怖いって言われても俺は普通なつもりだったんだけどなあ。彼女の言葉にはちよつと傷ついています。メンタル弱いんです。

「でも、貴方はそのままが良いと思う。もし私と貴方が同じ考えだったら、この娘は一人になつちやうから。それはきつと辛い」

……彼女が何を伝えたいのか、やっぱりわからない。

それでも、このパーティーのことを——相棒のことをちやんと考えてくれているんだって思えて、それが嬉しかった。だからそつと笑つてみた。恥ずかしいから彼女に気づかれないよう、そつと。

この世界の人間がNPCにしか見えないと言つた彼女。そんな彼女の目に今の相棒はどう見えているのだろうか？ それが少し気になって。でも、なんとなく答えはわかつたから、やっぱり俺は笑つてみた。

「そつか。結局、どうすれば良いのかわからないけどさ。うん、まあ、このまま頑張つてみるよ」

「うん、私も頑張る」

この会話に意味があつたのかはわからない。

でも、今の自分を否定されはしなかったから、少しでも自信を持つことはできた。

「……ちゃんと装備が整ったら、今度こそゴーヤ倒す」

ふふっ、そうだな。

今回は完敗だった。次に戦うことになるのがいつになるのかはわからない。普通にいけばHRが7となった時はず。そしてその時はきつと3人で戦うことになる。

大丈夫。きつとこの3人なら倒すことができる。負けっ放しのまま進むのは好きではないけれど、これで一つ目標ができたんだ。

それはきつと悪いことではないんじゃないかって思うのです。

目に見える目標があると言うことは良いことなのだし。

……と、とんでもない話を聞いてしまいましたぞ。

彼があのお話を終わらせようとしていたのがわかったから、そんなに眠くはないのに私は寝ると言った。今回は採取をしていただけだから、身体はあまり疲れていない。そんなんだから私は夢の世界へ行くことができなかつた。

そして聞こえてきた、彼と彼女の会話。

話の内容が気にならないと言ったら嘘になるけれど、どうしてか聞いちゃいけない気がして、一生懸命寝ようとした。

でも、寝ようと思えば思うほど私の意識は覚醒して……結局、全部聞いちゃいました。バクバクと跳ねる心臓の音は彼らに聞こえちゃうんじゃないかって言うくらい。いつそ起きてしまおうとも思ってたけれど、そしたらその後の空気がどうなるかくらいわかっていたから、私は寝たふりを続けた。

そして聞こえてきた二人の会話。

この世界とか、ゲームの世界とか、私には理解のできない会話だったけれど……わかつてしまったこともある。

おかしいって思ってた。いくら察しの悪い私でも疑問に感じたことはあった。それでも私からソレを聞いちゃいけない気がして……聞いたことはあったけど深くは探っちゃダメだと思つて……

だから私はあの時、彼から話をしてくれるまで聞かないって言ったし、聞こうとも思わなかった。

けれども、今日私は聞いてしまったのだ。

それが意図的なものではなかったとしても私は聞いちゃったのだ。

二人の会話の意味はやっぱりよくわかんない。

わかんないけど……そっか。そうだったんだ。

ずっとずっと疑問に思っていたことが一つ解決してしまった。

彼は——君はこの世界の人じゃなかったんだね。

そしてきつと彼女も。

どうして彼女がそのことに気がついたのかわからないけれど、だから彼女はこのパーティーに入ったんだろう。そしてあのセリフ。どうして私たちのパーティーに入りたのかって彼が聞いたとき、彼女が言ったセリフ。

そう考えていくと、全部繋がってしまう。そしてその繋がったものはきつと間違えていない。

そうなる、思ってしまうことがあるのです。

あの時、ひたすら前へ進もうと自分に誓った私だけど、考えてしまうことがあるのです。

——私がこのパーティーに居ていいのかなって。

そんな卑屈な考え。

どうしよう……私はどうすればいいのかな？

このまま気づかないフリをし続けていつてもいいと思う。でもきつとそんな未来は辛い……気がする。それなら聞いていたことを言ってしまった方が……

その方がいいのかな……

うん、やっぱりそっちの方がいいよね。

それが正解なのかはよくわかんない。わかんないけど……聞いちゃったことを言う方がいと思う。それがこの二人のためにもなるんじゃないかなあ思うのです。

だから私は一度大きく、でもそつと深呼吸をした。

やっぱり心臓の音は五月蠅い。でも此処は私が勇気を出さないといけないところ。此処で私が喋ってしまったら、私は一人になってしまいかもしれないけれど、きつと一人でもやっていける！……はず。

臆病者の私は今動かなきゃずっと動かない。だから動くのです。無理してゐることはわかつてゐるけれど、私は今動かないとダメなんです！

そして、私はゆつくりと目を開けた。

その瞬間、笛ちゃんと目が合った。

私は慌てて目を閉じた。

うおおおおお!? め、めちやくちやびつくりした！ タ、タイミングがよすぎるよお……い、いやダメだ。此処で引いちやダメなんだ。

てか、もう笛ちゃんに気づかれてしまったんだ。今更どう仕様も無い。

だからもう一度、目を開けようとした時だった。

「……貴方はハンマーしか使わないの」

そんな彼女の声が聞こえた。

あ、あれ？ もしかして私が起きたことに気づいてない？ いやでも、確かに目は合つたと思うんだけど……

「うん？ ああ、これからもハンマーを担ぎ続けると思うよ。この武器が弱いことくら

いわかってる。でも、やっぱりこの武器が一番好きだしなあ」

彼の声。

目を開けるタイミングを完全に見逃しました。

「……この娘のおかげ？」

いやいや、ちよい待って笛ちゃん。

そう言うお話は私が寝ている時にしてもらいたいのですが……だって彼は私が起きていることに気づいていない。だからこれから彼が落とす言葉は彼の本心なはず。

ソレを聞くのは……怖い。

「まあ、それが一番だよな。最初はどうなることかと思ったけど、今じゃ相棒がこのパーティーで一番活躍しているんだ。もし、相棒がいなかったら俺はハンマーじゃなかったって思うよ。だから本当に感謝してる」

……何これ。超恥ずかしい。

いかん、絶対に今の私の顔は真っ赤だ。

「……あの娘に直接言っただけじゃあ、言っただけじゃあ……」

「んなもん、恥ずかしくて言えるか！」

本当に申し訳ないことだけど、言っただけじゃあ……

でも、彼の口から直接そんな言葉を聞いたことは嬉しかった。だって、あの彼の言葉なのだから。ずっと私が憧れていた存在なんだから。

顔がにやけないよう気をつける。でもちよつと罪悪感。もしかして、笛ちゃんわかつてやつてる？

「……もしあの娘がこのパーティーを抜けるつて言った時、貴方は？」

彼女の言葉を聞き——トクリと、今までだって跳ねていた心臓がまた大きく跳ねた。

だってソレは今から私が言おうとしてくれた言葉だったから。

そして、私がその言葉を落とすとき……彼は何て言ってくれるんだろう。

「そりゃあ、止める。俺は今のパーティーでずっといきたい。だからそうなったら辛いだろうなあ……それくらいこのパーティーは気に入っているよ。この3人じゃないならソロでやるんじゃないかな。だからできれば、ずっと居て欲しいけど……まあ、もし相棒がそう言ったら止められないんだろうなあ。それが相棒の本心なら止めることはできないと思う」

そうなんだ……

ストーンと、心の底へ何か落ちた感覚。

心の中でモヤモヤしていた何かもなくなった。

私の本心……なら、か。

私だって本当はこのパーティーを抜けたくはない。でも彼らのためになるなら……なんて思っていた。でも本当は抜けたくなかったから、彼の言葉は嬉しい。

純粹に、心の底から嬉しかった。

「……うん、私もそう思う。貴方とあの娘がいる今のこのパーティーは好き」

「でも、いきなりどうしたのさ？ てか、君だってそれくらいわかっているでしょうに」
「言葉にしないと伝わらないことだってあるから」

……そんな彼女の言葉が誰に向けられているのかはわかった。

彼と彼女の言葉が嬉しかった。

今のパーティー……かあ。

うん、私もそう思います。今、言葉にすることはできないけれど、それは私の嘘偽りない言葉だと胸張って言えます。私もこのパーティーが好きです。

なんだか、彼女の策略へ見事に嵌つちやっただ気がするけれど……うん、今は悪い気分じゃない。

ごめんなさい。ヘタレな私が迷惑かけて。

ありがとう。そんな私を必要としてくれて。

うむ、コロコロと思つていたことは変わつちやつたけど、今日聞いたことは忘れよう。ちよつと無理かもしれないけれど、できるだけ頑張つてみよう。

それが正解なのかはわからない。

わかんないけど、さつきよりはいいんじゃないかなつて思います。

いつか話してくれる日まで私は待ちます。

今日聞いちゃつたけど、それはそつと心の奥にしまつておきます。

きつとこの二人にはまだ私に話すことのできない秘密は沢山あると思う。でも、彼女との言葉を受けたから、もう大丈夫。今までみたいな不安はありません。

だから、これからも一緒に居てくれると私も嬉しいです。

そんな我が儘な私ですが、改めてよろしくお願いします。

誰にも聞こえないよう、心の中でそうそつと呟いた。

第42話～ゴリ押しに山権現～

「つしやー！ 鳥竜玉出た!!」

思わず、大きな声を上げてしまった。だつてたぶん、これでもう倒したドスジャギイの数は9頭目になると思うから。

他の素材は足りていたけれど、玉がなかなか出てくれないせいで、ジャギイSの腕だけ作ることができなかった。けれどもこれで漸く俺も上位の一式防具を身につけることができる。

他の二人はとつくに素材は集めきり、既にジャギイS一式を装備している。そうなることはわかっていたけれど、全員が同じ装備って言うのはやっぱり変な感じがした。まあ、武器まで同じってわけではないからまだ良いのかな？

「おおー！ おめでどうー！」

うん、ありがとう。悪いね、俺のためだけに付き合ってもらっちゃってさ。

この相棒にも、笛の彼女にも随分と長い時間付き合ってもらってしまった。出ないものは仕方無いけれど、やっぱり申し訳ない気分になる。

さて、これで漸く上位防具一式を装備することができ。だから次は武器を作っていたいわけだけど……俺の場合、山権現があるから当分は問題ない。

そうなると彼女の笛か、相棒の操虫棍になる。そして彼女は既に加工屋へマスターバグパイプを依頼していると言っていた。相変わらず仕事の早いことで。

つまり、次にやらなければいけないのは相棒の操虫棍を強化することだけど……操虫棍ってホント、武器の種類が少ないんだよね……

今使っているスニークロッドを強化するのが一番だとは思うけれど、そのためにはレビテライト鉱石が必要。そしてそのレビテライト鉱石は天空山でしか出ない。現時点じゃ上位の天空山へ行くことはできないから、下位の天空山のクエストへ行くことになるのだけど……正直、面倒なんです。

いや、行った方が良いのはわかってるんだけど、此処までテンポよく進んで来たのにそれが戻ってしまうようでちよつと嫌だった。それに天空山って遠いらしいし。

むう、飛び級した弊害がこんな形で出るとは思わなかった。でも相棒の武器を強化するのが、このパーティーの火力を上げるために一番大切なんだよなあ……そうなるത്アサルトロッド？ むう……毒と睡眠を比べた時、どっちが良いんだろうか。最終的にはヤマタになると思うけれど、それまでが難しい。

どうしたものか……ま、正直なところどっちでも良いのだし、本人が好きな方を選べ

ば良いか。きっとそれが一番なはず。

そんな考え事をしながらドスジャギイから更に剥ぎ取り。そう言えば、これでもうコイツと戦うことはないのか。

たぶん、このドスジャギイはイヤンクツクの次に俺が倒したモンスターなはず。

「ありがとう。いただきました」

そして剥ぎ取りを終え、最後の挨拶。

これからドスジャギイと戦うことはないと思う。俺が初めて会い、初めて倒されたモンスター。それも此処でお別れ。上位のドスジャギイと初めて戦った時は薦ハメを使った。けれども、あの後どうにもまた薦ハメをやる気にはならなかったのと、薦エリアへの誘導が上手くいかないせいで、結局薦ハメを使うことはなかった。

そのせいで、どうしても討伐にかかる時間は増えてしまったけれど、やっぱり俺にはこっちの方が合っているかもしれない。ハメが悪いとは思わないけれどさ。

うん……ありがとう。お前のおかげで俺は此処まで来ることができた。

感慨深いこともあるけれど、そんないつも通りの言葉を落とす。お前に倒されてからそれなりの時間は経ったけれど、自分はちゃんと前に進んでいる。これからも止まるつ

もりはない。

さようなら。

お前からもらったこの素材、きつと大切にさせていただきます。

「これからはどんどん上位のモンスターと戦っていくんだよね？」

遺跡平原の帰り道はこのパーティーでは珍しく特に会話もなく、さつさと皆して眠ってしまった。

そしてバルバレに戻り俺の防具を加工屋に頼んだ後、例のごとく相棒がせつかくだから飲もうと言ったので、3人仲良くいつものように打ち上げ。そしてお金がホントにピンチです。護符が買えません。

まあ、これで防具も揃ったのだし、今のところは良しとしよう。

「そだね。でもとりあえず君の武器を強化しないとかな」

クエストで疲れた身体に冷たいエールは良く染みる。

ビール美味しいです。

「強化……スニークロッドの？」

「うん、それでも良いし、新しいのも良いし」

本当にそれはどっちでも良い。毒と睡眠どっちが好きなのかで選ぶくらいで良いんじゃないだろうか。必要になるのはどの道ネルスキュラ素材。

ただ、スニークロッドを強化するのなら下位の天空山へ行かないとってだけ。

「それってどっちが良いの？」

それはなんとも言えないです……

んく……どっちが良いのだろうか。ゲームをやっていた時はヤマタしか担がなかったせいで、どっちが良いのかわからない。

「君の好きな方で良いよ」

だからぶん投げました。

だって、俺もわかんないんだもん。

「えー、それはちよつと怖いよ……ねえ、笛ちゃんはどうした方がいいと思う？」

相棒がそう尋ねると彼女は、えっ、私に聞くんですか？ 的な顔をした。それがちよつと面白かった。でも、ちゃんと会話に参加してください。

そう言えばこの彼女は操虫棍を使ったことはあるのだろうか？ ゲームの中や、この世界で。

「新しい武器って言う……アサルトロッド？」

そんな彼女の質問。

「うん、そのつもりで喋ってたけど……他って何かあったっけ？」

あるとしたら、キリン棒やソリッドグレイブとかになるのかな？ でもキリンとは戦えないし、ソリッドグレイブは……うん、まあ、武器が武器なのだし弱くはないと思うけど、ちよつとなあ……

ヤマタが強すぎるせいか、他の操虫棍の印象がどうしても薄くなる。

「えと……今の段階じゃ特にないと思う。アサルトロッドで良いんじゃないかな」「わかった、じゃあソレにする」

彼女の言葉を聞き即決した相棒さん。

知識の差的に俺たちの意見を参考にするのは良いことだと思うけど、もうちよつと我が儘を言っても良いんだけどなあ……ただ、アサルトロッドを選んだことが間違っているわけでもないから難しいところですよ。

「了解。んじゃあ、次はネルスキュラだな」

上位のネルスキュラって行動パターン変化したかな。ん〜……ちゃんと覚えてないや。まあ、なんとかなるか。

「君の武器はいいの？ その武器って確か下位の武器でしょ？」

いや、まあ、俺だって強化できればしたいけど……ブーステッドハンマーには下位のゲネル・セルタスの素材が、ファッティプッシュを強化するにしてもレビテライト鉱石が必要なんです。山権現に至っては上位のダレン素材が必要だからかなり先のこととなる。

それに山権現だって弱いわけじゃない。斬れ味が青まであるのは大きいです。だから、行けるところまではこれで行きたい。

「まあ、俺は当分大丈夫だよ」

俺がそう答えると、相棒は少しだけ不満そうな顔をした。

あら、もしかして逆に気を遣わせてしまったのだろうか。でもなあ、例え俺の武器を強化したところで、滅茶苦茶強くなるかと言うとそうではないのですよ。ファッティプッシュをヘビープレッシャーまで強化すればそれなりに強くは……たぶんなる。でも、其処まで強化するのはまだ無理だったりします。

それに俺の防具の素材を集めるため、二人の進行を妨げてしまった。そんなことも気

にしているのです。

「むう……また遠慮してるでしょ？」

「してない、してない」

本当はちよつとだけしてます。

でも、作る武器がないと言うのは本当のこと。操虫棍と比べてハンマーを武器の種類が多い。多いのだけ……まあ、アレだ。現時点で作ることのできるハンマーって全部似たり寄ったりなんです。そんなところも不遇だと思う。

「じゃあ、いいけど……でも、別に私は君のためだけにクエストへ行くことを気にしないよ？」

「……私も」

ああ、いや、それは嬉しいけど……本当に今回は大丈夫なんです。

あ、あう……ちよつと恥ずかしい。

「うん、ありがとう。でも今回は大丈夫だから、そだね……次に防具を作るとき、よろしくお願いします」

色々と悩んだけれど、どんな防具を作るのかは決めました。

その時は下位のクエストへも何度か行かなきゃいけないことになる。その時、改めてお願いします。

「ま、とりあえず今は相棒の武器を強化しよう」

なんとも恥ずかしかつたから、やっぱり無理矢理話をまとめた。

きつと顔は赤くなっていると思うけれど、それはアルコールのせいだと信じた。うむ、やっぱり俺にはもつたないくらい良いパーティーです。

上位のネルスキュラならドスジャギイのようにはいかないと思う。ああ、でも防具もあるし割と簡単な気も……う、うんまあ、油断せずにいこう。

「了解！」

「……了解」

とりあえず防具は揃った。

当分はこれで進むことはできるはず。もし止まるとしたら……ブラキから先だよね。それまでにはなんとか防具も組んで、俺の武器だつて強化しないとだ。

そして、それはまだまだずっと先のことだけど……相棒の防具、どうしよう。

第43話く代わりに我が儘く

「ネルスキュラって……あの蜘蛛みたいなモンスターのことだよな？」

原生林へ向かう馬車の上、相棒がぼそりと呟いた。そしてその顔は少しばかり不安そうにも見える。

今回のクエストはネルスキュラ一頭の討伐。クエスト名は「ネルスキュラに愛を込めて」。蜘蛛好きな依頼主がネルスキュラへ頬ずりをしたいんだってさ。頭おかしい。それにギルドもそんな依頼受けるなよ……

「うん、そうだよ。俺たちがHR1から2へ上がる時に倒した奴」

脚の数がちよつと足りないけれど、一応蜘蛛らしい。

まあ、いかにもつて感じの糸を出すのだし、蜘蛛じゃなければなんだと聞かれると、答えられそうにもないんだけどさ。

以前戦ったのは……もう1ヶ月くらい前のことだろうか？ あの時とは地底洞窟だったけれど、今回は原生林。それに今は笛の彼女もいるのだし、状況はかなり違う。

そして何より今の俺は上位防具。腕はまだ完成していないけれど、防御力は以前の3

倍。負ける気がしません。

「うーん……ネルスキュラってちよつと苦手」

まあ、アイツ乗り難いもんね。

でも、頭怯みで大ダウンしてくれるところとか、スタン耐性が其処まで高くないところとかは好きだよ。

上位となり、毒攻撃が猛毒攻撃に変わったけれど……あとは、特に変わったことはないはず。ジョーとかに乱入される危険はあるけれど、そしたらネルスキュラにこやし玉を当て、6番へ誘導すれば問題ない。

「私の新しい武器って素材結構必要かな？」

いや、流石に必要な素材数までは……でも2回ほど行けば足りると思う。だから本当は2頭クエストを受けたかったのだけど、残念ながらありませんでした。まあ、ゲームでも今から行くクエストをクリアしないと出ないし仕方無い。

それにしても、なんだか相棒がネルスキュラと戦いたくないように見える。

んー……ああ、そう言えば前回戦った時も、嫌そうな顔をしていたような気がするぞ。そっか、ネルスキュラは嫌いだったのか。フルフルを可愛いか宣うこの相棒のことだから、好き嫌いの基準がわからないけれど、どうやらネルスキュラは苦手らしい。

「……運がよければ1回で集まると思う」

そんな笛の彼女のセリフ。

あら、そうなのか。もし1回で集まってくれるなら嬉しい。えっ？ てか、この彼女はアサルトロッドの必要素材数とか覚えているのか？ そりゃあ、すごいな。俺なんてハンマーですら素材数まで覚えているのは少ないのに。

「ホント？ はあ、1回で集まれば良いなあ……」

たぶん、この相棒なら集まる気がする。

何か俺の分の運を吸ってそうだし。そうとでも思わないと納得できん。

さて、原生林まではまだまだ時間がかかる。だからちよいと寝させてもらおうかな。

「っしや、それじゃ行くか！」

「おおー！」

「おー」

いつも通り大きな声を出した彼。

ネルスキュラの初期エリアは確か2番。彼女がネルスキュラが苦手だつて言っていたけど、私もあまり得意じゃない。虫、嫌い。

でも、これで彼女の操虫棍ができるから私も頑張ります。

マスターバグパイプも完成し、これで私は防具と武器が上位装備になった。負ける要素はないはず。それに今はソロじゃなくてパーティー。それが一番大きいかな。

「前回と同じよう、できるだけ上段で」

「了解！」

「……了解」

エリア2へ着くと、カサカサとした音が聞こえた。

ネルスキュラの動きは速い。隙もなかなかないからどうしてもゴリ押しになっちゃう。もうちよつとゆっくり動いてくれても良いのに。

薦を使って上段へ上がってからとりあえず自分強化。ガララ笛よりは笛っぽい音になったのかなあつて思う。

「赤は頭、白は脚と爪、橙は胴体。乗り頼んだ！」

「は、はい！」

いつも通りの彼と彼女のやり取りが聞こえた。やっぱりこの二人は良いコンビだと思おう。

前方攻撃からデイレイをかけて後方攻撃で頭を狙う。当たって怯めば大ダウン。まあ、なかなか当たらないのだけ……

彼の立ち位置を確認して私の攻撃が当たらないよう、連音攻撃で旋律を調整。そして、私の方を向かないことを祈りながら攻撃力強化「大」。上位武器となつてから、やつと「大」を演奏できるようになった。

マスターバグパイプの見た目はそこまで好きじゃないけど、旋律は優秀。

「ナイス、助かる」

彼の声。

私が演奏する度に彼はそう言ってくれる。それがちよつと嬉しい。

「の、乗ったぞー」

ぐうれいと。

難しいと思うけど、頑張つて。

あの娘が乗りを頑張っている間、柄攻撃、連音攻撃、もう一度柄攻撃で旋律を合わせ

てから防御力強化〔大〕を演奏。

これで私の仕事は終わり。あとは効果を切らさないようにすることと、ひたすら頭を狙うだけ。

「せ、成功です！」

大丈夫、ちゃんと見てたから。

最近是她女も乗りを失敗しなくった。ネルスキュラって結構難しいと思っただけど……うん、ナイスです。

身体を薦へ半分埋めた状態のネルスキュラの頭へとりあえず後方攻撃。どうせ直ぐ下に落ちるから無理はしない。それはちよつと面倒だけど、下で戦うよりは良いと思う。

そして彼のカチ上げが入ったところで、ネルスキュラが下へ落ちた。それに続いて私も下へ。

うーん、そろそろスタンを取る気がする。頭は彼に譲り私は止めておこうかな。

そう考えお腹へ行くと彼がいた。あら、気が合いますね。どうやら考えていたことは同じだったみたい。

じゃあ私が頭へ行けばいいかと思いい頭へ行くと、また彼がいた。

……き、気が合いますな。

「……頭お願い」

「お、おう」

初めから言葉にすれば良かった。

連携って難しいね。

そして、乗りダウンからネルスキュラが立ち上がったところで本日は一回目のスタン。

流石です。

ネルスキュラのスタン中は爪が邪魔になってしまうから、流石に彼と共存はできない。だから私はスタンを取ったあとも、あの娘と一緒にネルスキュラのお腹を叩き続けた。頭はお願いします。

結局、このクエストも体力がなくなる人はいなかった。

強いて言うのなら猛毒をくらい、解毒薬を忘れたらしい彼がちよつと危なかったぐらい。解毒薬くらいいつも持ち歩けば良いのに。

あと途中でネルスキュラの餌が乱入してきたけれど、その時はネルスキュラもエリアチェンジしようとしていたし、問題なかった。でも、ゴーヤが乱入してきたらちよつと

まずかったかもしれない。アレとは当分戦いたくないかな。

結果的に2スタんと2乗り。そしてたぶん5分針。ぐうれいです。

「おぉー！ 倒したー！」

嬉しそうに大きな声を出した彼女。

この娘も日に日に上手くなっている気がする。このパーティーでは一番の火力要員。色々と思っていることがあるとは思うけれど、どうかこのパーティーを抜けないでもらえると嬉しい。

「っしや、終わった。んゝ……お疲れ様」

うん、お疲れ様。

……私たちがゴーヤにやられた帰り道。あの時、確かに彼女は起きていた。そして私と彼の話を聞かれてしまった。その時は、やつべーよ、聞かれちゃったよ。なんて思いかなり慌てた。

そしてあの娘の性格を考えると、どうせまた私たちに無駄な気を遣ってしまう。それがわかって、それが嫌だったから、何も気づいていない彼にどうにか喋らせた。恥ずかしいこと言わせちゃって、ごめん。でも、その代わり彼の言葉はあの娘にはちゃんと届いたと思う。

だから、結果的にそれは正解だったんじゃないかな。

私と彼の話を聞き、あの娘がどんなことを考えたのか詳しくはわからない。でも、とりあえずは私たちの思っていることを知ってもらえたんじゃないかと思う。

このパーティーは好き。

この3人のパーティーが好き。でも、私以外の二人は我が儘を言わないから、自分の感情を殺してしまうから、ちよつとしたすれ違いだけで壊れそうになる。

だから私が頑張ってみる。私は我が儘にこのパーティーを壊さないように頑張る。私と彼の話を聞いたあの娘が今、どんな思いを持っているのかはわからないけれど、こうやって今もパーティーを続けてくれているのだし、たぶんそう言うことなんじゃないかな。

二人が遠慮しているせいで、どうにもバランスが悪いから私が上手く調整するので。そう言うことは苦手だけでも、たぶんそれは私にしかできないこと。だから頑張る。それくらいこのパーティーが好き。

それは随分と我が儘なことだとは思うけど、それで良いのだ。二人が我が儘を言わない代わりに私が我が儘になる。

私と彼がこの世界の人間じゃないことをあの娘は知ってしまった。そして、そのことを彼は気づいていない。

う、うーん……その辺のことを考えるとなんだか複雑。たぶん、一番大変なのはあの

娘だと思う。でも、私からそのことを聞くわけにはいかないから……これは大変だ。

相談とかしてくれれば良いけど、どうせしてくれない。いつかバレてしまうとは思っていたけど……うん、頑張ろう。

本当は彼がもうちよつとあの娘に言っただけで良いのだ。でも、彼も彼で口下手で恥ずかしがり屋なところがあるからそれも難しい。私が言えたことじゃないけど、彼も頑張つてほしい。

他人とコミュニケーションを取ることが苦手な私。そんな私が今はなんとも板挟みのような状況だけど、どうしてなのやらそれがそれほど嫌だとは思わなかった。

むしろ、今の状況はちよつと楽しい。

あれ？ 楽しい……？ そんな歪んだ性格ではないと思っただけ……どうしてだろう。

……うん、まあ、考えてもわかんないよね。

でも、それもそれで良いのです。今は3人とも他の人には言えない色々なことを持っているんだと思う。

そして秘密を抱えすぎるのは良くないと思うけど、それくらいの方が良いのかなあつて最近思うようになりました。

詰まるところ、これからもよろしくお願いします。

第44話〈再会は明後日〉

「ほっほほ。上位ハンターとなっても順調みたいだね」

原生林からバルバレに戻り、報酬を受け取ってから相棒の武器を作るために加工屋へ行こうとした時、ギルドマスターに捕まった。

声をかけてくれるのは良いけれど、お話は短くしてくれると嬉しい。いくら防具が揃ったとは言え、上位ハンターとなつてから倒したモンスターはドスジャギイとネルスキュラだけ。焦つたところで仕様が無いけれど、できるだけ早くHR5となり上位の氷海や天空山へ行きたい。

「まあ、今のところはね」

「うむ、よきかな、よきかな」

順調とは言つても、防具はジャギイ装備で武器だつて強いわけじゃない。まだまだ駆け出しの上位ハンターと言つたところ。

「そんなキミたち宛に『緊急クエスト』が届いたよ」

……うん？ 緊急クエストですと？

「……それは流石に早くない?」

笛の彼女の言葉。同感です。

流石にこれは早すぎる。防具も揃ったわけだし、悪いことではないけれど……

「うん、確かに早い。けれども、前も言ったように今はとにかく上位ハンターが不足しているんだ。そしてタイミング悪く、そろそろ地底洞窟の火山が活動を始めると言う報告が入った。だから此方としても直ぐにHR5以上のハンターが欲しい。そんな理由でキミたち宛に緊急クエストが届いたんだよ」

ふむ、どうやらギルドもかなり苦労していそうだ。

そして地底洞窟の火山がねえ……つまり地底洞窟は地底火山へ変わるってことだろう。地底火山には厄介なモンスターが多い。ブラキとかブラキとか……

流石にこの装備でブラキはキツイです。即乙だつてあるかもしれない。

さてさて、どうしたものか。話の内容的に地底洞窟はまだ火山マップとはなっていないってことだろう。そうなると、この緊急クエストは……ゲーム通りレイア亜種になるのか? 苦手な相手じゃないけれど、ジャギイ装備つて良く燃えるんだよなあ……

「それで、その緊急クエストの内容って何なんですか?」

あら? 珍しく相棒が怯んでいない。

もうちよつとわたわたするのかなと思つたけど……

「ゴア・マガラの狩猟だよ。ゴア・マガラは非常に謎の多いモンスターだ。どうやら狂竜化ウィルスと関係があるみたいだけど、今のところ詳しいことは全くわかっていない。けれども、危険なモンスターには違いない。そこでキミたちに頼みたいんだ」

おっと、そっちが来たか。

ん〜……そっか、飛び級をしたせいかな俺たちは下位でゴア・マガラとは戦っていないもん。何処かで戦うだろうとは思っていたけどさ。

ゴアなら今の装備でも、なんとかなる気がする。ゴアは決して弱い相手じゃない。それでもちやんと装備さえ整えれば負けないはず。だから、せめて相棒の新しい操虫棍が完成するまで待っていてもらいたい。

「それは何時までに受ければ良いんだ？」

「そうだね。遅くても10日以内にはお願いしたいかな。とは言っても断つてくれても構わないよ」

10日……それならもし素材が足りなかったとしても、またネルスキュラのクエストに行く時間と、武器が完成するのにかかる時間はありそう。俺の防具は今日中に完成するはずだし、それならなんとかなるかな。

さて、俺は此処でHR5となってしまうところだけど……他の二人はどうなんだろうか。

「どうする?」

「……私は大丈夫」

彼女の声。

「うん、私も大丈夫だよ」

相棒の言葉。

そんな言葉には少し驚いた。でも、無理をしているようにも見えはしなかった。何かあったのかな?

「了解。それじゃあ、その緊急クエストを受けるよ。準備ができたらかこつちからまた声をかける」

「ほっほほ。うん、待っているよ」

さて、これで次にやることが決まった。

相棒の武器が完成したら直ぐに行きたいところだけど……一つやりたいことがあった。本当は今回のクエストで集まってしまうれば楽だったんだけどなあ。そしてそれは一人で問題なくできること。

だからちよいと時間をくれれば嬉しいけど。

「とりあえず、加工屋へ行くか」

「うん、そうだね」

ま、これで素材が足りなければもう一度ネルスキュラへ行くことになる。

それでネルスキュラへ行くことになれば、俺の欲しい素材だつて手に入るだろうし丁度良い。」

「ああ、アサルトロッド改だな。確かに素材は受け取った。明後日の夕方までには完成させておくよ」

……素材足りちゃったよ、おい。

ホント、どうなっているのだろうか。いや、決して悪いことではないけれど、簡単に集まりすぎじゃない？ 妖怪イチャリナイが全く仕事しない。物欲センサーどこ行つたよ。

ああ、後俺の防具も受け取りました。これでジャギイS一式が揃い、俺も晴れて上位防具です。

「えと、それでこれからはどうするの？」

相棒の声。

さて、どうしようか。俺はちよいと行きたいクエストがあるのだが……

「どの道、相棒の武器が完成するまで待たないとだけど、それまでは……何か行きたいクエストってある？」

「……ノヴァクリスタルって今の段階で採取できたっけ？」

ああ、うん、確か原生林と地底洞窟の……いや、ダメか。そう言えば秘境行けないじゃん。採取できないわ。むう、ノヴァって地味にレア鉱石だよ。それでいて色々な装備に要求されるし。

まあ、獄炎石よりはまだマシかもしれない。

「現状じゃ採取は無理かなあ。だからゲリヨスからになると思う。何に使うの？」

「……クロムメタル」

ああ、腰の胴系統倍化か。

俺は今のところ使う予定は無いけれど、いつか使うよなあ。最終的にはグリードやバングスになるとは思うけれど、それまでだって使うかもしれない。

あと、完全に俺の趣味だけど、腰の胴系統倍化はクロムメタルコイルが一番好きだ。女性のクロムメタルコイルとか本当に好みです。二人には是非装備してもらいたいと思わないでもない。

「……じゃあ、私は上位のドスゲネポスくらい。貴女は？」

「私は特にないよ。てか、何を作ればいいのかわかんないもん」

まあ、相棒はそうだろうな。いつかちゃんと装備だつて考えてあげないとだ。んで、彼女はドスゲネポスカ。んく……記憶が曖昧だけど、ガララ笛にドスゲネポス素材を使った気がするし、たぶんそのためだろう。

ドスゲネポスなら……二人でも行けないかな？ 動きが早く鬱陶しいけれど、しっかりと動きを見れば強い相手では無い。相棒だつてドスゲネポスが相手なら3色集められるだろうし。

「あー……その、ですね。一つ提案しても良いですか？」

「そりゃあいいけど、どしたの？」

このメンバーなら俺のクエストを手伝ってくれるとは思う。でも下位クエストで、しかも旨味なんてほとんどないものに連れて行くのはちよつと申し訳ない。

「俺は下位の氷海へ行きたいんだけど、一人でもクリアできるだろうし、君達が行つてもメリツトがほとんどない。だから俺一人で行こうと思つていますが……ど、どうですか？」

「……目的は……」

「つぎは……」

前回の報酬を受け取ったとき、回避性能6スロ2と言う、俺には珍しくかなり良いのが出てくれた。回避性能があれば世界が変わる。だから今はうさぎの腹甲が欲しいところ。

「……わかった。じゃあ、私たちはドスゲネポス行ってくる」

おおー、良かった。

俺が行ってもドスゲネポスが相手じゃほとんど戦力にならないだろうから、助かります。ハンマーは小さい相手との乱戦が苦手なんです。

「んじゃあ、暫くの間は別行動ってことで。明後日の夕方には俺も戻っているだろうか、その時にまた会おう」

できれば2頭クエストへ行きたいけれど、例えば1頭クエストで流石の俺でも、一回行けば素材は足りるはず。そして回避性能がつけばこれから一気に楽になる。ゴアなんかは特に。

「うーん……了解。それじゃあ私は笛ちゃんと一緒にクエストへ行けばいいんだよね？」

相棒も何かを言いたそうではあったけれど、どうやら納得してくれたらしい。悪いね、せつかくのパーティーなのに、別行動をとっちゃって。

「うん、そうだね。ま、二人ならドスゲネポスだつて倒せると思うよ」

この二人は普通に上手い。

それこそ、今の状態でもゴアを倒すことができるんじゃないだろうか？ 俺も足を引つ張らないよう頑張らないと。

うん？ ああ、でもこの二人だけでクエストへ行くのって初めてなのか。まあ、仲だつて悪くないだろうし、問題は無いと思う。ただ、どんな会話をするのかちよつと気になるかな。俺の悪口で盛り上がらないことを願う。

「そんなじゃ、サクツと行つてきたいから俺はもう出発するわ」

なんでウルクススさんつてば遺跡平原に出ないんだろう。そうすればもう少し楽なのに。ゲームならイベントクエストとかもあり、闘技場でも戦えたんだけどなあ。まあ、無いものをねだつても仕方無いか。

「えっ？ もう行くの？ 別に急ぐ必要はないと思うけど……」
だつて氷海遠いんだもん。

それにやりたいことが決まっているのに、動かないのはどうも性に合わない。止まっていることが苦手なんです。

「ま、大丈夫だよ。行くときに寝れば疲れだつて取れると思うし」

「そうかなあ……気をつけてね」

そちらこそ頑張ってください。

それじゃ、また二日後に。

なんて言葉を落とし、手を挙げてから二人と別れた。

さてさて、久しぶりのソロクエストだ。それをちよいとばかり楽しんでいる自分がいます。

第45話く滑空へホームランく

「君ってどう言う防具にするの？」

原生林へと向かう馬車の上で彼女に質問した。

先日は久しぶりのソロでクエストへ行つたわけだけど、何と言うか……まあ、やっぱり少し寂しかったです。クエストは問題なくクリアでき、装飾品を作ることもできました。でも、ソロと言うのは精神的になかなか疲れる。それが良いことなのか、悪いことなのかはよくわからない。

けれども、回避性能のスキルをつけることができたわけだし、行つて良かったとは思っている。これでフレーム回避がかなり楽になりますな。

彼女たちも問題なくクエストをクリアできたと言っていたし、やはり別れて良かったかもしれない。それにしても、二人はどんな会話をしたんだろうなあ。

「頭がディア、胴ナルガで腕はグラビ。あとは胴系統倍化にする」

えと、それでつくスキルは……匠、回避性能とあとはなんだろうか。まあ、スロットは沢山あるし、他にも色々につきそうではある。でも、ディア素材って確かブラキ素材

と交換だったよなあ……うん、頑張ろう。

「貴方は？」

「ゴアゴアにしようかなって思ってる」

すごく良く燃えるけれど、当たらなければ良いのだ。匠挑戦者はそれ以上に価値がある。挑戦者を付けるための装飾品を作ることができればもつと選択肢はあつただけどなあ。

いつそナルガ倍化もありかなとは思った。でも、やはり火力は欲しい。あと、スカルヘッドはちよつと……

ふむ、彼女はナルガ胴を装備するのか、人気もあるし俺だって可愛い装備だとは思うけれど……

「……どうしたの？」

こてりと首を傾げられた。そんな彼女の身体の一部に自然と視線が移る。

今はジャギイ装備だからそれほど目立ちはしない。でも、ナルガ胴装備となるとそうはいかないだろう。

「……いや、なんでもないです」

彼女がそのことを気にしているのか、気にしていないのかはわからないけれど……

まあ、余計なことと言わないに限る。

それにほら、全員が全員大きい方が好きってわけでもないのですよ。うん、だから頑張れ。

俺、個人的な意見だと、ないよりはあった方が良いです。

「ねえねえ、ゴア・マガラってどんなモンスターなの？」

それと比べてこの相棒の方は……いや、もう考えるのは止めよう。そんなことを考えたところで誰も得をしない。

「ん……身体は黒くて、口から濃い紫色の奴を吐き出すよ。あと飛ぶ」

「なにそのバケモノ」

いや、化物ですし。

分類的には、確か飛竜でも古龍でもなかったと思う。まあ、動き自体はシャガルと変わらないのだから、もう古龍で良い気がするけど。ああ、でもアイツは罠にかかるのか。それじゃあ古龍と認めるわけにはいかんな。

一応、設定上はシャガルの未成熟個体だったはず。でも、今のギルドは其処までのことをわかっていないと思う。あと、シャガルと違って閃光玉は効かない。どうやらゴアには目がないらしい。

「ブレスと土下座にさえ気をつければ大丈夫だと思っよう」

「土下座?」

うん、土下座。叩きつけとか、倒れ込みなんて言われることもあるけれど、土下座が一番しつくりくる。予備動作がわかりやすいし、当たることはほとんどないと思うけれど、当たるとすごく痛い。

あと咆哮のフレーム回避が難しいかな。判定自体は短いけれど、やたらと出が早いです。他のモンスターと同じタイミングでフレーム回避をしようとするともまず失敗する。

「う、うゝん、よくわかんないけど、そんなに強いモンスターではないの?」

それはどうだろうか?

流石に俺は慣れたけれど、初見はとてもコロコロされた。懐かしいなあ。

「弱い相手じゃないよ。今まで戦った相手の中じゃ一番じゃないかな」

正確に言うところジョーが一番だろうけれど、アレはノーカン。

「あつ、やつぱり?」

てか、これから戦っていくモンスターで弱い相手なんていないと思う。モンハンはこのからがキツイ。

だからこそ面白いのだが。ぬるま湯に浸かったままじゃあ、面白くない。

このクエストをクリアできれば、HR5となり活動範囲はさらに広がる。うむ、楽しみだ。

彼女たちと軽く会話をし、一眠りして暫くすると原生林へ着いた。

「つしや、行くか!」

「おおー!」

「おー」

そんないつも通りのかけ声。うん、やっぱりパーティーの方が気合の入り方も違う。ゴア・マガラの初期エリアは5番。ウチケシの実を持ってきた方が良かったかなあ。なんて考えながら、ゴアの初期エリアを目指す。

そして、2番から5番へ入ると直ぐにゴアの姿を確認できた。

「なんか……黒いね」

相棒の声。他に感想はなかったんだろうか。まあ、パツと見どんなモンスターなのかよくわからないし、仕方無いと言えば仕方無いかもしれない。

そして俺たちに気づくゴア・マガラ。目が会うことはないけれど、しつかりと此方を向いている。

「赤は顔、胴体と翼が橙、脚が白。乗り頼んだ」

いつも通りエキスの場所を教えてから、とりあえずカチ上げ。弾けるスタンエフェクト、僅かにかかるヒットストップ。頭を狙いやすいのは好きだけど、スタン耐性の上昇値が高いのはいただけくない。

3スタン取れるかなあ。

カチ上げた後、少しだけデイレイをかけてから発見時の咆哮を回避。

いつもなら、こう……咆哮の振動が肌に触れるかなあつてくらいでローリングをするけれど、ゴアでそれをやると間に合わない。何故かコイツだけタイミングが違うんです。それでいて、触角が生えた時の咆哮はまたタイミングを変えてくるからちよつと苦手。

でも、今は回避性能がある。以前よりは確実に戦い易くなったと思うんだ。

フレーム回避後、直ぐにハンマーを右腰へ構えてもう一度カチ上げ。気をつけるのはほぼノーモーションの突進と、バックジャンプで風圧を喰らってからのプレス。

なんて思っていると、早速突進が直撃した。

無理です。頭の前にいるとどんなに頑張っても避けられません。せめてもう少しだけ突進の予備動作があればなあ。

「この黒い霧みたいな奴ってなに？」

相棒の声。

ゴアさんからの素敵な贈り物です。ちよつと入って斬るだけで会心率が上がる素敵なものだよ。

……相棒へ事前に教えておくの忘れてました。

「その霧に当たったら、モンスターを攻撃しまくれ！ そうすれば強くなるから」

発症したらちよつと不味いけれど、エリアチェンジでもされない限りは大丈夫。一度でもダウンを取れば直ぐに克服できる。

とりあえず、回復薬を飲んで喰らった分を回復。そしてガッツポーズしていると、もう一度ゴアの突進が直撃した。それホント、やめてください。

もう無視して戦ってやろうと思わないでもなかったけれど、命は大事にいききたいから仕方無しに回復薬を飲み込んだ。

さて、反撃開始だ。

ゴアは決して弱い相手ではない。

そんなことはわかっていたし、油断していたわけではなかった。けれども、どうにもその日は色々々々噛み合わなかった。

そして、そろそろスタンが取れるかなあつて思ったとき、急にゴアの動きが止まった。うん？ こんな動きあつたかだろうか。

そんな様子のおかしいゴアへ、カチ上げを決める直前にわかった。

ああ、そう言えば相棒つて今、睡眠武器じゃん。

ヤバいと思ったときにはもう遅い。俺のカチ上げがゴアの頭へ直撃し、本日一回目のスタンを奪った。

「…………ごめんなさい」

今は謝ることしかできやしない。

「…………ごんまい」

取ってしまったものは仕方無いから、彼女と立ち位置が被らないよう動いてからスタンをしたゴアへハンマーを振り下ろした。

むう、睡眠爆破もつたいなかったなあ。どうにかもう一度眠らせてくれないだろうか。

スタンプが解け、起き上がったゴアの咆哮。

ホームランの硬直が残っていたせいで、フレイム回避失敗。さらに、今までは翼に見えなかったものを地面に置いてから、もう一度咆哮を上げた。

その瞬間、視界は一気に暗くなり、あの霧のようなものが漂い始めた。

なんか触覚は生えだし、6本脚だし、なんとも不気味な姿となってしまうたけれど、頭の肉質は各段に柔らかくなる。あと俺がシャガルと戦うのに慣れているからだろうけれど、この状態の方が戦い易い。

「……なにこれ、超怖い」

かなり引き気味の相棒さん。

どうやらゴアは可愛くないらしい。

さてさて、俺が欲しいのはその触覚だ。これからの防具のために破壊させてもらおうじゃないか。回避性能もあるし、此処は多少の無理ができるはず。

とりあえず、触角へ攻撃しようとしたとき、シューと何かを吸い込む音が聞こえた。

それを聞いてから直ぐにローリングで距離を取る。流星に拡散プレスは喰らいたくはないです。

「えっ? えっ? な、なにが起こるのですか?」

ゴアの顔の前でわたわたしている相棒の姿。

……何故お前はそこにいる。

そして、黒色のブレスが弾けた。どうやら直撃っぽいです。あまり言いたくはなかったけれど、今度からは事前にモンスターの攻撃パターンを教えた方が良くもしいい。

耐えるだろうと思っていたけれど、どうやらその前からダメージを喰らっていたらしく、相棒はそのままネコに運ばれていった。いくら拡散ブレスでも流石に即乙はしない。けれども、思っていたよりダメージは大きいかも。

ま、まあ、まだー乙。たぶん大丈夫。

左腕始動の連続叩きつけを躲してから頭へカチ上げ。今はとにかくその生えてきた触角が欲しい。シャガルもそうだけど、攻撃の隙が大きいからカチ上げを決め易い相手だとは思う。どっかのブラキもコイツらを見習ってくれないだろうか。

ソロならスタンプ連打ですらだけで良いけれど、流石にパーティーじゃ無理。突進後の振り向きや、土下座の後を中心にひたすら頭へハンマーを振り上げ続ける。

それじゃあ火力が出ていないことはわかってはいるけれど、他にできることがないんです。

さらに暫くすると、いつの間にか相棒の姿があり、ジャンプ攻撃が見えた。

「乗ったー!」

そろそろ、スタン取れるかなあって思っていたとき、相棒の元気な声が響いた。神々しくなっていないから、たぶんベースキャンプから戻ってきて直ぐ、エキスを取る前にジャンプ攻撃をしたんだろう。

さて、それじゃあ、砥石でもと思いアイテムポーチをガサゴソいじっていると、相棒が乗り攻撃へ移る前に彼女の後方攻撃がゴアの頭へ吸い込まれていくのが見えた。

そして、スタンエフェクトが弾けると同時に、暗くなっていた視界が元に戻り、ゴアが後ろへ吹っ飛んだ。どうやら狂竜化が解けたっぽいです。

「……あつ、ごめん」

そればかりはしゃーない。

乗り攻撃が決まった瞬間って、一発だけ攻撃したくなっちゃうよね。

そして、狂竜化の解けたゴアの顔の向く先は俺の方。……マジかよ。勘弁してください。砥石中です。

研ぎ終わり、何故か武器を確認しているところにゴアのブレスが直撃。砥石高速化スキルのおかげで研ぐことはできたけれど、体力がそろそろヤバイ。もう一度ブレスを耐えることは流石にできない。

少々慌てながら、回復薬を飲む。ガッツポーズ。

此方へ走ってくるゴア・マガラが見えた。なにそれ……

突進は直撃しました。

ああ、もう。なんだか上手くないかなあなんて思いながら、もう一度回復薬を飲むとした時、ゴアがバックジャンプへ移るモーションが見えた。

ソレを見て何かを考える前、反射的に背中へ担いでいたハンマーを取り出し右腰へ構え、風圧をキャンセル。

いやいや、俺は何抜刀してるんだよ。もうこっちはー乙してるんだ。直ぐに回復しなきゃ……って頭ではそう思った。

でも、身体は言うことを聞かなかった。

カチリ——と俺の中で何かが噛み合った。

明るくなったはずの視界は白黒に変わった。心臓の音ばかりが響く。

白黒のはずの視界は何故か今までよりも鮮明に見えた。

ああ、またこの感覚か。そう思った。

ただ、悪い気分じゃあない。

ゴアの空中ブレス。

狙いは俺。

ローリングで回避。

「滑空来る！ 避けてっ！」

珍しく彼女の大きな声が聞こえた。

でも、何を喋っているのかまではわからない。

もう一発でも喰らえばベースキャンプ行きは避けられない。そんなことわかってい
る。

此処で俺が乙れば状況は一気に悪化する。そんなこともわかっている。

それでも俺はハンマーを握った手に力を込めた。

ゴアを確認。

距離はローリング4回分ほど。

縦振り……間に合わない。横振りを一回。

ゴアが僅かに後ろへ下がる滑空の予備動作が見えた。

デイレイはかけず、横振りから更に縦2。

頭を突き出し、俺の方へかなりの速さで飛んでくるゴア・マガラ。それが当たれば

ベースキャンプへ一直線。

でも、もう止められない。

そしてハンマーを一度グルリと回してから、最大威力のホームランを俺目掛けて飛んできたゴアの顔面へぶち込んだ。

第46話　未来へ先送り

彼目掛けて滑空をしたゴア・マガラが叩き落された。

彼のホームランによって。

何が……起きたの？

いや、何をやったのかはわかってる。わかっているけれど……こんなの無茶苦茶だ。だって、もし彼の攻撃が当たらなかつたら、あれだけダメージを受けていた彼は確実にベースキャンプへ運ばれる。そしてもし当たっていたとしても、ゴアが怯むのかはわからない。今回は運良く、スタンをしたから良かったけれど、例えそれを計算していたとしても――

そんなことをやろうとは絶対に思わない。

当たる確率は低く、どう考えたって当たつたとしても分の良い賭けじゃない。それでも彼はソレをやった。正直、それが正気とは思えなかった。

「ナイス！」

無邪気に喜ぶあの娘の声。

私はどんな顔をして良いのかわからなかった。

元々彼にそんな気はあった。あえて危険な方を選んでいくような気が。けれども、今回は流石に不味い。成功したから良いもの、もし失敗していればクエストクリア自体が怪しくなる。だから私はどんな顔をして良いのかわからなかった。

確かに成功すればメリツトはあるけれど、失敗した時のリスクが大きすぎる。そんなことくらい彼だつてわかっているはず。

今いるこの世界とゲームはやっぱり違う。そうだと言うのに、彼は飛び込んで行く。それこそゲームと全く同じような感覚で。

私はそれがわからなくて、あの時彼に「怖い」と言った。そんな動き私には絶対にできないだろうし、他の人だつて同じだと思っから。

そんなんだから、やっぱり私は彼が怖かった。

「っしや、倒したーっ！」

「ギ、ギリギリだったね……」

エリア8。飛竜の卵なんか落ちていている場所の近くでゴア・マガラは動かなくなつた。

もう少しで3スタンを取れそうではあつたけれど……まあ、倒せたのだし良しとしよう。これで俺たちも晴れてHR5となる。やれることは一気に広がった。うむうむ、順調順調。

さてさて、そんじや防具のためにも剥ぎ取らせてもらおうかな。上位のゴア素材が必要なのは3部位。レア素材は必要としないけれど、俺の運の悪さを考えると、あと数回は戦わなきゃいけない気がする。

必要素材も後で確認しないとかなあ。なんて考えながら剥ぎ取りをしているとき、笛の彼女が何故か俺の方を見ていることに気づいた。どうしたのだろうか？

「剥ぎ取らないの？」

「あつ、うん……剥ぎ取る」

……うん？ 何かあつたのかね？

今回はカチ上げを彼女に叩き込んだりしてなかったと思うけど……彼女は怒ると怖そうだし、できるだけ怒らせないようにしたいのです。

「ありがとうございます」

剥ぎ取りを終えてからいつもの言葉を落とす。

ゴア装備は、これからかなり長い間お世話になると思う。だから大事に使わせてもらう。さて、次の目標は……まあ、その辺も話し合えば良いか。今ばかりは無事HRが上がったことを喜ぼうじゃないか。

ガタゴト揺れる帰り道。

どうやら二人とも寝てしまったらしい。まあ、緊急クエストって妙に緊張するもんね。それに今回は決して弱い相手ではなかったのだし、疲れて寝てしまうのも仕方無い。

そんなじゃ、俺も寝よつかな。なんて思い、一つ大きく伸びをしてから目を閉じようとしたときだった。

「……今日の2回目のスタンを取った時だけど」

なんて急に笛の彼女から声をかけられた。

てつきり寝ているものとはばかり思っていたから、超びつくりした。んもう、起きているのなら起きると言っていて欲しかった。

んで、2回目のスタンを取った時と言うと……ああ、滑空してきたゴアに俺のホームランが当たった時か。今思い返しても、あの時はホント当たって良かったと思う。あの時当たっていなかつたら、クエストをクリアできたのかも怪しいのだから。

「うん、それがどうしたの?」

「……スタン値の計算とかしてた?」

……いや、してないです。

てか、パーティーでスタン値計算とか俺じゃあできません。上昇値も減少値もはつきりとわかっていない相手。それでいて、彼女が当てた分まで計算するなんて俺には無理です。

「いんや、してなかったよ」

もしかして彼女はやっていたのだろうか？　ちよつと信じられないけれど、その可能性もなくはない。

お、俺だつてソロなら……できなくはないです。でも、スタン値を計算していたところでTAをやっているわけじゃないのだから、其処までメリツトはないんだよね。

「あの時……貴方はどうして避けずに攻撃したの？」

おお、しつかりと見られていたのか。ちよつと恥ずかしい。まあ、その直前はゴアにポコポコにされていたわけだから、自分で思っている以上に目立っていたのかもしれない。

でも、そう言う目立ち方はちよつと勘弁願いたいところ。

さて、彼女の質問への答えだけ……どうしたものやら。

正直なところ、俺にもよくわからない。はつきりと覚えてはいないけれど、あの時は確かに納刀して回復しようと思つたはず。けれども、何故か身体は言うことを聞かず、そのまま博打みたいなことをした。

……あれ？　もしかして俺が思っている以上にヤバい状況だった？

「ん……どうしてなのかは俺もわかんないかな。なんか、攻撃しなくなつた……のかなあ」

なんともまあ、酷い回答となってしまった。

とは言っても、自分でも良くわかっていないのだ。あの時は、ゴアの動きしか視界に入らなかったし、たぶん何も考えていなかった。

「……危ないよ？」

ですよねえ……

きつと、彼女も色々と思うことがあるのだろう。もし、俺と彼女が逆の立場だったとしたら、俺も何かを言っていたと思う。

てか、其処はパーティーとして言わなきやいけないこと。だって一人だけの問題ではないのだから。

「すみませんでした」

だから、素直に謝った。

成功したから良かったものの、失敗していれば彼女たちに迷惑をかけていた。今更になつて嫌な汗が吹き出してくる。

「あう、あつ、いや、そんな謝って欲しいわけじゃなくて……でも、危ないことはダメだ
と思うから……」

わたわたし始めてしまった彼女。

本心では『調子乗んなよ、このやろー』くらい思っているのかもしれない。でも、それを口に出さないのはきつと彼女の優しさ。思ったことははっきりと言って欲しい。なんて思うときもあるけれど、今はやはり彼女の優しさに救われる。

「うん、ありがとう。できるだけ気をつけます」

ただ、その優しさに甘えることはダメなこと。

それくらいはわかっている。

協力し合うのは大切だ。でも、甘やかし合うのは違う。確かにソロよりはパーティーの方が絶対に効率が良い。けれども、一人が足を引く張ってしまふことだってあるのだ。例えば、大剣の斬り上げ・ライトの散弾速射・弓の曲射・ガンスの無差別砲撃・片手の盾コン・S・B・そしてハンマーのスタンプ。

難しいね、パーティーって。考えなきゃいけないことが多すぎて嫌になる。だから色々と考えなくて良いソロの方が楽と言う人はいるだろうし、その考えを否定はできない。

でも、今の俺はパーティーにいるわけだから、やっぱり考えないといけないんだと思う。上手いかなことばかりではあるけれど、何も考えないのは違う。

自分でできることは精一杯してみたいのです。

「色々あるとは思いますが、これからもよろしくお願いします」
「……うん、よろしく」

さて、それじゃ俺も寝ようかな。

どうせ帰ったら、相棒が打ち上げしようと騒ぎ出すに決まっているのだ。でも、そんな日常は意外と気に入っていたりします。

おやすみなさい。

——これからもよろしく。

そんな言葉を落としてから彼は寝てしまった。

なんか上手くまとめられてしまった。

むう……本当はもっと言った方が良かったかもしれない。でもそこは口下手な私の

せいで、本当に言わなきゃいけないことを言うことはできなかった。

この彼のあのハチャメチャな攻撃は大きな武器だと思う。現にあの彼の動きのおかげもあつて順調に進めているのだから。それは彼の良いところ。

でも、良いと悪いは裏表。

今まではその表の面しか出てはいない。けれども、いつか絶対に裏の面が出るときは来る。いくら彼が上手くても、全て成功させることなんてできないのだから。そんな危なさが怖い。

そしてその危なさを操虫棍の彼女はわかっていないだろうし、きっと彼も理解はしていない。気づいているのは私だけだ。

直した方が良いのかなと思わないこともない。でも、それが彼の良いところだから、直さない方が良いのかなとも思う。

うーん、どうすれば良いのかなあ……

そもそも、言つて直ることなのかもわからない。だってアレはきつと彼の性格的な問題だから。ソレを直すのはちよつと難しい。

今はまだ問題なく進めている。でも、いつまで問題なく進めるのかはわからない。そしてもし、彼のせいでこのパーティーが躓いてしまった時、彼は……うん、その時は私が頑張ろう。

いつもいつも、彼にばかり頼っているのだ。そんな時くらいは私が頑張ろう。きっと、それで良いはず。

問題を先送りにしてしまっただけな気もするけれど、私にできるのはそれくらい。だって、この問題を解決するのは彼自身が変わらないといけないから。そしてもし彼が変わってしまった時、このパーティーがどうなるのかはわからない。今はそう言うことにしておこう。

不安は残る。でも、もしこの先の未来で彼が躓いてしまった時は私が頑張ると決めました。

ふふっ、パーティーはやらなきやいけないことが沢山だ。

でも、そのことが何故か嬉しかった。

第47話く捨てた想いは恋心?く

「HR5かあ……全然実感がわかないけど、ホントにそうなんだよね?」

バルバレに戻り、報酬を受け取ってギルドマスターから有難いお話を聞いた後、予想通りに相棒が打ち上げをやるうと騒ぎ出し飲むことに。まだ朝と言っても良いような時間だけでも、もう気にしないことにしました。こんな楽しんだもん勝ちなのだ。

ああ、今日もビールが美味しい。昼間から飲むこの背徳感も合わさり、より一層美味しく感じられる。

「まあ、まだHR5だけどそうらしいね。でもこれで漸く全部のエリアへ行けるようになったな」

全部のエリアへ行けるようになったとは言え、地底洞窟はまだらしい。どうやら火山が活動を始めたから今はちよいと危ないんだってさ。あと数日で行けるようになるとは言っていたけれど、正直行きたくないです。ブラキとかホント勘弁。

とは言え、此方の活動範囲が広がったのは事実。何より天空山と氷海へ行けるようになったのが大きい。これで、レビテライト鉱石やノヴァクリスタルを採取することがで

きる。

「これからの予定はどうするの?」

現在それを悩み中です。

大きく分けると防具を作るか、武器を作るかだけど……どうすつかね? 防具を作るとしたら、俺はゴア。彼女はグラビ、下位のブラキと胴系統倍化になる。武器を作るとして、現時点でできるのは……彼女の笛くらいか。俺は作るものがないし、相棒も現時点では強化ができない。

そうなると彼女の笛を強化してしまった方が良いのかな? ガララ笛なら耳栓を演奏してもらえりし、かなり楽になる。ゲームだとガララとレイアの抱き合わせがキークエだったけれど、この世界ではどうなんだろうか? レイア素材を使う予定はないから、できれば1頭のクエストが良いのだけ。

「んじゃあ、次はガララで良い?」

「私はいいよー」

一度戦ったことのある相手だし、ガララなら相棒も大丈夫なはず。

「……私の武器ってこと?」

「うん、ガララ笛ができちゃえばこの先楽だし」

戦うかはわからないけれど、フルフルなんかと戦う時は高耳がほしい。あとグラビで

も高耳があればかなり楽になる。できないことはないけど、グラビの咆哮ってフレーム回避が難しいんだ。

「でも君の武器はいいの? 確か、今の笛ちゃん武器だつて上位武器でしょ?」

いや、そうなんだけどさ……前も言ったようにホントに作るのがないんだ。

現在の武器倍率状況は俺が120、彼女が140、相棒が160です。んで、これで彼女の武器ができれば150となる。どう見ても俺が足引つ張つてますね。だから本当は俺の武器を強化したいところだけど、如何せん作るものがない。

「……ジンオウハンマーとかは?」

「碧玉とか出る気がしない」

ジンオウガの碧玉が1回のクエストで出ない確率は80%弱くらいだと思った。つまり20%以上の確率で碧玉は出る。けれども、俺の運の悪さ+物欲センサーを考えるといつたいどれほどのジンオウガを倒せば良いのかわからない。

いや、いつかマラソンをしなきゃいけないことはわかっているんだけどさ。でもできればレア素材のない装備が良いです。じゃあ、何を作るのかって聞かれるとブラキハンマーになる。まあ、そればかりは仕様が無い。それにアレを作っておけば最後まで使える。

「とりあえず彼女の武器を強化しちゃおう」

防具や俺の武器はその後で良いと思う。

いつそ俺が違う武器を使うつて言う選択肢もあるけれど、できればずっとハンマーを使い続けたい。

そして、そんな俺の提案に二人は納得してくれた。二人共何か言いたそうではあつたけれど、これが最良の選択肢なはず。たぶん、きつと。

その後、いつも通り相棒が酔いつぶれてしまったため、明日の朝また集会所で言つてその日は別れることに。それにしても何故、毎度毎度この相棒は酔いつぶれるまで飲むのだろうか……運ぶ俺の身にもなつて欲しい。いや、まあ、これくらいで文句は言わないけどさ。むしろ女の子を背負つているのだし、感謝しなきゃいけない……つてのは流石にないか。

そんな相棒をいつも通り家まで送り届け、さて俺はどうすつかなあ。なんて考え、とりあえずフラフラと出歩いて見ることにした。

時間はまだお昼くらい。酔い覚ましにもなるし丁度良い。

「なんだ？ 珍しく今は一人なのか？」

お酒のせいで多少覚束無い足取りでフラフラ歩いていると、いつもの加工屋から声を

かけられた。

「まあね。さっきまでは一緒だったけど、今は皆バラバラだよ」

でも、なんだかんだで俺たちも仲の良い方だとは思う。たぶん一人だけでいる時間より皆と一緒にいる時間の方が長い。

「そう言えばお前さんはどうするんだ?」

いや、何のことだよ。いきなりそんなことを言われてもわからないでしょうが。

「何のことさ?」

「いや、だからどつちとくつつくつつくって話」

……? どつちとくつつく?

余計にわからなくなった。なんだろう、もしかして俺がおかしいのか? 流石に頭が回らなくなるほど酔ってはいないと思うんだけどなあ……

まあ、自分じゃ酔っていないって思っているだけかもしれない。

「どう言う意味?」

俺が加工屋へそう聞くと、ため息を一つ落された。その呆れ顔が無性に腹が立つ。

だって、わからないものはわからないのだ。

「だからさ、狩猟笛と操虫棍の女の子のどつちを狙ってるのかって話だよ」

……言葉が出なかった。

どうしてそんな話になった。

「いや、意味わからんぞハゲ。どうしてそうなる」

「ハゲてねえよ。ふさふさだわ。だつてあんな可愛い子二人と一緒になんだ。んなもん、どつちを狙うかくらい決めてるんだろ？ あつ、もしかして、もうどつちかどくついでいたりするの？」

……いや、まあ、そりゃ俺だつて男ですし、そう言うことに興味がないと言つたら嘘になる。けれども、どつちを狙っているとかそう言うことは全くない。そもそも恋愛ごことが苦手な俺にはそんなことできません。

「いや、狙うとかそう言うのはないんだけど……」

「それ本当かよ……もつたねえなあ。せつかく一緒にいるんだしもつとなんかあつたりするだろ？ それに、どつちかどくつについてもらわないと、困る奴が沢山いるんだが……」

もつたいないとか、そう言う話じゃないと思うんだけど……。それに縦しんば、もし、仮に、例えば、俺が彼女と相棒の何方かに告白でもしてみろ。まず断られるだろ？ そして、その後のパーティーの空気とか考えたくもない。その瞬間にパーティーの壊滅は決定だ。

それだけは……って、あれ？ 困る奴が沢山いる？

「おい、ハゲ。困る奴が沢山いるってどう言うことさ？」

「だからハゲてねえって。ちよつと薄い部分があるだけだわ。……お前さんたちってダレンを倒してから一気に有名になっただろ？ だから俺みたいな加工屋とか雑貨屋で集まった時、よくお前さんたちのことが話題に上がるんだが、その時賭けをすることに なったわけだ」

ああ、そう言うことでしたか……

つまりアレでしょ？ その賭けの対象が……って話でしょ？

「んで、その賭けつてのは、お前さんがどっちとくつつくかかって内容なわけだ。だから、どっちかとくつつかないとほぼ全員が困るってこと」

いや、そんなこと知らんがな。

勝手に賭けの対象にされ、勝手に外しただけでしょ。どう考えても自業自得だ。俺の悪い点が全くもって見つからない。

「……んで、ハゲはどっちに賭けたのさ？」

「おい、ハゲじゃねえって。ちゃんと残つてるとこあるだろうが。それで俺だけ…… まあ、言わないでおくわ。いらんこと言ってもしょうがないしさ」

充分いらんこと言ってたじゃん。

はあ……なんだろうね。多少有名になったことはわかっていたけど、そんな目で見られているとは知らなかった。

うつわ、これじゃあ明日彼女たちと会う時、どんな顔をして良いのかわかんないじゃん。なんとも面倒な話を聞かせてくれたものだ。

てか、賭けの対象にされているのだし、少しぐらい俺にも賭け金が回ってきてても良いんじゃないだろうか？　そして、最初に賭けをやり始めたのは誰だ？　今なら躊躇うことなくハンマーを振り下ろせる気がする。

「でも、本当にそう言うこと思っていないのか？　お前さんがどっちとくつつこうが勝手だが、二人共あれだけ可愛いんだ。しかも、ダレンを倒したことでかなり有名になった。狙ってる奴は少なくないだろうな」

ああ、やつぱりそうなのかねえ……

とは言っても、本当にそう言うことは考えなかった。無理矢理頭の外へ追いやつて、考えないようにしていただけかもしれないけれど。

しつかし、狙っている奴らは少なくないかあ……そりやあ、アレだ。なんだかちよつとモヤつとしますな。ま、まあ、でも俺から何か言うことはやつぱりないと思う。成功しないつてのもあるけれど、それ以上にこのパーティーが壊れてしまうのが嫌なんです。

例え臆病者と言われようが、それくらいこの今のパーティーが気に入っているのだ。

「……それでも、俺は誰かくつつくことはないかな」

「自分を縛りすぎだろ。息苦しくないのか?」

「縛りプレイくらいが丁度良いんだよ」

俺がそう答えると、加工屋はやはり呆れたようにため息を一つ落とした。

「んじやあなハゲ、良い素材が手に入ったらまた来るわ」

「ハゲてねえって言うてるだろ。良い加減泣くぞ。ああ、またいつでも来いよ」

別れの挨拶を交わし、手を挙げてから加工屋の元を離れた。

おかしな話を聞かされてしまったけれどこれじゃあなあ……

はあ、酔い覚ましにはなつたけれどこれじゃあなあ……

……彼女たちが誰かくつつこうと、それを止めることはまずできない。そんな権利

なんて俺にあるはずがないのだから。

しかしどうにも、そんな未来のことを考えると……こうモヤつとするのですよ。贅沢

で我が儘なことってのはわかっているんだけど……モヤモヤが晴れることはない。

ホント、面倒なことを聞かせてくれたものだ。

どう考えたって俺の一人相撲で彼女たちは全く悪くないわけだけど……

明日からどんな顔して彼女たちと会えば良いのやら……

因みに、ついつい気になって聞いたのだけど、2票差で相棒の方へ多く賭けられているらしい。

第48話～下を向いて赤い顔～

その日は朝から彼の様子がなんかおかしかった。

私がおはようって挨拶しても、なんだか生返事。そんな彼の顔を見ようとすると反らされるし……最初は、もしかして私が酔った時に何かしちやったのかと思つて慌てたけれど、どうやらそうじゃないみたいだった。だって、笛ちゃんに対しても同じような反応だったし。

一応会話はしてくれみたいだけど、とにかく目を合わせてくれず、顔がそっぽ向いてるんです。

明らかに様子がおかしかったから、何かあったのか聞いた。でも、なんでもないって言われてしまい、それ以上は何も教えてくれない。なんでもないわけがないでしょうが。君は顔に出やすいんだから。自分が嘘つくの下手だって気づいてないのかなあ。

とにかくまあ、その日の彼の調子は変だったのです。

笛ちゃんに聞いてみても知らないって言つてたし、何がやらさっぱりです。

悩んでいることがあるなら相談してくればいいのにね。いつもいつも一人抱え込

んじやう彼。せつかくのパーティーなのに……

それがやつぱり寂しかった。

そんな彼の様子のおかしかった日の目的は笛ちゃんの武器強化。ターゲットはガラ
ラアジャラと私たちが一度戦った相手。

彼の様子的に大丈夫かなあとクエストへ行く前は滅茶苦茶心配でした。

何とも嫌な予感がする。

そして当たるのはいつだって嫌な予感なんだ。

丸々1日馬車に揺られ原生林へ到着。

此処に来たのももう何回目だろうか。最初は遺跡平原と地底洞窟の採取ツアーにし

か行けなかった私。それが今じゃ毎日のように大型のモンスターと戦っている。

人生どうなるかわからないものだね。それもきつと彼のおかげなんだと思う。あの時、勇気を出して彼に声をかけて本当に良かったと思う。

そして、そんな彼の様子は結局変わらなかった。

相変わらず、私が話しかけても目を見てくださいません。んもう、本当にどうしたのさ？
なんとも嫌な予感がした。

私たちが今までで失敗したクエストはあの遺跡平原の採取ツアーだけ。でも、あの時は失敗しても何の問題もなかった。けれども今回は違う。もし失敗してしまったら、依頼をしてくれた人は困るだろうし、彼女の武器だつて強化することができず丸々2日を無駄にしてしまう。

それは嫌だった。

でも彼の様子はおかしくて、その原因はわからなくて、そんなだから私じゃどうしようもなく……

結果、嫌な予感は当たってしまい――

私が一度ベースキャンプに運ばれた。

……いや、もうなんだろうね。

穴掘ってください。私が入ります。

クエストですか？ 私が一回倒れたことを抜かせば、普通にクリアしましたよ。

で、でも、もし彼の様子がおかしくなければ私だってやられることはなかったんじゃないかなあつて思います。クエスト中も様子のおかしい彼がいつい気になっちゃつて……気がついたらガララアジャラに囲まれていました。

ヤバイヤバイと思いつながら、ジャンプすれば抜け出せることは知っていたのでジャンプしようとしたんです。でもね、ガララアジャラさんつてば噛み付いてきたの。直撃しました。

ああ、はいはい、これ知ってますわ。前回も一度喰らいましたし。なあんて頭の中では余裕ぶつてみたけれど、身体は痺れて動かない。

そして何もできずに地中からの突き上げ攻撃が直撃したところで、私の意識は途切れました。

もうね、恥ずかしく恥ずかしくてしようがなかったです。他人の心配ができるほど私には上手くないことだつてわかっているのに……

そして真つ赤な顔を下に向けながら、二人が戦っていたエリアへ戻った瞬間、ガララアジャラが倒れました。あつ、でもちゃんと2回は乗ったし、一度眠らせたから仕事を

していないわけではないんだよ？

結果的に、倒れたのは私だけ。これで2回連続私だけが倒れています。そんなすこぶるよろしくない状況なんです。

でも、今回はきつと彼のせいなんです。頼むからそうであってくれ。

まあ、うん。どうとでも罵ってください……

何かおかしいって思ってた。

特におかしかったのは彼の様子。話しかけても何故か目を……てか顔を此方に向けてくれない。

そんな彼の様子がおかしいと思ったのはあの娘も一緒だったみたいで、一生懸命何があつたのか聞いていた。私も私でやっぱり気になったけれど、彼は何も教えてくれな

い。

むう……絶対また一人で抱え込んじゃってる。

そう思ったけれど、彼の性格的にそのことを私たちに話してくれることがないことは知っている。もう少し私たちを頼ってくれても良いのに。

そんな何とも微妙な雰囲気のままクエストの時間に。

最初は大丈夫かなあって思っていたけれど、そんな私の心配を余所にクエストが始まると彼はいつもの調子に戻っていた。流石と言うべきなのかな。

しかし、そうではない人が一人。

クエスト中もあの娘は頑張って彼をいつもの調子戻そうと頑張っていた。彼は既にもいつも通りだと言うのに。それは明らかに空回り。彼も何が何だかわからず、困った顔をしていたのを良く覚えている。どうして貴女がテンパー！

だから私が、なんとかあの娘を落ち着かせようと思いました。でもね、ダメでした。私の言葉が全然届いていないみたいで……

ああ、こりやあまずいなあ。なんて思い、ひたすら嫌な予感ばかりが膨らんだ。

そんな嫌な予感は見事に的中し、あの娘が一乙。そんな状況でも乗りを成功させていたのは流石なんだけども。

ただ、まあ、誰が悪いかって言うことやっぱり彼になると思う。彼の調子が最初からい

つも通りだったらあんなことにはならなかったと思う。……たぶん。

一応、ガララを倒したわけだし、武器の強化はできると思う。そのことは良かったのだけど……

「はあ……」

ガタゴトと揺れるいつもの帰り道であの娘のため息が聞こえた。

未だにその顔は赤い。たぶんよっぽど恥ずかしかったんだと思う。そんな様子はなかなか可愛い。

一方、彼の様子は多少マシになったものやっぱりちよつと変。クエスト中は大丈夫だったように見えたけれど、また戻ってしまったらしい。ホント何があったんだろう。

このままじゃ不味い。まずはあの娘のフォローをしてあげたいところだけど、そこはコミュニケーション能力の乏しい私。なんて声をかければ良いのかわからない。下手したら止めを刺しそうで怖い。

そうなるを彼をどうにかするしかない。でも、どうせ聞いても教えてくれない。

お酒を飲ませて酔わせれば話してくれるかなあ。押しに弱い彼のことだ、私が頑張れば話してくれるはず。

ふむ、帰ったら無理矢理でも聞き出そう。

だって今のパーティー状況はちよつと不味いのだから。

大変なことになりました……

「それで？ 何があつたのさ？」

場所は俺の家。状況は大ピンチです。

珍しく打ち上げはやらす、今日は解散となつた。あの加工屋の話もあり、俺は心身ともにヘトヘトだったから、解散となつたのは嬉しかった。馬車の上で寝たとは言え、寝心地が良いわけではない。だからさつきと家に戻り一眠りしようかと思つていたら、相棒と彼女が俺の家に入ってきた。しかも何故かお酒を持つて。

いや、もうね。嫌な予感しかないわけですよ。

何が始まるのかと思っていたら、とりあえずお酒を飲めと彼女に言われた。断ることなんてできるわけがない。どこぞの体育系サークルばかりにお酒の強要。なるほどこれがアルハラか。

しかも、ビールとかなら良かったけれど、飲まされたお酒のアルコール度数は滅茶苦茶高いわけですよ。吐き出さなかつただけでも褒めて欲しい。

どうしてこんなことをされなきゃいけないのかと思っていたけれど、原因は俺にあるらしく、文句なんて言えませんでした。

どうやら俺は一生懸命隠していたつもりだったけれど、やっぱり今日の俺の様子はおかしかったらしい。いや、だってあんな話をされた後にいつも通り接する方が無理だろう。でも、相棒が乙つたのは俺のせいではないと思う。

んで、尋問が始まりました。

黙秘権は無いそうで、弁護士なんているわけがない。

「えと……そのですね」

さてさて、どうしたのか。

いや、ホントどうしよう……

「何があつたの？」

今日は珍しく彼女も積極的だ。洒落にならん。

言えと？ 加工屋から聞いたあの話を俺の口から言えと？ 本当に勘弁してください。

とは言うものの俺が喋るまで二人は納得してくれそうにない。完全に詰んでます。

なんとか誤魔化すことはできないものかと考えてみたけれど、先ほどの一気飲みでいいで頭は回ってくれない。逃げ道は潰されている。嫌な汗が止まらない。今のこの二人はあのイビルジョーよりよっぽど怖い。

「……もう少しさ、私たちを頼つてもいいんだよ？」

そんな何とも不安そうな相棒の声。

……罪悪感がヤバい。

いや、ですね、頼るとか頼らないって話ではなくてですね。むしろ、この二人のことは信頼しているのであって……ああ、もう！ 頭が回らない。

はあ。

うん、仕様が無いか。

……流石にこれ以上は無理です。

こんなくだらないことでパーティーの仲が悪くなるよりはよっぽどマシだ。ただ俺

が恥ずかしい思いをすれば終わる話。

一つ大きく深呼吸をした。

それから、ポツリポツリと加工屋から聞いた話を二人に話しました。

「あゝ……うん、なるほど。そ、そう言う理由だったんだ」

全部話してまず相棒がそんな言葉を落とした。

穴掘ってくれ。俺が入るから。

お酒のせいもあり、顔が熱くて仕様が無い。でも、今回は俺も被害者側だと思うんだよなあ。

とは言うものの、恥ずかしくて顔を上げることができない。いったい彼女たちからはどんな視線を向けられているのやら。

「……別にそんなこと気にしなくて良いのに」

「うん、そうだよね。君が悪いわけじゃないんだもん」

二人の言葉。

相変わらず顔を上げることができないけれど、どうやら俺ほど気にはしていないらしい。あれ？　もしかして俺がおかしいのか？　一人で馬鹿みたいに気にしていただけ？

ヤバい、余計に恥ずかしくなった。

「私はできる限りこのパーティーにいるつもりだよ？　そう決めたもん。だから気にしなくても良いのに」

「……私も」

……うん、ありがとう。救われます。

どうやら俺一人であうだうだと考えていただけらしい。彼女たちの顔を見ることはできないけれど、きっと呆れたような顔をしているはず。

「てか、そんなことだったんだね。てつきり、何か大きな問題でもあったのかと思った」
すみません。俺の中ではかなり大きな問題だったんです。

こう言う時、女性はやはり強い。

うん、まだかなり恥ずかしいけれど、どうにかかなりそうです。死にたくなるほど恥ずかしかつたけれど、彼女たちには感謝。

「じゃあ、この問題は解決ってことでいいよね！　これからの予定は？」

「えと……とりあえず、彼女の武器を強化して、次は防具を作るから……」

そして漸く、顔を上げることができませんでした。

でも、やっぱり恥ずかしくて彼女たちの顔を見ることはできず……仕様が無いね。恥ずかしがり屋なんです。

けれども、ポツリポツリとこれからの予定を話し合っていくうち、少しずつだけ彼女たちの顔を見ることもできるように。

本当にご迷惑をおかけしました。

んで、話し合いの結果、次はようやくやつと地底火山へ行くことに。ターゲットはグラビモス。ただ、それは彼女の武器ができてから。だから早くても明日の夜出発とかになると思う。

グラビはなんとも面倒な相手ではあるけれど、たぶん大丈夫だとは思う。何も考えずひたすら乗りまくるだけ。うむ、頑張ろう。

そんな予定を話し合ったところで、その日は本当の解散となった。

……加工屋から聞いたあの話には全く興味がなかった彼女たち。

そのことを少しばかり残念に思ってしまう自分がいます。そんななんとも複雑な想いはあるけれど、まあ、とりあえずは一安心と言ったところ。

でも、正直なところ彼女たちは俺のことをどう思ってくれているんだろうね？

まあ、この臆病者がそんなことを聞けるはずがないんだけどさ。

第49話～ひたすらにジャンプ攻撃～

先日はもうなんか色々とおつたけれど、彼女たちの話を聞き俺も落ち着いてきた。

加工屋から聞いた話を忘れることなんてできないのだから、以前と全く同じとは言えないけれど、それでもだいたいブマシになったと思う。

それも彼女たちのおかげです。

「グラビモスってどう戦えばいいの？」

そして今は、漸く解禁となった地底火山へ向けてガタゴトと揺られているところ。

地底火山は地底洞窟と比べ、危険度の高いモンスターが多い。楽に倒すことのできる相手は少なくなるだろう。でも、比較的バルバレから近いので助かります。

んで、今回の相手はグラビモス。剣士殺し筆頭。MHP2Gの武神闘宴では多くのハンターがコイツに悩まされたことだと思う。まあ、アレは亜種なんだけどさ。

馬鹿みたいに硬い肉質。巫山戯たほどの体力。近接武器を蹴散らすガス噴射と正直、剣士では戦いたくない相手だった。けれども、MH4になり状況は一変。

「ん〜……ひたすら乗り攻撃をすれば勝てると思う」

乗りと言う新システムの導入があつた。グラビモスの強さをぶち壊してくれた。

乗り成功時のダメージは固定で、どんな武器だろうと2回乗れば背中が壊れる。背中さえ壊れてしまえば、あとはプレスを誘導してからお腹を殴るだけ。更に、もう4回乗れば乗り成功ダメージだけで胸部を2段階破壊することだつてできる。

しかも、グラビさんつてば乗つてくれと言わんばかりに乗り耐性値は低いし、上昇量も少ない。そして乗り自体も全然難しくない。

剣士ソロで戦うにはその体力の多さがちよつと面倒な相手だけど、パーティーで戦う場合、グラビは其処まで強くない。

グラビは隙も多いし、3人でジャンプ攻撃を繰り返せば6回くらい直ぐに乗ることはできると思う。パーティーの有り難みを感じることでできる良い相手です。

「……えと、頭殻が欲しいのだけど、頭は私がやった方が良い?」

ぼそりと彼女がそんなことを聞いてきた。

彼女の笛も前回ガララを倒したことで無事強化することができた。名前はハザードコール。麻痺も取れるし、耳栓と攻撃力アップを演奏できるかなり優秀な笛。

でも、これでこのパーティーには睡眠と麻痺つて言う状態異常武器が二人になつちやつたんだよね……絶対にいつか麻痺、睡眠、スタンが被る。

麻痺からスタンして眠らされるとか普通にありそうだ。ガンナーならまだ良いけど、

剣士で状態異常管理とかできる気がしない。

「うん、頭は任せるよ。俺の武器じゃあ壊せるかわかんないし、多分俺は腹を殴っていた方が良いと思う」

忘れそうになるときもあるけれど今担いでいる山権現は水武器。属性値も350とグラビ相手ならなかなかのダメージが期待できる。

「じゃあ頑張る」

おう、頑張れ。

はてさて、サクッと倒すことができれば良いんだけどね。

「着いたー！ むわつとするー！」

到着一番、相棒の元気な声が響いた。

うむ、確かに地底洞窟だった頃よりはかなり暑い。まあ、溶岩が流れているわけだしそれで暑くない方がおかしいんだけどさ。

グラビモスの初期エリアは8。そして2, 3, 5, 8, 9番エリアでクーラードリンクが必要となるはず。今はベースキャンプだからそれほど暑いとは思わないけれど、そのエリアへ入ったらきつと滅茶苦茶暑いだろうなあ。

「あつ」

「どうしたの?」

しまりました。

「えと……クーラードリンク忘れたわ」

そうか、出発前にアイテム整理をしていたとき、何か足りないなあって思っていたけど、クーラードリンクだったのか。

むう、今まで暑いマップになんて来たことがなかったから、頭の中から抜けていたんです。でもホットドリンクは持ってきていたりします。いや、飲まないけどさ。

「……暑さ無効演奏できるよ?」

うん、それは知っているけど、アレって効果時間があまり長くないんだよね。まず戦っている最中に切れる。そしてまた彼女に演奏してもらおうと流星に負担が大きい。演奏効果を4つも維持していたら攻撃機会が減ってしまう。

「それでも良いんだけど……相棒さん、2つほどもらえないでしょうか？」

「んもう、準備はちゃんとしないとダメじゃん」

返す言葉もありません。

ホットドリンクなら忘れてもまだなんとかなるけれど、クーラードリンクがないのは流石に厳しいです。

その後、クーラードリンクは相棒からちゃんといただけました。ありがとうございます。

ベースキャンプを離れてからは、これからの防具なんかにも必要となるため、虫や鉱石を採取しながらエリア8を目指した。マレコガネと獄炎石がほしいのです。

そしてクーラードリンクを飲んでから、エリア8へ。クーラードリンクの味だけでなく……うん、まあ、美味しくはないです。ホットドリンクの方が俺的には飲みやすいと思っただ。

そんなこんなで、エリア3から8へ入るとあの巨体を崖の上から確認することができた。

「でかいね」

でかいな。

すごくゴツゴツとした真つ白な外殻は、薄暗い地底火山で良く目立っていた。俺と相棒はグラビと戦うのが初めて。ただ、まあ、なんとかなると思う。

「そんなじゃ、行きますか。」

笛の彼女の演奏音が2度響いた。これでスキル高耳が発動。

「助かる」

「……最初の乗りはお願い」

崖から飛び降りると、グラビがそんな俺たちに気づき、あの特徴的な大咆哮を上げた。けれども此方には耳栓がある。ピリピリと震える空気をかき分け、一気に近づいてから段差を利用してジャンプ攻撃。

「そして、1回目の乗り。」

「が、がんばれー!」

なんとも気の抜ける相棒の声が聞こえた。

「あれ? そう言えば俺が乗るのっていつ以来だ? もしかしてアルセルタス以来とか?」

そんなことを考えながらも、懐のナイフを取り出してからグラビモスの背中を斬りつける。そして、彼女の攻撃力強化【大】の演奏が終わったところで、乗り成功。

「私はどこに行けばいいの!」

「尻尾頼んだー！」

乗りが成功し、吹っ飛んだ身体の体制を戻しながら相棒へ指示。

急いで倒れているグラビへ近づき、もう身体を密着させるくらい場所から、縦1始動でホームランを2回。横振り始動でホームランを1回。

乗りダウンからグラビが起き上がったところで、また段差を利用してひたすらジャンプ攻撃。とにかく背中を壊してしまわないと戦い難い。

そしてグラビの怒り咆哮。まあ、耳栓があるから今は関係ないんだけどさ。つけることは少なかったけれど、耳栓って便利だね。ただ高耳までつけるとなると流石に重いんだよなあ……

怒り咆哮が終わり、腹から睡眠ガスを噴き出そうとした時。

「の、乗りましたぞー！」

相棒が2回目の乗りを奪った。

てか、なんですかその口調……でもナイスです。これが成功すれば背中破壊は完了。あとはひたすら腹へハンマーをぶち込み続けるだけ。

相棒が乗り攻撃を続けている間は、砥石をしながら彼女の演奏を聴いた。

泥・雪無効とか、寒さ無効とか明らかに関係ない演奏だったけれど、きつと彼女なりのお茶目心の現れだと思う。まあ、乗り攻撃中って暇だし笛を担いでいるとついつい演

奏したくなるよね。その気持ちわかります。

相棒の乗り攻撃は無事成功。グラビの背中が砕け、ヒビが入ったのを確認。うむ、順調順調。

先程の乗りダウンと同じように、俺は腹、彼女は頭、相棒は尻尾を担当。そして縦1始動のホームランを2回決めたところでグラビがスタン。

「……頭、壊れた」

ナイスです。これで彼女も腹へ攻撃ができる。

スタンをしたグラビはわざわざ一度起き上がってからまたゴロリの横に倒れ……ようとした時、急に前へ走り出した。

滅茶苦茶ビツクリした。

「し、尻尾斬れました!」

お、おう、そう言うことだったのか。いったい何事かと思った。

そう言えば、尻尾を斬るのも初めてかもしれない。武器的に俺じゃあ斬れないし、彼女だつてきれないことはないけど柄攻撃なんてしない。そして唯一の斬撃武器である相棒も、普段は尻尾じゃなく脚ばかりを攻撃していた。

もしかして、俺が脚を頼むって言っていたからだろうか……

「助かる。次は腹、頼む」

「了解ですー！」

これで、背中も頭も尻尾も破壊完了。そうなってしまおうと後は腹を攻撃するだけになるわけだけど……まあ、SAのない俺じゃやっぱり厳しい。だから腹は彼女たちに任せ、俺はひたすらジャンプ攻撃に専念することにした。

此処は適材適所。自分にできることを精一杯やるだけ。

その後、俺が2回乗り胸部は2段階の破壊が完了。更に、相棒の操虫棍によつて寝た時、一度睡眠爆破を入れることもできた。

そろそろ倒せるかなあ。なんて思っていると、彼女が2回目の麻痺を引き最後のラツシユをかけたところでグラビモスは倒れ動かなくなった。

いくらグラビモスとは言え、パーティーで連携をすればたぶんこんなものなんだろう。ソロじゃ戦いたくない相手ではあるけれど、今はパーティーなんだ。そんなパーティーの大切さが改めてわかったクエストだったのかな。

なんて思った。

さてさて、これで一山超えることができた。防具はジャギイS一式と何とも頼りな

い。それでも、此処まで進むことはできている。

次はいよいよブラキになるんだろぅなあ。

そんな直ぐに訪れる未来のことを考えると、何とも複雑な気持ちとなった。

第50話～口に出さず伝わる想い～

MH4において、一番難しいクエストは何かと聞かれた時、多くの人は同じ答えが浮かぶんじゃないだろうか？

集会所や旅団クエスト、そしてイベントクエストの中にも難しいクエストは沢山あった。けれども一番難しいクエストと言うと、浮かぶのは一つだ。

——ギルドクエスト。

それは多くのハンターが挑み、より強い武器防具を得るため、時には死んだ目をしながらやり続けたもの。俺はそのギルドクエストがMH4の中で最も難しいクエストだと思っている。

とは言っても、ギルドクエストにだって色々な種類がある。レベルは1～100まであり難易度だって全然違ってくる。ギルドクエストに登場するモンスターもドスランポスみたいな奴もいれば、テオやクシヤのような古龍種だって登場する。

そして俺はあの2頭の登場するギルドクエストが一番難しいと思っている。一度レベル100をやったことはあるが、あんなもん2度とやりたくない。どう考えても調整

を間違えてる。

その2頭のうち1頭は、樹海の一匹狼ことイャンガルガ。狂竜化したアイツとかホントヤバイ。こんなもんどうすれば良いんだよって速度で嘴を叩きつけてくるし、ほぼノーモーションから繰り出される突進なんて避けられるわけがない。狂竜化したことでその速度は1.4倍になる。ただでさえすばしっこいアイツがそうなるともう止められない。

そんなイャンガルガが1頭目。そしてもう1頭が、歴代パッケージジモンスター最強と呼ばれるブラキディオスだ。

狂竜化したあの2頭のギルドクエストは本当に難しいと思う。それは凄腕のハンターが4人集まったとしても普通に失敗するレベル。カメラ外から即死の竜巻を飛ばしてくる鋼龍や、地表を走り回るトカゲはオマケで地雷が本体とまで言われる天廻龍など、あの2頭と比べれば可愛くすら見える。

そして俺が何を言いたいかと言うと……

うだうだと文句みたいことを並べ、何を伝えたいかと言うと……

「ブラキとかホント戦いたくないな……」

ってことなんです。

いや、情けないとは思うけれど、ホントにブラキは苦手なんですよ。

でも、そう思ってしまうのも仕方無いのでは？　　って言う言い訳。

「……貴方でもそう言うモンスターってっているんだ」

今はグラビを倒した帰り道。

心の中で愚痴を落としたつもりが、どうやら口に出ていたらしく、それを笛の彼女に聞かれてしまった。

「そりゃあ、苦手なモンスターくらいいるよ」

ゲームの中では100を超える数のアイツを倒した。けれども、そんな中で一度たりとも上手く戦えたことはない。ホントに戦い難い相手なんです。

けれども彼女の防具を作るため、そして俺の武器を作るために戦わなければいけない。苦手なモンスターは結構いるけれど、アイツはその中でも一番苦手。やだなあ……
「でも、下位だしなんとかなると思う」

うん、それはわかっている。

狂竜化はしないだろうし、此方は上位防具一式で相手は下位。だから失敗することは無いと思うんだけど……

アイツの何が一番嫌かって――

「戦っていて面白くないじゃん、ブラキって」

それが一番大きな理由です。

とにかくアイツは此方に隙を見せてくれない。脚くらいならいつでも攻撃はできるけれど、俺の担いでいる武器はハンマー。脚なんて攻撃していてもちっとも面白くない。

頭を確定で狙えるのなんて尻尾回し攻撃くらい。後は罨や乗りを入れていかなないと頭を叩くことは難しい。それがとにかく嫌だった。

強い相手は大歓迎だ。強い相手にどう避けてどう攻撃するか考え、手探りで攻略方法を見つけていくあの感覚は嫌いじゃない。どの攻撃なら頭を狙うことができ、それを見切ってからハンマーを叩き込む。そんな戦いに憧れる。

一方ブラキだけど……確かにブラキは強い。本当に強い。でもそう言うことじゃないんだよなあ……

だってアイツってほとんどの動きが頭を叩けないもん。

だからブラキが本当に苦手だった。

「えっ？　そ、そんな理由？」

あ、あら？ まさか驚かれるとは思わなかった。大切な理由だと思うけど……

ブラキの弱点は頭だ。けれども無理矢理頭を狙うよりも確実に脚を殴った方が早く倒せたりする。それって何か違う気がする。俺の技術不足で頭を狙えないとかなら、まだ良いんだけどさ。

「うーん、粘菌はストレスも溜まるし、上位のブラキと戦う前にゴア装備作っちゃった方が良いかな？」

あの粘菌もなかなか厄介なんです。

せっかくの攻撃チャンスにあの粘菌がついていたりして、ローリングをしなきゃいけない状況とかストレスがヤバイ。

下位のブラキくらいならまだ良いけど、上位でマラソンをすることを考えると、結果的に防具を作った方が早い気がする。

「……でもゴア装備ってよく燃えるし、爆発で消し飛びそう」

うん？ 確かにゴア装備の耐火性は低いけど……

「いや、ブラキの爆発は無属性だからゴア装備だろうがクック装備だろうが、ダメージは変わらないはず」

まあ、俺も最初は火属性の攻撃だと思ってた。見た目は明らかに炎だもんね。勘違いしてしまうのも仕方無いかもしれない。

「……知らなかった」

それはしやーない。

しっかし、防具はどうすつかね。要は今の装備でゴアとブラキのマラソンをするとしてどつちが楽かって話だけど……むう、悩む。

まあ、とりあえず下位のブラキを倒してからか。あまりにもストレスが溜まるようなら、ゴアを先にやろう。

それにどの道、HRが6にならないと上位ブラキとは戦えないし。

むう、ブラキかあ……倒すことはできると思うけど、なんとも気は進まない相手です。

——戦っていて面白くない。

か。

私はどうなんだろう？ 確かに戦っていて面白いって感じる時もある。そんな時もあるけれど……それが本心なのかはちよつとわからない。

でも、彼の言ったあの言葉はきつと本心なんだと思う。

苦手な理由は戦っていて面白くないから。その気持ちはわからないでもない。モンハンはゲームシステムの的に、同じモンスターと戦い続けなきゃいけない時がある。そして5頭くらいなら問題なく戦える。でも、それが10頭20頭100頭と増えていけば、そんなのただの作業だ。楽しむためにやっているはずなのに、それが作業になってしまつては意味がない。だって、何のためにやっているのかわからないから。

そんなことを考えると、やっぱり戦っていて面白いモンスターつてのが一番なのかもしれない。だから彼の言っていることは理解できる。

でもそれは私だからであつて、きつとあの娘には理解されないだろうなあ。

だって、この世界のハンターは狩りを楽しむために戦っているわけじゃなく、モンスターを倒すために戦っているのだから。その戦いに面白いか面白くないかつてことはない気がする。面白いか、面白くないかじゃなくて、倒せるか倒せないかの2択しかない。もしかしたら彼みたいないな考えの人もいるかもしれないけれど、やっぱり少ないと思う。

とは言つても、私は彼の気持ちがあつてしまふ。どちらかと言うと私は彼より人間だから。そして例え、彼の考え方が間違えていようと、別に悪いことじゃない。

楽しみながらモンスターを狩ろうが、使命感に迫られながらモンスターを狩ろうが結局変わらないのだから。むしろ、変なプレッシャーのせいで動きが鈍るようじゃ仕方ない。

難しいものです……

「えと、じゃあ次はブラキディオスつてことでいいの？」

「うん、そのつもり。まあ、今度は上位じゃなく下位クエストだけだ」

あの娘と彼の会話。

それは考え方の全く違う二人の会話だ。

「おおう、久しぶりの下位クエスト！ 頑張ります」

「うん、頑張れ。超期待してる」

それでも、この二人の仲は良い。ちよつとすれ違いそうになることはあるけれど、それはお互いを思つてのこと。本当に良いコンビだと思ふ。でも、どうして此処までこの二人が噛み合っているのか私にはわからない。

「ふふん、任せなさいな。流石に下位クエストなら私だつて活躍できますから！」

「いや、今でも充分……ん……まあ、張り切り過ぎない程度にやれば良いと思ふよ？」

そしてそんな二人の関係が羨ましかった。

私だって仲は良いと思うけれど、彼ともあの娘とも、そんな良い感じにはならない。それは少し寂しい。

「そう言や、君って防具はどうするの？ 何時までもジャギイSじゃ流石に不味いし……」

ああ、そつか。あの娘の防具を聞いていなかった。

武器は当分今のままで大丈夫だと思う。でも、防具はそろそろ厳しくなるはず。鎧石を突っ込めばなんとかなりそうではあるけど、いつまでもジャギイSじゃ可哀想。

「うーん。そう聞かれても私はよくわかんないし……でも、強いのがいいです」

「いや、まあ、そりゃあ強い防具が良いんだけどさ……」

仲良く防具の会話をし始めた二人。

そんな二人の会話に、少しだけ混ざってみる。でも、話の中心はやっぱ私を抜かした二人だった。

うーん、会話って難しいね。でも今はこんな状況を充分満足しているから、これで良いのかなあとも思う。

考え方はみーんなバラバラな3人。

「ねえ、笛ちゃん。リノプロ装備っていいと思わない？」

「……ぐうれいとだと思おう」

武器だつて皆バラバラ。

だからちよつとしたことで、直ぐにバラバラになつちやうんじゃないかつて言う、不安はいつもある。

「いやいや、全然グレートじゃないからね？　お願いだからリノプロはやめてください」
「でも、リノプロ装備ってカッコイイし可愛いよ？」

それでも、なんとかまとまっではいるんじゃないかなあつて思う。

「可愛いかは知らんけど、強くないんだつて」

「むう……じゃあ——」

そしてそんなこのメンバーが私は好きだったりします。

でも、恥ずかしいから私の口からそんな意思を伝える言葉は出ないのです。

これから先、少しばかり遠い未来で3人ともバラバラになってしまいうけれど、そのことをちよつとだけ後悔することになる。

ちゃんと言葉にしておけば良かったなあ……って。

でも、後悔したのは少しだけ。

言葉にしなきゃ伝わらないこともあるけれど、言葉にしなかったって伝えることはある。

たぶん、そう言うこと。

第51話く乗りスタン痺れ麻痺から水爆落としスタンく

「はあ……」

ガタゴトと揺れる馬車の上。

落ちたのは一つのため息。

「んく……どうかしたの？」

目指す場所は前回と同じ地底火山。

ターゲットはブラキディオス。今まではなんとか逃げていたけれど、ついに戦わなくちやいけない日が来たらしい。

「いんや、なんでもないよ」

こてりと首を傾げ、心配そうな声をかけてくれた相棒に一言返事を落とした。ブラキと戦うのが嫌のため息が溢れたなんて、恥ずかしくて言えるわけがない。

今回のクエスト、失敗することはないと思う。いくらブラキと言えど相手は下位。今までは捕獲の時にしか使わなかったけれど、此方には罠もある。普通に考えるとよっぽど酷いハメ技を使われない限り、まずやられることはない。

それに此処で失敗するようじゃ、上位のブラキになんて勝てはしないだろう。でも、嫌なものは嫌なのだ。

苦手なものは苦手なんだ。

いくら勝てるとは言え、ブラキは好きじゃない。

「ブラキディオスってすごい強いんだっけ？」

ああ、そっか。相棒はブラキが初見になるのか。そうなるのかなり厳しいかもしれない。い。

今までのモンスターとは動きが全然違うし、爆発の範囲もかなり広く避け難い。俺も初見は本当に苦労したなあ……正直なところ倒せる気がしなかった。

「うん、超強い。だから最初は無理しないよう攻撃した方が良いと思う」

とは言え、相棒の武器は操虫棍とブラキに対する相性も良く、この相棒はかなり上手い。案外普通に戦えちゃったりするんじゃないかと思っっている。

まあ、操虫棍と相性の悪い相手とかいないんだけど……強いて言うならエキスを3色集めることのできないドス系くらいだろうか？ 操虫棍でダメなら他の武器だってダメだと思う。

「うわ……そんな相手私で大丈夫かな」

ん……心配なところはあるけれど、よっぽどなことがない限りまず大丈夫だと思

う。

ただ、やっぱり気乗りはしなかった。

罨、使うか……

「そんじや、行くか」

「おおー！」

「おー」

地底火山のベースキャンプに着き、準備を終えてからいつも通り彼が声を出した。

でもその声はいつもより小さかったし、なんだか元気がないようにも聞こえる。私の気のせいかな？

今回の相手はブラキディオス。詳しくは聞いていないけれど、確か笛ちゃんの防具と彼の武器のために素材が必要なんだって。

そして今回は久しぶりの下位クエストです！　すごく強い相手だって聞いているけど、下位なら私でも大丈夫……だといいな。

ベースキャンプから飛び降り、エリア1でクーラードリンクを飲み、さらに笛ちゃんの演奏を聴いた。これで咆哮を受けても耳を塞がなくていいんだって。便利なものです。

そしてブラキディオスの初期エリアは2番だって言ってた。だからどうして知ってるのさ？　なんて思わないでもなかったけれど、どうせ聞いても教えてくれないだろうし、彼も困ったような顔になることもわかっていいるから私は聞きません。

それでもいつか教えてくれる日が来るといいけど。

エリア2は所々に溶岩が流れていて、ものすごく暑そうなエリア。クーラードリンクのおかげで何も感じはしないけれど、あまり長居したくない場所。

そしてそんなエリアにブラキディオスはいた。特徴的な角と腕。青黒く輝いている外殻。種族が同じなせいかな、イビルジョーとちよつと似てるかも。

「頭が赤。後ろ脚が白。尻尾と胴体が橙。乗りまくってくれ」

「了解です！」

いつも通りの彼の指示。最近になって漸くエキスの特徴みたいなのがわかってきた。赤色のエキスを取ると、攻撃が沢山できるようになる。そして、だいたい頭が赤色のエキス。白色のエキスを取ると足が速くなつて後ろ脚で取れることが多い。橙色のエキスを取ると……んくよくわかんないです。でも、取れる部位は背中やお腹が多いっぽい。

自分の両腕を腕を舐めてからグオオ！ と大きな咆哮を上げたブラキディオス。でも、笛ちゃんのおかげで耳を塞ぐことはない。

さてさて、サクツとエキスを集めちやおうかな。

そんなことを考え、ブラキディオスに向かって虫を飛ばした時、ブラキディオスがぐつと身体を沈めたと思つたら、一気に此方へ飛んできて両腕を使って攻撃してきた。当たりはしなかったけれど、滅茶苦茶驚いた。

そして、ブラキディオスの両腕が着いた場所には緑色のネバネバしたものが残つている。何が何だかさっぱりだけど、近づかない方が良さそうだ。

とりあえず取りやすい赤と白のエキスを取って、橙はどう取ろうかと考えているとさっきのネバネバが爆発した。

……まじすか。

え？ えっ、それ爆発するの？

どれくらいかのダメージなのかはわからないけれど、あの緑色のやつにはホント近づかない方がいいっぽいです。てか、爆発はズルい。

爆発することがわかると、急にブラキディオスが怖くなった。今までのモンスターと比べて動きは恐ろしく速いし、もうちよつと勘弁して欲しいくらい緑色の奴を地面に設置しまくる。いつ攻撃すれば良いのか全然わからない。

「……乗ったー」

おおー、ナイス笛ちゃん！

そっか、私は乗りまくればいいのか！

笛ちゃんの乗り攻撃も無事成功し、ダウン中のブラキディオス尻尾から橙エキスをゲット。頭は二人に任せて私は尻尾を攻撃。ブラキディオスって尻尾斬れるのかな？

それにしてもブラキディオスってダウンでもしてくれない限り戦えないね。

こりやあ大変な相手だ。

乗りダウンからブラキディオスが起き上がると、急に緑色だった部分が黄色くなった。たぶん怒り状態になったってことだと思っ

た。そして怒り咆哮を上げ——ようとした時、今度はスタンした。うむ、良いタイミング。スタンしたブラキディオスの足元には何故か彼がいたから、それに気をつけながら尻

尾を攻撃。彼は何をやっているんだろうか。いつもならずつと頭の前でハンマーを振り回しているのに。

スタンから起き上がったブラキディオスだったけれど、今度は痺れ始めた。ああ、何をやっていたのかと思つたらシビレ罨を置いていたんだ。

そう言えばそんなものもあつたね。罨なんてフルフルを捕獲した時以来な気がする。

シビレ罨にかかったブラキディオス。そんなブラキディオスに対して笛ちゃんが頭。彼が腕。私が後ろ脚を攻撃。

そうやって暫く攻撃していると、シビレ罨の壊れる音がした。むう、罨の効果つて意外と短いんだね。

これで拘束も解けてしまった。よしつ、此処は私のジャンプ攻撃でもう一度乗りを狙おう！

そう思つた。でもね、ブラキディオスさんつてば、また痺れ始めたんです。それはたぶん笛ちゃんの武器のおかげなはず。

……すごいね。さつきから全然攻撃させてない。

また痺れ始めたブラキディオスに対して、さつきと同じ立ち位置から攻撃。そろそろ麻痺も解けちゃうかなあなんて思っていると、急にブラキディオスが横に倒れた。なに

よしつ？

「寝たっ！ 攻撃ストップ！」

響いた彼の声。おお、そう言うことですか。

そう言えば私の武器つて睡眠だもんね。アレだけ斬ったんだもん。そりやあ寝ちやうか。

モンスターが寝た時は爆弾を置くと決めてある。だからいつも大タル爆弾をアイテムポーチへ入れてはあるけれど、今回は支給品に大タル爆弾がありました。

そんな支給品の大タル爆弾を寝てしまったブラキディオスの頭の前へドーン。さらに彼がブラキディオスの足元へ落とし穴をセットしていた。なるほど、起こした瞬間落とし穴へ入れるのか。

準備を終えると爆弾から少し離れたところで、彼がハンマーを地面へ叩きつけた。その衝撃で起爆。爆音が響き、ブラキディオスの頭は爆風に包まれた。

そんなことをしたのだから、流石にブラキディオスも目を覚ます。けれども目を覚ましたばかりのブラキディオスの足元には彼の設置した落とし穴。さつきから怖くなるくらい上手くいつている。

こんな戦い方もあったんだ……

落とし穴へ落ちたブラキディオスを攻撃すること直ぐ、落とし穴に落ちても暴れていたブラキディオスがくたりと前へ倒れた。どうやら頭の前で鈍器を振り回していた二

人が2回目のスタンを取ったみたい。

落とし穴へ落としスタンを取って動かなくなったブラキディオスに攻撃していると、ブラキディオスは本当に動かなくなった。

おおー、笛ちゃんの乗り攻撃が成功してから一度も攻撃されてない！そして私はなんと一度も攻撃を喰らってないのです！うむうむ、今日はすごく上手くいった気がする。いつもこうでできればいいんだけどなあ……

「倒したー！」

「うん、お疲れ様」

上手くいったことか嬉しくて、大きな声を出した。

そんな私の声に反応してくれた彼。そしてその彼の表情はなんて言うか……あまり嬉しそうではなかった。せつかく上手く倒せたんだしもっと喜ばいいのに。

「……今日は運が良かった」

「そうなの？」

倒したブラキディオスから素材を剥ぎ取っていると、笛ちゃんがぼそりと声を落とした。

よくわかんないけど、今回は運が良かったらしい。

「うん。だって、全然被らなかつたし」

最初は何のことかなあって思ったけれど、たぶん、睡眠とか麻痺がスタンや乗り攻撃と被らなかつたってことだと思う。

そう言えばそうだね。今までって乗った瞬間スタンしたり、麻痺した瞬間スタンしたりってことは結構あつたもんね。ふむ、今回はそれがなかつたから上手くいったのかな？

とは言え、クリアできたのは確か。ブラキディオスは強いモンスターらしいし、それを倒せたのだからやっぱり私は嬉しい。この調子なら上位のブラキディオスもなんとかなる気がしてきた。

彼が今、何を考えているのかわからないけれど、無事倒せたのだしそれだけで充分なんじゃないかなあって私は思います。

第52話く頬膨らませて嫉妬く

まさか彼処まで上手くいくとは思っていなかった。

今回は罫をしようとは思っていたものの、ハメようとまでは思っていなかったのです。それに麻痺や睡眠なんかの状態異常系は、思ったタイミングで発動させられるものじゃない。そうだと言うのに、今回は完全にハメきることができてしまった。

前回の薦ハメのこともあるし今更ハメをダメとは言わないけれど、どうにもモヤモヤする。かと言って相手はブラキなのだし、普通に戦ってもそれはそれでストレスが溜まるんだよなあ……うん、なんとも贅沢な性格をしているね。まあ、こればかりは感情論なのだしどう仕様も無いんだけどさ。

「……難しい顔してるけど、ハメのこと？」

どうやらそんな顔をしていたらしく、笛の彼女にそんなことを言われた。

クエストの帰り道。時刻は夜。今日も今日とて、元の世界じゃまず見ることできなかった星々が頭の遥か上の方で輝いていた。

因みに相棒は既に夢の中っぼいです。

「うん。やつちや不味かったとかは思わないけれど……どうにもね」

じゃあどうすれば良かったのかと聞かれると、その質問に答えることはできない。

そんな我が儘な自分の性格が嫌になる。

「でも、あの娘は上手く倒せたって喜んでた」

うん、見てたよ。超嬉しそうだったね。そしてたぶん、それが正解だとは思う。せつかくモンスターを倒したと言うのに、それで悩んでいたんじやあ仕様が無い。

それに罠がダメとかハメは禁止とか言うわけにもいかない。今はソロじやなくパーティープレイなんだ。縛りプレイなぞパーティーじや迷惑でしかない。

むう、もしかして俺ってパーティープレイが合っていないのだろうか？ そんなこと思ったことなかったんだけどなあ。

はてさてソロ、か。

ふむ……

「一つ、提案しても良いですか？」

「……また別れるの？」

……流石、鋭いことで。

今回のクエストで彼女の防具は胴系統倍化を残してほぼ完成。一方、俺は防具なんて一箇所もできていないし、武器だってまだだ。そしてその武器と防具を作るのには、下位のゴアとレウス、そして今日倒したブラキの素材が必要。

それに今はちよつとパーティーを離れてソロで戦ってみたい気分。とは言え、それで彼女たちに迷惑をかけるようじゃ不味い。いくら俺の武器がハンマーと言え、全く戦力になっていないわけではないはずだから。

「たぶん、あの娘は嫌がると思う」

ですよねえ……あの相棒のことだ、俺がまたそんなことを言えば絶対反対する。それは嬉しいことではあるけれど、下位クエストのマラソンを手伝わせるのもやはり気が引ける。

でも流石に今回は説得できそうにない。

「だから私が説得する」

ほそりと彼女の言葉が落ちた。

なんですと？ えっ？ それは嬉しいけど、急にどうしたのだろうか。

「そりゃあ有り難い。有り難いけど……良いのか？」

「うん、私たちはいつも貴方に頼ってばかりいたから、たまにはそれも悪くないと思う」
……頼られていたんですか？

そんな感じは全くしなかった。てか、むしろ武器的に俺が一番火力を出せていないと思っただけど……そう言う話では、ないのかな？

今のモンハンでパーティーにおけるハンマーの立ち位置なんて崖っぷちだ。かと言つてソロなら活躍できるかと聞かれてもそうとは言い切れない。事実TAをした時、ハンマーを使った場合が一番になるクエストなんてないんじゃないだろうか。

火力もなく立ち回りも難しい。だからこそ面白いのだし、飽きることはないのだけど……うーん、そうだと言うのに、頼られているとは。

ただのお世辞だったかもしれないけれど、それは嬉しかった。

「わかった。じゃあ、相棒の説得はお願いします」

「任せて」

うん、頼りにしてます。

ふむ、じゃあ次のクエストから俺は当分ソロで頑張ることになるのかな。今のところの予定は下位のゴア、レウス、ブラキと言ったところ。ソロでブラキか……いやまあ、うん、頑張ろう。

「……ねえ」

「どしたの?」

そろそろ寝ようかと思ったとき、彼女から声をかけられた。

「……もし、元の世界へ戻ったら何したい?」

……そんな彼女の言葉にはちよつと驚いた。

別に禁止していたとか、そう言うわけではないけれど今までそう言う話をしたことはなかったから。だって、俺たちが元の世界へ戻ることのできる保障なんてないのだから。

そりゃあ、何時までもこの世界にいて良いとは思わない。思わないけれど、元の世界への帰り方なんてわかるはずがない。

だからなのか、元の世界の話を自分からしようとは思わなかったし、彼女の話だって聞いていない。

それが、急にそんなことを言い出したものだから、驚いてしまうのも仕方無いことだと思う。

「ん〜……そうだね。とりあえず家族や友人に会いたいかな。んで……ああ、MH4Gをやりたい。君は?」

発売まで残り2ヶ月もないくらいだった。新しいモンスターやG級のモンスターたちと戦いたかったなあ。それに、もしかしたらハンマーのモーシヨン値とかも見直され

たかもしれないし。まあ、例え変わってなくても担ぐ武器はどうせハンマーになるだろうけどさ。

「とりあえずワンコ倒す」

……この彼女はジンオウガに何かの恨みでもあるのだろうか。

この世界に来てからだって、一式防具を作ることができくらい倒していると言うのに。

「あと、4Gも楽しみ」

だよな。

……うん？ そう言えば、この彼女って俺より一年以上前からこの世界へ来ていたんだよな。そうだとするのには、4Gの存在を知っているのか。発売の発表ってそんなに早かったっけ。

いや、待て。違うのか？ もしかして元の世界の時間の流れと、今の世界の時間の流れが違うってこともあるのか？

「え、えと。ちよつと聞いても良い？」

「どうしたの？」

ゲームの世界へ飛ばされるとか言う、もう理屈じや説明できないようなことが起きているんだ。そうだとすてもおかしくはない。

「君って……元世界のいつ、この世界へ飛ばされたの？」
「えつと……確か——」

少し考えるような仕草をしてから、彼女がぼそりと言葉を落とす。

そして、その落された言葉は俺がこの世界へ飛ばされる2日前の日付だった。

……ふむ。たった二日の差で一年か。

例が少なすぎるせいでもまだわかることは少ないけれど、少なくとも元の世界と今の世界の時間の流れが違うことはわかった。

考えても仕方の無いこと。

けれども、考えずにはいられない。謎解きは嫌いじゃないのだから。

ま、正解なんて出るはずがないんだけどさ。

「……好きな数字」

「うん？」

「貴方の好きな数字って何？」

決して良くはない頭を使い。元の世界と今の世界を考えると、そんなことを彼女から聞かれた。

いや、好きな数字とか言われても……

「じゃあ……3」

「そうじゃなくて4桁」

怒られた。

いや、そんなこと最初に言ってくれないとわからないのですが……

さて、4桁の好きな数字ねえ……3333じゃ味気ないし、今考えると3だつて其処

まで好きな数字じゃない。だいたい好きな数字つてなんだよ。

ん……ああ、あの4桁ならちようどあの数字で良いのか。

「1248かな」

それはきつと多くのハンマー使いが追い求めた数字。その数字にたどり着くことのできるハンターがどれほどいたのかはわからない。それでも、俺たちは追いかけた。続けた。

結局、最後の最後まで出なかったなあ……

「ふふつ、じゃあ私は1196だ」

そう言つて彼女はクスクスと笑つた。

どうやら俺の言つた数字の意味を理解していたらしい。笛とハンマーの武器係数は同じ。けれども、ハンマーはボーナスが乗るから数字は少しだけ大きくなる。

「出たの？」

「……出なかった」

まあ、そんなもんだよな。妥協品はそれなりに出てくれるけれども、ゴール品なんて出る気がしない。紅玉なんかのレアアイテムとは比較にならないほどの確率。調整を間違えている気がしてならない。

それにしても、まさかモンハンの世界へ来てゲームの話をする事になるとは思わなかった。もしこの世界にもギルドクエストがあれば、やはりソレを追いかけることになるのかな。それは何とも気の重くなる話ではあるけれど、少しだけ楽しみだ。

「そっか、なかなか出てくれないよなあ。俺も笛しか持つてなかったし」

「……は？ 持つてたの？」

……彼女にすごい顔をされた。

いかん、地雷を踏み抜いたか。

「え、えと、うん」

「……旋律は？」

ヤバイ。見るからに不機嫌だ。

頬が膨らんでいるところはちよつと可愛いけれど、この彼女怒ると怖いんです。

「あ、赤空素白のゴルリコを……」

「……へえ、よかったね」

どう見ても祝ってくれてません。絶対良いなんて思っていない。

とは言うものの、それは仕方ないことかもしれない。もし俺と彼女の立場が逆だったとしても、そんな顔になった気がするのだから。

どんなにクエストをクリアしたところで、ゴール武器なんて出ない時は出ない。だからこそ他人が持っていると余計に羨ましいし、妬ましい。ホント難しいものですよ。

そんな俺と彼女の会話にどんな意味があったのかなんて、その時の俺はわからなかった。

そして、その会話の大切さに気づくことができたのはそれから少しばかり遠い未来のこと。

さて、次からはこの彼女とも別れソロで頑張ることとなる。それに不安もあるけれど、それを楽しみにしている自分がいたりします。

第53話〈ハンマー使いの場合〉

ブラキのクエストを終え、帰ってきてから相棒にこれから暫くは別れてやろうと提案。

しかし、予想通り其処は相棒が渋った。別に時間がかかっても良いから皆でやりたい。と。そしてその日は結局、説得できることなく次の日また会うことを約束して解散。後は笛の彼女に任せることとなった。

そして次の日。

本当に彼女が説得できたかどうかはかなり不安だったけれど、どうやら其処は彼女が頑張ってくれたらしく、相棒も別れることを納得してくれた。かなり渋い顔だったけど……

しかし、これで心おきなくソロでやることができる。順調順調。

俺は下位のクエストをやっていく予定。じゃあ彼女たちはその間、どうするのか聞いてみると、どうやら相棒の防具を作るらしい。

んで、何の防具を作るのか聞いたけれども彼女曰く――

「…………秘密」

だそうです。

別に教えてくれても良いと思うんだけど……

まあ、とりあえずそんな感じでパーティーが2つに別れてのハンター生活が始まった。

ソロハンター生活初日。

まずは何を倒すか考えたけれど、とりあえず武器が欲しいと思った。目標はディオステイル。名前の通りブラキディオスのハンマーで、下位クエストだけで作ることできる最高の武器なんじゃないだろうか。

そしてそのディオステイルを作るために、レッドビートと言うレウスのハンマーが必要。

そんなことで、最初の目標はレッドビートの作成と決まった。ターゲットは空の王者。すぐ飛んでしまい鬱陶しい相手ではあるけれど、閃光玉さえ持つていけばかなり楽な相手となる。何より、ハンマーとの相性もかなり良い。

そんなじゃ、ま。ひと狩り行きますか。

そして、ソロでのマラソンが始まった。

とは言うものの下位クエストと言うこともあり、空の王者の討伐はあっさりと終了。まあ、閃光玉さえあればこんなものなのかもしれない。そしてスタンプの便利さには改めて気づかされた。パーティーじゃ使いどころが難しいけれど、ソロなら叩き込み放題。振り向きへスタンプを入れられるのが美味しい。

クエストの場所も遺跡平原と、バルバレからはかなり近くこれならあっさりと素材は集まるかもしれない。

うきうき気分でバルバレへ戻り、報酬を受け取ってから直ぐに加工屋へ向かった。有り難いことにレッドビートは一発生産が可能な武器。だからかなり運が良ければ、一回クエストへ行くだけで作ることができるけれど……まあ、鱗と骨髄が足りませんでした。

むう、骨髄は面倒かもしれない。さくつと出てくれれば嬉しいが。

ソロハンター生活2日目。

昨日に引き続き、今日もオレウスの狩猟へ出かけた。昨日、ソロでも割とあっさりクリアできることはわかっていたので、その日も問題なく討伐完了。ただ、バックブレスだけは未だに直撃する。どうにかならないものか。

剥ぎ取りに必要な鱗の数は足り、後は骨髄だけとなった。剥ぎ取りでも出ると思ったけれど、もしかしたら捕獲の方が良いかもしれない。

バルバレに戻り、報酬の確認。骨髄は見当たらなかった。残念。

ソロハンター生活3日目。

骨髄を求め、本日も王者を狩りに行く。

問題なく討伐完了。しかし、剥ぎ取りで骨髄は今日も出なかった。ハンマーも尻尾を斬ることができたらなあ……

少々嫌な予感を覚えつつ、バルバレに戻り報酬を確認。

骨髓がない。

ソロハンター生活4日目。

2回連続で咆哮のフレーム回避を失敗し、バックプレスが直撃。
骨髓は出ない。

ソロハンター生活5日目。

流星にこのままじゃ不味いと思い、その日は捕獲を試してみた。

咆哮のフレーム回避もかなり安定してきた。しかし、閃光玉の素材がそろそろヤバい。閃光玉くらいギルドで売ってくれても良いのに……

バルバレへ戻り、祈るような気持ちで報酬を確認。

骨髓が3つきた。嫌がらせか。てか、骨髓って1頭から複数取れるものなのか……

何はともあれ、素材が揃ったため加工屋へ向かいレッドビートの作成をお願いした。会うたびに加工屋の髪の毛の量が減っている気がする。今度ババコンガを倒したとき、桃毛獣の毛でもあげることしよう。きつと喜んでくれはず。

漸く最初の目標を達成することができ、その日は久しぶりに集会所でお酒を飲んだ。そして今までの反動のせい、飲みすぎてしまったらしく記憶が曖昧だ。

闘技大会の受付嬢と何かの会話をしたはずだけど、何の会話をしたのやら……

ソロハンター生活6、7日目。

ゴアSの脚防具にノヴァクリスタルが必要なことを思い出し、二日酔いのせいで痛む頭には辟易しつつも氷海の採取ツアーへ出かけることに。

そしてクエストが始まって直ぐ、エリア5であっさりとノヴァクリスタルを採取することができた。クエストの時間はまだまだあるし、他にも色々と採取してしまおう。

採掘も虫の採取も終わり、じゃあ後はクエストの終わりまで釣りでもしていようと思い、釣りをしていたところを乱入してきたイビルジョーに襲われた。クソが。

こやし玉など持って来ていなかったせいで、1スタンを取る前にモツシャモツシャさ、さくつとベースキャンプへ。意地でも1スタンくらい取ろうか迷ったけれど、その日は許してあげた。まあ、必要な物を取ることができたのだし良しとしよう。

氷海の採取ツアーから戻ってきて直ぐ、加工屋へ向かいレッドビートを受け取った。

攻撃力は山権現よりも武器倍率で10高く、見た目も俺の好きなハンマー。ただ、斬れ味が緑までしかないため、使うことはなさそうだ。

レッドビートを作成したことで、漸くディオステイルへの強化ができるようになった。

ブラキは一度倒しているし、もしかしたらもう強化できるんじゃないかと思ったけれど、どうやら砕竜の尻尾が1つ足りないらしい。

なるほど尻尾か。

……尻尾？

ソロハンター生活8日目。

さてはて尻尾をどうするかと集会所で悩んでいたところ、闘技大会の受付嬢に捕まった。そして何が何だかわからないまま、イヤクツクの闘技大会へ出場することに。マジ意味わからん。

どうやら先日集会所でお酒を飲みまくった時、受付嬢と闘技大会へ出る約束をしていたらしい。そんな記憶はないんだけど……

とは言え約束を破るわけにもいかず、まあ、たまには良いのかな。なんて思いつつ出

場。使う武器はハンマーと片手でかなり迷ったけれど、どうせならソロスを取りたかったので片手にした。

結果、4分28秒。

かなりギリギリではあったけれどどうにかソロス。アレだね。頭で思っている以上に身体は動きを覚えているらしい。

以前よりタイムは落ちてしまったし、何度かミスをした。それでも久しぶりに感じた闘技大会独特のあの感覚は悪くないなんて思った。

あと、片手剣つてやつぱり使いやすいね。

ソロハンター生活9日目。

色々と悩んだ結果、まあブラキの場合、捕獲すれば尻尾だつて出るだろうと考え、とりあえず何度かブラキと戦ってみることにした。

そんなこんなで地底火山へ出発。

はあ、ブラキソロとかやだなあ……

もうプライドなぞ捨て、段差を利用しジャンプ攻撃を多用したり、スタンプを連打す

ることでどうにか捕獲完了。

しかし、壁際へ追い込まれて恐ろしいコンボを受けたため1乙。それでも、角と拳を破壊することはできたのだしよしとしよう。

バルバレに戻り報酬を確認したところ、やはり尻尾はなかった。

おかしいな。少なくとも俺が戦っていたブラキに尻尾はついてたのに……めっちゃブンブン振り回してたのに……

まあ、こればかりは仕様が無い。次、頑張ろう。

ソロハンター生活10日目。

場所が遺跡平原から地底火山となってしまうたせいで、自分の家で休むことができなくなった。のんびりやっても良いと思うけれど、やはりできるだけ急いで素材を集めてしまいたい。

その日は、ブラキさんの機嫌が良かったらしく、驚くほどあっさりと捕獲することができた。あれ？もしかして俺が上手くなったのか？

でも尻尾は出なかった。

ソロハンター生活11日目。

まさかの2乙。

壁ハメ怖い……なんとか捕獲することはできたけれど心が折れかけた。

やはりブラキは苦手だ。改めてアイツの壊さを思い知った。

心身ともにボロボロの状態でバルバレへ戻り、報酬を確認。すると尻尾が2つ。

……流石にこれは酷い。しかし、まあ、文句を言うわけにもいかないし、文句を言うだけの体力だつて残っていなかったせいで、その日は素材を加工屋へ渡してから直ぐに自分の家に戻った。

ソロハンター生活12日目。

これで武器の準備はでき、後はゴアの防具を作るだけとなった。

しかし、加工屋へ会話をしていた時に知ったことが一つ。なんと、ディオステイル改とするのに上位ブラキの素材は必要ないらしい。更に4頭ものブラキを倒したおかげか、あと必要なのはレウス素材だけ。

要求されるレウス素材は流石に上位のものだけど、火竜の堅殻を3つだけとかなり良心的。それくらいならば捕獲することで1回のクエストで集めることができる。

そんなことで急遽予定を変更し、上位のレウスと戦うことに。武器的にかなり厳しいけれど、此処でディオステイル改さえてきてしまえば後々がかなり楽になる。

そして遺跡平原で上位リオレウスと対決。

閃光玉は調合分まで使い果たし、回復薬もかなりギリギリ。それでも、どうにか1乙で捕獲することができた。しっかし、アレだね。ジャギイS装備は良く燃える。

あと閃光玉を使い叩き落した時、火竜の紅玉を拾った。そんな大事なもん落とすなよって思いはしたけれど、有り難くいただくことに。物欲センサーが発動しなければ、こんなものなんだろう。

期待に胸を膨らませバルバレへ帰還。

普通に考えれば堅殻が3つくらいは出てくれるはず。そしてもう上位クエストをソ口では行きたくない。大きな期待と大きな不安。そんなものを抱えつつ報酬を確認したところ——堅殻は3つ以上あった。

良かった。本当に良かった……

そのまま加工屋へ向かい、追加の素材を渡してディオステイル改まで強化をお願いした。これさえできてしまえば下位のゴアなら余裕でいける。それに爆破武器ならほぼ全てのモンスターに効くのも大きい。

そんなウキウキ気分のまま序でに下位のゴア装備を作るための素材を聞いてみた。そこで問題が発生。

ゴアメイルを作成するのに黒蝕竜の尻尾が必要だった。

……いや、これは無理です。

ゴアの尻尾ばかりはどう仕様も無い。本体からの剥ぎ取りじゃ出ないし、ブラキのように捕獲をしても出ない。クエスト報酬でも出ないはずだし、尻尾を切らない限りどう仕様も無い。

それでも、まあ、他に集められるものくらいは集めておこうかな。

ソロハンター生活最終日。

まさか、尻尾で躓くことになるとは思わなかった。余っている素材で適当に片手剣を

作っても良いかもしれないけれど、此処は素直に彼女たちにお願いしようと思う。

そう言えば、彼女たちはどれくらい進んでいるのだろうか？ そんなことが気になつたけれど、あの二人なら大丈夫だろうし、今は自分のことに集中しよう。

そして集会所でゴアのクエストを受注。

「はい！ ゴア・マガラの狩猟ですね！ 参加人数は……えと、3人でよろしいですか？」

うん？ 3人？

いや、一人で……

そう言おうとした時だった――

「……それで大丈夫」

久しく聞いていなかったあの声が後ろから聞こえた。

慌てて後ろを振り向くと、そこには彼女たちの姿。

「久しぶり！」

元氣そうな相棒の声。

「……ソロじゃやっぱり大変？」

相変わらず何を考えているのかわかり難い彼女。

随分と急なものだったからさすがに驚いた。しかも彼女たちの装備は俺と一緒にいた時のものとは全く違うものだった。

彼女は以前言っていたように、頭がディア、胴にナルガ、腕がグラビで腰と脚はクロムメタル。そして相棒の方はジンオウS一式となっていた。

そっか、ジンオウガ装備にしたんだ。

うん、悪い選択ではないと思うよ。

「それじゃ、早速行こうよ！ 遺跡平原なら近いし楽だよね」

相変わらず元気なようで安心。装備は一気が変わってしまったけれど、そこばかりは変わっていないらしい。

ホント、有り難いものです

「そうだな。サクッと行ってくるか」

うむ、随分と喧しくなりそうではあるけれど……そう言うのも嫌いじゃない。

第54話く彼女たちの場合く

正直なところ、彼がまたパーティーを離れてソロでやると言うのは不満だった。

そりゃあ、私たちのことを思つてのことだつてのはわかつていたけれど、別に私はそんなこと気にしないもん。少しぐらい時間がかかっても良いから皆と一緒にクエストへ行きたかった。

そう思ったから最初は彼の提案に反対した。早く強い装備を作つた方がいいつてもわかる。でも、別にソロでやる意味はそんなにないはず。

結局、彼が提案してきたその日は、結論が出ないまま別れることに。そんなどうにもモヤモヤとする気持ちのまま帰ろうとした時、笛ちゃんに呼び止められた。

どうしたのだろうかと思つていと――

「……彼の提案を受けてあげて」

なんて言われてしまった。

むう、これで2対1と私が不利になつてしまった。それでも引くつもりはやっぱりない。

「私は彼の素材集めくらいならいくらでも手伝うし、それで時間がかかることなんて気にしないよ?」

「……私だってそう」

うん? そうなの? じゃあできれば私側についてもらいたいのだけど……

そうだと言うのに、どうして笛ちゃんを私を説得しようとするのだろう。

「ただ……今回は私たちのためにもなると思う」

「ん……どう言うこと?」

私たちの……ため?

そりゃあ、彼のクエストへついて行くよりは自分たちの装備を強化するためのクエストへ行った方がいいのはわかるけど、なんかそう言うことではない気がする。

「いつも彼に頼ってばかりだった。だから私たちだけでも頑張らないと」

ああ、なるほど。そう言うことですか。

それは私も思っていたこと。特に私なんて彼に頼ってばかりだった。初めて彼とクエストに行つてからずっと。

そして、多分だけど笛ちゃん——私のために言ってくれている。

私たちが、初めてクエストを失敗したあの日の帰り道で聞いてしまった二人の会話。

彼はそのことに気づいていないと思うけれど、私はもう知ってしまった。

この二人はこの世界の人じゃないって。

じゃあ、どうやってこの世界へ来たのか。それはわからない。あの話を聞いていた限り、たぶんいきなりこの世界へ来ちゃったんだと思う。

いきなりこの世界へ来た二人。つまり裏を返すとそれは——いきなりこの世界から消えてしまうことにだって繋がってしまう。私としてはずっと一緒にいてもらいたいけれど、そればかりはどう仕様も無い。そしてこの二人がある日突然消えてしまうその瞬間から私は、一人となる。

そうなってしまった時、私が今みたく毎日モンスターを倒すようなことができるとは思わない。だから笛ちゃんのセリフは私を思つてのことだと思う。彼女は私が聞いていたことを知っているはずだから。

そして、笛ちゃんが私のためとは言わず、私たちのためと言つたのは彼女の優しさなんだろう。

……うん、わかりました。

此処まで気を遣つてもらつたんだもん。流石に断ることなんてできない。

「……そうだね。そろそろ自分だけでも頑張らないとだね。わかった。彼の提案を受けるよ」

もしこの二人がいなくなつた時、私はどうなるんだろうか……

「大丈夫、今は私もいるから」

ふふっ、そうだね。

ありがとう。

「でも、彼がソロで頑張ってる間、私たちは何をやるの？」

「……貴女の防具を作っちゃおう。何か作りたい防具ってある？」

なるほど、それはいい。

そして防具……防具かあ。な、何がいいんでしょうね？ 恥ずかしながら本当にそう

言う知識はないんです。だって防具って言ってもモンスターの数だけあるじゃん。そんなの覚えきれない。

作りたい防具かあ……リノプロ装備とか言ったらどうせ怒られるよね。

そうなる……

「あつ、じゃあ笛ちゃんが前付けてた防具がいい」

あれ？ でも上位防具はあるのかな？ 多分あるとは思うけれど、ちよつと不安だ。

「ジンオウSってこと？」

おおー、良かった、どうやらあるみたいだ。

私はジンオウガと戦ったことはないけれど、笛ちゃんが一式を装備していたってこと

は、慣れているはず。それなら多少は戦い易いんじゃないかあって思うのです。

「うん。どうかかな？」

「ジンオウガなら大丈夫だと思おう。じゃあ私たちの目標はジンオウス一式つてことで」

「了解です！」

うむ、今は笛ちやんがすごく心強いです。

ジンオウガは確か……電気を出すモンスターだったよね。初見でも戦える相手だといいいけど……。ブラキディオスみたいな感じだとちよつと辛い。

「……それじゃ、また明日。頑張つてこー」

「うん、またね」

そんな会話を笛ちやんとした次の日。

彼に提案を受けることを伝えた。でも、ただ伝えるだけじゃ負けた気がしたから、できるだけ嫌そうな顔をして。そんな私の表情に彼はやつぱり申し訳なさそうな表情。

それがちよつと面白かった。でも、これくらいは許して欲しい。彼が私たちを頼つてくれないのはいけないのだ。

そしてその日から彼と別れ、私と笛ちゃん二人のパーティーとなった。前回も一度そう言うことがあったけれど、今回は暫くの間続くことになると思う。せめて彼より早く防具を作っちゃいたいなあ。

彼と別れて直ぐ、私たちも防具を作るためクエストへ出発。

ちよつと面倒なことにジンオウガは天空山にしか出ないらしい。それでその天空山だけで、なんと往復で2日半もかかってしまうのです。

こりゃあ、大変だ。

天空山へ着くまで1日と少し。其処から帰るのにも1日と少し。防具一式が完成するまでどれくらいかかるんだろ……

そんな長い道のりだったけれど、その間は笛ちゃんと色々なお話をした。

それは彼がいたら絶対にはできないような会話。本人がいないのをいいことに言いたい放題。そしてそれが、本当に楽しかったです。

ただ、どんな会話の内容だったのかは割愛させていただきます。私と笛ちゃん二人だけの秘密なのだ。

そんな会話を楽しみながらも天空山に到着。

天空山は今まで見たフィールドとは雰囲気全然違って、なんて言うか今にも崩れ落ちちゃうんじゃないかって感じだった。探掘なんかをしながら色々なエリアを回った

けれど、段差がすごく多い。そんな独特な雰囲気なフィールドにジンオウガはいた。

ジンオウガの見た目は青、黄、白とすごくカラフル。

カツコイイと言えばカツコイイかもしれないけれど、見た目は怖い。

よしっ、頑張ろう！

……ジンオウガ強い。

なんとかクリアすることはできたけれど、私が2回も倒れてしまった。

ジンオウガの何が強いって、電気が完全に溜まった状態になるともう手がつけられないところ。尻尾ならまだ攻撃できるけれど、それが切れちゃうともうどうしていいのかわからない。

笛ちゃんがいてくれて本当に助かった。

「お疲れ様」

「うー、お疲れ様……」

まずいなあ、こんなに強いとは思っていなかった。一式防具を作るってことは、あともう何回か戦う必要がある。こんな調子で大丈夫だろうか。

彼と別れて最初のクエストはそんな感じとなってしまった。

一応クリアすることはできたけれど……なんとも厳しい感じ。むう、やつぱり3人いないと大変だ。そうだと言うのに、彼はよく一人でやろうなんて思えるよね。

「……次からだけど、ジンオウガがバチバチ状態になったら、乗り攻撃お願い」

「あつ、うん。了解ですー」

そう言えば、今回は自分がやられないよう必死で乗りを全然狙っていなかった。そか、乗れば良かったのか。

うむ、次からはもう少し戦えそうな気がしてきた。

「ジンオウガって何頭くらい倒さないとかな？」

「どんなに少なくても4頭くらい。それに碧玉がなかなか出ないからもっと増えるかも」

おお。少なくて4頭ですか。

そして碧玉つてのが……うん？ 碧玉？ それなら確か……

アイテムポーチの中身をガサゴソと確認。クエスト中で慌てていたからしつかりと確認はできなかつたけれど、雷狼竜の碧玉とやらを拾った気が……ああ、うん。やつぱり持ってた。

「碧玉とか言うのなら出たよ？」

「……え？ ホ、ホントに？」

超驚かれた。でも、何がそんなに驚くことなのかはわからない。

「うん、バチバチが解けたとき、落し物をしたから拾ってみたんだ。そしたらその碧玉つて奴だった」

なるほど、この碧玉つてのはどうやら珍しい素材なんだね。それは良かった。

そして私の言葉に笛ちゃんは、物欲センサーがー。とか、リアルラックがー。とか、良くわからないことを呟いていた。

でも、どうやら悪いことではないのだし、良しとしよう。

ジンオウガ討伐2頭目。

1頭目を倒してから、また直ぐに2頭目を倒すために天空山へ出発。例のごとく一日

以上の間、揺られ続けた。その間は寝たり笛ちやんと会話をしたりと、なかなか忙しいのです。

そして前回のことも踏まえてのクエスト。

1度戦い、少しくらいはジンオウガの動きにも慣れてきたから、今回は一度も倒れませんでした！ それはバチバチ状態になったら乗って言う、笛ちやんのアドバイスのおかげもあつたんだと思う。

素材も集まってきたし、うん、なんかいい感じだ。

バルバレに戻り防具に必要な素材を確認してもらおうと、ジンオウガ素材は雷狼竜の高電殻って言うのと、雷狼竜の堅殻って言うのが足りなかった。でもたぶんあと一回行けば集まると思う。

そして何故かジンオウガ装備にはアルセルタスの素材が必要みたい。いや、まあ、色は似てると思うけどさ……

「……あれ？ 雷狼竜の甲殻はいつ手に入れたの？」

驚いたような笛ちやんの声。

甲殻ってのは……ジンオウガの下位素材だっけ？

「えと、確か私が頼んだふらっとハンターが取って来てくれたんだと思う」

あのハンターたちにはいつもお世話になってます。私が戦ったことのないモンスターの素材を持ってきてくれるし。

お金も其処まで要求されないと、リターンの方が多と思う。

「えっ……そんなのあるの？」

いや、普通にあるけど……

「うん、失敗しちゃうことの方が多いけど、たまに成功してくれるよ。笛ちゃんも頼んでみたら？」

「し、知らない人に話しかけるのはちよつと」

それくらい頑張ろうよ……

ジンオウガ討伐3頭目。

3頭目つてこともあり……うん、流石に慣れました。

どうしていいのかわからなかったバチバチ状態の時も、今ではちゃんと攻撃することができる。確かに動きは速いし、攻撃と攻撃の間も短い。でも絶対に躲せないような攻撃でもないから、慣れれば其処まで強い相手じゃないんじゃないかな。

とは言え、ソロじゃ無理です。笛ちゃんと一緒だから此処まで強気になれています。

3 頭目の討伐も終え、これでゾンオウガ素材は揃いました！
そしてなんて言うか……ちよっとだけ自信もついたかなって思います。

3 頭目のゾンオウガの討伐が終わって直ぐ。もうどうせだったら、このまま必要な素材を全部集めちゃおうってことで遺跡平原へアルセルタスの討伐に出発。

……アルセルタス、か。

上位のアルセルタスと戦うのは初めてだけど、やっぱり彼と初めて行ったクエストのことを思い出した。

そんなアルセルタスも笛ちゃんやんが鬼のように閃光玉を使ってくれたこともあり、あっさり討伐完了。なるほど、今まではどう使うのかよくわからなかったけれど、閃光玉はそう使うのか。私も今度試してみようかな。

そして！ ついに素材が全部集まりました！！

彼と別れてからもう8日目になっちゃったけれども、これで私の防具を作ることができはるはず。彼の方は順調だろうか？

その日は素材が全部集まったってこともあり、打ち上げをすることに。彼がいないのは寂しいけれど、たまには笛ちゃんと二人で飲むのも悪くはないのです。

そんなウキウキ気分でバルバレへ戻ると、彼が闘技大会へ出場するってことを聞いた。

……いや、どうして闘技大会？

彼のことだし、それが無駄なことではないんだらうけれど、私には彼が何を思つて闘技大会へ参加するのかがわからなかつた。

「……今日はいつてもみたいに飲まないんだ」

そんな彼は良いとして、笛ちゃんと二人で打ち上げ。

今日もアルコールは美味しいです。一山越えたのだしなおのこと。

「うん。だって、今はいないんだもん」

笛ちゃんの言葉に私がそう答えると、彼女は可愛らしく笑つた。

お酒は好きだけど、彼がいないのならその量も減つてしまうのです。

それから二日は疲れた身体を休めるため、クエストへは行かなかつた。

とりあえず加工屋へ防具をお願いして、その後は笛ちゃんと買い物をしたり、渋る彼女にふらつとハンターの依頼の仕方を教えたりなど。

笛ちゃんは人見知りな方だとは思つていたけれど、此処までだとは思わなかつた。

そして二日経ち私の防具が完成。そんなことはないはずなのに、新しい防具を装備しただけで、自分がすごく上手くなったように感じた。

あと、笛ちゃんの防具も完成だそうです。でも私と違って所々下位の防具だし、一式でもない。似合っているとは思うけれど、それで大丈夫なのか？ 素材が足りない場合とかは仕方ない時もあるけれど、普通なら一式防具なはず。でも笛ちゃんはそれでいいって言ってるし……ふむ、よくわかりませんな。

この後はどうしようか。と話あつた結果、あともう一度だけ二人でクエストへ行き、それから彼と合流しようってことになった。

そして行くクエストはガララアジャラとしました。前回は私がやられちゃつたし、笛ちゃんの武器を強化するのもも使うそうだから丁度いい。

そんなガララアジャラのクエストだけど、囲まれても焦らないこと。後ろ脚をひたすら狙い続けることを意識。

そして今回は私もやられることなく討伐完了。私が慣れたつてのもあると思うけど、笛ちゃんの演奏のおかげで耳を塞がなくても良くなったのが大きかったです。

お疲れ様でした。

彼と別れてからそれなりの時間が経った。

もつと上手くできたんじゃないかなあつて思うところはあつたし、まだまだ自分が上手いなんて思えない。

それでも彼抜きで上位の防具を一式揃えることができた今、少しは胸を張ることができると思う。それほどに、彼の存在って言うのは私の中で大きかったです。

そして、前よりも少しだけ上を見ることができるようになったのだし、こうやって別れることになってしまったのも結果的に良かったのかなつて思います。

「それじゃ、あの彼のどこへ行くっか」

「……………うん」

そしてそんな私に付き合ってくれた彼女。

彼女には何度も何度も助けられた。3人目のパーティーが彼女で本当に良かったつて思う。

あとどれくらい一緒に居られるのかなんてわからないけれど、どうかもう少しだけ一緒に居てくれると嬉しいです。

第55話～瀕死の敵へ閃光玉～

彼女たちと別れ、ソロで戦うこと12日。

そしてまた3人パーティーとなってから10日と言ったところ。

「つしゃー！ 素材揃ったー！」

結局、俺が最後となってしまったけれど、上位のゴアを倒し漸く防具に必要な素材が揃いました。

頭がゴアSヘルム、胴にゴアメール、腕にゴアSアーム、腰にゴアフールド、脚にゴアSグリーブ。つまりゴアSゴア複合テンプレ装備。発動スキルは匠と挑戦者+2、細菌研究家におまけで火属性弱化。火耐性はまさかのー43とジャギYSと比べ物にならないくらい良く焼けるし、空きスロットも1つしかない。

そんな大きすぎる欠点のある防具ではあるけれど、それ以上に匠と挑戦者+2が美味しい。これだけのスキルがあればダラだって倒すことはできると思う。火属性の攻撃なんて避ければ良いのだ。

「おおー、おめでどうー！」

そんな元気な相棒の声が響いた。

この相棒がいなければ尻尾を手に入れるのが、半端じゃなく苦勞することになったと思う。俺も彼女も打撃武器。未だジンオウS装備の相棒はなれないけれど、この相棒がいてくれて本当に良かった。

「……次は緊急クエスト?」

そして彼女の声。彼女の防具も完成しているし、あとはひたすらHRを上げるだけ。

MH4はダラを倒してHRの上限解放が終わってからが本当の始まりだと思ってる。それまでまだ時間はかかるけれど、少しずつスタートラインが見えてきた。

「うん、そうだね。どんなクエストかは聞いてないけど、じいさんも緊急クエストが届いてるって言ってたし」

ゲーム通りならグラビモス亜種ははず。

もしそうだとすると、俺の装備的に決して相性の良い相手ではない。怒り状態の熱線とか耐えないと思う、まあ、前回グラビを倒した時のように乗りまくれば良いから、倒すことはできると思うけど。

それに俺の武器もかなり強くなったのだし、むしろ前回よりは楽かもしれない。武器倍率は30も上がり、防具が完成すれば斬れ味も白ゲージ。

「ありがとう。いただきました」

これで長い間お世話になったジャギイS一式ともお別れ。少しばかりの寂しさを感じることはあるけれど、何時までもその装備でいるわけにはいかない。少しずつでも前へ進むのだ。

「そんじや、帰るか」

はてさて、次の緊急クエストはなんでしようね？

バルバレへ戻り報酬を受け取ってから直ぐに加工屋へ向かい、防具の作成をお願いした。胴と腰が下位のゴア防具なせいか、何度もそんな装備で大丈夫かと聞かれることに。

やはりこの世界では複合装備と言う考えはないらしい。説明するの面倒だなあ、そもそもどう説明すれば良いんだろうか。なんて思っていると――

「大丈夫だ。問題ない」

と、俺の代わりに笛の彼女が答えた。

いや、確かに問題はないのだけど……そのセリフはダメだろ。ゲームが違います。あと最初から一番良いのをください。

この彼女はたまにぶつ飛ぶから怖い。悪い子ではないのだけど……

そんなことがあった後また集会所へ戻り、緊急クエストの内容をじいさんへ聞きに行った。

んで、例のごとく長ったらしいお話を聞かされた。

そしてH R 6へ上がるための緊急クエストの内容は——ブラキディオスの討伐だった。

またお前か。

いや……ホント勘弁してほしい。

「ブラキディオスってあのすごく強そうな奴だよな？」

俺の防具が完成したと言うこともあり、今日は打ち上げ。こうして3人で一緒に飲む

には本当に久しぶりなんじゃないだろうか？ 相棒と彼女は俺と別れたあとも、二人で打ち上げをしたとか言っていたけど。

「うん、地底火山で戦った奴と同じだね」

あの時は本当に運が良かった。

今回もあの時みたく、ハメのような感じとなれば良いけれど、流星にそれは厳しいだろう。下位と上位じゃ相手の体力が全然違うのだし。

……今回も罠をフル活用して倒そう。

苦手な相手ではあるけれど、此処でブラキの素材が集まれば俺の武器も強化することができる。丁度良かったと割り切れば良いのだ。

「んで、申し訳ないんだけど緊急クエストへ行くの、俺の防具が完成してからで良い？」

「……大丈夫」

「私もいいよー」

ありがとう。

流星にジャギイS一式で上位のブラキとは戦いたくない。それにゴア装備なら細菌研究家が発動するから、それなりに楽になる。粘菌がつく度、3回もローリングをするのは少々面倒臭い。

新しい防具が揃った時の俺の防御力は198とそれほど高くはない。そして笛の彼

女はもつと低いだろう。うくん、そろそろ鎧玉を使っても良い時期だろうか？ コツコツと貯めてきた鎧玉を突っ込めば防御力だって300は超えると思う。それに今度の防具は長く使うことになるだろうし……

因みに、相棒の装備が一番防御力が高かったりする。まあ、相棒だけ全部上位防具なのだから、当たり前と言えれば当たり前前々だけどき。

「じゃあ、緊急クエストへ行くのは3日後ってこと？」
「うん、そうだね」

防具が完成するのが2日後の夕方。

出発するのは3日後の朝となりそうだ。

それにしてもブラキかあ……どうにかサクツと倒せる方法ってないのかな？ 下位のブラキですら苦労したと言うのに、相手が上位となればかなりキツイ。

まあ、このパーティーならなんとかなるか。ソロじゃなくて本当に良かったと心から思う。

結局、その日の打ち上げも相棒は酔い潰れ、俺が家まで運ぶことになった。この相棒も出会った時と比べてかなり成長しているのに、どうしてこればかりは学習しないのだろうか……

「っしや！ 行くか！」

「おぉー！」

「おー」

HR6となるための緊急クエスト。場所は地底火山。ターゲットは歴代パッケージモンスター最強と呼ばれるブラキディオス。

装備を整えるためHR5で長い時間止まってしまっていたけれど、これからは一気に進むことができる。

ブラキの初期エリアは下位クエストと同じエリア2。今回はちゃんとクーラードリ
ンクを持ってきました。

「……耳栓演奏するからちよつと待って」

「うん、お願い」

エリアーでクーラードリンクを飲んでいると、彼女がそんな言葉を落した。パーティーに笛が居てくれるとやはり助かる。ハンマーもそう言うことができたらなあ。まあ、そんなことができたとして、それをハンマーと呼べるのかは怪しいところだけだ。

彼女の演奏を聴き終わり、漸く量産体制へ移ることができた怪力の種を飲み込んでから、エリア2へ。

これでブラキが狂竜化していたら笑うに笑えないが、ギルドからそんなことは聞いていないし、見つけたブラキもどうやら通常個体らしかった。

「とりあえず乗り頼んだ」

「了解ですー!」

ブラキの初期スタン耐性値は低い。一回でもダウンを取ってもらえれば1回目のスタンは簡単に取りることができる。まあ、上昇値が高いせいで2回目は結構厳しいんだけどさ。

相棒の飛ばした虫が当たり、此方を振り向いてからブラキが咆哮をあげた。そして両腕を舐め少し後ろに下がったと思ったら、いきなりジャンピング土下座。マジ怖い。

そんなブラキにとりあえずカチ上げ。ソロであれだけ戦ったおかげか、頭を狙うタイ

ミングは前回よりも掴めている。自分を狙ってくれた時だけだけ。パーティーだと挑発スキルが本当に欲しい。

「乗ったー」

ナイス！ 超素敵。

てか、早いな……もしかして、相棒さんまた上手くなった？ 最初はアルセルタスの乗りも失敗するようなハンターだったのに……

嬉しいことではあるけれど、この凄まじいほどの成長速度を見るとなかなか思うところはある。

「罾って持ってきてる？」

相棒が乗りを頑張っている間、砥石を使いながら彼女に確認。演奏中失礼。

「……うん。2つともある」

了解。それなら俺が罾を2つ使っても捕獲は問題なくできる。

いや、碎竜の剛拳が欲しいから、討伐じゃなく捕獲したいんですよ。

そして相棒の乗りも無事成功。最近相棒さんが乗りを全然失敗しなくなった。ちよつと寂しいね。

そんじゃ、罾をフル活用して徹底的にやらせてもらおうか。

その後、前回と同じようにできるだけブラキに攻撃させないよう、罠とさらに乗りも混ぜながら立ち回った。シビレ罠と睡眠が被ってしまったこと以外は、ほぼ完璧な立ち回り。流石に体力が多いせいも、ブラキに全く行動させなかったわけじゃないけれど、これだけでできれば充分。

落として穴から出てきたブラキへホームランを叩き込んだところで、2回目のスタン。そのスタンを解けた瞬間ジャンプ攻撃で乗りダウン。ダウンが解け立ち上がったブラキは脚を引きずった。

其処で逃がしてしまうとエリア9まで行かれてしまい少々面倒だから、閃光玉を投げた。絶対には逃がさない。

そんな怯んだ状態のブラキの足元へ彼女がシビレ罠を設置し、捕獲玉を2回当てた。

それで捕獲成功。そしてクエストクリアです。尻尾は切れていないけれど、他の部位破壊はできているし上出来と言ったところ。

うん。お疲れ様でした。

それにしても……このパーティー本当に強いかもしれないね。

ハンマーに笛に操虫棍と決して相性の良い組み合わせのパーティーではないはずなのに、なんとも不思議なものですよ。

「え、えと。捕まえちゃったけど、今回のクエストって捕獲でも良いんだよね？」

「うん、討伐クエストじゃなく、狩猟クエストだから捕獲でも良いはず」

捕獲クエストなのに討伐してしまうと失敗になるけど、狩猟クエストなら大丈夫なはず。

てか、捕獲できるモンスターで討伐クエストってないんじゃないかな？ もしかして

俺が知らないだけあたりするのだろうか？

「じゃあ、これで私たちはHR6ってこと？」

「そのはず」

俺がそう言うと、相棒さんは嬉しそうに笛の彼女と喜んだ。

HR6かあ……古龍系やゴリラ、イビルのようなキツイモンスターとはまだ戦えないけれど、振り返ればもうこんなところまで来たんだな。

とは言え、前も思ったようにモンハンはHRが解放してやっとスタートラインと言ったところ。まだまだ頑張らないとだ。

第56話〈素材玉に光蟲〉

HR6となるための緊急クエストも無事クリアすることができ、バルバレへ帰還。

じいさんから有り難い話を聞いた後、爆砕の破鎧ができることを期待しながら報酬を確認。しかし、残念ながら碎竜の剛拳と碎竜の堅黒曜甲が足りず、俺のハンマーを強化することはできなかった。

まあ、1頭のブラキから4つも拳が出たらおかしな話ではあるけど。

そんなことで、彼女たちには申し訳ないけれど、また上位のブラキを討伐することに。ディオステイル改だって弱い武器じゃない。でも、爆砕の破鎧ができてしまえばずっと使えるんです。まあ、ダラのハンマーであるラグナができてしまえば使わなくなると思う。いや、ラグナが強すぎるんですよ。

そして次の日。俺の武器強化のため2日続けてブラキと戦うことに。この世界ではわからないけれど、なんて言うか、こう……同じモンスターを何度も何度も倒すって言うのはモンハンをやってるって感じがする。

モンハンの世界へ来たと言うのにおかしな話だよ。

そんなブラキのクエストだけど、今までと同じように徹底的に罨や乗りを利用した。これじゃあ上手くはならないと思いはするけれど、コイツばかりは許して欲しい。

その結果、特に苦勞することなく捕獲完了。

そしてバルバレへ戻り報酬を確認したところ、拳が1つ足りなかった。

どうやら俺が戦っていたブラキの片手は飾りだったらしい。

「……現実を見て」

すみません。もう一度お願いします。

彼女たちに申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、3日連続でブラキのクエストへ出発。

最近のコイツとばかり戦ってきたおかげか、以前感じていたような苦手意識はかなり薄れてきた気がする。でも、罨は全力で使わせてもらうがな！

そしてバルバレに戻り報酬を確認。

すると、なんと宝玉が一気に2つも来た。ゲームをやっていた時も、何故かブラキの宝玉ってなかなか出ないイメージだったから嬉しかった。ただ、ハンマーに宝玉を使わないのが残念なところ。

まあ、宝玉が手に入ったのだから悪いことじゃあない。

「……拳は？」

……ちよつとソロでブラキと戦つ「手伝う！ 手伝うから！ 別にこれくらい気にしないからっ！」いつも迷惑かけて本当にすみません。

結局、俺の武器を強化するのに上位のブラキと4回も戦うことになってしまった。スキル挑戦者を発動させる装飾品にブラキの素材を使うから、ブラキの素材はいくらあつても良いと思うけれど、彼女たちには感謝しきれない。

いつもありがとう。

しかしこれで俺も武器が完成。表示攻撃力は884。武器倍率換算で170。さらに爆破の属性値も260。斬れ味は匠込みではあるけれど白ゲージと文句無しの強武器。これで漸く俺は全ての装備が整った。

そんなわけで、次は彼女たちの武器の強化だけ……まず、相棒の武器の強化にはティガレックス希少種の素材が必要らしい。俺たちのHRは6。残念ながらソイツと戦うのはまだ無理です。最低でもダラを倒した後じゃないと戦うことができない。

そう言うことで彼女の武器を強化することに。彼女の今の武器はデンジャーコール改。強化先はパラハザードコールで、ガララ素材は足りているけど、レウス亜種の素材

が足りないらしい。

次のターゲットが決まった。

リオレウス。別名は天空の王者。その名の通り本当に良く飛ぶ。良く飛ぶって言うより、むしろ降りてきてくれない。最近嫁さんもやたら飛ぶようになったり、低空の王者などと馬鹿にされることもあるが、弱い敵じゃない。

俺もソロで一度戦っているけれど、かなりギリギリだった。まあ、あの時はソロで下位の武器だったのだし苦労するのは当たり前だと思っただけ。

そして今回戦うこととなったのは、その天空の王者の亜種である蒼火竜。通常種と比べ、肉質が全体的に固くなっている。そして何よりなかなか降りてこない。通常種も飛んでばかりだったけれど、亜種はやばい。降りて来ない。本当に降りて来ない。

そんなんだからブラキほどじゃないけど、コイツも苦手だった。だって、空飛んでたらハンマーじゃ何もできないんだもん。

じゃあ、どうやってレウス亜種と戦えば良いのかって話だけど――

「……閃光玉は私に任せて」

と、彼女が言ってくれた。よろしくお願いします。

こうやってしつかり役割を決められるのもパーティーは大きい。

俺の武器が完成するのを待ってから、レウス亜種を倒すため天空山へ出発。

そう言えば、天空山へ行くのは初めてだ。彼女たちは俺がソロでやっている間、ジンオウガと戦っていたはずだから天空山へは行ったことがあるはず。

そんな天空山だけど、今までのどのフィールドよりも遠く、移動に一番時間がかかった。ゲームの中で登場したシナト村は天空山の近くにあるはずだけど、俺が行く機会はあるのだろうか？ もし行くことができたなら、あの14代目に何か言ってやりたい。そもそもこの世界へ来たのはアイツが原因なのだから。

まあ、今のこの生活だって悪くないと思えているのだし、怒っているってわけじゃないんだけどさ。でも、何か言ってやりたいとは思うんだ。

そして天空山へ到着。

天空山はもうどうして形を保っているのかわからないくらい、不安定なフィールド。そんなボロボロなフィールドとなってしまったのはダラが原因だと思っただけ……この世界にダラって何頭いるのだろうか？ 1頭はいると思うけれど、1頭だけで武器や防具を全部作ることができるとは思わない。先のことはあるけれど、どうなることやら……

そんなことを考えつつ、レウス亜種の初期エリアである8へ。

どう言う仕組みなのか全くわからないけれど、このエリアは傾く。自分の卵があることなど全く関係なしに、レウスが暴れると何故か傾く。そしてもつとわからないのが、傾いたエリアがまた戻ること。

まあ、アタリハンテイ力学のある世界に俺たちの世界の常識は通用しないってことだろう。

それでレウス亜種との戦いが始まったわけだけど――

笛の彼女がすごかった。

レウス亜種に何かの恨みでもあるんじゃないかってくらい閃光玉祭り。レウスが少しでも飛ぶと視界が真っ白になる。天空の王者と呼ばれるあのレウスがほとんど飛べなかった。

更に、乗り麻痺睡眠スタンと此方も全力。たぶん状態異常になっっていない時の方が少なかったんじゃないだろうか。

そんなこともあり、かなりあつさりレウス亜種を討伐することができた。

「レウス嫌いななの？」

「……最小金冠の出ないアイツが悪い」

……そうですか。

俺はあっさりとして出てしまったので、何と声をかければ良いのかわからなかった。出た者に出ない者の気持ちはわからない。

せつかくだし採掘とかしておけば良かったと気づいたのは、帰り道だった。

レウス亜種の討伐を終え、バルバレに戻り報酬を確認したところ、幸いなことに必要な素材は足りたらしい。

この差はなんなのだろうか。彼女は蒼火竜の翼が3つ必要と言っていた。そして翼つてなかなか手に入らなかったと思うけど……

相棒のことは良いとして、この彼女も充分おかしいと思う。その運を俺に少しくらいわけてくれても良いのに。何と言うか、裏切られた気分だ。

いや、別に彼女たちは全く悪くないんだけどさ。

そしてそれは、俺と彼女の武器強化が完成し、これからどんなクエストをやっているのか集会所で相談している時だった。

「……ちよつといいかい？」

あのギルドマスターが俺たちへ近づいて来て、そんな言葉を落した。

もしかして、次の緊急クエストが届いたりしたのだろうか？ 流石に早過ぎる気もするけれど、今までのことを考えるに有り得ないことはない。

「どうしたのさ？」

「キミ達にね、お願いがあるんだ」

しかし、ギルドマスターはいつものように柔らかな表情ではなく、何処か緊張したような顔だった。

何か……あつたのか？

「これは本当ならキミ達に頼むべきでない。でもね、さても運の悪いことに腕の立つハンター達は皆、最近やたらと現れるようになったラージャンの狩猟へ行ってしまうているんだ」

やたらと現れるようになったラージャンねえ。

この世界ではどうかわからないけれど、俺のいた世界じゃラージャンなんて毎日何頭狩られていたのやら……

そして、どうやらじいさんは何かのクエストを俺たちに頼みたいって話らしい。相変わらず回りくどい話し方だ。

「……いや、むしろ彼らがいたとしてもキミ達に頼んだかもしれない」
ありや、随分と信頼されているんですね。

俺たちだつて弱くはないと思うけれど、流石に俺たちより上手いハンターはいるだろうに。とは言え、悪い気分じゃない。

「それで……俺たちにクエストを頼みたいってこと？」

「ほっほほ。理解が早くて助かるよ」

さてはて、どんなクエストなのやら。

「クエストの内容は？」

俺が聞いた。

「覇竜……アカムトルムの討伐をキミ達にお願いしたい」

ギルドマスターが答えた。

ん〜……アカムか。

すごく大きいけど一応飛竜種。飛ぶところは見たことないけど飛竜種。まあ、動きはティガと似ているし、飛竜種と言われてもそれほど違和感はないが。

「最近になって溶岩島でアカムトルムが現れたとの報告が入ったんだ。アカムトルムは非常に凶悪なモンスター。そんなモンスターを見逃すことはできないし、今キミ達以外に頼めるハンターもいない」

いや、そんなこと言われたらもう断れないんですが……

「いくらキミ達でもアカムトルムが相手では辛いことはわかっている。でもどうか、私の頼みを受けてはくれないかな？」

ふむ……たぶん今のパーティーならアカムにも勝つことはできると思う。たぶん、かなり苦労するとは思うけれど勝てない相手ではない。

それに最終手段だって……

そして、此処でこのクエストを受けクリアすることができればギルドからの信頼はまた上がる。

「あ〜……俺は引き受けても良いんだけど……君達は？」

「……私は大丈夫」

「うん、おじいさんも大変そうだし私も頑張るよ！」

はい、決まりましたね。

「了解。うん、じゃあ、そのクエストを受けるよ」

俺がそう言うのと、ギルドマスターはいつものように、ほっほほと笑った。

「キミ達ならそう言ってくれると思っただよ。ほっほほ。ありがとう。どうかよろしくお願いするよ。それじゃあ、準備ができたらまた私に声をかけなさい」

ギルドマスターはそう言っただ度頭を下げてから、離れていった。

ふむ……これで次のターゲットも決まったか。

本当ならHR7となつてから戦う相手。しかし此方の装備は揃ったし、それがちよつと早くなつただけで特に問題はない。

「えと、私は全然知らないんだけど、アカムトルムってそんなに強いモンスターなの？」
そんな不安そうな相棒の声が聞こえた。

まあ、今まで戦ってきたモンスターとはちよつと違うから、何とも言えないけど強いことは確かだ。

「……現金自動預け払い機」

そして、ぼそりと聞こえた彼女の声。

「こら、やめなさい。怒られるでしょうが。それはゲームの中でしかも昔の話なんだから。横アカムとかATM呼ばわりできないくらい強かったじゃん。」

「うん、強いよ。アカムはすごく強いモンスターだと思う。でも……」

「でもっ。」

あゝ……なんて言えば良いんでしょうね？ 確かにアカムは強いんだ。でもそれは普通に戦った場合と違いますか……アイテムを使わなかった場合と違いますか……

「倒すことはできると思う」

「いや、それじゃあなんか不安なんだけど……」

いや、だってそれはゲームの話であって、この世界でも実際にできるかはわからないんだ。

今までの経験的にできるとは思うんだけど……

「……やるなら全力でやらないと。変な意地張って失敗したら意味ない。ダメだったらダメで良いから」

彼女の言葉。

うん、そうだよな。

よし、決めました。

「んっ……どう言うことかっ。」

こてりと首を傾げた相棒。

でも細かい説明はまた今度で。

「へい、相棒」

「えつ、え？ な、なに？」

アカムと戦う場合、持っていくと便利なアイテムはいくつかある。

そしてその中でも――

「閃光玉を調合分まで準備しといてくれ」

やるなら徹底的にやらせてもらおうか。

第57話～願いを込めてホームラン～

笛の彼女の武器が完成するのを待つてから、アカムトルムを討伐するため溶岩島へ向けて出発。

天空山もかなり遠い場所にあつたけれど、溶岩島はもつと遠いらしく、朝早く出発したのにも関わらず着くのは次の日の夜らしい。しかも島とついている通り、何時ものように馬車だけで行くことはできず、途中から気球で運んでもらうんだつて。

そう言えば、ゲームの中でも溶岩島で戦う時は夜だつた。彼処から見える星空が綺麗で好きだつたからよく覚えてる。

「二応、調査分まで閃光玉持つてきたけど、こんなに使うの？」

不安そう……つて言うか、よくわかっていないような相棒の声。

まあ、この世界で閃光ハメを知っているハンターなんていないだろうし、それは仕方の無いことかもしれない。

「実際に戦つてみないとわからないけど、三人分の閃光玉を合わせても足りないかもしれない」

アカムを閃光ハメで倒す場合、普通はギガロアなんかの貫通弾を撃つことのできるヘビイボウガンでしやがみ撃ちをする。しかも、俺たちのパーティーのように3人ではなく4人パーティーで。

その場合なら、早ければ1分10秒ほどであのアカムを倒すことができる。クエストをクリアした後の時間の方が長かつたくらいだ。

けれども、今の俺たちにヘビイを担いでいる奴なんていないし、人数だつて3人。ハメ切れる保証なんてない。

「何にそんな使うのさ……」

ひたすらアカムの顔の前に閃光玉を投げ続けるんです。

調査分まで含めて閃光玉は合計45個。1発の閃光玉で7秒ほど拘束ができるから5分間は攻撃し続けることができるはず。

とは言え、相棒にどう説明したら良いのやら……

「えつとだな……閃光玉を投げるとモンスターって怯むだろ？」

「うん、それはわかるよ」

さてさて、此処からが難しい。

そもそも、どうしてアカム相手に閃光ハメが成立するかと言えば、アカムの閃光に対する耐性が高過ぎることが原因。閃光玉をモンスターに使った場合、ほとんどのモン

ターは閃光やられ状態でも何かしらの攻撃モーションをとる。ゴリラなんかは閃光やられ状態になると手がつけられないほど動き回るし……

でも、アカムは違う。閃光に対する耐性が高過ぎるせいで、何かの攻撃モーションへ移る前に閃光やられ状態が解けてしまう。そしてアカムの動きが鈍重なこともあって、閃光やられ状態が解けるモーションに数秒の時間がかかる。

その時間はたったの数秒しかないけれど、其処は調合分まで閃光玉を持っていき数の暴力で押し切る。それがMH4でできたアカムの閃光ハメのやり方。

そして、このことを相棒に説明したところで……まあ、理解されんわな。

「んで、今回俺たちがやろうとしているのは、閃光玉を投げてモンスターを怯ませ続けようってこと」

「そんなことできるの?」

それはやってみないとわかりません。

もしかしたら閃光玉が効かないとかもあるかもしれないし。

「そこはやってみないとわからないかな。でも、やる価値はあると思う」

俺がそう言うと、相棒はふーん。と言葉を落した。

たぶん、よくわかってないよなあ……でも、どう説明すれば良いのか俺だってわからないんです。

「まあ、最初は俺と彼女が閃光玉を投げるから君はその後になるかな。口じゃ上手く説明できないけど、始めればなんとなくわかると思う」

「うーん、それって何かコツとかあるの?」

「コツですか……強いて言うなら閃光やられ状態が解けた時のモーションを覚えることだけど、こればかりはやってみないとわからない。そうなる……」

「閃光玉を投げてから7秒数えてまた投げることかな。それを調合分までやれば良いと思う」

「8秒でもいいけないことはないと思うけれど、今回はできるだけ安全にいききたい。」

「なんか、すごい状況になりそうだね」

「まあ、別ゲーと言えば別ゲーだしそれは仕方無い。だからこのやり方を嫌う人は少なくなかった。お手軽ではあるけれど、多少の知識がないとできないこと。でも、慣れてしまえば作業とかしならない。」

「成功してくれば良いが……」

その後、彼女や相棒と攻撃する部位やアカムが寝た時の行動などもしつかりと話あっておいた。打ち合わせ通りいかないとは思うけれど、最初にどう動くか決めておくのは大切なんです。

そして長い時間をかけ、漸くに溶岩島へ着いた。

場所は溶岩島のベースキャンプ。

此処から飛び降りればアカムのいるエリアへ行くことはできるけれど、モドリ玉を使わない限り戻ってくることはできない。

そしてモドリ玉は持ってきていきません。つまり、俺かアカムのどちらかが倒れるまでは戦い続けることになる。

こう言う、後のない状況ってやたらと緊張するよね。

そしてそんな状況は嫌いじゃない。

「…………準備できた」

うん、演奏お疲れ様。

彼女に頼み、攻撃力強化【大】を演奏してもらった。クーラードリンクも飲んだし、準備は完璧。あとはターゲットを倒すだけ。

「つしや！ 行くかつ!!」

気合を入れるため、臆病な自分を前へ進ませるためいつも以上に大きな声を出す。

「おぉー!」

「おー」

さて、ひと狩り行きますか。

ベースキャンプから飛び降りると、直ぐにあの巨体を発見することができた。その身体は今まで戦ってきたどの飛竜よりも大きい。

長さならガララアジャラの方が勝ってはいるけれど、アレとは迫力が違う。

「えと、今からアレと戦うん……だよね?」

不安そうな声に引き攣った顔の相棒。

まあ、アカムの迫力は本当にすごいし、それも仕方の無いことかもしれない。

「ま、大丈夫だよ。サクツと倒してじいさんに報告してやろうぜ」

「うん……頑張りますー！」

おう、超頑張れ。

そんな俺たちに気付いたアカム。

そして、今までのどのモンスターよりも大きな咆哮をあげた。

その咆哮が終わると、此方に向かってゆつくりと突進。動きが遅すぎるせいであの突進逆避け難いんだよなあ。

さて、それじゃ始めようか。

俺はゆつくりと突進をしてきたアカムの前に閃光玉を投げた。

一瞬視界が真っ白に染まる。そして、アカムが怯んだ時にあげるあの独特の鳴き声が聞こえた。

おっし！ とりあえず閃光玉は効くっぽい。

そして閃光やられ状態となったアカムの顔には彼女が、腹には相棒が行きインファイト。これではめられなかったら大惨事だよなあ。

どうか、上手くいきますように……

そんな願いを込め2つ目の閃光玉を投げた。

「閃光玉あといくつ残ってる!？」

「あと3つ!」

そんな相棒の声が聞こえてから視界が真っ白となった。

閃光ハメは成功した。成功はしたのだけど……アカムが倒れない。

此処までミスは何もないはず。アカムに攻撃はされていないし、相棒の攻撃によって寝たアカムにも爆弾はちゃんと入れることができた。あの長い両牙も砕け、腹だつて破壊は終わっている。

それでもアカムを倒すことができていない。

今まで使った閃光玉は42個。

……ちよーつと不味いかも。流石に3人でしかもこの武器じゃ火力が足りなかつたつてことだろうか。

「次がラスト!」

そして視界は再び真っ白に。

これで閃光玉はあと一つか……つまり次が最後の攻撃チャンス。むう、ハメきれると思っただがなあ。鎧玉を使っていない今の俺の防御力で、アカムの攻撃はちよつと辛い。

ああ、もうお願いだから倒れてください！

そんな願いを込めてのホームラン。

それがあの大きな顔に直撃した瞬間だった。

アカムが一瞬上を向いたかと思うと、そのまま地面に倒れ込み動かなくなった。

はあ……終わったか。

「これで、ラストー！」

あつ、いや、相棒さん。もう倒し……ああ、視界が真っ白に。

まあ、かなりギリギリだったけれど無事倒すことができたんだ。しかも此方は無傷。相手がアカムなのだから充分過ぎる結果だろう。しかも此方は無傷。

「よし、私も戦……あれ？ え、もしかして倒したの？」

「……うん、終わった」

何が起こったのかわからないような表情の相棒と、冷静にアカムから素材を剥ぎ取る彼女。まあ、アカム笛ってすごく強いし彼女もアカムの素材は欲しいのだろう。パー

ティーならあのダラ笛よりも良いんじゃないだろうか？

「お、おおー！ 何だかわからないけど、すごい！ 本当に倒しちゃったんだ！」

7秒に一回は視界が真っ白になってたもんね。レウス亜種と戦った時もすごかったけれど、今回はあれよりも閃光玉の頻度は多かった。今回のクエスト中の光景はちよつと異様だったかもしれない。

さて、それじゃ俺も剥ぎ取らせてもらおうかな。此処で剥ぎ取っておかないと次、いつアカムと戦えるのかわからない。素材を使うかはわからないけれど、あつて悪いものじゃあない。

このクエストをクリアしたことでHRが7に上がったりはしないだろうか？ そうすればテオやクシヤなんかの古龍と戦うことの権利が手に入るのだけど……

特にテオとは久しぶりに戦いたい気分。しかも、古龍がそんなホイホイいるのかねえ。そしてじいさんの言っていた最近やたらと現れるようになったラージャンつてのも気になる。

かなり順調に進めているけれど、これからは強いモンスターばかり。いつまで止まらず進むことができるのやら……

「ありがとうございます」

剥ぎ取りを終えてから、ふと空を見上げてみた。

そこには画面越しに見た景色よりもずっとずっと綺麗な星空があった。澄んだ空気に星空は良く映え、月明かりだって弱くはないはずなのに、それに負けなくらい輝いていた。クエスト中は全く気づけなかったけれど……うむ、なかなか良い景色じゃないか。

これだけの景色を見れただけでも、この世界へ来て良かったかもしれない。

「おい、迎えが来たから帰ろうよー！」

「……帰る時間」

そんな小っ恥ずかしい思いは、彼女たちが俺を呼ぶ声によつて、直ぐに消えていった。
「ああ、直ぐ行くよ」

そして、これだけの景色を俺はあと何回見ることができのだろうか。

第58話〈お守りにKO術〉

結果だけを見れば余裕で、けれども内容はかなりギリギリでアカムを倒すことができた。もし閃光玉を使い果たし、それでも倒しきることができていなかったら、どうなっていたかはわからない。

装備は文句無しに良いものだけど、如何せん防御力が足りていない。特に俺と彼女は。

そんな中でも倒すことができたと言うのは、運が良かったとでも言うべきなのだろうか。

流石にそろそろ防御力を上げないと厳しいよなあ……

今の装備を最終装備にしようとかだなんて思っていないせいで、どうにも鎧玉を使うことが躊躇われる。ただ、そろそろ良い時期なんのかもしれない。これからは古龍種のモンスターみたく強く奴らと戦っていかなきゃいけないんだ。出し惜しみしている場合じゃないかもしれない。

「これからの予定って何か決まってるの？」

「得には決まってるかな。でも、そろそろHR7になるための緊急クエストが出ても良いと思う。まあ、じいさん次第かな」

ゴリラやイビル、金銀にテオクシヤなどなど。戦いたいモンスターは沢山いる。それにあるかはわからないけれど、ギルドクエストだって挑戦したい。

てか、ギルドクエストがないとキリンと戦えないんだよなあ……キリンと戦いたいで言うのもあるけれど、彼女たちはにキリン装備を是非……なんてね。

ゲームの方はもうやりたいことなんてなくなってしまうていたけれど、今の世界は違う。やりたいことはまだまだ沢山ある。

それが嬉しかった。

「おお、戻ってきてくれたか。よくぞ無事に……そしてアカムトルムの討伐を成功させてくれたね」

バルバレへ戻ると、直ぐにギルドマスターに捕まってしまった。

そして、どうにも周りのハンターから見られているような感覚がする。ダレンを倒した時ほどではないけれど、今回もなかなかだ。

むう、目立つのはあまり好きじゃないんだけどなあ……

「まあ、なんとかね」

たればを言ったところで仕様も無いが、もし閃光玉がアカムにきかなかつたらどうなっていたかはわからない。よく馬鹿にされるけど、アカムさん普通に強いし。

「ほっほほ。クリアできただけで充分過ぎる働きだ。さて、そんなキミ達にギルドからHR7となることを認めても良いと言う、連絡が来たよ。おめでとう。これでキミ達はこのギルドの中でもトップであるHR7だね」

うん？ HR7が一番なのか？ それはつまり上限開放組がないと言うことになりそうだが……

ゲームの中ではダラの緊急クエストをクリアすることでHRは上限が開放された。でも、この世界にダラが沢山いるとは思えなかつたし、また別の条件でHRの上限は開放されるのかと思っていたんだが……どうなのだろうか？

まあ、とりあえずHR7となったのだし、それはまた今度考えるところ。

「ほっほほ。それじゃあ、さても素晴らしき活躍を期待しているよ」

そう言うってからギルドマスターは離れていった。

HRが上がればラッキーだって思っていたけれど……うむうむ、なかなか良いじゃないか。是非とも古龍種のモンスターと戦いたい。

「HR7かあ……もうそんな所に来ちゃったんだね」

不安そう……ではないけれど、なんとも複雑そうな相棒の顔。

たぶん、俺たちのこのHRの上がり方はこの世界じゃ異常なんだろう。上位ハンターでさえ、尊敬されるような世界。その中で俺たちはトップに立っている。そりゃあ、相棒だって複雑な気持ちにはなるか。

そんな異常な早さでHRが上がれば、周りのハンターたちからも見られるのも仕方無い。

「……次の予定は？」

ぼそりと聞こえた彼女の声。

この彼女は今の状況をどう思っているのだろうか？

「ん……古龍種と戦いたいなあって思ってるけど、どう？」

「私も戦いたい」

ですよねえ。せつかく装備も整い、HRも7となったんだ。強いモンスターと戦うには丁度良い。

「でもクエストあるのかな？　そもそも古龍種が現れないから、クエストも全然ないと思うけど」

そこは聞いてみないとわからない。

ただ、やっぱり戦いたいじゃないか。もうこの際ダレンでも良いからさ。

「うん、ちよつと聞いてみるわ」

贅沢なことだけど、できるならテオかシヤガルが良い。

クシヤも悪くはないけれど……また閃光祭りになりそうだからちよつと遠慮したいです。それにクシヤは頭が小さいからちよつと苦手。

そんなことを考えながら、上位の受付嬢の元へ。

そこで、古龍種のクエストがあるか聞いたところ——運の良いことにテオのクエストが届いているらしかった。

つしゃ！　と一度心の中でガッツポーズをしたけれど、よくよく考えてみると俺の防具でテオと戦うのはかなりキツイ。だって、テオにやん火を吹くもん。

しかし此処でモタモタしていると、他のハンターにテオのクエストを取られてしまうかもしれないし……むう、どうしたものか。

まあ、とりあえず、彼女たちに相談か。

そして、彼女たちにテオのクエストがあることを伝えると——じゃあ行こう。ということになった。笛の彼女の目が珍しく輝いて見えた。相棒はよくわかってなさそうだったけれど……

そんな短すぎる相談をした後、再び受付嬢の元へ行き、そのクエストを受けることに。場所は地底火山。最近暑いエリアばかりだ。

いや、まあ、テオが寒いエリアにいたらおかしいんだけどさ。

そんなことで、アカムとのクエストを終えたばかりだと言うのに、飯を食べてからまた直ぐクエストへ出発することになった。疲れはないし、そのことに問題はない。でも、やっぱり不安なところはある。だって、このクエストで乙る可能性が一番高いのは俺なのだから。火属性——43は本当に良く燃える。

「……なんでネコ飯をネコの火属性得意にしなかったの？」

地底火山へ向かう途中、彼女に聞かれた。

……しまった。

「ヤバい、忘れてた……」

そうか、そう言えばそんな便利なスキルもあつたじゃないか。

今回は何スタン取れるかなあ。とかウキウキ気分でKO術の発動する飯を食べていた。馬鹿かよ。馬鹿ですな。

「い、いや、まあ、当たらなきゃ問題ないし」

括弧震え声。

「……ホントに忘れてたの？」

疑うような彼女の視線。

何を疑われているのかはわからないけれど、俺にモンスターからダメージを多く喰らうことで喜びを感じるような趣味はない。被ダメはできるだけ減らしたいのです。

「うん。いつもの癖で……」

正直なところ、KO術を発動させたところで、恩恵は其処までない。KO術が発動するとスタン値が1.1倍にはなるけれど、そのおかげで1回分多くスタンを取ることができるかと言えば、それはかなり怪しい。

じゃあ、どうしていつもKO術を発動させるかと言うと……お守りみたいなものだと思っている。験担ぎだとかそんな感じ。

まあ、K O術に全く意味がないとは言わないけどさ。

「そう………気をつけて」

「うん、わかってる」

さて、俺の火耐性は143。つまり火属性攻撃を受けたとき、1.43倍のダメージを受けるわけだけ……

当たらなければ良いと震え声で言ったアレは、正直なるとかかると思っている。予想でしかないけれど、テオの攻撃に火属性が付与されているものは、非怒り時のプレスだけなんじゃないだろうか。

スーパードヴァなんかも火属性が付与されていそうだけど、あんなもん現段階の防具じゃ耐えられる方が少ない。細菌研究家スキルのおかげで爆破はしないし、そもそもアレは無属性。それに怒り時のプレスも無属性じゃないかって思っている。まあ、だからと言ってそれを確かめる余裕はないんだけどさ。

つまり気をつけるのは非怒り時のプレスのみ。それなら攻めすぎなければきつといける。それくらい、テオとは戦ってきた。

何回も何回も戦い、嫌になるほどアイツの行動を頭へ叩き込んだ。それでも上手くないかないことは多かつたし、頭じゃわかっていてもその通りに行動できないことも多かつた。

でも、今は違う。

あの時に蓄えた知識と経験をずっと上手く活用することができる。

だってこの世界は——ゲームじゃないから。

さてさて、久しぶりの古龍種が相手なんだ。精一杯楽しませてもらおうじゃないか。

第59話～地底火山で打ち上げ花火～

「テオ・テスカトルってどんな感じのモンスターなの？」

地底火山へと向かう途中であの娘が彼に尋ねた。

どんなモンスターと言っても……説明するのは難しそうだ。

「んと……4足歩行で翼が生えてて、火を吹いたり突進したりするモンスターかな。あと顔が大きい」

……いや、間違っちゃいけないけれど、その説明はどうなんだろう。もつと教えておいた方が良いことがある気がする。

「へえー。よくわかんないや」

うん、でしようね。

私もそれだけじゃわからないもの。

とは言っても、口で説明するのが難しいのは確かなこと。今まで戦った中で同じような骨格のモンスターっていないし。

「まあ、実際に見てみればどんなモンスターかはわかるよ」

「それはそうでしょ。うくん、何か気をつけることってあるの?」

気をつけること……それは沢山ある。近距離爆破と遠距離爆破。後方爆破と前方爆破の違いとか。

でも、一番気をつけることと言えば――

「スーパードヴァかな」

その攻撃になると思う。たぶん今の私たちの装備であの攻撃を耐えられる人はいない。だってあの攻撃、鬼みたいに強いんだもん。

「えと、なにそのカツコイイ攻撃」

「んと……テオの怒り状態が解けた時にやる攻撃かな。当たつたらまず倒れると思う」

初めて戦ったときは、何が何だかわからないまま乙つた。あんな攻撃聞いてない。そして何より迫力がすごい。衝撃派みたいな奴で空間が歪んだように見えるし。

「えっ……そんなのどうすればいいの?」

「ノヴァを止める方法は色々あるけど……まあ、君が乗れば大丈夫だよ」

ノヴァの条件はテオの怒りが解けた時。テオの怒り時間は90秒。それさえ覚えていれば大丈夫。

とは言え、タイマーなんてないから、怒りが解けた時のあの独特な鳴き声で判断した方が良いかも。それに、粉塵も消えるはずだからよく見ていればなんとかなる。

「せ、責任重大だ……」

「えつと、だな。そのノヴァをやる時だけど、乗り以外でもスタン、睡眠、尻尾切断、頭怯みでも止めることができるんだ。だからそんなに無茶はしなくても良いよ？ 一回でも乗ってくれば十分だし」

テオは嫌いじゃないけど、この時間に追われながら戦わされるのがちよつと苦手。ソロじゃ全部のノヴァを止めることなんてできない。

でも、今はパーティーでこの彼なら止めてしまうような気がする。

「そうなの？」

「うん、たぶん。んで、今考えてる流れだけど……」

そう言って始めた彼の説明をまとめると、最初のノヴァは私と彼が頑張つてスタンを取ることで止める。次はあの娘が乗って止める。その次はもう一度スタン。その後は……頭破壊か睡眠か乗りで止めるって言う流れ。

つまり、今回の目標はテオに一度もノヴァをさせないこと。簡単に言ってくれるけれど、そんな楽なことじゃない。

「まあ、ノヴァをしそうになった時は言うから、その時は全力でテオから離れるように頼む」

それで間に合うかなあ……操虫棍って一回一回の動作がすごく長いんだよね。

「了解！ 頑張ります！」

そして、あの娘の心配をしていられるほどの余裕が私にもそろそろなくなってきた。いくら戦い慣れている相手とは言え、此処はゲームの中じゃないし、相手は古龍種。

うん、私も頑張らないとだ。

あつ、そう言えば……

「……上位テオって引つ掻きの後、牙を鳴らして粉塵爆破したっけ？」

いつも曖昧になってしまう。あの攻撃は鬱陶しいけれど、アレをしてくれた方が戦い易い。ギルクエはしてくれたと思っただけ……

それが気になったから彼に聞いてみた。

「いや、星7のテオはしないはず。するのは高レベルのギルクエとJUMPテオかな。まあ、だからと言ってしないとは限らないんだけどさ」

そっか。しない可能性の方が高いっぽいんだ。

むう、できればしてほしいんだけどなあ。

ふむ、とにかく今回は乙らないよう頑張ろう。

「よしや！ それじゃ行くか！」

「おおー！」

「おー」

いつも通りのかけ声。彼と別れ、あの娘と二人でクエストをやっていた時は、このかけ声になかったせいで、なんとも変な感じがした。

そんなことを考えるとクスリと何か落ちる。ただ、悪い気分じゃない。

テオの初期エリアである2へ向けて出発。

その途中で、聴覚保護の演奏を1回。これがないと何もできずに突進を喰らってしまふことがある。

「ありがとう。助かる」

どういたしまして。

暑さ無効を演奏するかちよつと迷ったけれど、どうせ旋律維持なんてできないだろうから止めておいた。

そして、エリア2へ。

エリア2の流れる溶岩の上、アイツがいた。

……やっぱり、実際に見ると迫力がある。テオにやんなんて呼ばれるくせに全く可愛くない。

「あつ、ちよつと可愛いかも」

……うん、そうだね。かわいいね。

そんな緊張感のないあの娘の言葉を聞きながら自分強化を演奏。

彼はハンマーを腰へ構えながら一気にテオへ近づいていき、あの娘は虫を飛ばしていた。

そして、私の演奏が終わると同時にテオの咆哮が響いた。

咆哮の終わったテオは私に向け突進。むう、笛はヘイトを稼ぎすぎる。彼はそれを羨ましがるけれど、私は其処まで嬉しくない。一人静かに演奏していたんです。

「遠方爆破！」

私に突進をしたテオが、その翼をゆつくりと羽ばたかせた。

それを見てから直ぐ、彼の声が響く。チャンネルタイム。

急いでテオの頭へ行き、彼の邪魔にならないよう立ち位置を変えながら頭へ叩き込む。テオは顔が大きいから共存も難しくない。

カチリと牙を鳴らす音が聞こえ、遠くの方が爆発した。それを確認してから直ぐにローリングを2回して距離を取る。あの出が早い突進は怖い。やっぱりテオと戦う時は回避性能より距離の方が便利だ。

突進を回避して、テオがバックステップ。そして威嚇をしたところで、彼の力チ上げが頭に入りテオが怒った。あれだけ頭をポコポコされれば怒るよね。

此処から時間との戦いも始まる。制限時間は90秒。そんな戦いがテオを倒すまでずつと。

こればかりはやっぱり苦手だ。私の集中力はそんなに持たない。

それでも、やらなきゃいけない。

「前方粉塵ー」

了解。

たぶん、1回目のスタンは問題なく取ることができると思う。問題は2回目以降のスタンと……彼がまた無茶をして乙った時。

もし彼が乙った場合、私たちは一気に崩れる。だから無茶をして欲しくはないんだけど、クエストが始まると彼って言うこと聞かないんだよね……

危ないってわかってるはずなのに、突っ込んでくんだもん。今だって、前方粉塵と自分で言っておきながらテオの頭の前でハンマーを振り回している。ああ、もう何をやつ

ているのか。

あの時、できるだけ気をつけるって言ったのに……

そしてギリギリまで攻撃して、カチリと聞こえてから爆破をフレーム回避。流石に一発で乙りはしないと思うけれど、見ていてすごく危ない。そんな無茶しなくても良いのになあ……

そんな彼に呆れながら後方爆破後のテオへ後方攻撃。

あつ、スタン取った。

「ナイスー」

できればもうちよつと時間が経ってからスタンを取りたかったけれど、こればかりは仕方無い。

彼、大丈夫かなあ……うん、粉塵を用意しておこう。

……ヤバい。テオにやん超楽しい。

頭へぶち込んだときのヒットストップが、弾けるスタンエフェクトが最高に素晴らしい。

一発でも喰らったら乙るんじゃないかって言う緊張感がすごい。視界なんてとつくに白黒で、音だつて自分の心臓と呼吸くらいしか聞こえてこない。

もう飽きるほど戦った相手。でもそれは、ずっと戦いたいと思つていた相手だった。ハンマーでテオと戦う時は、どれだけブレスと粉塵爆破を誘導できるかが大切。下手な距離を取ると突進を連発され、時間を稼がれてノヴァを止められなくなる。

そうさせないため、テオの90。ターンに合わせてテオの顔を横切るようにローリング。それでブレスを誘導。ブレスのモーションが見えたら直ぐに、ハンマーを腰へ構えて、ブレスの終わり際にカチ上げと横振り。

突進の出は早く避け難いけれど、そこは回避性能で無理矢理避ける。正直このテオが相手なら攻撃なんて当たる気がしない。

コイツばかりは倒してきた数が本当に違う。

何度も何度も失敗した。だからこそ——練習した。

そんな経験があつた。

1発喰らえば終わる攻撃はいくつもある。でも、そんなものグルクエと何も変わらな
い。むしろいつも通りだ。

「乗ったー!」

一度目のスタンを取り、2回目の怒り状態となつてから暫くして相棒が乗った。
ちよつと早い気もするけれど、乗ってくれただけで充分。ナイスです。

空中でテオの背中を切りつける相棒を見つつ、彼女の演奏を聞きながら砥石を使つて
準備。落ちてくるテオの真下へ爆弾を置いても良いけど……まあ、やめておこう。

落ちてくるテオの頭の位置を確認。

そろそろ終わるかなあと言うくらいから、縦1始動でハンマーを振り下ろした。

そして、テオが落ちて来たところへホームランを叩き込む。タイミングは完璧。超気
持ちいい。頭の大きなモンスターはやっぱり好きだ。

乗りダウンしたテオへ、更にホームランを2セット叩き込むと、立ち上がったテオは
翼を激しく羽ばたき、その身体の周りには赤色のモヤモヤしたものが漂い始めた。

直ぐにハンマーを腰へ構える。

「近距離爆破! 避けて!」

誰かの声が聞こえた。

近距離爆破はテオの顔の左側からグルリと反時計回りで爆発する。

でもその攻撃の判定は見た目以上に薄い。

今にも粉塵爆破しそうなテオの顔へ、最初の爆破に巻き込まれない右側からのカチ上げ。

その瞬間自分のすぐ隣が爆発した。そして更に、テオの身体をグルリと回りながら爆発。そんな爆発の最後をフレーム回避。

まさに紙一重での回避。ギリギリの戦い。ずっと待っていた緊張感。

それはゲームではできなかったこと。自分にそれだけの腕がないせいですつとずつとできなかつたこと。

でも今は違う。

ボタンを押し間違えることもなければ、カメラ操作をミスすることもない。甘いステイク入力の原因で前口りは暴発しないし、デイレイだつて簡単にかけることができる。フレーム回避だつてずつとずつと上手くできている。

それは此処がゲームの中じゃないからできること。

自分の思つたように自分が動く。それが心の底から楽しかつた。

「あはっ」

無意識に変な笑い声が溢れた。

それくらい面白かったってことだと思うんだ。

テオと戦い始めて10分と言ったところ、此処まで2スタン、2乗り、1睡眠、1麻痺。頭の破壊も終わっているし、そろそろ倒せるかなあ。なんて思っていると、テオが脚を引きずった。

つしゃ、もう少しだ。とは思ったものの、結局エリア2で倒しきることはできず、そのまま逃げられた。まあ、こればかりはしゃーない。

スーパードヴァは全部防げているし、細かいダメージは受けたものの、ほぼノーダメージ。そして0乙。今回はかなり調子が良い。

「おぉー、もう少しだ！」

そんな相棒の声が聞こえた。

ふと気づけば、白黒だった視界も戻っている。たぶん集中力が切れたんだろう。

そして砥石で武器を研ぎ、クーラードリンクを飲んだところで、何故か彼女から蹴ら

れた。

「あたつ、えっ？ え、どうしたの？」

お、怒られるようなことをしただろうか？ 特にそんなことはしてないと思うけど

……

しかし、彼女は何も言わずにテオを追いかけるため、エリア8へと続く崖を飛び降りていった。

えと……なんだったんだ？

エリア8にテオの姿はなく、そのままエリア9へ行くと、気持ち良さそう……ではないけれど、テオは寝ていた。

これ起こした瞬間、スーパードヴァだよなあ……

「えと、どうすればいいの？ 罠とか使う？」

「とりあえず爆弾かな。あと古龍種に罠はきかんぞ」

言ったような気がするけど、言っただけでなかったかな？ まあ、どうして古龍種に罠がき

かないのかは俺もよくわかんないけど。

「……起きたらノヴァだよね？」

彼女の声。

「うん、そうだと思う。だからちゃんと距離を取らないと」

そのことを知らなくて、最後の最後で泣かされた記憶がある。

悲しい事件だった。

爆弾を翼の近くにセット。彼女たちが距離を取ったのを確認してから、マタタビ爆弾をセット。んで、ダツシユでテオから距離を取った。

マタタビ爆弾特有のピンク色の爆風が見えてから、大タル爆弾が起爆。

大タル爆弾の爆風に包まれる中直ぐにテオが起き上がり、飛んでから大爆発した。

ゲームの中でもすごい迫力だったけれど、生で見たスーパードヴァはすごかった。それを充分距離を取ったところで観察。

「……たまやー」

そのセリフはどうなんだろうか。

いや、確かに綺麗だけどき。

そんなスーパードヴァも終わり降りてきたテオへ相棒が虫を当てると、テオが倒れた。

えと、うん……

……お疲れ様でした。

「え？ た、倒したんですか？」

うん、君の虫が倒したね。

ふむ、最後はちよつと微妙な終わり方だったけれど、内容は悪くない。相手はあの古龍種であるテオなんだ。胸張つても良いんじゃないのかな。

そんじゃ、剥ぎ取らせてもらおう。

なんて考えながら倒れたテオへ近づいて行くと、また彼女に蹴られた。

んもう、何ですか？

「……後で反省会」

「あつ、はい。わかりました」

普段通りの表情ではあつたけれど、そんな彼女がひたすらに怖かった。

第60話　約束にスタンプ

「反省会を始めます」

テオを倒しての帰り道。

いつも通り、何を考えているのかわかりにくい表情の彼女がそんな言葉を落した。

「……はい、お願いします」

正直なところ、何を反省すれば良いのか全くわからない。

今回は一度も彼女を力チ上げなかったし、ホームランも当てていない。立ち回りをミスって突進連発させた覚えもないし、攻撃だつてほとんど喰らつてないはず。そうだと
言うのに、何を反省すれば良いのだろうか……

因みに相棒はこの反省会へ参加しなくても良いらしく、今はいつも通り寝息を立てている。

「……初めてゴアと戦ったとき、気をつけるって言ったの覚えてる？」

……気をつける？ そんなこと言ったかな。てか、何に気をつけるって話だろう。

そしてそれと今回の反省会にどんな繋がりがあるのやら。

「あー……そんなこと言いましたっけ？」

はて、気をつける……いや、ホント何をだ？

そして、俺の答えに彼女はため息を一つ落した。

非常に申し訳なくなる。不味い、そんな大事なことを俺は忘れたのか？

「今日の貴方の戦い方はちよつと……てか、かなり危ない」

そりゃあ相手はテオだし、危なくないなんてことはないと思うけど……いくら慣れているとは言え、弱い相手じゃないのだから。

しかし、立ち回りはそんなに悪くなかったと思うんだけどなあ。

「貴方が上手いのは知っている。でも、流石に今日は無茶し過ぎ」

……なるほど。なんとなく彼女の言いたいことがわかってきた。

確かに今回はフレーム回避を多様しくった。ゴリ押しと言っても良いくらいに。たぶん、そのことを言っているんだろう。

ああ、そう言えば、ゴアを倒した時の帰り道でも同じような会話をした気が……す、すっかり忘れていました。

しまったなあ、そりゃあ彼女だって怒るはずだ。

「いや、その……つい、いけるかなあって」

テオと戦っていたらテンション上がっちゃったんです。ギリギリのあの感覚が楽し

かったです。そんなギリギリのプレイができることが嬉しかったです。

そしてそれはどう考えても俺の我が儘だった。

「……どうして貴方は無茶するの？」

どうしてかねえ。

別にTAをやっているわけじゃないから、慎重に安全に戦った方が良いのはわかっているんだけど、どうしてか身体は勝手に動くんです。

より火力を出すことができれば、それが安全に繋がることはある。でも、あの時の俺はそんなこと全く考えていなかった。ただただ攻撃のチャンスへハンマーを振り回し続けた。喰らった後のことなど何も考えず。

改めて思うと、かなり身勝手な行動だ。

ゲームをやっていた時でさえ、此処までの行動はしなかったかもしれない。じゃあ、どうして今、この世界に来てそんな行動をするかって言ったら……

「たぶん、此処がゲームの世界じゃないからだと思う」

そう俺が言うと、彼女は首を傾げた。

俺だって良くは理解していない。でも、今の俺の無茶な行動はそれが原因。

「……………どう言う意味？」

まあ、そう聞かれるわな。

正直、恥ずかしいからあまり話したくないんだけどなあ……………でも、誤魔化そうにもな
んて言えば良いのかわからないし……………

「自分の思ったように行動できるからかな」

そしてやっぱり恥ずかしかったら、一番大きな理由は隠して表の理由だけ口に出して
みた。申し訳ないけど、プライドを優先させてもらおう。

俺の中にプライドがどれくらい残っているのかわからないけれど、見栄くらい張りた
い。

「よくわからないけど……………やっぱり危ないことはダメだと思う。それに、彼処で無理矢
理回避したところで手数はそんなに変わらない」

はい、その通りです。

返す言葉ありません。

まさにサンドバック状態。こんなことになるのなら、相棒を叩き起こしておけば良
かった。ああ、でも、なんか状況は悪化する気もするな。

近距離爆破を避けたところで、どうせホームランまでは入らないもんね。入っても力
チ上げくらい。そんな攻撃を1発入れるのに対してリスクはあまりにも大きい。

そりゃあ、手数を増やすことは大切だけど、それ以上に安全に戦うことが大切。

頭じゃわかつているんだけどなあ……このまま続けたら、いつか絶対痛い目を見る日が来るだろう。全ての攻撃を回避し続けることなんてできないのだから。

それはわかつてるんです。

いや……本当は何もわかってないのかな。

「そして、貴方がもし乙った時、私たちは一気に崩壊する。だから貴方はできるだけ乙っちゃダメ」

「いや、それは——」

「乙っちゃダメ」

「あつ、はい。わかりました。全力で頑張ります」

逆に難易度が上がったように思えるのは気のせいだろうか？　いくら慎重に戦おう

が、乙る時は乙るんだが……

まあ、彼女が言いたいのはそう言うことじゃないんだろう。

「でも、やっぱりその約束はできないと思う」

俺がそう言うのと彼女の頬は膨らんだ。

なにこの人、可愛い。

「だからさ、もし今日みたいに俺が勝手な行動をし始めたら……」

「？」

「1度スタンプで吹き飛ばしてくれないかな？」

此処で、いくら口約束をしたところでクエストが始まってしまえば、どうせ忘れる。前回だってそうだったのだから。できるだけ気を付けようとは思うけれど、ダメかもしれない。

だからその時はお願いします。

「……うん、わかった」

そんな俺の提案に、彼女にしては珍しく笑いながら答えてくれた。

いつも心配させてすみません。これからも迷惑をかけると思いますが、よろしく願います。

彼女による反省会という名のサンドバック化も終わり、無事バルバレに戻ってきた。そしてバルバレに戻ると、何故か今回もギルドマスターに捕まった。何？ あんた俺たちのこと好きなの？

申し訳ないけれど、俺にそんな趣味はない。

「ほっほほ。まさか古龍であるテオ・テスカトルまで倒してしまうとは……いやはや、キミ達が居てくれて本当に良かったよ」

普通に褒められた。照れる。

でも、テオのクエストならいくらでも受けたい。やはりアイツは戦っていて楽しいから。

「そう言えば、ラージャンが大量発生したみたいなのを言っていたけれど、大丈夫なのか？」

そのことが少し気になった。

ゲームの中では絶滅してもおかしくない量が毎日狩られていたけれど、この世界じゃそうはいかないはず。

「うむ、かなり落ち着いてはきたんだけどね、その原因がわからないんだ。こんなことは今までなかったのだけど、何があったのやら……」

また妙なフラグを立ててくれるじゃないか。

そう言うのは本当にやめてもらいたい。予想外のこと起きると途端にダメになるハンマー使いがいるんです。

「そして、ここだけの話なのだがね。最近になって異常な地形変動が報告されているだよ。現在、原因を調査中だけど、そちらも未だ何もわかっていない」

ほら、来ちゃったよ。言わんこつちやない。

とは言うものの……どう考えてもそれはダラのことだよな。ゲームの中でも同じようなセリフを言っていた気がするし。

ただ、それとラージヤンは関係ない気がする。ダラくらいなら良いけれど、他にも何かあるとなると困る。ん〜……俺の気にし過ぎだろうか？

「ほっほほ。もし何かわかったときはキミ達に頼むと思うよ。キミ達にはとても期待しているんだ。さあ、これから頑張んなさい」

言われなくとも頑張ります。

しかし、ふむ……そろそろダラと戦うことにはなりそうだな。今の装備でも充分勝てるだろうし問題は無いはず。

ただ、どうにもモヤモヤとした何かが残った。いや、まあ、考えてもわからないことなんだけどさ。

「じいさんの話どう思う？」

ギルドマスターが離れてから、彼女に尋ねた。

「……ダラの話だと思う」

まあ、普通に考えればそうだよなあ。

うーん……やはり俺の考え過ぎなのだろうか。

「ねえねえ、せっかく古龍種を倒したんだし、打ち上げやろうよ」

そんな相棒の声が聞こえた。

それもそうだな。せっかく倒したんだし、飲まなきゃもつたいない。

何が待っているかわからないけれど、このメンバーならなんとかなるとは思う。

なくんて、その時はいつも通り安易な考えでしかなかった。いや、まあ、知らないも

のは知らないのだし、どう仕様も無いことではあったんだけどさ。

多少の違いはあったものの此処までゲーム通り。予想の範囲内。

けれども、全てがそう上手くはいってくれないらしい。コイツつたら知らないことが

起きたらもうダメなんです。初見モンスターとか本当に苦手なんです。

そんな自分の無力さを知るのはいさしだけ先の未来のこと。

第61話～後ろ脚へカチ上……え?～

テオを倒してから暫くは、何と云うか随分とのんびりとした日々を送った。

できれば他の古龍種やダラと早く戦いたいところではあったけれど、残念ながらクエストがない。まあ、古龍がそんなボンボン現れても困るってことなんだろう。

そうなってしまふとやるのがなくなる。武器も防具も揃っているし、鎧玉を使った防具の強化も終わってしまった。じゃあ、何をやるかと言うことになる。

そして、テオを倒した日から3日間の休日を挟み、皆と相談した結果、何故か3人で釣り勝負をすることになった。

勝負の内容は一番早く黄金魚を10匹釣った人が勝ちと言う、なんともわかりやすい勝負。んで、一番黄金魚を釣った数が少ない奴が、何でも言うことを聞くと云う内容。

そんないかにも子供が考えるような内容だった。

因みに笛の彼女が考えました。実は彼女が一番子供っぽいんです。クールなように見えて実は何も考えてないこととかあるし。最近になって漸くわかった。

クエストは上位の採取ツアー。場所は遺跡平原のエリア10。つまり俺のホームグ

ラウンドと言つても良いような場所。彼女たちには申し訳ないけれど、正直この勝負に負ける気はしなかった。

そして、いざ釣り勝負を始めてみたわけだけど……相棒がおかしい。

この相棒はネコ飯で釣り名人を発動させなかった。たぶん、釣り名人と言うスキルを知らないんだと思う。俺と彼女は魚・乳製品の揚げ料理を頼んだけど。いや、勝負なら全力でやるべきなんだ。

そう……そうだと言うのに、早々に10匹の黄金魚を釣り上げた。俺はまだ3匹しか釣ってない。どうなってるんだ。例え黄金ダンゴを使ったとしても、此処まで早くは釣れない気がする。

素材の集まる早さと言い、この相棒は色々とおかしい。

「やたつ、10匹釣ったよ！ 皆は？」

「俺は3匹です……」

「……6匹」

はいはい、俺がドベですね。

まあ、そうなったわけですよ。つまり俺は相棒さんの言うことを聞かなきゃいけない

いってこと。相棒のことだし、鬼みたいなことは言わないと思うけれど、色々とぶっ飛んでいるところがあるからちよつと怖い。

「んで。俺は何をすれば良いんだ?」

一回飯をおごるとかだと本当に嬉しいです。

「えつと……あつ、そうだ! 私の友達がさ、HR2になるための緊急クエストをクリアできなくて困ってるんだ。だから君が手伝ってあげてよ」

ああ、良かった。それくらいなら、いくらでも引き受けようじゃないか。

「うん。了解」

全く話したことのない相手だし、どうなるかはわからないけれど、相棒の友人なら悪い奴ではないだろう。

「ああ、あと、防具はリノプロ一式でハンマーはネコの奴でお願い」

……えつ?!

「い、いや、どつちも持ってないぞ?」

あとリノプロ一式は心の底から嫌なのですが。どうしてあんなデザインになったのか本当にわからない。だいたいあんな装備をしている奴が、クエスト手伝うとか言っても断られる。

「作ればいいじゃん。手伝うよ?」

「……私も手伝う」

……マジで？

その後、どうにか有耶無耶にできないだろうかと頑張ってみたけれどダメでした。立場弱いんです。そして結局、リノプロ一式とくるねこハンマーを作るため、リノプロスやババコングを倒しに行くことに。ゲームの中だと、ねこハンマー系を作るのにニャンターの証が必要だと思っただけけど、どうやら肉球のスタンプで良いらしく、割と簡単に作ることはできた。

ずっと後になって知ったのだけど、あの釣り勝負をしている時、笛の彼女はこっそり黄金ダングゴを使っていたらしい。

そんなことがあり、相棒の友人である弓使いの少女と一緒に狩りへ行つてから更に数日。あの日にできた心の傷も漸く癒えてきました。

集会所で3人揃って飯を食べているところに、ギルドマスターが近づいて来た。

ふむ……やつと来たか。

「やあ、狩りの方は順調かな？」

「まあ、今のところは」

何の用事もなくギルドマスターが俺たちに声をかけてきたとは思えない。

つまり、何かの用事が俺たちにあると言うこと。そして今までのことを考えるに、ダラかそれとも……

「ほっほほ。それは良かった。今日はね、キミ達に頼みたいことがあるんだ」

そう言つてギルドマスターはいつものように笑つた。

ゲームだとダラと戦う前のギルドマスターはかなり真剣そうに見えた。でも、今のギルドマスターは其処まで追い込まれているようには見えない。

と、言うことはダラじゃないってことだろうか？

「先日、ラージャンが急に現れるようになったと言つた。今は落ち着いたけれど、その原因はやはりわかつていない。そしてだね、先日またラージャンが1頭発見されたんだ。たぶん、それを討伐できればこの問題は完全に解決すると思う。そこで、そのラージャンの狩猟をキミ達にお願いしたい」

ああ、ゴリラの方だったのか。

確かにゴリラは危険なモンスターではあるけれど、ダラと比べ其処まで驚異つてわけじゃないだろう。激昂ラージャンとなると少々面倒ではあるけれど、どっちにしろ一番戦つた相手。テオも討伐数は多いけれど、ラージャンの討伐数は桁が一つ違う。

それならなんとかなるのかな。

「どうだろうか。そのクエストを受けてくれるかな？」

彼女たちに視線を向けた。無言で頷く二人。

「どうやら良いと言ふことらしい。」

「了解。受けさせてもらおうよ」

俺がそう言うと、やはりギルドマスターはいつもの笑顔をした。

「达拉ではなかったのは少々残念だけど、強い相手と戦うことができるんだ。それだけで充分だろう。」

ギルドマスターの話聞いた次の日。

早速ラージャンの狩猟のため、遺跡平原へ向かうことに。

ラージャンとの戦いに備えて、回避性能から耐震にスキルを変えました。ラージャン相手なら此方の方が役に立つのです。

ネコ飯はいつも通りKO術の発動するもの。日替わりスキルで火薬術でも出てくれれば嬉しかったけれど、残念ながらネコのド根性だった。うん。まあ、悪いスキルではないと思いますよ?」

「それにしても、どうしてラージャンが急に現れるようになったんだろうね?」

遺跡平原へ向かう途中で、相棒の声が響いた。

「さあ、そればかりはわからん」

一番考えられるのはダラが原因なんだろうけれど、ラージャンとダラってあまり関係してない気がするんだよなあ。かと言って他に考えられるのはシャガルくらいか?

でも、ラージャンは狂竜化しないはず。ギルクエのレベル100でもしなかったのだし。むしろ狂竜化なんてしていたら、さらに多くのラージャンが狩られることになっただろう。

はてさて、何が原因なのやら。

考えたところで、答えなんて出るわけがなく、遺跡平原へ向かっている間は結局いつも通り雑談をしていた。ギルドの人曰く、激昂ラージャンでもないらしいから、苦勞することはあつてもクリアすることはできるはず。たぶん即乙する攻撃もない。

それにラージャンが相手ならあのテオよりもずっと戦い易い。

「着いたー!」

そんなこんなで遺跡平原へ到着。

ゲームの中で通常のラージャン1頭と遺跡平原で戦うことはなかった。激昂ラージャンやイビルジョーと抱き合せならあつたけれど。

実は激昂ラージャンでした。なんてこともあるかもしれない。たまつたもんじやないが。

「つしや! 行くか!」

「おおー!」

「おー」

まあ、会つてみればそれもわかるか。

ラージャンの初期エリアは確か4。段差だらけで戦い難いエリアではあるけれど……うん、頑張ろう。

エリア4へ入ると段差の下にラージャンを見つけたことができた。

ふむ、激昂ではないのか。やっぱり俺の考えすぎだったかねえ?

とりあえず戦い易い上の段にシビレ罠をセット。最初からガンガン罠を使わせてもらおう。そして、彼女の聴覚保護スキルを付与する演奏を聞きながら、ハンマーを構えてラージャンへ接近。

振り向くゴリラ。そして咆哮。しかし既に此方には聴覚保護がついている。

挨拶がわりにとりあえずカチ上げ。

ラージャンは全モンスターで一番スタンの取り難い相手。特殊補正だかなんだか知らんが、実質の初期スタン耐性は500近くあると思う。明らかにおかしい。

そんなモンスターだからこそ、スタンを取りたいんじゃないか。

カチ上げを決めてから、ラージャンの右腕の右側へ立つ。此処は基本通りにいかせてもらおう。直ぐにデンプシーがきた。回数は3回。右半身をラージャンへくつつけるようにしながら一発溜め1。

振り向きではなく90。ターンを2回。倒れ込み、元気玉、振り向き、ビームのコンボが確定。つまり大チャンス。

左ヘローリングで倒れ込みを避けてから縦1を頭へ。前ロリを1回。直ぐに腰へハンマーを構え、バックジャンプ元気玉を放ち降りてきたラージャンの頭へカチ上げ。ま

た直ぐに横ロリで位置を調整し、横振り。レーザーを身体に掠らせながら縦2。そして、ホームラン。

そこで、ようやくとラージャンが怒り状態となった。

ああ、何だかすごく懐かしい気分だ。随分と間が空いてしまったけれど、身体はちゃんと覚えてくれたらしい。今ならT Aをやっても良いタイムを出せそうだ。

「おーい、罨入れるよー」

相棒の声が聞こえた。

了解です。

声を聞いてから直ぐに納刀し、罨の方へダツシュ。あんまりやりすぎるとまた彼女に怒られる。それはよろしくない。自分から頼んだことだけど、叩きつけられて喜ぶような趣味もないのです。

ケルビステップをしながら俺を追いかけてくるゴリラ。彼女が少し離れたところへ落とし穴を仕掛けているのが、ちらりと見えた。

そしてそのままシビレ罨へ誘導。

シビレ罨にかかったラージャンへ腕に吸われないよう、縦1始動でホームランを2セット。流石にラージャン相手にハンマーと笛が共存するのは無理だから、今回ばかりは彼女に頼み後ろ脚を攻撃してもらうことに。

一人でスタン取れっかなあ……

ラージャンがシビレ罨から抜け出したところで、次は彼女が仕掛けた落とし穴へ誘導。徹底的にやらせてもらう。

誘導する途中、彼女がゴリラに轢かれたけれどたぶん大丈夫。避け難いよね、ケルビステツプ。

彼女を轢きながらゴリラは落とし穴の中へ。バタバタと暴れる腕に位置をずらされないよう気をつけながら、今度は横振り始動のホームランを3セット。3回目のホームランを叩き込んだとき、ラージャンの角が片方砕けた。

うむ、良い感じ。

さらに、落とし穴から出たラージャンが今度は相棒が頑張ってくれたおかげか、こてりと横になった。ナイスです。

アレだけボコボコに殴られたと言うのに、のんきにお腹を掻きながら寝ているゴリラ。すごく頭の悪そうな光景だ。

「……爆弾、どこ置く?」

「頭の前で良いんじゃないかな。どうせなら角も破壊しちゃいたいし。ああ、あと、頭の直ぐ前にシビレ罨お願い」

「わかった」

大タル爆弾Gを頭の前へ3人分セットしてから彼女が更にシビレ罨を仕掛けた。2回目だし拘束時間は長くないけれど、ないよりはマシと言うもの。

そしてマタタビ爆弾で起爆。爆風の中、起き上がったラージヤンは直ぐにシビレ罨にかかった。そんなラージヤンへカチ上げ、横振り始動でホームランを1回。スタンはまだ取れない。

むう……もうちよつとだと思うけど、そう簡単にはいかないか。

さて、罨もほぼ使い切ったし此処からがキツイよなあ。なんて思っていると、今度はラージヤンが痺れ始めた。

「ホント笛さん素敵！ 結婚して！」

思わず叫んでしまった。

そんな俺の言葉を受けてなのかわからないけれど、彼女の笛によるスタンプが暴発。

「なんで私!?!」

それを喰らった相棒が吹き飛んだ。楽しそうだね。

吹き飛んでいく相棒を横目に、麻痺状態のラージヤンへとりあえず縦振り。そこで2

本目の角が砕けた。だからどうしてコイツはスタンを取る前に角が壊れるんだよ。

そんな愚痴を零しながらホームランを叩き込んだ。

ゴロリと横へ倒れるラージャン。

つまり本目1回目のスタン。

っしやあ!! 超嬉しい。本当に嬉しい。

「……ナイス」

ありがとう。

まあ、アレだけ毘やらなんやらを使つてギリギリなのだし、誇つて良いのかは微妙なところ。でもやっぱ嬉しい。

スタンを取ったラージャンへ横振り始動でホームランを2セット叩き込む。これだけボコボコにしているんだ、流石にそろそろ倒せるんじゃないかな。

スタンから起き上がるラージャン。

しかし直ぐ、仰向けに倒れた。

うん? 仰向け?

2回目の睡眠なのか? それにしては早すぎる気がするけど……あと、もう爆弾は

残ってません。

「……勘弁。これは聞いてない」

ぼそりと彼女の声が聞こえた。

嫌な予感。

仰向けに倒れたラージャンを確認。

その体は黒く……より黒く染まり始めていた。

……いやいや、ちよつと待てつて。お前はダメだろ。お前だけはダメだろうか！

慌ててラージャンへ近づき、既に2本とも砕けている角へホームランを叩き込んだ。

そんなことは関係なしに立ち上がるラージャン。その姿は今まで見たどんなモンスターよりも恐ろしかった。

そんなラージャンの咆哮が響いた。

ちよつと待てつてくれ。知らないぞ。こればかりは本当には知らない。どうして？

何故？ コイツが狂竜化？ そんな疑問が頭の中をグルグルと回る。

それでも無理矢理身体を動かし、ハンマーを右腰へ構える。落ち着けて、例え狂竜

化したところでラージャンなのは変わらない。それにアレだけ殴ったんだ、体力だって残り僅かなはず。

構えていたハンマーが1度光ったところで、その後ろ脚へカチ上げ。

しかし、ガキンとカチ上げをしたハンマーが弾かれた。

……………え?

い、いや、カチ上げ……だぞ?

意味がわからなかった。なんとか冷静さを保とうとしていた頭も此処まで。ラージャンが此方を素早く振り向いた。

ヤバっ! デンプシー……頭の隅では理解した。でも、体は動かない。

狂竜化するはずのない相手が狂竜化したこと。弾かれ無効な攻撃が弾かれたこと。今までじゃ考えられないことが連続で起きた。

そんな混乱状態の俺にラージャンのデンプシーが直撃した。

もうなんか逆に面白くなっちゃうくらいに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる俺。

残っている体力は本当に僅か。クンチュウの転がり攻撃でも乙るほど。つまりド根性発動。ラージャンのデンプシーは確1つてことだろう。ホント洒落にならん。

直ぐにマタタビ爆弾をセットし、秘薬を飲み込む。一度立て直さないと。

秘薬で全回復したところでマタタビ爆弾の爆風で吹き飛んだ。ガッツポーズキヤンセルです。

直ぐに起き上がり、ラージャンと皆の状況を確認。

見えたのは、ドス黒く変わったラージャンと倒れた彼女たちを慌てて運んで行く救助アイルーたちだった。

つまり2乙。

もう後はない。

「あはっ」

乾いた笑い声の一つ落ちた。

第62話～振り向きへホームラン～

モンハンにおける最終的な目標ってのは何かってよく考えることがあった。

それは人によって違うだろうし、それで良いと思っっている。じゃあ自分の場合はどうか。クエストの全クリアとか、勲章を全て集めることとか、全モンスター100匹以上討伐とか、色々と考えた。

そしてそんなことを考えているうちに、それらは全て終わってしまった。でも、まだモンハンは続けたい。

そんなことを思っただけ俺がたどり着いた一つの答えはTAだった。

モンスターをどれだけ早く倒すことができるか。ただそれだけを目指す。

其処で大きな壁にぶつかった。そしてその壁を乗り越えることは未だにできていない。

TAをやり始めて、まずやったことは上手い人のプレイングを見ること。ネットに転がっている上手い人の動画見る。それだけのこと。

最初はなんでそんな動きができるんだよ。なんて思いながら見ていた。でも、何度も

何度も見ているうちに自分でもできるって思えた。思ってしまった。

そして動画を参考にして自分も挑戦。そこで漸く気付いた。

自分の下手さに。

ゴリ押ししの通用しないT Aの世界ではより緻密な操作を要求される。でも、何度練習したつて上手くいかない。何回挑戦しても失敗する。頭じゃわかっていても、画面の向こうにいた俺の操るキャラは動いてくれなかった。

自分は上手くない。でも、そう思いたくはなかった。だから精一杯抗ったんだ。知識を詰め込み、どうにか差を埋めることができないか頑張った。

だって悔しいだろ？ HRもコストし、1000時間以上もかけたゲームですら上手できないなんて。

そうだと言うのに、俺のプレイングが改善されることはなかった。相手の行動パターンを覚え、それに合わせた立ち回りを考えたところで、結局上手く戦うことなんてできない。つまり、俺はそれほどにモンハンが下手だった。

馬鹿みたいな時間をかけても人並み程度のプレイングが限界。そしてその原因は自分の操作ミスがあまりにも多すぎるせい。

そんなことはわかってる。頭じゃわかってた。

でも、上手くできないものはできないのだ。

けれども、この世界に来てからそれは変わった。

相手の動きはゲームと同じ。つまり、あの時に詰め込んだ知識をいかすことができる。

さらに、あれほど多かった操作ミスはこの世界じゃありえない。秘薬を飲もうとして砥石を始めるなんてこともないし、距離感を把握できず攻撃を空振りすることもない。前ロリは暴発しないし、モンスターに合わせてデイレイをかけることだって簡単にできる。ゲームよりも視界はずっと広いし、そこにカメラ操作は存在しない。

この世界では頭で思い描いた動きを簡単に実行することができた。

それが心の底から楽しかった。だって、ずっとずっと俺が目標にしていたことだったから。

けれどもそれは、相手が俺の知っている相手だったから。詰め込んだ知識と経験をいかすことのできる相手だったから。

「……ずるいよな。お前らは」

ラージヤンのケルビステップ。

左ヘローリングで回避。

こんな意味わからん奴に勝てつかなあ……でも、負けたくはないよなあ……

……うん、まあ、できるだけ頑張ってみようか。

——カチリと、自分の中の何かがはまった

「せつかく行動を覚えてもさ、お前らが知らないことをするだけでもうダメになるんだ」
バックステップ。

更に回転攻撃。その終わり際、頭へ溜め1。弾かれはしなかった。ただ、何故かスタ
ンエフェクトが出ない。

「お前がやる1ー種類の攻撃を覚えるのに、どれくらいかかったと思う？」
デンプシー。

また左ヘローリング。デンプシーの数は3回だった。

そして振り向きなしで回転攻撃。確定行動の可能性大。

追撃は厳しい。

「そんなお前の行動を漸く覚えてたつてのにさ……なんだよ、それ」

バックステップから飛び上がるラージャン。飛鳥文化。当たる攻撃ではないはず。

着地後、バウンドしもう一度飛鳥文化。新モーシヨン。クソが。

2回目の飛鳥文化をローリングで回避。しかし、ラージャン更にバウンド。ローリン

グ後、最速でまたローリング。

3連飛鳥文化か。

飛鳥文化後、ラージャンが威嚇。確定かはわからない。

「やつと……やつと自分の思うように動くことができるようになったんだ」

ケルビステップ。ローリングで回避。

バックステップから回転攻撃。これも確定行動の可能性大。

頭へ溜め1、振り上げ。ヒットストツプは確認。しかし、やはりスタンエフェクトが

出ない。もしかして属性値も入っていないのか？

「でも、お前のせいでもそれもダメになった」

ショートデンブシーから軸合わせ無しで回転攻撃。

とりあえずこれは確定行動か。

ハンマーを右腰へ構える。

「……嫌いだ」

早い振り向き。そこへスタンプ。直ぐにはローリングをせず、様子見。

小ジャンプからのしかかり。左ヘローリングで回避。

「……お前なんて大っ嫌いだ」

サイドステップ。ローリングでさらに距離を取る。

回転攻撃。そして此方を振り向きながら、ビーム。これも確定行動の可能性大。ビームの終わりへカチ上げを頭へ一発。

「お前が何なのか知らんけど……大っ嫌いなお前にだけは勝ちたいんだよ」

一番戦った相手で一番倒した相手。そして一番倒された相手。

だからこそお前だけには負けたくない。

デンプシー。左へローリングで回避。回数は7。

バックステップ。飛鳥文化に備えて納刀。時計回りに走りながら、3連飛鳥文化を回避。

右腰へハンマーを構え、威嚇中のラージャンの頭へカチ上げ。

デイレイをかけてから、デンプシーを左へローリングして回避。数は3回。回転攻撃がほぼ確定。

回転攻撃。

それを見てローリングで直ぐに尻尾の下へ行き、後ろ脚に吸われないよう、空中へ横振りから縦2。ラージャンの動きに合わせ、少しだけデイレイをかけ――

振り向きへホームラン。

スタンエフェクトが出なければ、爆発もしない。でも、大きすぎるほどのヒットストップが腕にかかった。それが最高に気持ち良い。

これだからハンマーはやめられない。

そんなハンマー最高威力の技が当たると、ラージヤンがやつと倒れてくれた。

「……………ああ、疲れたな」

動かなくなったラージヤンを見るとそんな情けない言葉が溢れ、地面へ倒れてみただも遺跡平原の地面はあまり良い寝心地ではない。

白黒の視界も徐々に戻り始めてくれた。

戦っていた時間は10分もないはず。でも疲れた。本当に疲れた。これなら今直ぐにでも寝ることができそうだ。

もつたいたいとは思ったけれど、その時ばかりは地面へ寝ていたくてせつかく倒したのにも関わらず、ラージヤンから素材を剥ぎ取りはしなかった。

結局、彼女たちと合流するまで、倒したラージヤンの前に寝転がり続けることに。

お疲れ様。

戦うのは当分遠慮したいけれど、それなりに面白かったよ。

ラージャンを倒しての帰り道。馬車へ乗ると、猛烈な睡魔に襲われたせいで直ぐに寝てしまった。

彼女たち——特に笛の彼女は何かを聞いたそうな顔をしていたけれど、そこは何も言わずに俺を寝かせてくれた。

すみません、今日はちよつと疲れたんです。

色々と考えなければいけないことがあった。でも、その時ばかりは限界だったんです。

そして気がつくと、バルバレまでもう少しと言ったくらい場所だった。

たぶん、夢は見えていない。それほど疲れてたつてことなのかねえ？ でも、アレは流石に酷い気がする。たぶんギルドだって知らなかったんだろうけれど、なんなんだよあのゴリラ。本当に意味がわからない。

「あつ、起きた……お疲れ様」

「うん、お疲れ様」

目を開けて直ぐ、彼女が話しかけてくれた。

まさかゴリラ相手にあんなことになるとは……ホント、何が起こるのかわからないものだね。

「……アレって狂竜化なの？」

「普通に考えればそうなんだろうけど……何か違う気がする」

ワンコみたく狂竜化することで肉質が硬化する奴はいる。でも、ラージャンの後ろ脚は硬化とか言うレベルではなかった。カチ上げが弾かれるってどう言うことだよ。どんなに硬い肉質でも、弾かれ無効なら弾かれることはないはずなんだけどなあ。

それにスタンエフェクトが出なかったのもおかしい。見た目は狂竜化だけど、それとは別なんじゃないかって思う。

ホント、なんだつたのやら……バルバレへ戻つたらとりあえずじいさんに聞いてみな

いと。

「……一人で倒しちゃったんだね」

「最後だけね。それに体力だつて全然残つてなかつたぞ？　ちよつと叩いたら直ぐに倒れてくれた」

ちよつとじゃなかつた気もするけれど、なんか恥ずかしいからそう言つてみた。

そして今回倒すことができたのは、運が良かったから。もしネコ飯でド根性が発動しなければ、あのデンプシーを喰らつた時点で終わりだった。彼女たちと比べると、運の悪い方ではあるけれど、俺だつて運は良い方なのかもしれない。

「動き、違った？」

「うん、飛鳥文化を3連続でやってきたよ」

あれには驚いた。

俺の知っている飛鳥文化なんてまず当たる攻撃ではないけれど、アレはやバイ。

「……まじですか？」

マジです。

「……私も戦いたかつた」

「そりゃあ、申し訳ない。でも、まあ、どうせまたいつか戦うんじゃないかな」

あんな奴がポコポコ現れても困るが、たまになら戦つてやるのも悪くはないかもしれ

ない。

なくんてね。

はあ、何を上から目線で言っているのやら。

その後、彼女と雑談を続けていると相棒も起床。三人で雑談をしながらもう乗り飽きるほど乗っている馬車に揺られ続けた。

そしてバルバレへ到着。

さてさて、今回は流石に説明の一つくらいはしてもらいたいところ。

しかし、集会所へ入って直ぐに、なくんか様子がおかしいことに気付いた。

早朝とかを抜かせば集会所はだいたい五月蠅い。そして今は五月蠅くなり始める時間である夕方。けれども、その日の集会所は妙に静かだった。

なくん……何があつたんだろうか？

今の集会所がどんな状況なのかわからなかったけれど、とりあえずギルドマスターの元へ。

へい、じいさん。こりやあ、何事だい？

「ふう……やあ、どうやら無事ラージャンを討伐できたようだね」

無事かどうかは怪しいけれど、討伐はできましたよ。ただ、ですね、そのラージャンのことで聞きたいことが……

なんて思い、此方から話しかけようとしたが、見事じいさんの言葉に遮られた。これは酷い。

「この集会所を設立してから幾星霜……まさか、こんな日が来ようとは。私は各地の御伽噺を調べるのが好きなんだけどね——」

そう言い、いつものような長いお話が始まった。

まあ、つまりアレですよ。どうやらラスボスが現れたってことだと思う。たぶん。

「——とんでもないことがわかったんだ。調査団の報告によるとね、そこにいたのは、とてつもなく巨大な古龍であるダラ・アマデユラだった」

ああ、やっぱりそうですか。

しかし、ふむ、アイツが現れてくれたのは良いことだ。アイツの素材があれば全員の武器が一気に強くなる。一頭で素材が足りるのかはわからないけど。

「——そこでね。私たちはダラ・アマデユラ討伐に全力を尽くすことを決意した！ ただ、それを任せることのハンターがいないんだよ……」

「じゃあ、俺たちが行くよ」

「そして決意したは良いものの、私たちもどのハンターになら任せることができるのか

決めることができないんだ」

……なんで、じいさんったら俺を無視するんだろう。

そんなじいさんにため息を一つ落としてから彼女たちを見る。今回も無言で頷かれた。相棒の顔はちよつと引き攣っているように見えないでもなかつたけど。

大丈夫、あのゴリラと比べればまだ可愛いから。

「なあ、じいさん」

「うん？　なんだい？」

今まで遠くを見ながら話をしてきたギルドマスターが、漸く此方を向いてくれた。

「だからさ、そのダラ・アマデユラの討伐に俺たちが行くよ」

俺がそう言うと、ギルドマスターは酷く驚いたような顔した。

「ほ、本当に行つてくれるのかい？」

「うん、倒せるかはわからんけど、やるだけやってみるよ」

そう俺が答えると、いきなり手を握られた。

じいさんに手を握られてもちつとも嬉しくない。

「そうか……そうか。それなら我々は、御伽噺の如き存在に立ち向かうキミ達の成功を信じることにしよう！　どうか……生きとし生けるもののため頼んだよ！」

何を大げさなと思わないでもなかつたけれど、この世界におけるダラはそれほどの存

在ってことなんだろう。

そう考えると、なんだろうか……急に不安になってきた。今日のラージヤンみたいに俺たちの知らない行動をされるとかなりヤバイ。

とは言え、もう行くと言ってしまったのだ。今更、後に引くことはできない。

うゝん、大丈夫かねえ……

そんなどうにもネガティブな考えばかりが浮かび始めていると、ぽんぽんと誰かに肩を叩かれた。そして、後ろを振り向くと――

「……大丈夫。今度は私も頑張るから」

なんて声を彼女がかけてくれた。

「わ、私も頑張ります」

彼女に続いて相棒の言葉。

よくよく考えると、この相棒は出会うモンスター全てが始めて戦うモンスターなんだ。それでも、此処まで一緒にいてくれた。そんな相棒が頑張ると言っているんだ。あまり情けないことは言えない。

「……うん、了解」

もしかしたら、ダラだって俺の知らないことをするかもしれない。そうなった場合、クエストを失敗する可能性はかなり高い。

でも、まあ……このパーティーでダメなら仕方無い。そう思うのですよ。

「さくつと倒してくるか」

「おおー！」

「おー」

ホント、良いパーティーに恵まれたと思う。

ゴリラのことを聞くタイミングはすっかり逃してしまっただけで、そんなものまた今度聞けば良い。

さてさて、そんなじゃ、ひと狩り行きますか。

第終話くまた来ますく

ダラがいる千剣山を目指してバルバレを出発。

場所が場所なせいもあってか今回は馬車ではなく、気球で行くことになった。まあ、明らかに山の上って感じだったし、馬車じゃ流石に厳しいよね。

「ダラ・アマデユラかあ……どんなモンスターなんだろうね。おじいさんの話だとすごく危険なモンスターなんだろうけど」

すごく不安そうな表情の相棒。

ギルドマスターがアレだけ危ないとか言っていたし、そう思ってしまうのも仕方ない。

「危険っちゃ危険だけど……なんとかなるよ」

「君は相変わらずだね……ダラ・アマデユラのことも知ってたの?」

そりゃあ、知ってます。100匹マラソンで一番苦勞した相手なのだし。苦勞したと言っても時間がかかるって意味です。

「まあね」

以前は、まだ戦ったことのないモンスターのことを話すとこの相棒は不思議そうな顔をしたけれど、今ではそんな顔を見なくなった。

いつか自分のことを話して欲しい。なんて言われたものの、そのことを話すことはまだできていない。何かタイミングが掴めないんです。まあ、これで無事ダラを倒すことができればきつと話すことだってできるはず。そう思うのです。

「そう言えばさ、モドリ玉を調合分まで持ってきたけど何に使うの？」

必要かどうかわからないけれど、念のためって感じ。

「保険かな。ダラの攻撃で何を吐き出してるのか知らんけど、すごいブレスをなぎ払う攻撃があるんだよ。緊急回避すれば簡単に避けられるけど、厳しそうならモドリ玉を使えば良いってこと」

あの攻撃は驚くよなあ……ラスボスにふさわしい超豪快な攻撃だし。

「うーん、よくわかんないけど、何かを吐き出しそうになったら、モドリ玉を使えば良いってこと？」

「まあ、そんな感じ」

ただ、ベースキャンプから戻ってくるのはちよつと面倒なんです。そして、2連なぎ払いブレスのあと、噛み付き攻撃に派生する時があつて、戻ってくるタイミングが悪いとベースキャンプから戻って来た瞬間、またベースキャンプヘデスルーラさせられるこ

とがある。

アレは流石に笑った。笑い事ではないけど。

「……部位破壊はどうするの?」

彼女の声。

本当はアカム笛にしたかったみたいだけど、どうやら間に合わなかったらしい。そのため結局今回もパラハザードコールを担いでいる。てか、1回で素材足りたんだね……俺が後ろ脚と背刃をやるよ」

「……わかった。じゃあ私は下半身やる」

お願いします。

正直なところ、後ろ脚を破壊する必要があるかはわからないけれど、どうせなら全部位破壊を目指したい。

「私はどうすればいいの?」

「ん〜……じゃあ、尻尾をお願い」

尾殻が欲しいです。全然出なくせに何故かそれなりの量を要求される。

あー、でも彼女と一緒に行動していた方が安全な気もする。

「了解です!」

まあ、この相棒なら大丈夫か。

粉塵だって調合分持ってきた。普通に考えれば失敗する要素はない。とは言え、前回のこともあるし……はてさて、どうなることやら。

「つ、着きましたぞー！」

千剣山ベースキャンプに到着。

バルバレから千剣山まではそれなりの距離がありそうなのに、2日もせず着くことができた。馬車と違ってガタゴトと揺れないし、なかなか快適な旅でした。

ベースキャンプスタートのおかげで、最初から支給品をもらうことができたため、支給品ボックスから対巨龍爆弾を4ついただく。あとは……まあ、良いか。回復アイテムだつてしっかり持つてきているし。

よし、準備完了。

「つしや！ 行くかつ！」

「おおー！」

「おー」

そしていつも通りのかけ声。

このかけ声も今では儀式みたいな感じとなつてしまった。この世界に来てから、かなりの月日が経ったけれど、相変わらず臆病な自分は声を出さないと動いてくれないのですよ。

「あつ、ちよい待って」

「？」

声を出して直ぐ、ダラの待つエリアへ向かおうとする彼女たちを呼び止めた。

「俺から行かせてもらつても良いですか？」

「……何かあるの？」

彼女のセリフ。

いや、何かあるって言うかですな……その、ダラがいるエリアへ行くには登らないといけないわけですし、女性陣が先へ行くと上を向いたとき、ほら見えちゃうじゃないですか。

見たいって気持ちもあるけれど、それ以上に小心者なんです。

「ん〜……じゃあ、お先にどうぞ」

こてりと首を傾げながら相棒が言った。

さっきのセリフを少しだけ後悔した。

そして、ベースキャンプからダラの待つエリアへ。

「なに、アレ」

俺に続いてエリアへ入った相棒がまずそんなことを呟いた。

その視線の先には大きな山へ巻き付くようにいた古龍。

「……うわ、でか」

そして彼女の言葉。

うん、予想以上に大きいね。大きいと言うより、長いって感じだけど。

そして俺たちに気付いたダラ・アマデユラが大きな咆哮をあげた。クエストスター
ト。

「へい、相棒！」

「な、なんですか？」

「とりあえず、尻尾にジャンプ攻撃お願い」

最初に巻きついていている状態はあまり長くない。だからその前に1度ダウンを取りたいのですよ。最初はジャンプ攻撃一発で怯んでくれるはず。

「了解です！」

ジャンプ攻撃は相棒に任せ、ダウンした時頭が落ちてくる場所へダツシユ。

そして、段差を一つ乗り越えたところで、ダラの悲鳴のような声が聞こえた。

「ぐうれいと」

ぼそりと聞こえた彼女の声。

うん、ナイスです。

相棒のジャンプ攻撃でダウンしたダラ。そして落ちて来た頭へひたすら縦1始動でホームランを叩き込む。肉質65越えのソレへホームランを叩き込むとヒットストッブがすごい。

3回目のホームランを叩き込み、彼女の後方攻撃も当たったところで、ダラの頭についていた角のような物が壊れた。

とりあえずこれで1段階。乗るかはわからないけれど、一応、頭に乗ることができるようになりました。

「下半身頼んだ」

「……任せて」

大ダウンも終わり、顔を上げたダラの咆哮。それをなんとなくフレーム回避。やる意味はほとんどないです。

咆哮も終わり移動を始めたダラ。砥石をしてから背刃を攻撃できる場所へ段差一つ飛び降りて移動。

「おお？ し、尻尾がどこかへ行ってしまったぞ」

尻尾が見つからず、わたわたしている相棒。

あとなんだ、その口調。

「あー、尻尾を攻撃するのは山に巻き付いている時だけで良いよ。後は彼女と一緒に場所をお願い」

「あつ、はい。了解です」

相棒に指示をしてから、もう攻撃してくださいとしか思えない位置に来た背刃へホームランを一発。ちゃんと壊すことができれば良いけど。

ホームランを叩き込むと、止まっていたダラがまた移動。急いで南端の場所へ行き、後ろ脚が来るのを待つ。此処で後ろ脚を破壊できないと、もうチャンスはない。

そして、現れた後ろ脚へまた縦一始動でホームランを叩き込む。肉質は驚きの80。其処へ叩き込み放題と言うのは美味しい。

そんな部位へ3回ほどホームランを叩き込んだところで、後ろ脚にヒビのようなものが入り、ダラの悲鳴が聞こえた。おっし、破壊完了です。

後ろ脚を壊せたことで大ダウンしたダラ。そして降りて来た頭へ3人でひたすらに攻撃。ふむ……この調子ならクリアできそうだ。

大ダウンから復帰後、直ぐに咆哮。

「へい、相棒。ちよつとこっちに來なさい」

「どしたの?」

咆哮を上げたダラを直ぐにその姿を何処かへ隠した。

うむうむ、今のところ新モーションもないし、行動パターンも予定通り。

相棒が俺の方へ近づいてきたところで、また急にダラの姿が現れその大口を開けて突進してきた。そんな突進が俺たちのギリギリ横を通過。

噛み付き攻撃の安置は、ベースキャンプから登ってきた時に見えるロープのある場所。そして此処からだ、噛み付き攻撃後のダラの頭へ直ぐに攻撃ができる。

「……し、死ぬかと思った」

そりゃあ申し訳ない。言っておけば良かったね。

噛み付き後、ダラはまた移動し山へ巻き付いた。

そんじゃ、対巨龍爆弾の設置と背刃を壊させてもらおうとしよう。

ダレンなんかもそうだけど、超大型種モンスターはパターンさえ覚えてしまえばそんなに苦労することはない。

「尻尾、切れたよー！」

「ナイス！」

そんなだから、クエスト中だと言うのにふわふわとした雰囲気となってしまう。

ダラは弱いモンスターではないと言うのに。

「またなぎ払いブレス来るぞー！」

「あつ、調合……失敗、ですと……？」

「……緊急回避で大丈夫」

どうにも締まらない空気。

でも、まあ、それで良いのかなって思う。この世界はゲームではないけれど、それくらいが調度良いって思うのですよ。

「あ、危なかった……」

「……ナイス回避」

緊迫した中でやる狩りも悪くはないけれど、それとはまた違った楽しさがある。

それがこの世界じゃずれた考えだつてもわかるけれど……別に楽しみながら狩りをしたつて良いじゃあないか。

せつかくこの世界へ来たんだ。それなら全力で楽しみたいのですよ。

「んもう、君は何笑つてるのさ！ クエスト中だよ？」

そして、それはこのパーティーだったからこそなのかなって思う。

ホント、良いメンバーに恵まれました。

「いや……楽しいなって思つてさ」

そう考えると、ラスボスとの戦闘中にも関わらずクスクスと何か溢れた。

そんな俺の言葉を聞き、相棒はため息を一つ。

きつと呆れられたのだろう。でも、この感情は偽りなんかではないだろうし仕方無い。

「うん、そうだね……私も楽しいや」

そして、はにかみながら相棒はそんな言葉を落した。

でも、そんな相棒の姿が一瞬ブレたように見えた。

あれ？ なんだ？ 気のせい……なのか？

「よしつ、サクツと倒して帰ったら打ち上げやろ！」

「あ、ああ、そうだな」

気のせい……だよな？

全ての部位破壊も終わり、いよいよ終盤と言ったところ。

そしてそれはダラと戦う時、一番難しい場面。空から馬鹿みたいに降ってくるメテオがヤバいんです。

とは言え、メテオの威力は其処までなく、此方は生命の粉塵がまだ大量に残っている。

まあ、つまりアレですよ。

この状況で負ける要素がない。

相棒がダラの頭へジャンプ攻撃をするのが見えた。

その攻撃が当たり、ダラの悲鳴。

「……ナイス」

そんな彼女の声が聞こえた。

大ダウンしたダラの頭へ3人で総攻撃。

縦1。

縦2。

そして、ホームラン。

そんな攻撃が当たった瞬間だった。今までとは違うダラの悲鳴が聞こえ、その巨体がゆっくりと倒れた。

「お、終わったのですか？」

「そうらしいね。……うん、お疲れ様」

ふむ、粉塵をがぶ飲みしたおかげか、此方は0乙。充分過ぎる結果だろう。

さてさて、早く剥ぎ取りを済ませねば。

そう思った時だった。

「……えつ、ちよ、ちよつと君、どうしたの？」

相棒の声。

なんだろうかとそちらを見る。

でも、身体が上手く動いてくれず、振り向くことができない。

なんだ、これは。

「……もう時間っぽい」

彼女の声。

動いてくれそうにない身体を無理矢理にでも動かす。

そして、どうにか彼女たちの方を振り向くと、そこには崩壊が始まった世界と、今にも泣きそうな顔の相棒の姿。

「うくん……もうちよつといたかった。ごめん。ありがと。私は先にいつてます。またね」

最初に崩壊したのは彼女だった。

ああ……ああ、そう言うことですか……

確かにタイムリングは悪くない。だってアイツはラスボスなのだから。でもなあ……これはちよつといきなりすぎる。

「やっぱり君は、消えちゃうんだね……」

何かを喋ろうと思った。

でも、俺の口から言葉は何も出てこない。

「そうなるってわかった。だって、君達は私と違ったから……」

いつか見た景色と被る。

でも、それをいつ見たのかを思い出すことはできない。

「君達と会えて、私は幸せでした。……ありがとう」

そんな言葉を落とした相棒は泣きながらも笑ってくれた。

そうだと言うのに、やはり俺の口から言葉は出てこない。

ああ、もう！ 最後まで頑張ってくれよ！ このまま別れたら絶対後悔する。一言で良い。一言だけでも良いからさ！

少しくらい根性見せろや！

「さようなら。私の大好きな人」

相棒の声。

「また来る！ それまで頑張れ！」

漸く出てきてくれた俺の声。
そんな言葉が溢れた瞬間——世界が崩壊した。

エラーが発生しました。
マルチプレイを終了してオフラインに戻ります。
Aボタンを押してください。

はたと、気がつくともうにも見覚えのある景色だった。

手にはどれほどの時間持っているのかわからないほど、持ち続けた3DSがあった。

そしてその画面にはエラーが発生したことを伝えるメッセージ。

えと……帰ってきたってことなのか？

混乱する頭。

い、いや、じゃあ今つていつなんだ？ 向こうの世界には3ヶ月以上もいた。もし此方の世界もそれだけの時間が過ぎていたとなると……

ヤ、ヤバくないっすか？

慌てて、机の上に放り出されていたスマホで日付を確認。

「あらっ？」

確認できた日付は、俺があの世界へ行った日から一日も経っていないかった。それを見て、ますます混乱。

だつて本当に意味がわからなかったから。

とは言うものの、アレが夢だったかどうか確認する方法は……あつ、そうか。もしかしてギルカ見れば良いのか？

Aボタンを押し、エラーメッセージを消す。画面の向こうのキャラは、ちつとも五月蠅くなんてなさそうな集会所に立っていた。

やや震える手で、ゲームを操作しギルドカードを確認。

そしてギルドカードの中でも、過去10クエストまでの記録を見ることのできるページへ。

そこには、あの彼女たちと一緒にクエストをやってきたことがしつかりと書かれてあった。

それを確認できたところで、安堵のため息を一つ。何に安心したのかは自分でもよくわからない。たぶん、データとしてでも残っていたのが嬉しかったんだと思う。

「いや……少し疲れたな」

ちよつと色々とありすぎたんです。

未だに心臓はバクバクだし、頭だつて混乱している。

俺と同じよう、この世界へ戻ってきたであろう笛の彼女は気になる。気になるけれど……今はちよつとだけ休ませてもらおうかな。

そんなことを考えてから、手に持っていた3DSをパタリと閉じた。

後日談

後日談くその1く

どうやらいつの間寝てしまったらしく、目が覚めると時刻は既に夕方となっていた。開けっ放しの窓からは生暖かい風が流れ込み、そんな風で揺れたカーテンの隙間からは赤く染まった光が差し込んだ。

見えてきた景色はガタゴトと揺れる馬車の上でもなく、あの狭い部屋の天井でもない。そして背中へハンマーを担いでいないことに、違和感を覚えた。

たった3ヶ月ほどしかないなかったはずなのに、随分と向こうの生活に染まってしまったらしい。そのことがわかると乾いた笑い声のようなものが溢れた。

「何しようかね……」

独り言が落ちる。

でも、そんな言葉へ何かを返してくれる人はいなかった。

馬鹿みたいに長い大学の夏休み。悪いことではないけれど、流石に長すぎる。まあ、大学が始まったたら始まったで、どうせまた文句を言うのだからうけれど。

何もやることがない。

でも、暇だった。

だから、寝る前に閉じた3DSをなんとなく開けてみた。

画面には閉じる前に眺めていたギルドカードが表示されている。そこに書かれてあったプレイ時間はなんと、2000時間を軽く超えていた。

そうだと言うのに、HRは7。クリアしたクエスト数だってかなり少ない。こりゃあ、他の人にこのギルカは渡せないな。

そしてポーつとしながらギルドカードを眺めていると、ふとあの笛の彼女のことになった。彼女も無事この世界へ帰ってくるのができたのだろうか？

とは言え、向こうの世界にいた時、此方の世界のことを話すことはほとんどなかった。お互いに。だって、帰って来るなんて思っていなかったのだから。

むう、こうなるってわかっていれば、もうちよつと色々話したんだけどなあ。

まあ、今更そんなことを言ったところでどう仕様も無いんだけどさ。話をしたことなんて……

——もし、元の世界へ戻ったら何したい？

そんなことくらいか。

とは言え、アレだけの時間を一緒に過ごしたわけだし、やっぱり会いたかった。でも、どうすれば会うことができるのかはわからない。

確かあの時の彼女は、戻ったらまたジンオウガを倒すとか言って言っていたと思う。俺もジンオウガは嫌いじゃないけれど、やっぱりテオとかの方が好きだ。

今頃は本当にジンオウガを倒しているのかねえ？

……うん？

ちよ、ちよっとタイム……もしそうならいけるのか？

上手くいけばもう一度会えるのか？

開いていたギルドカードを閉じ、震える手でオンラインへ繋ぐ。

そして部屋を検索。ターゲットはジンオウガ。

結果、画面にはいくつもの部屋がヒットした。

まあ、そりゃあそうだよな。ジンオウガは元々人気があるし、やりたい人は多いのだろう。それにそもそも、あの彼女がこの時間にオンラインでしかもジンオウガをやっているとは思えない。

それでも、一応確認するだけ確認。

そんな中、どうも見覚えのある名前な主の部屋を一つ見つけた。部屋名は『仲間と遊んでいきます』。でも、一人。そして武器は笛。

……いやいや、まさかね？

だつてねえ。流石にアレですよ。都合が良すぎると言うか、何と言うか……

たまたま彼女と同じ名前のハンターが、たまたま笛を担いで、たまたまジンオウガを狩っている可能性とか……

心臓が暴れ、呼吸が僅かに乱れる。

そんな情けないような状態でその部屋を選択。

4桁のパスワードを要求された。

……パスワード？

い、いや、それは知らんぞ。

混乱していた頭が急に冷静になった。

んく……単純に考えるとパスワードは全部で10000通り。それを全て試すのは現実的ではない。どうすつかね。てか、部屋に入ろうと必死すぎる自分がちよつと怖

い。

それでもとりあえずパスワードにされそうなものを試そうかと思つたとき、ふと彼女の言葉を思い出した。

——貴方の好きな数字って何？

……もしかしてそれ、なのか？ あの彼女が何を思つてそんなことを聞いたのかはわからない。でも、今考えられる中では、一番筋が通る。

タッチペンを持った手が震えた。

そして何度か打ち間違えながらも“1248”と言う4桁の数字を打ち込んだ。

1248……それは発掘ハンマーの理想値。結局、最後の最後まで出ることのなかった数字。

深呼吸を一つ。

そして——決定ボタンを押した。

『パスワードが違います』

「違うんかいっ!!」

思わず叫んでしまった。

いやいや、これはおかしいだろ。流石にこの流れでこれはおかしいだろ！ いやだつて、明らかに感動の再会に繋がる流れだったじゃん。

ヤバい、急に恥ずかしくなってきた。回りに誰もいないけれど、滅茶苦茶恥ずかしい……

「はあ」

ため息が一つ溢れる。

うーん、アレが正解だと思っただけだなあ。けれどもあの数字はどうやら違ったらしい。そうなってしまふと、本当にわからない。

他にヒントなんて……

——ふふつ、じゃあ私は1196だ。

ああ、ヒントあったわ。

とは言え、それが正解だとすると、俺はこの部屋へ入っても良いのだろうか？ もし、さつきまでの数字が正解なら……あの会話で俺が伝えた数字が正解なら、俺にこの部屋へ入る権利はあってもおかしくない。

けれども、あの時彼女が言った数字は彼女の好きな数字。

そこに俺との繋がりはあまりない。

ただ、やっぱり期待しちゃうのですよ。例え可能性が低かろうが、思ってしまうのですよ。

俺が彼女と会いたいように、彼女も俺と会いたいんじゃないかって、そんな都合良い考えをしてしまうのです。

「ああ、もう！ 知らん」

怒っているとはちよつと違うけれど、どうにも感情がゆらゆらと揺れたから、その勢いに任せて、あの時彼女が言った1196と言う4桁の数字を打ち込んで決定ボタンを押した。

そして、画面が暗転した。

真っ黒になった画面へ再び色が戻り、見えてきたものは——あの彼女と同じ装備のモニターだった。

そんなハンターのHRは32。それは決して高い数字ではない。
ドクリと何かが跳ねた。

勢いに任せて、後先考えず入ったせいで、どうして良いのかわからない。えと、まず何を話せば……

どうすれば良いのかわからず、おろおろしていると画面の向こうのハンターが動き出し、何かのクエストを張った。

そうしてから

『ふい』

と、一言。

一瞬、何か言葉を返そうと思ったけれど、やっぱり何を話せば良いのかわからず、結局何もしないまま、クエストへ出発した。

クエスト名は『縄張りに進入するべからず』つまり、下位のジンオウガがターゲットのクエスト。

画面が暗転し、それが直るとあの世界のように一日以上もの時間をかけることなく、一瞬で天空山のベースキャンプへ到着。あの世界もこうだったらもつと楽だったんだけどなあ。

そして気づいたことが一つ。ああ、しまった。飯は食べてないし、アイテム整理もしていない。

ま、まあ、下位クエストだし、流石に大丈夫か。

そう思っていたけれど、クエストの内容はそりやあもう酷いものだった。カチ上げで何度も味方を吹き飛ばしてしまうし、馬鹿みたいに緊張していたせいも全く上手くできない。

そしてそれは、もう一人も同じだったらしく、後方攻撃をしようと思ったのだろうかけれど、叩きつけが何度も暴発。その度に俺の操るハンターは吹き飛んだ。

結果、10分針。

上位装備でしかも二人だと言うのにこれは酷い。流石に乙りはしなかったけれど、まさか此処まで下手になっているとは思わなかった。

そんなグダグダなクエストを終え、集会所へ。

『難しいね』

直ぐにそんなチャットが飛んできた。

『そうだな』

先ほどよりは多少マシになった震える手で、そうチャットを返した。

『私は二日ぶり』

『こっちはさっきぶりかな』

ただでさえ、打ち難いチャット。それにあの震える手が合わさり、1回1回のチャット

トでの会話に酷く時間がかかった。

『そうなんだ』

あれ？ もしかして彼女は二日間ずっと部屋にいたのか？ まさか、そんな……ねえ？

それから暫くはチャットで会話をしていただけ、それが面倒くさくなって、スマホのあるアプリのIDを交換することに。それで会話をした方が楽だもんね。

そして、IDを交換すると直ぐに相手から電話がかかってきた。
驚きの早さです。

慌てて通話ボタンを押し、スマホを自分の顔へ近づけた。

「も、もしもしっ…」

声が震えた。

情けないなあ……

「……うん、聞こえる」

そうやって聞こえてきたのは、電話越しではあるけれど、確かにあの彼女の声だった。

「あれってさ……なんだっただろうな？」

「……わかんない。わかんないけど、私は楽しかった」

表情は見えない。

でも、その声は何処か楽しそうに聞こえた。表情が見えないからこそわかることだつてあると思うんだ。

それから彼女とは色々なことを話した。

あの世界での思い出話だったり、こつちの世界での話だったり。そんな会話の中でわかったのだけど、彼女が暮らしているのは、俺の住んでいる場所からかなり近いと言ふこと。てか、歩いて行ける距離です。そして通っている大学も一緒だとき。

そんなこともあるんですね。

彼女の年齢は俺よりも一つ下だけど、彼女曰く――

「私は貴方より一年長くあの世界にいたから、実質的に同い年」
だそうです。

別に、一つくらい年齢が離れていようが俺は気にしないんだけど……

それにしても、一つ下だったのですか。俺よりも上だとは思っていませんでした。ほら、小さい方が好きと言う人だっているわけですし。

それから、彼女が俺の住んでいるところへ良く遊びに来るようになり……まあ、色々あったわけですけど、それはまた別のお話だったりします。

我武者羅にハンマーを振り回すハンターの物語はもう少しだけ続くらしいです。

後日談くその2く

彼と彼女が消えてしまつてから幾星霜……つて言うのにはちよつと大袈裟だけど、もう一年以上の時間が経つてしまつた。

そして別れ際にあの二人が残した「また」と言つた言葉。けれども、あの二人がまた戻つて来てくれることはなかつた。なんとなくわかつている。もうあの二人が戻つてくることはないんだろうなつて。

でも、期待しちゃうのですよ。その可能性が限りなく低いとしても、願つてしまふんです。また戻つて来てくれるんじゃないかって。

そんな淡い期待があるせいで、私のパーティーには二人分の空気が残っている。

いつまでもこのままじゃダメだつてわかつてはいるけれど、どうしても捨てきれないのです。そんなんだから二人と別れてしまつたあの日から、私は一歩も前に進むことができていない。頑張ろうとは思っているけれど、結局のところ私は一歩踏み出すことができていないのだ。

このままじゃ良くないんだけどなあ……

「また暗い顔してますよ?」

あの二人のことを思い出していると、ふいにそんな言葉をかけられた。

その言葉をかけてくれたのは、弓を使う女の子で今は私と一緒にパーティーを組んでいる。

「ん? そうだった?」

弱いところなんて見せたくはないから惚けてみせる。でも、何度も見られているんだろうなあ……だって、私はそんなに強くはないもの。

「そう言えば、弓ちゃんの新しい武器できたって?」

「いえ、あと一日かかるそうです。その間、どうしますか?」

そんな唯一の仲間である弓ちゃんはすごく真面目な子です。良い意味でも、悪い意味でも。

まあ、あれですよ。真面目と言うか真っ直ぐと言った感じ。あと、ちよつと腹黒い。

一緒にパーティーを組もうと言って来たのは、この子の方からだった。そんな提案にちよつと悩んだけれど、私は受け入れることに。だって、この子は彼と一緒にクエストへ行ったことのある子だったから。

確かこの子との最初の出会いは、集会所で相席をした時だったと思う。その時のこの子のHRはまだ1で、本当に駆け出しと言ったところ。そんなあの子を見ると、な

んだか昔の自分を思い出して、つい私から声をかけた。

それがこの子との最初の会話。でも、この子はこの子でかなりお堅い性格だったから、普通に会話をするようになるまで時間がかかった。それでも、一緒にご飯を食べるくらいには仲良くなれたのです。

その時のあの子は緊急クエストにかなり苦しんでいる様子だった。それも一人で。なんとか手伝ってあげたかったけれど、私だけじゃちよつと不安だった。だからあの彼へ頼むことに。彼になら安心して任せられるのです。

そして、いつの日か私たちのパーティーへあの子も入ってくればなあと思っていました。だって3人よりも4人の方が楽しそうだったんだもん。

結果的に、そんな私の願いは半分だけが叶った。

あまりにも大きすぎる犠牲の上で。

「どうしよつか。何か行きたいクエストとかある?」

「いえ、私は特にありません」

あの二人と別れてしまつてから、暫くの間は何をして良いのかがわからなかった。でも、不思議と涙が溢れることはなかった。

自分で言うのもアレだけど、どうやら私たちのパーティーは思っていた以上に有名だったらしく、私の知っている人も知らない人も関係なく、色々な人から聞かれた。

あの二人はどうしたんだ。って。

その質問に私は一度も答えたことはない。それを聞かれた時は、笑ってから——私もわからない。と言うようにしている。

私がそう答えると、それ以上詳しく聞かれることはなかった。

一人になってしまった私。防具はジンオウSで武器は渾然一体の薙刀ヤマタと何方も一級品。特に武器の方なんかは、この世界じゃ私しか持っていないとまで言われた超一級品。

そんな装備をしているハンターはお世辞にも一級とは言えなかった。

一人になってから色々なモンスターと戦いました。とりあえず、下位のモンスターから始め、最終的には古龍であるクシャルダオラまで。

ただただ我武者羅に戦い続けた。

でも、そんな一人でのクエストはちっとも面白くなつてなかった。

疲れるだけだったんです。体と心が。

今思い出しても、辛い日々だったと思う。

そんな時、あの子から声をかけられた。一緒にパーティーを組んでくれませんか？

と。今までだって決して少なくない人からパーティーを組んでくれと頼まれた。けれども此処でパーティーを組んでしまったら、あの二人のことを忘れてしまうんじゃないかって思い、それが怖くて全部断っていた。

でも、この子は別。あの彼と一緒にクエストへ行っただことのあるこの子だけは別だったのです。

それに一人じゃもう限界だったんだと思う。いろいろと。

その時のあの子のHRはまだ3だったけれど、少し悩んだ後その提案を受け入れた。

それからはあの子のHRを上げること。そのせいで私が高難度のクエストへ行く時間はなく、ギルドには迷惑をかけてしまったと思う。けれども、あのギルドマスターはそんな私を応援してくれた。

——やっぱりキミは一人よりもパーティーの方が合っていると思う。確かにキミが前線から外れてしまうのは痛いけれど、また戻ってきてくれるよう願っているよ。

そんな嬉しい言葉で。

そして久しぶりにやったパーティーでのクエストはやっぱり楽しかった。ギルドマスターが言ってくれたように私はソロが合っていないらしい。

「それじゃ、とりあえず集会所へ行つて、何かクエストがあるか聞きに行こっか」

「そうですね」

そんなあの子のHRも7となり、一流のハンターと言ってもおかしくない。まだまだちよつと危ないところはあるけれど、すごく上手くなったと思う。

防具はラギア一式。武器は爆砕の征矢とあの彼と同じブラキディオスの素材を使った弓。まあ、それが完成するまで、あと一日かかるみたいだけ。

この子からよくお礼を言われることがある。でも本当にお礼を言わなきゃいけないのは私の方だ。だってあのまま一人で戦い続けていたら、私はきつと壊れていた。だからこの子には心の底から感謝しています。

私のHRはもうそろそろ100へ届くところ。今のこのギルドの中では一番高いみたいだし、一番上手いハンターだなんて言われることもある。でも、中身はあの頃と変わっていないのです。外面だけ見繕ったところで、結局のところ中が変わらないと意味がない。

それはわかっている。わかっているけれど、やっぱり私は前に進んでくれやしなかった。

「……なんだか、今日の集会所は妙にぎわっていますね」

「うん。何かあったのかな？」

あの子とともに集会所へ。

集会所なんていつも騒がしい場所ではあるけれど、今日はそれとはまた違った騒がしさだった。そして、どうも色々な人からの視線を感じる。

うーん、何かあったのやら。

よくわからなかったけれど、とりあえず受付嬢さんのところへ行き、何のクエストがあるか聞くことに。

そうしようと思ったとき、ギルドマスターが私たちに声をかけてきた。

「ほっほほ。狩りは順調かい？ さて、いきなりだけど、キミ達はドンドルマと言う街を知っているかな？」

ドンドルマ……その名前くらいは聞いたことがあった。

「はい、知っていますが……」

どうやらあの子も知っているらしく、ギルドマスターへそんな返事をした。

「ほっほほ。それは良かった。それなら知っているかもしれないが、そのドンドルマには大老殿と呼ばれる宮殿があつたね。そこにはごく一部の、それも高い実力と実績を兼ね備えたハンターのみが入ることができる。さて、喜びなさい。その候補にキミ達を選ばれたんだ。そして、その最終試験とも呼べるクエストがキミ達宛てに届いた」

……なんだかすごいことになっちゃいましたね。

私にそんな実力があるとは思えないんだけどなあ……だって大老殿と言えば、今まで私たちが受けてきた上位クエストの更にも上。つまりG級のクエストが依頼されてくるはず。

流石にそんなクエストをクリアできる自信はない。

「なるほど、わかりました。それで……クエストの内容は？」

「ふむ、崩竜……ウカムルバスの討伐だよ。キミ達の実力なら充分やり遂げられる依頼だと思っただろうけど……どうかな？」

ウカムルバスかあ……戦ったことはないけれど、ものすごく強いモンスターだと思った。そしてそれを倒すことができれば私たちはあのG級ハンターになる。

でも、それはつまり、私が前に進まなければいけないと言うこと。

「どうしますか？」

あの子の声。

答えなんてわかりきっている。そして、その答えを出すのが怖かった。

でも、そろそろ私は前へ進まないといけないんだと思う。何時までもあの二人を待っているだけじゃダメなんだ。

怖い、怖いけれど……私は一歩、前へ進まないといけない。

「はい、そのクエスト受けます」

このギルドマスターにだけはあの二人のことを話した。突然消えてしまったことと……たぶん、もう帰っては来ないことを。

そんなせいか、酷く私のことを心配してくれたし、沢山お世話になった。だからこれはこのギルドマスターへの恩返しも含まれていると思う。

「ほっほほ。それは良かった。うむ、良きかな良きかな。それじゃ、準備ができたらまた声をかけなさい」

あの二人を忘れることなんてないけれど、私は前に進みます。

「……良かったのですか?」

心配そうな顔のあの子。

頼りないメンバーでごめんね。

「……うん、もう大丈夫。それにいつまでも止まっているわけにもいかないもん」

何時までも帰ってこないあの二人がいけないんだ。

私はもう充分待った。……充分すぎるほど待ったんです。

「でも、出発するのは弓ちゃん武器が完成してからにしようか。だからクエストへ行

くのは明日の朝かな」

「あつ、はい。わかりました……」

やはり不安そうなあの子。

優しいね、君は。

その日の夜は眠ることがほとんどできなかつた。

そして次の日。

ほとんど寝ていないはずなのに、体は予想以上に重くない。

家に帰ってから目を瞑っている間、色々と考えました。本当に色々と考えたんです。

そこで決めたことが一つ。

もう迷いません。私は一気に進みます。

あの子と合流し、朝一番に武器を受け取ってから集会所へ。

朝早くの集会所はやっぱ騒がしくはない。

「お待ちしました。お話は聞いています。これでまた一人、大老殿へ旅立って行かれるのですね……ふふふ。まだ少し早かったでしょうか？　でも、貴方たちなら問題なくクリアしてくれると信じています。もちろんケガしたら、絶対ダメですからね」

そっか、これでこのクエストをクリアしたら、もう此処へ帰ってくることはほとんど

……

いや、もう決めたじゃないか。一気に進むんだと。

「お願い」

「ふふふ。はい、わかりました。参加人数は二……えっ？　あれ？　え、えと……」

急に、戸惑い始めた上位クエストの受付嬢さん。

いや、いつも通り二人でいいのですが……流石に一人では行きたくないし。

「うん、4人で頼む」

そんな声が聞こえました。
すごく懐かしい声だ。

「……戻ってきていきなりウカムとかキツイ」

そしてまた懐かしい声の一つ。

どうして？ とか。何故？ とか色々な感情が溢れてきたけれど、それ以上に嬉しく
て……でも、やっぱり頭は混乱していて……グルグルと何か私の中で回って……

どうにか後ろを振り向く。

そこにはあの日と変わらない二人の姿。

「や、久しぶり。ちよつと遅れちゃったな」

「……でも、ギリギリせーふ」

色々と言わなきゃいけないことがあった気がする。

でも、私の口から言葉はなかなか出てきてくれやしなかった。

結局、再会して最初に出た言葉は――

「おかえり」

だなんて、酷く平凡な言葉となってしまうた。

でも、別にいいのです。だって、言葉なんてまたこれから出せばいいのだから。
そしてその日、私は一年ぶりの涙を流した。

後日談くその3く

この世界へ戻って来て久しぶりに相棒と再会することができた。

正直なところ、本当に再会できるかなんてわからなかつたし、一言で言ってしまうえば運が良かったってことなんだと思う。

でも、まあ、この世界へまた来た理由は相棒ともう一度会うこと。それは笛の彼女だつて同じだろう。それを達成することができたのだから其処に文句は何もない。

この世界に戻って来て直ぐ……まあ、彼女と一緒に戻ってきたわけだけど、とりあえず相棒を探した。そして集会所へ行くと、いつか見た弓使いの少女とともに相棒の姿が。しかも、ウカム討伐に向けて出発する前と言う、なんともギリギリなタイミング。

神様だかなんだか知らんが随分と粋なことをしてくれたものだ。

たぶん、色々と話さなきゃいけないことがあつたんだと思う。けれども、再会の挨拶を交わして直ぐ、俺たちはウカムルバスの討伐に向けて出発した。

ウカムのいる極圏へ向けて馬車に乗っている間は大変でした。急に消えることになつてしまった俺たちが悪いのだけど、わんわんと泣き続ける相棒さんの愚痴をひたす

ら聞き続けた。

どうやら俺たちの消えていた時間は1年ほどだったらしく、その間、相棒はかなり大変だったらしい。まあ、ずっとパーティーでやっていたのにいきなりソロになったらそりゃあ大変か。

そんななんとも微妙な雰囲気のまま極園に到着。

そしてその時になって漸く、不味いことに気付いた。

いきなりウカムとかヤバくないっすか？

ゲームの中では何度もウカムと戦った。ウカウカウ装備を作るのに必要だったし。けれども、此方の世界でウカムと戦うのは初めて。加えて1年以上のブランク持ち。それでいて失敗できるようなクエストではない。

うん……チキンプレイでも良いから乙らないようにいこう。

そんな不安だらけのままクエストスタート。

せめて1スタンスくらいは取るうだなんて、随分と消極的な考えだったわけだけど——
相棒さんがすごく素敵でした。

元々上手いのはわかっていたけれど、乗ってくれるし脚怯みでダウンは取るし、攻撃

は全く喰らわれないしと、もうこの人で一人で良いんじゃないかって言う活躍っぷり。

4人パーティーで、しかもスタンを取りにくいことに定評のあるウカム相手から2スタンまでは直ぐに取ることができた。暫く見ない間に滅茶苦茶成長したらしい。

こりやあ、ますます俺の立場が弱くなりますね。

結果、弓使いの少女がブレスで蒸発した1乙のみで、15分針にならないくらいで討伐完了。まあ、あのブレスはしやーない。当たり判定と攻撃値がおかしいんだ。

俺は俺でかなり慎重にプレイしたし、彼女は元々安全に戦う性格と言うこともあり、なんとか面目を保つことはできたのかなって思う。

「終わったー！」

動かなくなったウカムを見て、元気な相棒の声が響いた。

なんだか、それが懐かしくてクスリと何かが溢れた。

お疲れ様でした。

ウカムも倒すことができ、これで俺もG級のクエストへ挑む権利を得ることができた。漸くスタートラインへ立つことができたと言ったところ。

はてさて、これからどう進めて行こうかね？

ウカムも倒すことができると例のごとく、相棒が打ち上げをやろうと言い出したけれど、バルバレへ戻って直ぐギルドマスターの所へ行くことに。

そして此処で問題が発生。

ギルド側もまさか俺と彼女が戻ってくるとは思っていなかったらしく、大老殿へ立ち入る許可が下りなかった。と言うか、俺たちのことをどうするか悩んでいるんだとさ。実績的には充分だけど、こんなことに前例はないから、もう少し待ってくれ。なんて言われた。

むう、早くG級のクエストを受けたかったのだけど……まあ、しゃーないか。

そのことを相棒に謝ると

「私は二人が戻って来てくれただけで充分だし気にしないよ？　それよりも打ち上げやろうよ。打ち上げ！」

だなんて、笑って許してくれた。

一年以上もの時間を経て、変わったところもあるけれど、変わらないことだってあるらしい。

そして、何時ものよう……と言うか、あの頃と同じよう皆で打ち上げ。

弓使いの少女もパーティーに加わり随分と賑やかなパーティーになりました。てか、野郎は俺だけなんだよね……ハーレムとも言えるわけだけど、それも楽しむことができるとは俺のメンタルは強くない。

いや、贅沢な悩みだつてことはわかっていますよ？

そんな何とも姦しい（流石に失礼か？）雰囲気の中、タンジアビルを流し込んでいる時にまた問題が発生。それもかなり大きい奴が。

根本的な原因は俺たちにあるけれど、それを掘り起こしたのは相棒さんです。

笛の彼女とこれからどう進めて行くか、こつそり話をしていると、相棒さんが俺たちをじーっと見つめていることに気付いた。

それも所謂、ジト目って奴で。

「え、えと……どうしましたか？」

見られ続けているのはどうにも落ち着かなかったので、そう相棒へ尋ねた。

「なんかさ……君と笛ちゃんの距離、近くないですか？」

……さて、これは困りましたぞ。

いや、いつかは言わなきゃダメだってわかってはいたけれど、今じゃないと言うか、なんと言うか……そんな言い訳。

「……彼は私がもらった」

そして相棒の質問へ彼女がそう答えると、空気が凍りついた。ホットドリンクをください。

言ってきたのは彼女からなのだし、間違っちゃいけない。間違っちゃいけないけれど、その言い方はどうなんだろうか……

別に悪いことをしたとは思っていないけれど、謎の罪悪感がヤバイ。

「……………えっ？」

そんな相棒さんのセリフ。

いや、まあ、うん。そう言うことです。元の世界へ帰ってから色々あったんです。さて、この空気はどうすつかね。

お願いします。誰か助けてください。

そんなどう仕様も無い空気の中、口を開いたのは弓の少女だった。

「ふむ、よくわかりませんがわかりました。とりあえず貴方は帰ってください。ちよつと私たちだけで話合おうので」

そして鬼みたくなことを言われた。これは酷い。

しかし、流石に此処は引き下がれない。だなんて自分の中のプライドに火がついた。

「あつ、はい。わかりました」

まあ、だからと言って、俺に断ることなんてできるはずがないのです。立場弱いんです。プライドなどどつくの昔、2000zで売り飛ばしたし。

彼女たちに追い出され、トボトボと集会所を後に。もうちよつとお酒を飲みたかったけれど、まあ、これは仕方無い。

あの少女のセリフだってどうかとは思うけれど、あの空気を抜け出すことができ、ホツとしている自分もいたりします。何度でも言おう、小心者なんです。

ほろ酔い状態でもなかったら、何処か一人で飲み直そうかと思いつきながら歩いていると、俺がお世話になっていた加工屋と出会った。

「えっ……も、もしかして本物か？」

そしてそんなセリフ。

滅茶苦茶驚いたような顔がちよつと面白い。

てか、本物も偽物もないだろうに。

「ああ、そうだよ。最近になって漸く帰ってきたところ。久しぶり、元気してた？」

俺がそう答えると、いきなり抱きしめられた。

マジ暑苦しいです。心の底からやめてください。

「おい、放せこら。暑苦しいわ！ 残ってる髪の毛、筆り取るぞ」

「うるせーバカヤロー！ 筆り取るだけの毛だつて残つてねえわ！」

勝手に人へ抱き着いておいて泣き出す加工屋。

大の大人がわんわんと情けないって思ったし、やめてもらいたいって思った。

けれども……まあ、アレですよ。こうやって戻つて来たことを喜んでくれる人がいるつてのは良いことだなんて、小っ恥ずかしいことを思うのです。

そして数分ほど泣き続け、漸く放してくれたと思つたら

「よしっ、飲み行くぞ！ お前さんのおごりで」

今度はそんな身勝手なことを言い始めた。

そのことに文句の一つでも言つてやろうと思わないでもなかつたけれど、まあ……たまにはね。

以前、俺が飲みに行こうと誘つた時は、カーチャンが怖いからと断られたが、今日は良いのだろうか？

そのことが不安ではあつたけれど、まあ、この加工屋が裏で怒られようと知つたことじゃないから、気にせず飲むことに。

お酒が入ると、人の口つてのは良く回るようになる。途端に説教くさくなる人つてい

るよね。そんなこともあり、俺は加工屋から怒られ続けた。しかも泣きながら。その内容は何れだけ相棒が一人で頑張っていたかと言うこと。

それに対して俺はもう謝ることしかできないし、仕方無いことではあつたけれど、反省だつてしている。

はあ、俺はあと何人からこうやって怒られるんかねえ？

ただ不思議と、怒られることが悪いと感じはしなかつた。

最初は二人で始めた飲み会。けれども、いつの間にか知っている人も知らない人も、ハンターも雑貨屋も加工屋も関係なく、そろそろと集まつて来て大宴会となつてしまつた。

しかも全部、俺のおごりだそうです。笑うに笑えない。

泣き疲れたのか、説教に疲れたのか知らんけれど、あの加工屋も寝てしまったところで俺は逃げ出すことに。とは言え、一応3万2ほどは払つておいた。それで足りるのかは知らん。

G級になつたら装備を一新するから無駄な出費を抑えたいところではあつたけれど、こればかりは仕方無いのです。

昼間の早い時間から飲み始めたと言うのに、西の空はもう赤くなり始めている。

これからの予定とかを彼女たちから聞きたいところではあったけれど、ほろ酔い気分の今は何もする気にならない。

家に帰って寝るとしよう。

あれ？ そう言えば、俺の家ってまだ残っているのか？

そのことを不安に思いながらも自分の家へ。

けれども有り難いことに家はちゃんと残っていてくれた。とは言え、もしかしたら知らない人が住んでいるかもしれない。

そして、やや緊張しながらも自分の家の扉をコンコンコンと3回ノック。

「あつ、はい。開いてるよー」

聞き覚えのある声が聞こえた。

相棒の声だった。

んく……どう言うことですか？

「えと、此処って俺の家で良いのか？」

ゆつくりと扉を開けて直ぐ、相棒に尋ねた。

「うん。そうだよ」

どうやら俺の家らしい。

いや、じゃあどうして君がいるんだよ。あと、その手に持っている酒瓶と思われる物はなんですか？ もう色々とおかしい。

何が何だかわからなかったけれど、どうやらただ一緒にお酒を飲みに来ただけらしい。そう笑いながら言われた。

因みに、俺を追い出した打ち上げは彼女が寝てしまったところで終了したんだってさ。彼女はお酒があまり強くないのに、飲んじやっただらうなあ……

そんな彼女を家まで送り届け、暇になった相棒はお酒を片手に俺の家へ。まだ飲むですか？

そして何を話せば良いのか全くわからない。

「ん〜……最初に言っておくと、君のことだし私に気を遣っちゃってると思うけど、私はあんまり気にしてないよ？ いつかこうなるんだらうなあって思ってたし」

最初に相棒がそんな言葉を落とした。

その本心はわからないけれど、そう言ってもらえると助かります。

「そう……なのか？」

「うん」

そうだったのか……いや、俺だつて嫌われてはいないと思っていたけどさ。まさか、ねえ？ あの時はいきなり過ぎて滅茶苦茶驚きました。

「たぶん、私がいたから遠慮してたんだと思う。笛ちゃんも笛ちゃんですらに急に気を遣うし。だから私はあまり気にしていません。むしろ応援するもん」

あの明るい性格のせいかな、この相棒は一見抜けているように見える。

けれども一番大人なのは、きつとこの相棒なんだろうな。一年振りに会ったと言うこともあるけれど、その姿は随分と大人びて見えた。

それからはいつもしているような雑談の時間。

その時間に生産性は何もないけれど、悪い時間じゃあない。

「そう言えば、私のHRはもうちよつとで100なんだよ！ ふふつ、君の4倍以上だね」

「うるせー。直ぐに追いついてやるわ」

ぺしりとデコピンを一発。

そうすると一瞬不満そうな顔をして、また直ぐに笑った。

そんな仕様も無いことだけでも、戻って来て良かったって思う。

んで、これからの予定を聞いたところ、とりあえずギルドから何かしらの答えが出るまでは待機つてことになったらしい。

ふむ、それじゃ俺は闘技大会へでも出ていようかな。勘を取り戻すのにはちようど良いし。

「あつ、そうだ。すっかり忘れていたけど、これ返すよ」

「うん？　なんで2000Z？」

今では随分と昔になってしまったけれど、この世界へ来て初めて防具を作るときに借りたお金。懐かしいねえ。

「おおー、そう言えばそんなこともあったね。ふふつ、懐かしいなあ」

そう言つてクスクスと笑う相棒。

けれども、そのお金を受け取つてはくれなかった。どうしてか尋ねると――

「だって、これを受け取らなければ、もしまた君たちが消えちやつても帰つて来てくれそうじゃん。だから私は受け取らないでおくんだ」

なんて、静かに笑いながら答えてくれた。

また消えてしまうのかはわからない。でもそんな相棒の言葉は妙に納得することができた。実際のところはどうかかわからないけれど、こう言うのは悪くない。

夕方から始めた二人だけの飲み会。それは東の空が明るくなり始めるくらいまで続いた。

そして、珍しいことにその日は最後まで相棒が酔い潰れることはなかった。

流石に飲み過ぎたせい、次の日は案の定二日酔い。

そんな状態で闘技大会へ出場できるはずがなかったけれど、とりあえず闘技大会の内容を聞くだけでもと思い、集会所へ。あの受付嬢とも久しぶりに会いたいし。

「あれー？ 久しぶりー、本当に戻って来てたんだねー」

そして集会所へ入り、闘技大会の受付嬢の元へ行くと直ぐにそんな言葉をかけられた。

「よ、久しぶり」

「まったく、どこへ行っていたのさー？ 皆心配していたんだよー」

「あー……ちよつと旅へ出てたんだ」

こればかりは本当に悪かったと思っっている。とは言え、いきなりの出来事だったし仕方なかったんです。

「……………本当に心配したんだよ？」

いつもの間延びしたような声ではなく、顔を落とす急にしゅんとしてしまった受付嬢。

その目は潤んでいるように見えなくもなかった。

「あつ、いや……その、す、すみません」

やばい、やばい。まさかこんなことになるとは思わなかった。

そしてそんな俺たちの様子を、クスクスと笑いながら見ている下位クエストの受付嬢が鬱陶しい。仕事しなさいよ。

「ふふつ、別に謝らなくてもいいのに。変なのー。そしてねー、いつかキミが帰って来てくれると思って、私一生懸命考えて、新しいクエストを増やしたんだー」

一度、両目を袖で拭い、顔を上げてから受付嬢はそう言った。

「題して、『イビルジョー討伐』。キミならできると思うんだけど、ぜひ、やってくんないかなー」

「おお、ジョーかあ……」

ハンマーでソロスを狙うことのできる数少ないクエストだけど、随分とえぐいのが来ましたね。

とは言え、まあ、断ることなんてできないか。

「……了解。今日はちよつと厳しいけれど、挑戦させてもらうよ」

そして俺がそう答えると――

「……え？　ほんと？　やってくれるのー？　やっぱキミってさいこー……うん、カツコイイ」

受付嬢はそう言っただけにかむように笑った。

そんな彼女の様子には思わず見惚れてしまった。

「……何をしているのかと思ったら、もう浮気ですか？　笛さんに報告してきます」

弓の少女の声が聞こえた。

そんな状況はかなりヤバい。

「ちよつ、違つ……待て！ 待つてください。それだけはお願いだからやめて！」

そんなことを報告されたら何をされるかわからない。

怒らせると、あの彼女本当に怖いんだよ。

結局、高級お食事券3枚で和解しました。

全く……油断も隙もあつたもんじやない。

そんなことがあつた日から5日後。漸く、ギルドから俺たちが大老殿へ立ち入る許可が下りた。後で聞いたことだけど、あのギルドマスターが色々と頑張ってくれたらしい。今度、お礼を言いに行かないとだ。

因みに、ジョーの闘技大会だけど、ソロSは流石に無理でした。0乙ではあつたものの、タイムは12分台とすごく微妙な結果。

ただ、まあ、闘技大会の受付嬢は喜んでいたし、良かったのかもしれない。

そして、終に大老殿へ向かう日が来た。有り難いことに俺たちの住む場所も用意されているんだとき。

それはつまり、このバルバレへ戻って来るってことはほとんどなくなると言うこと。そのことに寂しさを感じはするけれど、それ以上にG級のモンスターと戦うのが楽しんだ。

「ぼーっとしてどうしたの？ もう出発の時間だよ」

相棒の声。

失礼。考え事をしていました。

「……G級楽しみ」

「私は不安なんです……」

続いて、彼女と少女の声。

そりゃあ、不安だってある。けれども、まあ、強いモンスターと戦うつてのはやっぱり楽しみなんです。

相変わらず臆病者な自分だから、いつものように声を出す。

気合を入れ、自分を前へ進ませるために。

「つしや！ 行くか！」

そう言っつて、漸く立つことのできたスタートラインから、一歩前へ踏み出した。

後日談くその4く

別に嫌われていただなんて思っではいかなかったし、アレだけの時間を一緒に過ごしてきたのだから、もしかしたら彼女だつて俺のことを多少は意識してくれているんじゃないかくらいは思っていた。

とは言え、彼女の表情の変化は乏しく、感情の読み取り辛いことも重なり、実際のところはどうなのかわからなかった。それに、彼女との関係はそれで良いのかなって思っていたんです。友達以上恋人未満と言うような関係に。

まあ、結局のところ、彼女はそんな関係に満足していなかったってことなんだろうけれど。

あの世界から戻ってきて1ヶ月ほど。

待ちに待った日がやって来た。2014年10月11日。MH4の続編であるMH4Gが発売。そして過去作同様、有り難いことにMH4のデータはそのまま引き継ぐことができる。

本当なら、あの世界へ行った時のデータを引き継いでしまうのが一番楽だったけれど、それは止めておいた。それに意味があるのかはわからない。でも、上書きしなくなりました。だからあのデータは、彼女と一緒に行ったジンオウガを抜かすと、ほぼそのまま残っている。

いつかそのデータのことを忘れてしまう日も来るのかね？ それはなんとも寂しいことではあるけれど、仕方無いのかもしれない。

そのためMH4Gの発売に向け、馬鹿なんじゃないかってくらいのパースでMH4を新しく進めることになった。いくらモンハンが好きとは言え、流石に疲れました。

でも、やっぱり直ぐにG級へ行きかけたんです。そんな考えは彼女も同じだったらしく、この夏休みの空いている時間はほとんどの時間彼女と一緒にモンハンをしていたと思う。

その結果、MH4Gの発売までにそれなりの準備をすることができた。

そしてMH4Gが発売。

その日はネットを繋いでではなく、彼女も俺の家へ遊びに来ていた。てか、最近は一

人で集まってやることの方が多と思う。家まで来るのは面倒だけど、集まっちゃった方が色々楽し。

それにあの世界ではずっと一緒にいた。今更、お互いに気を使うこともないだろう。ただ、女の子が家に来ると言うのはやっぱり緊張することではあつたりします。

「おおー、ウカムを倒せばG級へ行けるのか」

「……ウカム苦手」

彼女の使う武器はあの頃と同じ笛。そして俺はハンマー。

村クエを進めるときは違う武器に浮気をすることもあるけれど、彼女と一緒にやるときはハンマーしか担がないようにしている。効率は絶対に悪い。でも、まあ、良いんです。ハンマー好きだし。

MH4Gで最初にプレイすることになったのは、崩竜ウカムルバス。相変わらず難し難い攻撃である潜つてからの突進に辟易しながらも、どうにか討伐完了。これはちよつと火力が足りていないかもしれない。こんな調子でG級は大丈夫だろうか？

ウカムを倒してからは直ぐに、ドンドルマへ行きG級のクエストを受けてみることに、発売日と言うこともありキークエが何かはわかっていないけれど、まあ、全部やれば良いんだ。

「うっわ、何このじいさん。超デカイ。てか、頭どうなってるんだよ……」

「あつ、あ、プーギー。プーギーがいる。足元。見て、ほら。プーギー」

プーギーはわかったから落ち着きなさい。

「……近づけない」

そりゃあ残念だったね。

ふむ、此処がG級の集会所になるってことなのかな。上位と一緒にしてくれた方が楽しかったんだけどなあ。まあ、そこまで面倒なことでもないけれど。

「んじゃあ、とりあえず……アルセルタス亜種でも行くか」

「……了解」

MH4Gとなり亜種もかなり増えた。うむうむ、新しいモンスターと戦うつてのはやっぱり楽しみだよね。

その日はG2になるまで進めたところでお開きに。パッケージモンスターである、セルレとも戦ったわけだけど……なんだか良くわからないモンスターだった。

パッケージモンスターなだけあって、コイツの武器が強いんだろうなあ。詳しく調べてはなないけれど、ローリングで斬れ味が回復するらしいし、ハンマーとの相性は良いかもしれない。

「……えと、明日だけど。ちょっと忙しいから、モンハンができるのは夕方とかになると

思う」

「ほい、了解。じゃあ俺は村クエでも進めてるよ」

確か、今作はモノブロスも復活したらしいし、ちよつと楽しみだ。ただ、アイツの頭つて硬いんだよなあ……

そんな会話をしてから、彼女を家まで送り届け、お酒を買ってから帰宅。それにしても、あの世界で飲んだタンジアビールは美味しかったな。もう飲む機会はないのが悲しいところ。

……俺たちが消えてしまった後、あの相棒はどうなったんだろうか。考えたってわからないことだけど、どうしても気になった。

そして、発売日の次の日。

ほぼ徹夜でモンハンをしていたせいで、目が覚めると時刻は2時を過ぎていた。これは酷い。大学生らしい生活ではあるけれど、生活リズムを崩すのはよろしくない。そろそろ休みも終わるのだし、それまでにはちゃんとした生活を送れるようにならないと

だ。

そして、だ。どうにも隣の部屋が騒がしい。騒がしいと言うか、ガサガサゴトゴトと、何をしているのか知らんが五月蠅い。

そんなせいで、俺の目は覚めてしまったんです。隣は空き部屋だったはずだから、誰かが引越して来たってことだと思う。学生とは思えないから、社会人の転勤とかかねえ？ 社会人ってのも大変だ。

夕方まではまだまだ時間があつたから、とりあえずまた村クエを進めることに。極限化セルレも倒してしまつたし、クエストを埋めていこう。

それにしても極限化、ねえ。この予想が正しいのかはわからないけれど、あの世界で戦つたラージャンってもしかしたら……なうんて思うのです。それを確かめる方法がないのは残念なところ。

てか、このアフロ猫は人の家のアイテムボックスを開いて何をやっているんだ。マタタビの数とか減つてないよな？

その後暫く村クエを進めていると、漸く隣の部屋も静かになつた。引越しお疲れ様です。

さて、試しにセルレ武器でも作つてみようかなと思つたとき、俺の部屋のインターホンが鳴つた。んゝ……もしかして、引越しの挨拶とかだろうか？ 人間関係が希薄にな

りがちな現代社会では珍しく、丁寧な人かもしれない。

まあ、隣人相手に悪い関係を築こうとも思わないし、此処は素直に出ることとしよう。これで、宗教の勧誘とかだったら笑えないが。

「はい、今行きます」

3DSを閉じてから、やや急ぎ気味に扉を開ける。

そしてその開けられた扉の先にいたのは、彼女だった。

「…………え、えと、なんで君が？」

あ、あれ？ まだ夕方と呼ぶのにはちよつと早すぎると思うけど……

突然のできごとに頭が混乱。

「今日から隣に引っ越して来ました。よろしくお願いします」

そんな彼女の言葉にますます頭が混乱。

いや、状況はわかるけれど、どうしてそうなったのかがわからないし、そもそもこんなこと聞いてなかったし、でも、ちよつと嬉しく思う自分がいたりするわけで……

「つまらないものですが、どうぞ」

「あつ、これはご丁寧にどうも」

そして、彼女が手に持っていたカップ焼きそば（激辛）をいただいた。社会経験の乏しい俺には、贈り物としてこれが正解なのかはわからない。

あと、申し訳ないけど辛いのは得意じゃなかったりします。彼女もそのことは知っていたと思うけど……

「ねえ、モンハンしよ」

「あつ、うん。まあ、そうだな」

色々と聞きたいことはあつた。けれどもそれを聞く機会はこれからいくらでもあるだろうし、別に焦る必要なんてないのだ。のんびりやっていこう。

とは言え、この彼女は何を考えているんだろうね？ 引越しだつてそんな簡単にできるものじゃないだろうに。

そんなこんなで、今日も二人集まつてモンハンをすることに。もしかしたら、今日中にG3へ上がることもできるかもしれない。

うむ、良いペースだ。

「どうして、また引越しなんて？」

地底火山でグラビモスと戦いながら、彼女と雑談。

むう、ハンマーと笛の二人でグラビはなかなかキツイな。

「……迷惑だった？」

「いや、そんなことはないよ。ただ、いきなりだったから」

それにしてもおかしいな。いくら乗り攻撃をしても背中が壊れない。もしかして、背中破壊できなくなつたのか？ それはちよつと困るのだが……

「隣へ引つ越しちやえば楽だつたから」

むう、この歩きながらビームを連発する攻撃が鬱陶しいな。なにその首の動き。明らかに無理があるだろ。

「まあ、そりゃあそうだけど……でも、ほら引つ越しつて大変じゃん。君の親もよく許してくれたね」

もう既に5回目の乗り攻撃。

けれども、まだ背中が壊れない。流星にこれはおかしい気がする。今までが早く壊れすぎたつてのものもあるけどさ。

「……最初は反対されたけど、彼氏ができたつて言つたら許してくれた」

……うん？ 彼氏ですと？

あつ、まず。乗り失敗した。

い、いや、ちよつと待て。あれ？ なんですか？ 彼氏いたの？

べ、別におかしなことじゃないけれど、それは知りませんでした。この彼女の容姿はかなり整っている方だし、狙っている野郎どもは少なくないだろう。

でも、まあ、なかなかシヨックを受けている自分がいたりします。

てか、彼氏がいるのに、俺の部屋なんかへ来て良いのか？ 修羅場的な展開は全力でお断りしたいのですが……このアパートに住んでいるってことだとは思うけど、そう言うのはちよつと困ります。

「それで今週末に私の両親が見に来るって言ってたから、よろしく」

……………うん？ よろしく？

え、えと、それはどう言う意味ですか？

お隣として挨拶してくれいな？ なんか違う気がするけど。

たぶん、頭のどこかでは理解していたと思う。でも、あまりにも突然過ぎたんです。だつてねえ、あの彼女がですよ？

そりゃあ、悪いとは思われていなかったんじゃないかと思う。とは言え、こんなことになるだなんて予想できるわけがない。

「あの……質問、良いですか？」

「うん」

「あ……その彼氏と言うのは？」

ふと、気がつけば俺が操作していたキャラはいつの間にかベースキャンプに。たぶん、それだけ動揺していたってことなんだと思う。

そしてそれは、彼女も同じだったんだろう。だつて、彼女の操作していたキャラも

ベースキャンプにいたのだから。

「貴方のこと」

そんな言葉を聞き、漸く俺は画面から目を離れた。

彼女と目が合う。

珍しくその顔は赤くなっていた。

「……いや、だった？」

そして酷く不安そうな顔。

嫌なはずがない。むしろ、俺なんかで良いのかと聞きたいくらいだ。

「そんなわけではないでしょうが」

「……そっか。それなら良かった」

何と言うか、順番がまるでぐちゃぐちゃだ。

でも、それは彼女らしいと言えば、彼女らしいのかもしれない。

コホンと一つ咳払いをした彼女。

手に持っていた3DSを置き、お互いちゃんと向き合ってみる。
そうしてから――

「貴方のことがずっと好きでした。付き合ってください」

なんて言葉。

だから最初に言ったのは彼女の方からなんです。それは男としてちよつと情けないかなと思わなくもないけれど……まあ、俺が彼女に勝てるはずなんてないのですよ。

これまでも、これからも、きつと。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

そんなことがありますとき。

それから俺と彼女の関係で何が変わったのかと言うと……特に変わったことはないのかもしれない。ただ、ちよつとだけお互いの距離が近づいたくらいじゃないだろうか。

俺は俺で不器用だし、彼女も彼女で不器用なところはあるから、普通のカップルとはちよつと違うのかもしれない。まあ、それでも別に良いのですよ。俺はそれでも満足しているわけですし。

彼女の方がどう思っているのかはわからないけれど。

そして二人が付き合うようになってから1年と言ったところ。

またあの長い夏休みがやってきた。

クエストも全てクリアしたし、金冠マラソンも終了。HRもカンストし、残っているのは発掘武器くらいとなつてしまいました。

つまり、結局今作もゴリラを狩り続けなければいけないことに。最後に辿り着くのはいつだつてゴリラだ。

「しっかし、ホント良い発掘武器が出ないな。どうなってるんだろうか」

「……そればかりはしょうがない」

仕様が無いことではあるけれど、もう少し出やすくしてくれても良いのにな。この調子じゃ、次作が発売してしまいそうだ。

「ゴリラも飽きたし、テオにしない？」

「賛成」

最近はゴリラとテオのヘビーローテーションが続く日々です。

でも、他にやることも……あれ？

「うわっ……急に電源が落ちた。データ大丈夫かこれ」

「むう、私もだ」

前回、ちゃんとセーブしていただろうか？ それなりに良いお守りが出ていたし、アレが消えるのはちよいと痛い。

嫌な予感がしつつも、電源をつけてデータを確認。

見事に全てのデータが消えていた。

「……………」

「……………」

そしてそれは彼女も同じだったらしい。

お互いに無言。言葉なんて出てこない。

マジかよ。

しかし、この状況はアレですね。見覚えがあると言うか、何処かで経験したと言うか
……

「……これって、もしかするのかな？」

彼女の言葉。

どうやら思うことは同じだったらしい。

「わかんない。わかんないけど……そう、なのかな」

もしそうだとしたら、それはあまりにも出来過ぎた物語だ。攻略本くらい用意しておいて欲しい。

「……どうする？」

どうしよつかね？ そもそも、またあの世界へ行けると言う確証は何もない。

でも、もしそうなら……もう一度あの世界へ行くことができるのなら……

「俺は行きたいかな」

「……あの娘がいるのかわからないし、同じ世界かはわからない。それに今度こそ帰って来られないかもしれない」

ですよねえ。

それでも、そうだとしても、やっぱり夢を追いかけたくなってしまうのですよ。もう一度、あの相棒に会いたいと思ってしまうのですよ。

「……私だつてもう一度行きたい。行きたいけど……そこに貴方がいないと困る」
い、いきなり言つてくれますな。

ちよつとビックリした。

俺だつて、彼女がいなかったら滅茶苦茶落ち込むだろうなあ。それくらいには彼女のことを好きなんです。

「んじゃあ、離れないよう手でも繋いでおく?」

「……うん」

繋いだ、右手と左手。

それは冗談のつもりで言った言葉。今更、冗談でしたなんて言えたものじゃない。けれども、まあ、悪い気は全くしません。

「あつ、データ引き継ぐか」

「あの時の?」

「うん。たぶんそつちの方が良いと思う」

このままずっと残しておくよりも、此処で使つてあげた方が良い。

それに、たぶん、これが正解なんだろう。

繋いでいない左手を使いながら、キャラクターメイク。

左手で操作したこともあり、少々時間がかかったけれど、どうにかそれも終了。

一つ深呼吸を試みた。

そうしてから、また一つ声を出す。臆病な自分を前へ進ませるために。

「つしや！ 行くか！」

「おー」

そんないつかのかけ声。

一つ声の数が減ってしまっているけれど、その声がまた戻ってきてくれるよう今は願おうじゃないか。

最後に手を繋ぎながら、二人同時にゲーム開始のボタンを押した。

「……リンクスタート！」

「いや、それは作品が違……」

そして、目の前が真っ白になった。

真つ白な世界から何処かの船の上のような世界へ変わった。

太陽は眩しく、風が強い。その強い風によつて飛ばされた砂粒が顔に当たる。隣を見る。

彼女と目が合った。

とりあえずは一安心と言つたところ。良かった……

「よう！ いつかのハンターさんじゃないか」

二人して安堵していると、急にそんな声をかけられた。

そちらを見ると、大きめの帽子を被つたカツコイイおじさんの姿。その姿に見覚えはある。

「懐かしいなア。ハンターさんと以前会つた時も船の上だつた」

日差しが強い。肌が焼ける。

風が強い。皮膚に当たると砂粒が痛い。

「それで、ハンターさんが言っていた凄腕になるって言う目標は達成できそうか？」

これが夢なのか現実なのかはやはりわからない。

それでも、確かなことは一つ。

「いんや、まだまだだよ」

此処、モンハンの世界だわ。

「はっはー！ そうか、まだまだだったか。しかし、やはりお前さんは良い目をしている。大丈夫、お前さんなら、できるぞ！」

その時から、モンハンの世界でまたハンマーを振り回し続ける馬鹿な男の物語が始まった。

そんな一人のハンマー使いのハンターが、離れ離れになった仲間とも無事合流し、モンスターハンターとまで呼ばれるようになるのは……まあ、また別のお話だったりする

ようです。